
タバサの悪魔勇者

冒険ファンタジー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

タバサの悪魔勇者

【Nコード】

N9501P

【作者名】

冒険ファンタジー

【あらすじ】

ある程度体を鍛えている^{とやまたくじ}杓山琢治は、小さな猫を救う為に道路に飛び出して猫を救ったが、交通事故に遭い死亡してしまったが、大天使を名乗る少女が小さな命を救う善行に感動し、別の世界で生きてほしいと言われた。その際チートな能力を貰って異世界へと旅立った。異世界に着くと、そこはゼロの使い魔の世界だった。しかも、着いた先がルイズではなく、タバサであった。ちなみにシルフィードも居ます。タバサルートです。小説版とアニメ版のコラボ。デイスガイア要素もあるよ。飛ばしているシーンがありますので注意し

てください。他の作品の要素もあります。まったく不定期です。文才は無い方ですので注意して下さい。

プロローグ

俺は^{とやまたくじ}杓山琢治。

何処にでもいるちよつと体を鍛えた凡人だ。

俺はいつもの様に、ジムに通つては鍛えていた。

その帰りに、ふと道路の方を見たら、子猫がふらふらしながらこつちに来るのを見かけてたら、反対車線から車が来て、このままじゃ猫が轢かれると思い、無我夢中に行動していた。

「危ねええええっ！」

その瞬間、俺は意識を絶った。

そして目が覚めると、そこは雲の中とも思える場所に居た。

「あれ？何だここは？」

するとそこに、

「うええ~~~~ん」

「なんだ!？」

背後から泣き声が聞こえた。

「……誰？」

「うえっうえっ、あっずびましえ〜ん」

涙声でよく解らんな……

「ぐすっ、わたし、大天使のルミエルといいますっ」

「大天使？」

「はい、そうですう」

ちよつとイラつとくる喋り方だな。

「その泣き虫大天使様がどうしてここに？」

「泣き虫じゃないですう、どうしてここに居るのかと言いますと、貴方を迎えに来たからなんですう」

「迎え？」

「はい、貴方は死んでここに居るから、迎えに来たんですう」

「えっ死んで……！？」

そつだ、俺は猫を助ける為に……そしてここに居るから、俺は車に轢かれたつて事か。

「なあ」

「はい、なんででしょう？」

「俺が助けた猫はどうなったんだ？」

「にゃんこは無事でしたよ、貴方のおかげで」

「そうか……」

無事なら良いや、思い残す事も無いし。

「じゃあ、俺をあの世へと連れて行ってくれ」

「あつちよつと待って下さい、あの世へなんて行きませんよ」

「へっ！？だつてさっき、迎えに来たつて」

「それは、もう一度生きるチャンスを与えに来たんですよ」

生きるチャンスって！？

「それはどういう事なんだ!？」

「それは、貴方が生前に善行を積んだ為で、更にはにゃんこを命懸けで救出して死んでしまったのですう、そんな人が死んじゃうなんておかしいですう!」

……この大天使って、天然で猫好きなのか？さっきからにゃんこって言うてるし……。

猫を救出した辺りが熱く言ってるし。

「と言う訳で、貴方には別の世界で生きて貰いますう!」

「(何がと言う訳なんだ?)……って別の世界って!？」

「はい、元居た場所は既に死亡扱いなので、別の世界に行って頂くと言う事なのですう」

「ふゝん…で、どんな世界なんだ？」

「それをこれから決めるんですう!」

「決める?」

「はい、この箱の中から好きなの引いてください」

クジ?……とりあえず引いてみるか。

「えゝと、ゼロの使い魔あ?」

「はい、その世界に御招待します」

確か、サイトって主人公が最初奴隷同然の暮らしをしていくが、後に国の騎士になるってあのゼロ魔か!

「あつ後、その世界で生きていく為の能力も与えますね」
「能力?」

「はい、あつその世界では言葉や文字が解らないから、解かる様にしておきました。後、原作の知識も分かる様にしました」

「まあある程度しか知らなかったから丁度良いな、他には？」

「はい、ではこの箱の中から好きなもの引いてください」

またクジか、……………とりあえずっと。

「えっと、魔界戦記デイスガイアシリーズ……ってデイスガイア！？」

ある意味良し、最近ゲームではまっていたのって、デイスガイアなんだよな。

「それじゃあ、デイスガイア的能力をどの様にしたい？」

「じゃあまず、ラハール・アデル・アルマースの能力を使える様にしたい！」

今言った三人は一番好きなキャラなんだよなあ。

「はい分かりましたあ。それで、顔や格好はどうしますか？」

「顔はアデルで、服装はアルマース、後ついでにラハールの腕輪を付けてくれ！」

「はい」

光が湧き出て来て、納まってくると…

「はい、鏡どぞぞ」

そこには、アデルの顔があった。

「服もアルマースのになっているな、後ラハールの腕輪も」

「その腕輪にはサービスとして、魔チェンジ機能を入れて置きました」

た」

「魔チエンジンって、ハルケギニアには悪魔は居ないですよ？どうやってするんですか？」

「悪魔の替わりに仲良しになった動物を魔チエンジン出来ますよ」

「まあ、妥当だな」

他の使い魔で試してみようかな？後は、武器か…。

「武器は魔物専用以外を扱える様にしてくれ！後、武器の技と魔法も使える様と、あつそれぞれの武器で、お気に入りのキャラの技も使える様にしてくれ！」

「はい分かりましたあ。でもあ、その世界で通じる物しか使えないから気を付けてねえ。後、今のLvは低い方ですが、修行すればちゃんとLvUPしますので頑張ってくださいね。それじゃあ武器をお付けします」

手にバーニングブローと精霊の杖、右肩にドレイクハンター、左脇に薄刃陽炎、右脇に夢氷黄泉路、腰にサンライズソード、内ポケットにノーブルローズ、背中にラハールの剣とエルダースピアが装着された。

おいおい、上位の武器ばかりじゃないか。

「ちなみに、この精霊の杖は、精霊魔法が込められています」

「それって、先住魔法のやつですか！？」

「はい、動物の言葉が分かったり、精霊達の事も分かるし、頼めば変身能力も身に付くんですよ！」

変身か、それもいいな。

「後、防具やその他の装備も付けたいんだけど…」

「はい、それではお付けします」

体にピンポイントバリアが纏い、ブラックベルトが装着され、フォアサイトは眼鏡ケースに収めてポケットに入れられ、靴に加速装置が付いた。

武器もそうだけど、これらがあれば大抵の敵なんか直ぐに倒せそうだな。

「他に希望はありませんか？」

「じゃあ、種族を悪魔にしてくれ」

「はい…… ってえ……！？悪魔にですか！？何ですか！？？」

「デイスガイアの主役なら悪魔だろ？」

「…… 分かりましたあ。でも、見た目は人間のままにしますね！そこだけは譲れません！」

「わ…… 分かった」

俺の体は悪魔になった。

「他に希望はありませんか？」

「いや、もういいよ」

「それでは最後に、貴方の新しい名前を決めてね」

「名前？別に杦山琢治のままでいいだろ？」

「その名前は、天界の管理所では既に死亡としていますので、他の名前にしてくださいねえ」

天界にもそうゆうのあるんだ…。

「新しい名前か……」

三人のキャラが一つになっている訳だから、

「アデル・ラハール・アルマースだ」

……言った後なんだけど、自分でも安易だなと思ってしまった。

「それじゃあアデルさん、新しい世界で第二の人生を楽しんできてね」

すると足元から穴が空き、落ちた

「どわーーーーー！！！」

しばらく落ちていると光が見えて来た。

「あそこがゼロの使い魔の世界か、このままいくとルイズの使い魔として過ごす訳だな」

そしてゲートを通って地面に着地すると、そこに居たのはルイズではなく、タバサだった。
あれっ？なぜにタバサ？

ブログ（後書き）

武器が装着されたって書いた後、ディシディアのフリオーナールっぽくなってしまったなと思ってしまいました。

オリ主設定（前書き）

アデルの設定どうぞ。

オリ主設定

名前

転生前

とやまたくし
杓山琢治

転生後

アデル・ラハール・アルマース（デイスガイアのアデルとラハールとアルマースの名を付けただけ）

年齢

19歳

容姿

頭

デイスガイア2のアデルの顔（燃える様な紅い髪、特徴的な癖っ毛、両頬に傷）

服装

デイスガイア3のアルマースの服

装飾品

デイスガイアのラハールの腕輪（両腕に装着）

悪魔の体

見た目は普通の人間

悪魔の翼

アルマースの服のマフラー（ラハールみたいに翼をマフラーに変えた感じ）

変身

精霊の杖を使って、シルフィードみたいに変身する（変身するものは主にゼロ魔の人間・生物）。

性格

女っ気の無い暮らしをして来た為、女性に対してはかなりオクテに

なる。

基本的に優しくてお人好しで家族と友達思いな感じで、何事もめげずに頑張る努力家でもある。

悪魔化してからは、自分の知り合いをバカにする様な事を言われたら、怒りを覚える様になったり、敵との戦いでは、物騒な考え持つ好戦的な感じになった。

立場

ルイズの所かと思ったら、何故かタバサの所に召喚された（シルフィードと一緒に）。

タバサの任務に付いていき、サポートをする。

サイトの活躍を見ている傍観者の立場、必要なら助太刀する。

本人は脇役だと思っているが、他から見たら主役に見える。

装備（英字はウェポンマスタリーの評価）

魔物専用武器は使えない。

拳 S

バーニングブロー（深紅の手甲、火属性、デイスガイア2でラスボス前にパパから貰うやつ）

剣 S

薄刃陽炎（紫色の刀、主な武器として使用）

ラハールの剣（モデルはアニメ版）

サンライズソード（見た目は柄だけの剣だけど魔力を込めると光の刀身が出る、主にエルフやヨルムンガンド時に使用、先住魔法の反射も切れる）

槍 A

エルダースピア（紅い交差的な槍、デイスガイア2のエトナの装備）

弓 C

ドレイクハンター（紅い竜の様な形の弓、主に獣や魔獣用に使用、

魔力で矢を作っている為無くならない)

銃 A

ノーブルローズ(バラのデザインが彫ってある銃、デイスガイア2でラスボス前にママから貰うやつ、魔力で打ち出す為弾切れにならない)

斧 A

夢氷黄泉路(青い斧、氷(水)属性、デイスガイア2の斧雪の装備)

杖 B

精霊の杖(赤・青・黄色・緑の宝玉の付いた杖、先住(精霊)魔法を使う事が出来る、動物の言葉が分かる様になる)

鎧

ピンポイントバリア(目に見えない、一部だけだが意思次第で何処でも防げる、ある意味反射)

ベルト

ブラックベルト(アルマースの服のベルトがこれ、攻撃力増加)

靴

加速装置(自分の意思で速度調節可能、最大速度はジョゼフの加速に匹敵する程)

眼鏡

フォアサイト(魔力を込めると数秒先の未来が見える)

特典

ゼロ魔の世界の言葉や文字が解る様になる。

ゼロ魔原作の内容が分かる様になる(小説だけじゃなく、アニメやタバサの冒険も含む)。

デイスガイアの魔法が使える(皆の前で使う時は杖を持つ)。

修行すればするほどレベルアップする。

腕輪の効果で仲良しの動物に触ると魔チェンジ能力が付く。

例、シルフィードは(聖竜に近いので)弓(他の動物にもなる可

能性あり）。

能力

ほとんどの技はゼロ魔の世界で通じそうな技だけ選びました。

何故マオではなくアルマースの技かと言うと、マオよりもアルマースの方がお気に入りだから。

武器専用技の中には、気に入ったキャラの技を入れています。

魔力を込めて使う技は、ゼロ魔の虚無以外の属性と、悪魔の力で使用する。

固有技系

紅蓮疾風拳

飛翔爆炎脚

烈火武神撃

回転剣の舞（使用する時は、口に薄刃陽炎、右手にラハールの剣、左手にそこらの剣で代用）

閃走・重ね十字

助けて、女神様（使用時は四極精霊陣、火・水・土・風の精霊を一つにして相手を攻撃する）

魔法

デイスガイアの全ての魔法を使える（杖無しでも使える、心の中で唱えても発動する、オメガクラスまで）

ゼロ魔の世界の魔法が使える（精霊の杖が必要、心の中で唱えても発動する、ほとんど精霊達が手助けしてくれるので常にスクウェアクラス）

武器専用技系

拳技（バーニングブローが無くても使える）

三連撃

残像拳

獅子王波（拳に火の魔力を込める必要がある）

餓狼粉碎蹴

轟炎獅子投炒め（バーニングブローを装備しなくても使用可能、拳に火と悪魔の力を込める必要がある）

剣技

一文字スラッシュ

飛天無双斬

暗黒剣Xの字斬り

乱れ吹雪の舞（剣に水と風の魔力を込める必要がある）

大次元断（サンライズソード装備時のみ使用可能、剣に悪魔の力を込める必要がある）

槍技

疾風迅雷

酷刺無槍（槍に風の魔力を込める必要がある）

タービュレンス（槍に風の魔力を込める必要がある）

真槍神理

カオスインパクト（エルダースピア装備時のみ使用可能、槍に悪魔の力を込める必要がある）

弓技（魔力が無いと使用不可）

スプラインアロー（弓に水の魔力を込める必要がある）

ライデンミサイル（弓に風の魔力を込める必要がある）

ジールレーゲン（弓に風の魔力を込める必要がある）

ドッペルゲンガー（弓に風の魔力を込める必要がある、加速装置を使用した技）

ホーリーアロー（シルフィードを魔チェンジした時のみ使用可能）

銃技（魔力が無いと使用不可）

三連星射（銃身に土の魔力を込める必要がある）

土竜弾（銃身に土の魔力を込める必要がある）

リフレクトレイ（銃身に魔力を込める必要がある、周囲の障害物を利用して撃つ事も可能）

トーテンクロイツ（銃身に火の魔力を込める必要がある）

超電子融合爆破（ノーブルローズ装備時のみ使用可能、銃身に悪魔の力を込める必要がある）

斧技

岩石くだき

ブーメランアクス

乱れ散り花

グラビトンフレア（斧に土の魔力を込める必要がある）

氷刃瞬雪斬（夢氷黄泉路装備時のみ使用可能、斧に悪魔の力を込める必要がある）

オリ主設定（後書き）

ゼロ魔はチート、デイスガイアは最初からの感じのLvです。

召喚したのは韻竜と傭兵！？（前書き）

シルフィードの扱いが少ないです。

召喚したのは韻竜と傭兵！？

タバササイド

私は今… トリステイン魔法学院で、二年生へと進級した生徒達の使
い魔召喚の儀式が行なわれていた。

友達とも言えるキュルケは、サラマンダーを召喚した。

そして、私の番が来た。

もちろん不安はあった、これから一生を共にする相手なのだ。

自分には、果たさねばならない目的がある、その力となってくれる
使い魔だろうか。

そして自分は、偽名によって召喚し、契約しようとしている。

成功してくれるだろうかと不安の種には事欠かないが、表に出して
も意味がない。

ここまで来たら、やってみるしかないのだから。

「我が名はタバサ…五つの力を司るペンタゴン…我が運命に従いし
使い魔を召喚せよ…」

目の前に現れた鏡の中から、蒼いドラゴンと紅い髪をした人間が出
てきた。

「これは…どうゆう事だ？…ん？」

「きゅい？」

「なっ！？ドラゴン！？」

現れた紅い髪の間人はドラゴンを見て、少し驚いた様だ。

「うそ………使い魔が複数！」

「しかも片方は風竜、片方は平……み……ん……!？」

周りが騒いでいたが、紅い髪の人間の持っている杖を見て黙ってしまった。

「おい、杖を持っているって事は……」

「あの男、貴族か!？」

「でも、剣とか持っているから、傭兵メイジか!？」

周りが騒然としていたが、コルベール先生が……。

「皆さん静かに、失礼しましたミスタ」

「ああ、俺はアデル。アデル・ラハール・アルマースだ!」

紅い髪の男は……アデルはそう名乗った。

「それより、状況がよく解らないのだが?」

「あっそうですね、ミスタ・アルマース。ここはトリステイン魔法学院です」

「魔法学院……」

アデルは口元に手を当てて、考えていた。

タバサがコルベールの下に近づき……。

「……コルベール先生、この場合はどうすれば……?」

コルベールは少し考えた。

「両方ですね。召喚されたという事は、ミス・タバサの呼び掛けに応えたわけですので……」

コルベールは後に続く言葉が出せなかった。
それはそう、相手は傭兵とはいえメイジなのだから、断られる可能性が高いからだ。
するとアデルは質問してきた。

「まさかとは思うが、俺は使い魔として召喚されたのか？」

タバサとコルベールは驚いた。

「……別に構わないぞ」

「「！！？」」

タバサとコルベールは再度驚いた。

「よろしいのですか！？ミスタ・アルマース！？」

「俺が使い魔にならないと、その子の立場が不味い事になるのだろ？」

「確かにそうですが……」

「俺はもう平民と指して変わらないから気にするな」

「……分かりました。ミス・タバサ、契約を行って下さい」

以外だった。まさか承諾してくれるとは思わなかった。

よく見てみると、燃えるような赤い髪とマフラーしていて、血の様に紅い手甲に金色の腕輪、赤・青・黄色・緑の四色の玉の付いた杖、肩には珍しい形の弓、右脇には青い斧、左脇には紫色の細い剣、腰には柄だけの剣？で、背中には、変わった形をした大剣と槍があった。

タバサはアデルに近づいた。

「契約するから屈んで」

タバサはそう言い、呪文を唱える。

「我が名はタバサ…五つの力を司るペンタゴン…この者に祝福を与え…我が使い魔となせ」

そう言った後、タバサはアデルにキスをした。

唇が離れ少し経つと、アデルは左手を押さえ苦しみだした。

「くっ、ぐっ」

「大丈夫、使い魔のルーンが刻まれているだけ」

痛みが治まってきたのか、アデルは着けていた手甲を外し、自身の左手の甲を見て「これが使い魔のルーンか」と言っていた。

「契約は終わりましたね。ミス・タバサ、次は風竜の方も」「はい」

タバサは風竜の方向に向かい、契約を行った。
コルベールはドラゴンのルーンを見てスケッチに書いた後、アデルのルーンを見て…。

「おや、珍しいルーンですね？」

タバサは、アデルのIVALDIと刻まれているルーンを見ておかしいと思った。

何故なら読めなかったからだ。するとアデルは…。

「これは……イー　ヴァル　ディ……か？」

「「!!!?!」」

タバサは驚いた顔をしてアデルを見た。

「ミスタ・アルマース、このルーンが読めるのですか!?!」

「まあ少しは。でも、意味までは解りません」

コルベールはルーンが読めるアデルに興味を湧いた。

その時、突然タバサはアデルに抱きついた。

「なっ!?!?...えっ!?!?!」

「ミ、ミス・タバサ!?!」

周りが騒然としていた。

するとタバサは.....。

「やっと...見つけた」

私の.....私の.....私だけのイーヴァルデイ!

イーヴァルデイ.....タバサが小さいころから憧れて、どんなこと
からも守ってくれて、助けてくれる勇者の名前、それがアデルの手に
刻まれていた。

アデルとコルベールは啞然としてタバサを見ていた。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

キュルケサイド

私は使い魔召喚の儀式で、サラマンダーを召喚したわ。

私のお友達のタバサに自分の使い魔を見せて、「……おめでとう」と言ってくれたわ。

あの子の使い魔はどんな使い魔かしら？あの子の事だから案外ドラゴンを呼び出したりして。

「我が名はタバサ…五つの力を司るペンタゴン…我が運命に従いし使い魔を召喚せよ…」

あら、本当にドラゴンを呼び出しちゃったわ、すごいわタバサ！…あれ？近くに平民がいるわね？

「うそ……使い魔が複数！」

「しかも片方は風竜、片方は平…み…ん…！？」

「おい、杖を持っているって事は…」

「あの男、貴族か！？」

「でも、剣とか持っているから、傭兵メイジか！？」

うそ、ドラゴンだけじゃなくメイジまで召喚しちゃったの！？

「皆さん静かに、失礼しましたミスタ」

「ああ、俺はアデル。アデル・ラハール・アルマースだ！」

ふうん、あのメイジはアデルというのね、結構凛々しい人じゃない。ちよつと揉めてるみたいね、まあ相手はメイジだし断られると思うわね。

そう思いながらも、タバサはアデルに近づいて行った。

「我が名はタバサ…五つの力を司るペンタゴン…この者に祝福を与

え…我が使い魔となせ」

そう言ったタバサは、アデルにキスをしていた。
えっ！？あのメイジ、契約を承諾したの！？

タバサはドラゴンの方も契約を交わした。

ドラゴンの方は問題無いわね。あら、あの子…アデルの方を見て何を驚いているのかしら？

そしてタバサは、アデルに抱きついた。

えっ！？タバサ、何でアデルを抱き着いちゃっているの！？はつまさかタバサ……遂に春が来たのね！

壮大な勘違いをしているキュルケであった。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

コルベールサイド

私は、ここトリスティン魔法学院の教師で、今は二年生へと進級した生徒達の使い魔召喚の儀式が行なわれています。

先程ミス・ツエルプストーが召喚したサラマンダー見て、大物を出したなと思った。

次に、ミス・タバサの番となった。

「我が名はタバサ…五つの力を司るペンタゴン…我が運命に従いし使い魔を召喚せよ…」

目の前に現れた鏡の中から、蒼いドラゴンと紅い髪をした人間が出てきた。

なんと、人間が召喚された！？

「うそ……使い魔が複数！」

「しかも片方は風竜、片方は平……み……ん……！？」

周りが騒いでいたが、紅い髪の人間の持っている杖を見て黙ってしまった。

「おい、杖を持っているって事は……」

「あの男、貴族か！？」

「でも、剣とか持っているから、傭兵メイジか！？」

周りが騒然としてい中、コルベールだけがメイジを見て咄嗟にディテクト・マジックを使ったら、コルベールは召喚された紅い髪の男を警戒した。

彼は、すごい魔力の持ち主だ。それよりも周りを静かにさせないと。

「皆さん静かに、失礼しましたミスタ」

「ああ、俺はアデル。アデル・ラハール・アルマースだ！」

アデル・ラハール・アルマース……聞かない名前ですね、これ程の魔力なら有名だと思うのですが……。

「それより、状況がよく解らないのだが？」

「あっそうですね、ミスタ・アルマース。ここはトリステイン魔法学院です」

「魔法学院……」

まさか、自分が使い魔にされるのかと思っているのでは。

すると、タバサがコルベールの下に近づいた。

「……コルベール先生、この場合はどうすれば……？」

むう、メイジを召喚した前例などありませんから……。

「両方ですね。召喚されたという事は、ミス・タバサの呼び掛けに応えたわけですので……」

私はこの後続く言葉が出せなかった。

それはそう、相手は傭兵とはいえメイジなのだから、断られる可能性が高いからだ。

するとアデルは質問してきた。

「まさかとは思うが、俺は使い魔として召喚されたのか？」

タバサとコルベールは驚いた。

まずい、彼が何かしら行動する前に説得しなければ……。

「……別に構わないぞ」

「「……!?」」

タバサとコルベールは再度驚いた。

「よろしいのですか!? ミスタ・アルマース!?」

「俺が使い魔にならないと、その子の立場が不味い事になるのだろ？」

「確かにそうですが……」

「俺はもう平民と指して変わらないから気にするな」

「……分かりました。ミス・タバサ、契約を行って下さい」

よかった、彼が話の分かる方で。しかし、今の話から、彼は貴族の位を無くして傭兵となったのだろう。そしてタバサは契約の呪文を唱える。

「我が名はタバサ…五つの力を司るペンタゴン…この者に祝福を与え…我が使い魔となせ」

そう言った後、タバサはアデルにキスをした。唇が離れ少し経つと、アデルは左手を押さえ苦しみだした。

「くっ、くっ」

「大丈夫、使い魔のルーンが刻まれているだけ」

痛みが治まってきたのか、アデルは着けていた手甲を外し、自身の左手の甲を見て「これが使い魔のルーンか」と言っていた。何とか無事に、彼との契約が終わった様だ。

「契約は終わりましたね。ミス・タバサ、次は風竜の方も」「はい」

タバサは風竜の方に向かい、契約を行った。念の為に、ルーンを写しておきましょう。コルベールはドラゴンのルーンを見てスケッチに書いた後、アデルのルーンを見て…。

「おや、珍しいルーンですね？」

アデルのIVALDIと刻まれているルーンを見て不思議に思った。何故なら読めなかったからだ。するとアデルは…。

「これは……イー ヴァル デイ……か？」
「「！！？」」

驚いた、彼はこのルーンを読めるみたいですね！

「ミスタ・アルマース、このルーンが読めるのですか！？」
「まあ少しは。でも、意味までは解りません」

いや、読めるだけでも凄い事ですよ！

コルベールはルーンが読めるアデルに興味が湧いた。
その時、突然タバサはアデルに抱きついた。

「なっ！？……えっ！！？」

「ミ、ミス・タバサ！？」

何故ミス・タバサが彼を抱きしめるのですか！？
するとタバサは……。

「やっと見つけた」

ミス・タバサは、一体どうしたんでしょう？

アデルはコルベールと一緒に啞然としてタバサを見ていた。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

アデルサイド

目の前にはタバサが居た。俺は思わず呟いた。

「これは…どうゆう事だ？…ん？」

「きゅい？」

「なっ！？ドラゴン！？」

何故シルフィードがいる！？さてよ…という事は、俺はルイズじゃなくタバサに召喚されたって事！？

アデルは完全にルイズに召喚されたのだと思った。

「うそ…使い魔が複数！」

「しかも片方は風竜、片方は平…み…ん…！？」

あれ、周りが騒いでたのに急に静かになった？

「おい、杖を持っているって事は…」

「あの男、貴族か！？」

「でも、剣とか持っているから、傭兵メイジか！？」

えっ、ああ精霊の杖を持っているから、貴族か何かだと勘違いしたのかな？

「皆さん静かに、失礼しましたミスタ」

「ああ、俺はアデル。アデル・ラハール・アルマースだ！」

とりあえず自己紹介はしておこう、後この状況も。

「それより、状況がよく解らないのだが？」

「あっそうですね、ミスタ・アルマース。ここはトリステイン魔法

学院です」

「魔法学院……」

やっぱり使い魔と呼ばれたって事か。
タバサがコルベールの下に近づき…。

「……コルベール先生、この場合はどうすれば……？」

コルベール先生は少し考え事をしているな。まあ当然の悩み所だと思ふよな。

「両方ですね。召喚されたという事は、ミス・タバサの呼び掛けに応えたわけですので……」

どうしたんだろうコルベール先生？急に黙って、

「まさかとは思うが、俺は使い魔として召喚されたのか？」

タバサとコルベールは驚いた。

「……別に構わないぞ」

「「！！！」」「」

その為にこの世界に来た様なもんだし。

「よろしいのですか！？ミスタ・アルマース！？」

「俺が使い魔にならないと、その子の立場が不味い事になるのだろ？」

「確かにそうですが……」

「俺はもう平民と指して変わらないから気にするな」

「……分かりました。ミス・タバサ、契約を行って下さい」

とうとうキスシーンか。

タバサはアデルに近づいた。

「契約するから屈んで」

俺は言われた通り屈んだ。

「我が名はタバサ…五つの力を司るペンタゴン…この者に祝福を与え…我が使い魔となせ」

そう言った後、タバサはアデルにキスをした。

そして唇が離れた。

やっぱり契約とはいえ、女の子とキスはちょっと照れるな。……つて来た！

アデルの左手にルーンが刻まれていく。

「くっ、ぐっ」

「大丈夫、使い魔のルーンが刻まれているだけ」

痛みが治まってきた、俺は手甲を外し、自身の左手の甲を見て思わず…。

「これが使い魔のルーンか」

と呟いた。

「契約は終わりましたね。ミス・タバサ、次は風竜の方も」

「はい」

次はシルフィードの方が。

コルベールはドラゴンのルーンを見てスケッチに書いた後、アデルの方へと近づいた。

俺のを写そうとしているのか？

アデルのルーンを見て……。

「おや、珍しいルーンですね？」

さつきはよく見てなかったけど、よく見てみるとそこにはI V A L D Iと刻まれているルーンがあつて、とりあえず読んでみた。

「これは……イー ヴアル デー……か？」

「「！！？」」

イーヴァルディって確か勇者の代名詞だったわけ？

「ミスタ・アルマース、このルーンが読めるのですか！？」

「まあ少しは。でも、意味までは解りません」

一応解らない事にしました。それにしても、悪魔になった俺が勇者ねえ。

その時、突然タバサはアデルに抱きついた。

「なっ！？……えっ！！？」

「ミ、ミス・タバサ！？」

何で急に抱きついて来るの！？
するとタバサは……。

「やっと見つけた」

あっそうか、タバサってイーヴアルディに憧れを抱いてたんだっけ、俺が彼女の勇者となってくれたのが余程嬉しかったんだね。コルベールは啞然としてタバサを見ていた。

色々あって今だにアデルに抱きついていているタバサと、その後ろで微笑ましく見ているキュルケは、ルイズの召喚が終わるまで、さっきまでの広場に居た。出て来るのは十中八九サイトだろう。

「宇宙の果てのどこかにいる私の僕よ、神聖で、美しく、そして強力な使い魔よ、私は心より求め、訴えるわ、我が導きに、応えなさい！！！」

随分と危機迫った感じで唱えるなあ、まあ彼女の今までの事があるからあんな風になるのかもしれないと言うのだろう。そして爆発が起こり、咄嗟にタバサを庇った。

「大丈夫か？」

「……うん……」

少し恥ずかしそうに言ったタバサ。

「あら、妬けるわね」

キュルケにそう言われたタバサは恥ずかしさのあまり、顔を赤くした。

そして、周囲がルイズに野次を飛ばしている中、爆煙の中から青い服の少年が倒れていた。

やっぱりサイトが出来たか。

召喚したのは韻竜と傭兵！？（後書き）

主観違いのマオ的立場になったアデルでした。

それぞれの夜（前書き）

休日
に風邪ひくと、平日まで病院に行けないから、きつかった。

それぞれの夜

アデルサイド

色々あって、俺はタバサの部屋いた。そして今後の事を言つつもりでいた。

ちなみに武器は、タバサに許可を取って、部屋の隅に置いてある。

「改めて挨拶といこう、俺はアデル・ラハール・アルマースだ」

「タバサ」

「ではタバサ様、お」「タバサでいい」!？」

呼び捨てで構わないという事か？

「ではタバサ、俺の事はアデルで構わない」

「分かった」

こくりと頷く姿が可愛いな。おっと、そうしている場合じゃなかった。

「まず使い魔として何をすればいいんだ？」

「使い魔としての仕事は三つある。一つは使い魔は主人の目となり、耳となる能力を与えられる」

「何か見えるか？」

「見えない」

「そうか」

出来れば見えない方が都合がいい。

「二つ目は主人の望むものを見つけてくる事」

「それは秘薬か何か？」

「そう」

「試した事が無いから何とも言えないな」

精霊達に言えばヒントをくれるかも。

「最後に主人を守る事」

「それならお安い御用だ」

さて、そろそろ本題といこうかな。…なんかタバサが照れている様な…。

「タバサ、君は俺との契約でいくつか覚悟しておかなければいけない」

そんな必要は無いと思うけど、一応は言っておかないと。

「どういつ事？」

「俺は…」

首に巻いてあるマフラーを、悪魔の翼に変化させた。

「俺は悪魔だ！」

「！！！！？？」

案の定タバサは驚いていた。

「それに…（ファイア！）」

アデルの手の平に火の玉を出した

「先住魔法！」

すると杖を握ろうとしていた。

やっぱり悪魔なら警戒するよな。俺は手の平の火の玉を消した。だがタバサは、杖を置いた。

「悪魔でも構わない、私には貴方が必要だから」

驚いた、てつきり拒絶するかと思っていたからな。

「何故悪魔の俺が必要なんだ」

知っているけど理由を聞いておこつ。

「貴方は、私の勇者だから」

「ゆ…勇者！？」

やっぱりな。

タバサは、アデルの左手のルーンの意味を教えた。

悪魔が勇者って、デイスガイア3のマオみたいだな。

「悪魔の俺が勇者とは、とんだお笑い種だな」

アデルはわざと皮肉を言った。

「貴方に迷惑をかけてごめんなさい」

「別にいいさ。でも、俺が必要なのはそれだけじゃないのだろう？。」

タバサは一瞬驚いた。
そして…。

「……私には、助けたい人と復讐したい相手がいるから！」

…母親とジョゼフの事か。

「誰かを救いたい事と倒したい事か」

「そう…この二つを成し遂げれば、後は私の体を好きにしていいか
」「ちよ、ちよつとまで！」！？」

ちよつと！？何考えてんの！？いくら俺が悪魔だからって中身は人間のままだから！

「何で自分の体を捧げる気なんだよ！？」

「？…悪魔と契約するには、契約者の体と魂を代償にする事じゃないの？」

「あのね…」

やっぱりか。

アデルは何かしてタバサを説得しなければと思った。

「言っておくけど、俺はつい最近まで人間だったんだ！」

「えっ！？」

咄嗟に元人間発言をしてしまったアデルでした。

「どういつ事？」

咄嗟に言った事とはいえ、どうしようかと思った時、デイスガイア

2 ネタを言おうと思った。

「俺の居た世界は魔王に支配されていたんだ。そして魔王は人間達を自分の手下にする為に、人間を悪魔に変える呪いをかけた。俺もその影響を受けて、この悪魔の翼が生えて来たんだ」
「.....」

タバサは、黙ってしまった。
ま、人間を悪魔に変える呪いなんて考えられないだろうと思うけどね。

「それじゃあ、貴方は呪われて悪魔になったというの!？」
「そう言う事になるな」

しばらく沈黙していたが...

「それと...」
「ん？」

タバサが何か質問をしようとしていた。

「「俺の居た世界」って？」
「あっ！」

やべ、まあ別世界の事も言っただけの方がいいな。
アデルは、タバサに別の世界がある事を伝えた。

「そのヴェルダームというのが、貴方の故郷がある世界なの？」
「ああ」
「ごめんなさい」

「何故謝る？」

「貴方の世界に還す方法が解らないから」

「いや、別に探してくれと頼んでいる訳じゃ……」

「でも、貴方の御両親も心配しているはず……」

心優しい子だなあと思ったアデル。

でも俺向こうじゃ死人だしな。仕方ない。

「いや、その心配はないよ」

「どうして……」

「俺の親も悪魔化して……記憶が無くなってしまい、俺の事が分からなくなっただからだ」

「……!?」

「もう息子の事なんて覚えていないよ、あの二人は。そもそも、夫婦だって事も忘れているだろうしさ」

「……ごめんなさい」

「いや、君が気にする事じゃない」

「それでも、ごめんなさい」

タバサは泣きそうな顔をしていた。
まずい、何とか元気付けないと。

「でも俺は、タバサに感謝しているんだ」

「えっ!？」

ちょっとした励ましを考えたアデル。

「魔界となった俺の世界で、忘れかけていた人間界の事を思い出させてくれたのはタバサだよ。俺は、凄く感謝している」

「アデル……」

ちよつと微笑んだタバサ。
そしてアデルはある誓いを立てる。

「タバサ！」

「なに？」

「俺…アデル・ラハール・アルマースは誓う、この先何があっても、
タバサ、君を支え、守り続ける事を此処に誓う！」
「！？」

俺は誓いを言ったら、タバサは…。

「ありがとう」

その時、窓から鳴き声が聞こえた。

「きゅい、きゅい」

「うわっ、なんだ！？」

「……………」

蒼いドラゴンが窓から顔を出してきた、なにやら不機嫌な様子。

「きゅい、二人ともイルククウをほったらかしにしてなんなのね
！きゅいっ」

「……………」

どうやら忘れられていた事に不満を持つ喋るドラゴン。

なんかごめんねシルフィード、ってこの時はまだ命名してなかった
んだっけ？

するとタバサがドラゴンの前に立った。

「な、なんなのね…」

「これから、喋るの禁止」

「どうして」我々人間は、韻竜が絶滅したと思っている。騒がれたら面倒「!!」

今後の事に付いて注意をするという訳か。

「どうして分かったのね」

「目が違う」

「当然なのね。お馬鹿な風竜なんかとは、頭の中身が違うのね。わたしたち韻竜の眷属は「言語感覚に優れ、先住魔法を操る」先に言わないでほしいのね」

なんか段々空気になってきてないか俺？

「じゃあ、そんな偉大な韻竜なわたしに、しゃべるな、ということがどんな意味を持つのかわかるわよね？」

シルフィードがどや顔をしていた。でもタバサは…。

「な、なんなのね…」

タバサの無言の圧迫感が部屋全体に広まってくるのが分かる。

アデルは何かしないかと思ひ、口を開いた。

「まあまあ、折角契約を交わした仲間なんだし、仲良くしようじゃないか？」

場を何とかしたい一心で出た言葉だった。

するとイルククウが…。

「きゅい！？そっちの人は何者なのね！？精霊が人間に纏わり付いているなんてあり得ないのね！」

「！？？」

あつ精霊の杖の影響かな？

「それは多分、この精霊の杖が原因だろう」

「精霊の杖？」

「きゅい！その杖から精霊が纏わり付いているのね！」

「！？？」

シルフィードは韻竜だから、精霊を感じるのだろう。

それからアデル達は、アデルの持っていた武器について説明をした。本当は大天使が作ったものだが、悪魔が作った事にした。ついでにアデルが悪魔だという事をイルククウに喋った。

「アデルの世界は不思議な物ばかり」

「ホントなのね、とても悪魔が作った物ばかりだななんて信じられないのね。おにーさんのところは不思議なのね」

「まあな」

それで色々あってシルフィードは、タバサの指示で適当に中庭で休む事となった。

「さて、今日はもう遅いし、寝るとしますか」

タバサがコクリと頷いた。

今気付いたが、俺はどこで寝ればいいんだ？とタバサに言ったら、

ベッドに指を差した。

「ベッドですよねタバサさん」

タバサがコクリと頷いた。

言葉が何故か丁寧になるアデル。

「えっと、タバサさんは何処で寝られるのですか？」

「そこ」

ベッドの方へと指を差すタバサ。

おいおいマジかよ。この流れから行くと……。

「一緒に寝る」

やっぱりか————！！??

「あのタバサさん、俺は別に床でも良いんだが」

「一緒に寝る」

その一点張りをするタバサさん。

何とかして別々にしようとしたが、タバサが……。

「私と一緒に寝るの……いや？」

涙目と上目使いをされたら、もう断れなかったので、一緒に寝る事になった。

普通の男ならこの状況を喜びそうだが、アデルの前世は女っ気の無い暮らしをしていたので、女性に関しては、かなりのオクテの青年だった。

- - - - -

タバササイド

色々あって、私の部屋いた。私だけのイーヴァルディと一緒に暮らせる。

彼の持っている武器は、部屋の隅に置くようにした。

「改めて挨拶といこう、俺はアデル・ラハール・アルマースだ」
「タバサ」

「ではタバサ様、お」
「タバサでいい」！？」

私には、様付けされる資格は無いから。

「ではタバサ、俺の事はアデルで構わない」
「分かった」

アデルと呼んで、ちょっと照れたタバサ。

するとアデルは使い魔の仕事について質問して来た。

「まず使い魔として何をすればいいんだ？」

「使い魔としての仕事は三つある。一つは使い魔は主人の目となり、耳となる能力を与えられる」

「何か見えるか？」

「見えない」

「そうか」

アデルから見た私を見たかったな。

「二つ目は主人の望むものを見つけてくる事」

「それは秘薬か何かか？」

「そう」

「試した事が無いから何とも言えないな」

さすがに、これは無理がある。

「最後に主人を守る事」

「それならお安い御用だ」

私の勇者様が私を守ってくれる。

タバサは少し照れてしまった。

するとアデルは、真剣な表情でタバサを見ていた。

「タバサ、君は俺との契約でいくつか覚悟しておかなければいけない」

真剣な表情で話してくるアデル。

……覚悟？ 一体何の…。

「どういつ事？」

「俺は…」

アデルの首に巻いてあるマフラーが、翼とも言える形に変化した。

「俺は悪魔だ！」

「!!!!!!??」

私は、悪魔を召喚したの！？
タバサは今までの自分の中で、ジョゼフに復讐したい気持ちと母を救いたい気持ちが積もった結果、悪魔を呼び出してしまったと思った。

「それに…」

アデルの手の平に火の玉を出した

「先住魔法！」

私は思わず杖を握ろうとしていた。

でも彼は、私の召喚で呼び出してしまったから、それに悪魔の彼を攻撃しても返り討ちになるかもしれない。

アデルは手の平の火の玉を消し、タバサは杖を置いた。

それでも、私は悪魔に魂を売ってでも成し遂げなければいけない事があるから。

「悪魔でも構わない、私には貴方が必要だから」

アデルは驚いた顔をしていた。

「何故悪魔の俺が必要なんだ」

貴方は、私のイーヴルディ…。

「貴方は、…私の勇者だから」

「ゆ…勇者！？」

私は、アデルの左手のルーンの意味を教えた。
悪魔にとって、勇者は天敵の存在。彼は嫌がると思うが…。

「悪魔の俺が勇者とは、とんだお笑い種だな」

やっぱり、悪魔の彼では勇者は嫌なのだろうか？

「貴方に迷惑をかけてごめんなさい」

「別にいいさ。でも、俺が必要なのはそれだけじゃないのだろうか？」

タバサは一瞬驚いた。

私の考えている事も解る様ね。
そして…。

「……私には、助けたい人と復讐したい相手がいるから！」

私は母と憎い相手の事を言った。

「誰かを救いたい事と倒したい事が」

「そう…この二つを成し遂げれば、後は私の体を好きにしていいいか

」「ちよ、ちよつとまで！」！？」

私は、今言った事が終われば自分の体を売るつもりだった。なのに、
彼はそれを止めようとしていた。

「何で自分の体を捧げる気なんだよ！？」

「？…悪魔と契約するには、契約者の体と魂を代償にする事じゃないの？」

「あのね…」

彼は困惑気味になっているのが分かる。
どういう事かと思っていたらアデルは…

「言っておくけど、俺はつい最近まで人間だったんだ！」
「えっ!？」

悪魔の彼は、元は人間だというの!？

「どういう事？」

アデルは少し悩んだ後、悪魔になった真相を話してくれた。

「俺の居た世界は魔王に支配されていたんだ。そして魔王は人間達を自分の手下にする為に、人間を悪魔に変える呪いをかけた。俺もその影響を受けて、この悪魔の翼が生えて来たんだ」
「……………」

私は黙ってしまった。人間を悪魔に変える呪いなんて考えられなかったからだ。

「それじゃあ、貴方は呪われて悪魔になったというの!？」
「そう言う事になるな」

彼は、アデルは無理やり人外の者となってしまったという。
アデルの話の中で気になる事を聞いてみた。

「それと…」
「ん？」

アデルは、何か不思議そうな顔をしてこちらを見た。

「俺の居た世界」って？」
「あつ！」

彼は、少し戸惑っていた。

その後アデルは、タバサに別の世界がある事を伝えた。

「そのヴェルダウムというのが、貴方の故郷がある世界なの？」
「ああ」

「ごめんなさい」
「何故謝る？」

「貴方の世界に還す方法が解らないから」
「いや、別に探してくれと頼んでいる訳じゃ……」
「でも、貴方の御両親も心配しているはず……」

私が召喚した事で心配しているのじゃないかと思った。
でも、彼は悲しそうな顔をして話した。

「いや、その心配はないよ」
「どうして……」

「俺の親も悪魔化して……記憶が無くなってしまい、俺の事が分からなくなっただからだ」

「……！？」

「もう息子の事なんて覚えていないよ、あの二人は。そもそも、夫婦だって事も忘れているだろうしさ」

「……ごめんなさい」
「いや、君が気にする事じゃない」
「それでも、ごめんなさい」

私は愚かな事を聞いてしまった。

彼は私と同じ、親の精神が狂わされて、自分の事が解らなくなる苦しみは、誰よりも知っているのに、聞いてはいけなかったと後悔してしまった。

ただアデルは…。

「でも俺は、タバサに感謝しているんだ」

「えっ!？」

アデルが何故か自分を感謝しているのだろぅと思った。

「魔界となった俺の世界で、忘れかけていた人間界の事を思い出させてくれたのはタバサだよ。

俺は、凄く感謝している」

「アデル…」

悪魔になりつつあるアデルを人間として守ってくれたと思って感謝してくれているアデルを見て、

タバサは恥ずかしそうになった。

そしてアデルはある誓いを立てる。

「タバサ!」

「なに?」

「俺…アデル・ラハール・アルマースは誓う、この先何があっても、タバサ、君を支え、守り続ける事を此処に誓う!」

「!?!」

やっぱり彼は、私の勇者様。

「ありがとう」

この時私は、歓喜で一杯だった。
その時、窓から鳴き声が聞こえた。

「きゅい、きゅい」

「うわっ、なんだ!？」

「……………」

蒼いドラゴンが窓から顔を出してきた、なにやら不機嫌な様子。

「きゅい、二人ともイルククウをほったらかしにしてなんなのね
!きゅいっ」

「……………」

どうやら忘れられていた事に不満を持つ喋るドラゴン。
そういえば韻竜の事、すっかり忘れていた。
するとタバサがドラゴンの前に立った。

「な、なんなのね……………」

「これから、喋るの禁止」

「どうして」我々人間は、韻竜が絶滅したと思っている。騒がれた
ら面倒「!?!」

タバサは、韻竜に対して注意事項を言った。

「どうして分かったのね」

「目が違う」

「当然なのね。お馬鹿な風竜なんかとは、頭の中身が違うのね。わ
たしたち韻竜の眷属は「言語感覚に優れ、先住魔法を操る」先に言
わないでほしいのね」

胸を張って威張る韻竜。

「じゃあ、そんな偉大な韻竜なわたしに、しゃべるな、ということがどんな意味を持つのかわかるわよね？」

ドラゴンが澄ました顔をしていた。でもタバサは……。

「な、なんなのね……」

タバサの無言の圧迫感が部屋全体に広まってくるのが分かる。
その時、アデルが……。

「まあまあ、折角契約を交わした仲なんだし、仲良くしようじゃないか？」

仲良くと言われて、ちょっと反省している。
するとイルククウが……。

「きゅい！？そっちの人は何者なのね！？精霊が人間に纏わり付いているなんてあり得ないのね！」

「！？？」

そういえば、アデルはさっき先住魔法を使っていた。
そしてアデルは、持っていた杖を見せた。

「それは多分、この精霊の杖が原因だろう」

「精霊の杖？」

「きゅい！その杖から精霊が纏わり付いているのね！」

「！？？」

韻竜は先住魔法を使えるから、精霊を感じるのだろう。

それからアデル達は、アデルの持っていた武器について説明をした。悪魔が作った物には、不思議な魔力を宿している武具があるらしい。ついでにアデルが悪魔だという事をイルククウに喋った。

「アデルの世界は不思議な物ばかり」

「ホントなのね、とても悪魔が作った物ばかりだななんて信じられないのね。おにーさんのところは不思議なのね」

「まあな」

色々あって、イルククウは、私の指示で適当に中庭で休む事となった。

「さて、今日はもう遅いし、寝るとしますか」

アデルがそう言い、私はコクリと頷いた。

アデルは、俺はどこで寝ればいいんだ？と私に言ったら、ベッドに指を差した。

「ベッドですよねタバサさん」

私がコクリと頷いた。

言葉が何故か丁寧になるアデル。

「えっと、タバサさんは何処で寝られるのですか？」

「そこ」

ベッドの方へと指を差すタバサ。

アデルと一緒に良いから。

「一緒に寝る」

アデルは顔を引きつつていた。

「あのタバサさん、俺は別に床でも良いんだが」
「一緒に寝る」

アデルの体温を感じたい。

前にキュルケが行った方法を使ってみた。

「私と一緒に寝るの……いや？」

アデルは俯きながら、一緒に寝てくれるのを承諾してくれた。
私だけの悪魔で勇者様、おやすみなさい。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

イルククウサイド

あのちびっこなんなのね！イルククウの事すっかり除け者にして、
きゅい。

「きゅい、きゅい」
「うわっ、なんだ!？」
「……………」

ちびっこともう一人がいる部屋に乱入してきた。

「きゅい、二人ともイルククウをほつたらかしにしてなんなのね！きゅいっ」

「……………」

どうやら忘れられていた様だった。

二人とも忘れてたみたいなのね。

するとタバサがイルククウの前に立った。

「な、なんなのね…」

「これから、喋るの禁止」

「どうして」我々人間は、韻竜が絶滅したと思っている。騒がれたら面倒「！！」

タバサは、イルククウに対して注意事項を言った。

「どうして分かったのね」

「目が違う」

「当然なのね。お馬鹿な風竜なんかとは、頭の中身が違うのね。わたしたち韻竜の眷属は「言語感覚に優れ、先住魔法を操る」先に言わないでほしいのね」

胸を張って威張る韻竜。

「じゃあ、そんな偉大な韻竜なわたしに、しゃべるな、ということがどんな意味を持つのかわかるわよね？」

シルフィードがどや顔をしていた。でもタバサは…。

「な、なんなのね…」

ちびっこのくせに妙な迫力を持っている。その上、この少女は自分を韻竜だとあっさり見破ったのだ。

この子、実は只者じゃないのかしら…。

その時、アデルが…。

「まあまあ、折角契約を交わした仲なんだし、仲良くしようじゃないか？」

アデルに仲良くと言われて、タバサは反省している様子。するとイルククウが…。

「きゅい！？そっちの人は何者なのね！？精霊が人間に纏わり付いているなんてあり得ないのね！」

「！？」

そう、人間が精霊と共にいる事はない筈なのに、アデルの傍に居る事に疑問を持った。

そしてアデルは、持っていた杖を見せた。

「それは多分、この精霊の杖が原因だろう」

「精霊の杖？」

「きゅい！その杖から精霊が纏わり付いているのね！」

「！？」

杖から精霊を感じる。精霊を集めて魔法を使うという使い方を聞いて唖然とした。

それからアデル達は、アデルの持っていた武器について説明をした。悪魔が作った物には、不思議な魔力を宿している武具があるらしい。ついでにアデルが悪魔だという事をイルククウに喋った。

「アデルの世界は不思議な物ばかり」

「ホントなのね、とても悪魔が作った物ばかりだななんて信じられないのね。おにーさんのところは不思議なのね」

「まあな」

色々あってわたしは、ちびっこの指示で適当に中庭で休む事となった。

それにしてもあのおにーさん、悪魔の割に結構話せるのね、きゅい。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

キュルケサイド

「ようやくあの子にも、恋をする様になって、友達として嬉しいわ」

まだ勘違いをしているキュルケ。

「それにしても、タバサに続いてルイズにも人間が召喚されるなんて、…明日ちよつとからかってみよ」

ルイズの召喚したサイトを手にしてみようと考えていた。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

コルベールサイド

夜分遅くまで図書館で調べ物をしているコルベール。

「ミス・タバサとミス・ヴァリエールの二人が人間を召喚するなんて前例は…無いですね。それにミス・タバサはドラゴンと一緒に召喚したのだって前例も…無いですね」

今回の使い魔召喚で、ありえない事が多かった為、調べても解らず仕舞いでした。

「それに、私には読めなかった筈なのに、ミスタ・アルマースの左手に刻まれたルーンを「イーヴァルデイ」と読んだ事から、彼はルーン文字に精通しているのかな？明日彼に、ミス・ヴァリエールの使い魔のルーンを見て貰う事にしよう」

サイトのルーンが解らずにいて、それを解明しようとして徹夜するコルベールであった。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

ルイズサイド

「なんで私の使い魔が平民なのよ。同じ人間なら、あの子の使い魔の様なメイジがよかったわ」

ルイズはサイトを召喚した事で、不満に満ちていた。

「じゃあ早く俺を元の場所に戻してくれよ」

「無理よ、そんな魔法無いわよ」

「あっさり言っなよ」

こちらの方はこんな感じで夜が更けていくのであった。

それぞれの夜（後書き）

結構グダグダになってしまいました。

朝と授業の出来事（前書き）

召喚されて翌日です。

単身赴任でしばらく更新できません。

朝と授業の出来事

アデルサイド

俺は、夜明け前に目が覚めた。

何故こんなに朝早くに起きたのかと言うと、鍛錬をする為だ。

といっても転生する前からの習慣だから、いつもの様に行くだけだった。

ふと、一緒に寝ていたタバサの方を見ると、可愛らしく寝息を立てていた。

起こしてはまずいと思い、そっと部屋を出て、外に出た。

庭に出た俺は、鍛錬を始めた。

体術はいつも通りにこなし、剣術は直ぐに慣れ、槍や斧も扱えるようになった、

弓の腕はちよつと慣れが必要になった、銃は音が凄そうなのでこの時はやらなかった、技は初級のしか使えなかった

（この時知ったのは、拳：三連撃・剣：一文字スラッシュ・槍：疾風迅雷・斧：岩石くだきくらいでした）。

魔法の訓練も行ったら、精霊達が教えてくれたので、直ぐにスクウエアクラスの實力が出せる様になった。

デイスガイアの魔法は全属性が使える事が分かった（この時の魔法は、ファイア・クール・ウィンド・

スター・ヒール系の一段落目の五つと、状態異常回復・状態異常発生・能力値上昇・能力値低下の範囲は単体から三列程）。

先住魔法の方も、精霊達に協力してくれて、辺りの精霊と契約して自在に使える様になった。

変身の方も、試しに犬になってみたら、問題無く犬になった。

元に戻って色々とおさらいしようとしたら、朝日が出てしまったの

で朝の鍛錬は此処までにしようと、
タバサの部屋に戻ったら、既に起きているタバサと目が合ってしまった。 気まずい空気だったので、
朝の挨拶をした。

「た…タバサ、…おはよう…」

するとタバサは、泣き出した。
えっ！？何で泣きだすの！？？

「…よかった。…夢じゃなかった」

ああ目を覚ましたら、俺が居ないと思ったからかな。

「タバサ……なんか、ごめん」

とりあえず謝らないと。

「ううん、それより何処に行ってたの？」

「いつもの日課として、鍛錬に行ってた」

「そう、……これからは一言言ってね」

「ああ」

「無理やり起こしてもいいから、一言言ってね」

「いや、さすがに迷惑がかかるから」

そんなに離れたくないのか、俺を。

それからタバサは、制服に着替えようとしていたので退室しようとしたら、呼び止められて、

「女の子が着替えるのなら側に居ない方がいい」と言ったら、「別に構わない」と言われ遠慮したら、

泣きそうになったので、妥協点として部屋に居て後ろを向く事で了承してくれた。

それから、タバサと一緒に食堂の方へと進んだ、ちなみに今の装備は左脇に薄刃陽炎と腰に精霊の杖。

途中、俺は歩みを止めた。

「どうしたの？」

「タバサ、よく考えたら俺は、貴族の食事方法とか知らないんだけど」

そう、俺の立場からすれば、見た目平民でも魔法が使えるから元貴族だろうとそう思われているので、平民の食事で済ませようとタバサに言ったら。

「…別に気にしない」

いや、君が気にしなくても、周りが気にするから。

「俺はこっちの人達とは違って、悪魔化したおかげで魔法が使える訳だから、基本的には平民と変わらないから」

「……分かった、貴方の分は平民用として賄い飯を用意する様言っておくから、食堂の裏にある厨房の方に行つてて、そこなら他の使い魔達も食事しているから」

「分かった」

「食事が済んだら、庭で待つてて」

「了解した」

そう言つた後、タバサは庭の方へと行つた。

「（シルフィードの所にいったのか？）」

考えをやめて、厨房の方へと行こうとしたアデルの背中に誰かがぶつかって来た。

「ん？」

「あつすみません」

「ちよつとあんた、なにしてんのよ！」

ぶつかって来たのはサイトで、後から来たのがルイズだった。

ルイズはそのまま食堂の方へ行き、俺はサイトの方を、この世界で活躍する主人公を見た。

「えっと、俺の顔に何か付いてます？」

「君は確か、昨日ミス・ヴァリエールに召喚された…」

「はい、何故かそうなっちゃって…」

「そうか、君も召喚されたのか」

「君もって？」

そういつて、アデルは左手のルーンを見せた。

「ええっ、貴方ですか!？」

「同じ使い魔としてよろしくね」

「はっはいこちらこそ！」

同じ境遇の立場として、少しは接してあげたいと思っている。

「俺、平賀才人です。サイトで構いません」

「俺はアデル・ラハール・アルマースだ、よろしくサイト君」

一応年上なので君付けにしました。

互いの自己紹介が終わった後、ルイズが来た。

「ちょっとサイト、早くしなさい！」

「わーっ たよ、それじゃあアデルさん、また後で」

「ああ」

サイトと別れた俺は、賄い飯を貰いに厨房へと向かった

- - - - -
- - - - -
- - - - -

タバササイド

朝になって目が覚めると、アデルに朝の挨拶をしようとしたが。

「おはよう、アデル…!？」

隣で一緒に寝ていた筈のアデルの姿が無かった。

タバサは動揺した。

「アデルが…居ない、まさか…昨日の事は…夢…だったの…」

タバサは泣きそうな顔をして、落ち込んだ。

すると、扉が開いた音が聞こえた方に向くと、そこには昨日召喚したアデルがいた。

「た…タバサ、…おはよう…」

アデルは、気まずそうに言った。

するとタバサは泣き出した。この時アデルは、ちょっと慌てていた。

「…よかった。…夢じゃなかった」

夢じゃなかった事に喜んで泣くタバサ。

「タバサ……なんか、ごめん」

アデルがタバサの様子を見て、申し訳なさそうに謝った。

「ううん、それより何処に行ってたの？」

「いつもの日課として、鍛錬に行ってた」

「そう、……これからは一言言つてね」

「ああ」

「無理やり起こしてもいいから、一言言つてね」

「いや、さすがに迷惑がかかるから」

出来れば、目が覚めた時に貴方の姿を確認しておかないと、不安になつてくる。

タバサはそう思った。

それからタバサは、制服に着替えようとしたが、アデルが退室しようとしてたので呼び止めたら、

「女の子が着替えるのなら側に居ない方がいい」と言われて、少し照れたが「別に構わない」と言ったら、

遠慮して来たので、妥協点として部屋に居て後ろを向く事で了承してくれた。

それから、アデルと一緒に食堂の方へと進んだが、途中でアデルは歩みを止めていた。

「どうしたの？」

「タバサ、よく考えたら俺は、貴族の食事方法とか知らないんだけど」

アデルと一緒に食事したかったタバサは……。

「別に気にしない」

周りの事なんか気にしない感じに言った。

アデルは困った顔をしていた。

「俺はこっちの人達とは違って、悪魔化したおかげで魔法が使える訳だから、基本的には平民と変わらないから」

タバサは少し悩んだ後、

「……分かった、貴方の分は平民用として賄い飯を用意する様言うておくから、食堂の裏にある厨房の方に行つてて、そこなら他の使い魔達も食事しているから」

「分かった」

「食事が済んだら、庭で待つてて」

「了解した」

アデルと別れた私は、韻竜の所に行き、お使いを頼んだ後、食堂へと向かった。

食事中、キュルケが質問して来た。

「ねえタバサ、例の彼とは仲良くなりそう？」

「！？」

一瞬むせそうになったタバサは、キュルケの方に向いた。

「あつ安心して、貴方の思い人には手を出さないから」

キュルケは一応、タバサに遠慮していた。

何だか急に恥ずかしくなったのか、タバサは黙々とハシバミ草を食べていた。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

アデルサイド

「おっあれだな」

アデルは今、厨房を探していた。

そして、それらしい建物を発見した。

「でも念の為に誰かに聞いてみようかな？」

すると、建物の中から黒髪のメイドが出て来た。

「（あの子は…そうだ、確か後にサイトの愛人になるシエスタだっけ？ここが厨房なのか聞いてみよう）…その君、失礼する」

「はい、何でしよ…」

シエスタが突然固まった。

「も、申し訳ありません！あの私…貴族様に何か失礼な事を……」

突然何を言い出すんだこの子は…。

アデルを見て怯えているシエスタは、目線が下の方を向いていた。
ああ腰にある杖を見て、俺が貴族だと思っているのか。

アデルは直ぐに訂正した。

「言っておくが、杖を持つてはいるが、貴族ではないぞ」

「えっ！？そうなんですか！？」

「ああ、今の俺は魔法が使えるだけの…ただの平民であり、タバサの使い魔だ」

「使い魔？」

シエスタは少し考えて、ふと思い出した事があった。

「！？じゃあ貴方が昨日ミス・タバサに召喚されたメイジなのですか！？」

「ああ、もう噂になっているのか」

「はい、平民とメイジが使い魔になるなんて初めてのことですから」

「そりゃそうだろうな」

「それでミスタは、私に何か御用ですか？」

「あつすまん、厨房はここであっているのか？」

「はいそうですが、何か御用ですか？」

「賄い飯はここで食べる様にと言われたので」

「食堂じゃ駄目だったのですか！？」

「いや、自分から遠慮して、平民と同じ物を食べたいと頼んだ」

「…分かりました。ではマルトーさんにこの事をお伝えしますね」

そう言つてシエスタは、厨房の方へ戻つて行つた。

それからマルトーさんに事情を話して、賄い飯を貰つた。

マルトーさんは最初に嫌そうな顔をしていたが、話してみれば結構
気の良い人だったので、

貴族の位を無くして初めて平民の苦勞が分かったと言ってみたら、
マルトーさんは…。

「くう、そう言ってくれるのはアンタくらいだぜ！」

マルトーさんとは仲良くなった。

食事中、ある野菜に手を出したら…。

「あつ、それは…」

シエスタが止めようとしていたが既に遅く、黙々と食べた後…。

「うまい。こんな野菜初めて食べた」

「えっ!?!」

アデルが食べたのはハシバミ草だった。アデルは基本的に好き嫌
いしないタイプだった。

食事を終えた俺は、サイト君にあげるパンを持って、食堂出口の庭
で待ってた。

すると、物足りなさそうな顔をしたサイト君が、食堂から出て来た。

「どうしたんだサイト君!?!」

理由は知っているけど、一応聞いてみた。

「いや、パンとスープだけじゃ物足りなくて…」

やっぱな…パン持ってきていてよかった。

「サイト君、よかつたらこのパン、いくつか食べるかい？」

「いいんですか！？こっちに来てから優しくしてくれる人がいるなんて、やっぱアデルさん良い人だ！」

そっそここまで言われると、ちょっと照れ臭いなあ。
するとそこに…。

「ちょっと、人の使い魔に餌あげないでよね！」

ルイズが怒鳴り声をあげてやって来た。
俺はこの時、苛立ちを覚えた。

「餌って、使い魔だからってペットの様な扱いをするなよ！」

「アンタだって使い魔じゃない」

「使い魔だろうと何だろうと関係あるか！人をペット扱いしてる時点で、君は貴族の意味を勘違いしただけの、ただの横暴娘だ！」

「なっ、何ですってー！！！！？」

俺は感情的になり、ルイズを挑発していた。

俺の後ろにいるサイト君は、俺とルイズを交互に見て、あたふたしていた。

しかも、ルイズの後ろにタバサとキュルケがいた。

「いいいい、いい度胸じゃあない、こっこの私を、おおおっお
お横暴、むっむむ娘ですってー！！！！？」

ルイズは俺に杖を向けて来たので、加速装置で瞬時にルイズの下まで行き、杖を奪って、
直ぐに元の位置に戻った。

「あつあれ！??杖が無い!？」

「これに懲りたら、貴族としての認識を改める事だな」

俺は、ルイズの杖を見せながら注意した。

この場にいた皆は、啞然としてアデルを見ていた。

「ちよつ、ちよつと納得いかないわ!」

ルイズは当然、納得がいかずにいた。

「一体何があつたのかしら?タバサ、貴女は見えたかしら?」
「分らない」

「貴女でも分からないなんて、すつごく早かつたのね。彼はスクウ
エアクラスかしら、うゝん…タバサの思い人じゃなかったら、アプ
ローチしていたわね」

「!？」

「じよ、冗談よタバサ、本気にしないでね」

「……………」

「あつタバサ、もしかして怒ってる？」

「（あの動き、魔法を使っていなかった。あれも悪魔の力だと言う
の）」

「あのゝ、タバサゝ、聞いてる？」

いつもの様に振る舞うキュルケと、瞬時に動いたアデルの動きが気
になるタバサ。

「すっげーなアデルさん、どうやって取ったんだ今の」

アデルに興味津々なサイトであつた。

これ以上時間かかると面倒だな。

「どうでもいいが、授業の方は大丈夫なのか？」

「「「あっ！？」」」

この一言で、この場にいたルイズ達は、急いで教室に向かうのであった。

「サイト早くしなさい、授業に遅れるわ！」

「へーい、それじゃアデルさん、またあとで」

「ああ」

ルイズ・サイトが教室の方へ向かった。

「貴方がタバサの使い魔ね、素敵な殿方ね」

「君は？あつ、私はアデル・ラハール・アルマースです」

知ってるけどね。

「あたしはキュルケ・アウグステ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツエルプストー。キュルケでいいわ」

「キュルケか、タバサとは仲良しの様だが？」

「ええ、あたしとタバサは親友よ」

タバサはコクリと頷いた。

「それじゃあタバサ、先に行ってるわ」

タバサがコクリと頷いた後、キュルケも教室に向かった。

「アデル」

「待ったかタバサ」

「行こう、アデル」

「ああ、タバサ」

教室に着いたタバサ達は直ぐに席に着いた。

教室の中は、使い魔を連れているので、ちょっとした触れ合える動物園みたいになっていた。

そういえば、朝からイルククウを見てないな、まだねてるのかな？
ちなみに俺はタバサの後ろに立っている。タバサからは座って良いと言われたが、いざという時に動きやすい様にした方が良いと言ったら、タバサは照れて分かったと言っていた。

後、サイト君は床に座っていた。

しばらくすると、ふくよかなお姉女性、シュヴルーズ先生が入って来た。

「皆さん。春の使い魔召喚は、大成功のようですね。このシュヴルーズ、こうやって春の新学期に、様々な使い魔たちを見るのがとても楽しみなのですよ」

シュヴルーズ先生は、教師らしく生徒達に挨拶をした。

先生が教室を見渡していると、俺とサイト君に気付いた様だ。

この時ルイズは、俯いていた。

「おやおや、ミス・ヴァリエールにミス・タバサ。珍しい使い魔を召喚したんですね」

シュヴルーズの一言により、教室が笑いに包まれた。

「ゼロのルイズ！召喚できなかったからって、その辺歩いてた平民を連れてくるなよ！」

「違うわ！ちゃんと召喚したわよ！そしたらこいつが来ちゃっただけよ！」

「嘘つくな！サモン・サーヴァントができなかったんだろっ？」

知っていても、この内容はカチンと来るもんだな。

先程から中傷的な発言をしていたデブ…マリコルヌは、矛先をタバサに向ける。

「そういえば、タバサも平民を召喚してたな！お前もゼロのルイズの仲間入りか？みつともないなあ、トライアングルのくせに！」

タバサはこれを完全に無視していたが、さすがに我慢の限界が来てたから、少し脅してみた。

そう思い、俺は瞬時にマリコルヌの後ろに立ち、肩を叩いた。

「あまり俺の主人に暴言を吐くな！」

「うわっ！？いつの間に！？」

周りが騒然としていた。

「お前は少し黙っている、次はないぞ！」

「なっなんだよ、貴族の位を無くした没落貴族のくせに、貴族の僕に逆」「聞こえなかったのか？俺は黙れと言ったんだ！」ひいひい！！！！」

少し殺気を出し、マリコルヌを強制的に黙らせた。
そしてシュヴルーズ先生の方に向けた。

「ミセス・シュヴルーズ、授業を始めてください」
「はっはい！？では皆さん、授業を始めましょう」

アデルは笑顔でそう言った後、タバサの所まで戻って行った。
この時の知り合いの心境は…。

「（すげー！一瞬で移動したな。あれも魔法かな？）」

「（あのムカつくメイジって、あんな事出来たの！？今のつて遍在^{ユニバース}？いずれにしても、スクウェアアークラスなのかしら？というか、そんなすごい使い魔なら、何で私の所に来なかったのよ！）」

「（すごいわ彼、あんな一瞬で移動できるなんて、タバサのじゃなかったら間違いなく恋をしていたわね）」

「（さっき見たのと同じで、一瞬で移動したあの動きは、やっぱり悪魔の力によるものだろうか？それに今の殺気は、相手を射殺せる程鋭かった）」

上から、サイト・ルイズ・キュルケ・タバサの心境でした。

そして授業は、錬金の講義が行われた。

「私の二つ名は赤土のシュヴルーズです。これから一年、土系統の魔法を皆さんに講義しますわね。さて、魔法の四大系統はご存知です
ね？ミスタ・マリコルヌ」

「は、はい。ミセス・シュヴルーズ。火・水・土・風の四つです！」

「はいその通りです。今は失われた系統の虚無を合わせて五つの系統がある事は、皆さんも知っての通りです。その中で土の魔法は最も重要なポジションを占めていると私は考えます。これは私が土の系統を使うから、と言う訳ではありません」

シュヴルーズは咳払いをして続ける。

いや、思いつきり自分の系統を自慢したいんじゃないのか？とアデ

ルは思った。

「土系統の魔法は、万物の組成を司ります。この魔法が無ければ、重要な金属も作り出せませんし、加工する事も出来ません。大きな石を切り出して建築する事も、農作物の収穫も今より手間取るでしょう。この様に、土系統の魔法は皆さんの生活に密接に関係しているのですよ」

シュヴルーズによる土系統の講義は、去年一年間のおさらいを兼ねていた様で、アデルはなるほど思った。

分かつてはいたけど、魔法至上主義な言い分を聞かされている気分になった。

何で魔法以外で解決してみようとは思わないのかねえ、とアデルは思った。

「今から皆さんには、土系統の魔法の基本である錬金の魔法を覚えて貰います。一年生の時に出来る様になった人もいるでしょうが、基本は大事です。もう一度おさらいする事に致しましょう」

シュヴルーズは教卓の上に石ころを置き、その石に向かって魔法を唱える。

すると、石ころは光りだし、光が治まるとピカピカ光る金属に変わっていた。

「ゴゴ、ゴールドですか？ミセス・シュヴルーズ」

キュルケが目の色を変えて立ち上がった。

「いいえ、これは真鍮です。ゴールドを錬金出来るのはスクウェアクラスのメイジだけです。私はただの…」

シュヴルーズは、そこで勿体ぶる様に言葉を溜めて…。

「トライアングルですから」

絶対自慢してるよこの先生。

一応知っているが、タバサにトライアングルって何だろうと質問してみた。

「タバサ、スクウェアとかトライアングルってなんだ？」

「系統を足せる数の事、それでメイジのレベルが決まる。例えるなら、土以外にも火等の系統を足せば、さらに強力な魔法になる。種類が一つだけだとドット、二つだとラインになる」

「つまり、使える系統が三つあるからトライアングルと？」

「そう。ちなみに、土・土・火と同じ系統があるなら、その系統がより強力になる」

「なるほど。俺の所で言うと、メガクラスがラインクラスで、ギガクラスがトライアングルクラスと言う事が」

「？…メガ？…ギガ？…」

「俺の所の魔法は、最高で四段階までの魔法を扱う事が出来るから、一段階目はこっちで言うドットクラスというのかな？」

「なるほど。今度使って見せて」

「もちろん」

デイスガイアの魔法のレベルをタバサに教えた。

ちなみに、ルイズ・サイトの方でも、同じ事を質問していた。

「ミス・タバサ、ミス・ヴァリエール、授業中に私語は慎みなさい！おしゃべりをする暇があるのなら、貴女達にやって貰いましょう」

『！？』

タバサの方はアデル、ルイズの方はクラス全員が驚いた。
あれ？確かこの時って、ルイズに指名するんじゃないかったわけ？
アデルはシュヴルーズに質問した。

「ミセス・シュヴルーズ、タバサの分は、私が代わりに行ってもかまいませんか？」

「ええ、構いませんよ」

周りはまた騒然としていた。
するとタバサは心配そうに言った。

「大丈夫なの？」

「ああ、安心してくれ」

そう言ったアデルは、教卓の上に立った。
そして精霊の杖を出し、石ころに向けた。

「（精霊達よ、この石を金に変えたまえ）」

すると、石ころは光りだし、光が治まるとピカピカ光る金属に変わっていた。

「はい、ありがとうございましたミスタ。見事な真鍮…あれ！？み…ミスタ…これは！？」

「一応ゴールドにしました」

『ええーーーーー』

うるたえるシュヴルーズに対して、あっけらかんと答えたアデルに対して、クラス中騒然とした。

「石ころを金にするなんて、あの男スクウェアアクラスか!？」

「タバサはトライアングルなのに、使い魔はスクウェアなんてすごいじゃない!？」

「さつきは遍在で、今度は金にするなんて、ありえないって!？」

ここまで騒がれるとはな、ちょっとやり過ぎたか？

やや反省気味なアデルでした。

ちなみに、タバサ達の心境は…。

「（鍊金を問題無くこなしている、少し心配だったけど杞憂だった）」

「（きやあゝアデルってば、ゴールドに鍊金するなんて、タバサから頼めば鍊金してくれないかしら?）」

「（さっきのおばさんは真鍮にしたからトライアングルで、アデルさんはゴールドにしたからスクウェアなのか、アデルさんで、やっぱすげー!）」

「（やっぱリスクウェアアクラス!…圧倒的じゃない!）」

上から、タバサ・キュルケ・サイト・ルイズの心境でした。

「それではミス・ヴァリエール、貴女もやってみましょう」

シュヴルーズがそう言った瞬間、生徒たちの顔が真っ青になった。

「あの先生、危険ですからやめておいた方がいいですわ」

「危険?どういう事です?」

やっぱ止めに入るよな。

キュルケが先生に説明している。

「ルイズを教えるのは初めてですよね？」

「ええ。あまり実技の成績が良くない事は存じています。しかし、座学に関しては学年首席であると、非常な努力家である事も存じております。さあミス・ヴァリエール、気にせずに行ってごらんなさい。数多くの失敗から、成功は生まれるものです。」

「ルイズ、やめて！」

キュルケが蒼白な顔で言う。

するとルイズは緊張した顔で立ちあがった。

「やります！」

そう言うのと、ルイズ教室の前まで歩いて行った。

うゝん念の為、俺とタバサとキュルケとサイト君にマジックバリアを張って、ルイズにはマジックダウンをかけておこう。

「「！？」」

タバサとキュルケは、体に何か違和感を感じた。

「よろしい。ではミス・ヴァリエール。錬金したい金属を、強く心に思い浮かべるのです」

そう言われルイズは目を閉じ、短くルーンを唱えようとした。

その瞬間、クラス中の生徒達が一斉に机の下に避難した。

そして、タバサがアデルの服を引っ張った。

「ん、どうしたタバサ？あれ、何故他の皆は隠れているんだ？」

「危険、隠れたほうがいい」

やっぱこう、ドキドキ感があるよな、この場面。
一応理由は知っているがを聞いてみよう。

「何で隠れるんだ？」

「早く、危ない」

言われた通りに、机の下に隠れる。

そしてルイズは、石ころに向けて杖を振った。

その瞬間、机の上にあった石ころの部分に、少し穴が空いた程度の爆発が起きた。

シュヴルーズは少し驚いて後ずさっていた。

ルイズ自身も少し驚いていた。

そんな中、アデルは…。

「（どうやら、成功したみたいだな！）」

先程かけた魔法防御と魔力低下の魔法が効いていた様だ。

「あれ？いつもより爆発の規模が小さいな？」

「今日は少しマシな方か」

「だから言ったのよ！あいつにやらせるなっ！」

ルイズを非難し続ける生徒達に対して、ルイズは…。

「ちょっと失敗みたいね」

そう言ったら…。

「ちょっとじゃないだろ！ゼロのルイズ！」

「いつだって成功の確率ほとんどゼロじゃないかよ！」

それを聞いたサイトは…。

「あいつがゼロのルイズと呼ばれる訳がよく分かった」

と思っていた。

アデルは、タバサに質問していた。

「なあタバサ、あの子の魔法はいつもああなのか？」

「……（コクリ）」

タバサは、無言で頷いた。

くどい様で悪いけど、内容は知っているが、一応知らないと言う事にした。

その後、ルイズとサイトは、教室の後片付けと掃除をやらされた。手伝おうかと言ったら、サイト君は嬉しそうな顔をしたら、ルイズがそれを拒否した。

朝と授業の出来事（後書き）

次回は決闘編です。

貴族対平民（前書き）

やっと戻って来れました。久しぶりの更新です。

二話続けます。

後最近フェアリーテイルにはまり、書いちゃいましたので、またしばらく更新できません。

貴族対平民

コルベールサイド

ミスタ・コルベールは魔法学院に奉職して二十年の中堅教師である。二つ名は「炎蛇のコルベール」、火系統の魔法を得意としている。彼は今、先日に行われた春の使い魔召喚の際に、ルイズとタバサが召喚した平民とメイジの二人の左手に現れたルーンの事が気にかかった。両方ともに見たこともないルーン（メイジの方はイーヴアルディと言っていたが）。それが気になってしょうがない為、昨夜から図書館に籠っていた。しかし、ルーンと同時に気になった事もある。それはタバサの使い魔の青年だ。

「彼は、桁違いの魔力を持っていた」

コルベールは、アデルが召喚した際にディテクト・マジックを使ったら、凄まじい魔力が渦巻いていたからだと分かったから。

「おそらく彼は、かなりの使い手……それもとてつもなく」

見た事の無い武器を持つメイジ、異国の者だと思わせる服装、もしかしたらこの図書館にその秘密が隠されてるやもしれない……そう思い、コルベールはルーンを探すと同時に彼の武器や衣服が書かれていそうな文献を探していた。

しかし、それらしき文献は見つからず、諦めてルーンのこと集中することにした。

そしてなんと偶然か、彼は求めている答えが載っている文献をみつけた。

「……こ、これは!!、それに、こちらも……ともかく、学院長に報告しないと!」

コルベールは本を軽く読んだ後すぐにレベーションで地面に降りた。そしてすぐさま学院長室へと走っていった。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

オスマンサイド

トリステイン魔法学院の学院長を務めるオスマン氏は退屈をもてあましていた。

しばらくぼんやりと鼻毛を抜いていたが、すごくして引き出しから水ギセルを取り出した。

しかし、吸おうと口に近付ける前に秘書のミス・ロングビルが羽ペンを振り、水ギセルを取り上げる。

「年寄りの楽しみを取り上げて、楽しいかね? ミス……」

「あなたの健康を管理するのも、わたくしの仕事なのですわ」

オスマン氏は立ち上がり、椅子に座ったロングビルの後ろに立つ。

「こつ平和な日々が続くと、時間の過ごし方と言うものが、何より重要な問題になってくるのじゃよ」

立派に聞こえるが、要するに暇なのだ。

「オールド・オスマン」

「なんじゃ？ミス……」

「暇だからといって、わたくしのお尻を撫でるのはやめてください」

そんなロングビルをよそに、オスマンはその辺をふらふらと歩き始める。

「都合が悪くなるとボケた振りをするのもやめてください」

どこまでも冷静な声で、ミス・ロングビルが言った。オスマンはため息をついた。深く、苦悩が刻まれたため息であった。

「真実はどこにあるのじゃろうな、考えたことはあるかね？ミス……」

「さあ、私には解りません。ですが少なくとも私のスカートの中には無いので、机の下にネズミを忍ばせるのをやめて下さい」

ミス・ロングビルのセリフに、悪びれる様子もなく自らの使い魔の名を呼ぶ。

「気を許せる友達はお前だけじゃ、モートソグニル」

机の下から、小さなハツカネズミが現れ、オスマン氏の肩に乗っかる。

オスマン氏はナッツを手に取り、使い魔に問う。

「まずは報告じゃ。モートソグニル」

「ちゅうちゅう」

「そうか、白か。純白か。うむ。しかし、ミス・ロングビルは黒に限る。そうは思わんかね。可愛いモートソグニルや」

ミス・ロングビルが立ち上がる。

「オールド・オスマン」

「なんじゃね？」

「今度やったら、王室に報告します」

はあー、とため息をつくオスマン。

「カーツ！たかが下着を覗かれたぐらいでカッコしなさんな。そんな風だから、婚期を逃すのじゃ」

ミス・ロングビルの中で何かが切れた。

彼女はオスマンを蹴りつけようと足を上げ、振り下ろす瞬間。

「オールド・オスマン！」

勢いよくドアが開かれ、コルベールが飛び込んできた。

「なんじゃね？」

ミス・ロングビルは何事もなかったように机に座り、オスマン氏は腕を後ろに組んで、重々しくコルベールを迎えた。凄まじい早業だった。

「たた、大変です！」

「大変なことなどあるものか。すべては小事じゃ」

「ここ、これを見てください」

コルベールは、持ってきた書物を手渡した。

「これは、始租ブリミルの使い魔たちではないか。まーたこのような古臭い文献など漁っておったのか。ミスタ……、なんだっけ？」

「コルベールです！お忘れですか！」

「そうそう、そんな名前だったな。君はどうも早口でいかんよ。で、コルベール君。この書物がどうかしたのかね？」

「これも見てください！」

もう一つ手渡したのは、サイトとアデルの手に現れたルーンのスケッチだ。

それを見た瞬間、オスマンの表情が変わる。

「ミス・ロングビル。席を外しなさい」

ミス・ロングビルは立ち上がり、部屋を出ていく。彼女の退室を見届け、オスマン氏は口を開いた。

「詳しく説明するんじゃ。ミスタ・コルベール」

- - - - -
- - - - -
- - - - -

タバササイド

ルイズのいつもの爆発で、授業は終わった。でも、やっぱり気になる。アデルの一瞬で移動する動きと、金へと

アデルサイド

確かこの後、ギーシュと決闘するイベントがあったから、戦う前に介入して、サイト君の能力を覚醒させとかないと。

そう思ってたなら、タバサがやって来て、授業の時に使った加速装置と錬金の事で質問があった。

とりあえず、通じる様に答えた。

「ああそれは、精霊達に頼んだから、あんな風に出来たんだ」

タバサは、なるほどと何処か納得していた。

「授業中、私に何をしたの？」

タバサ達にマジックバリアをかけた事を言っているのかな？

「それは、タバサとキュルケとサイト君に魔法防御をかけたからだよ。ちなみにルイズは魔力低下をした」

タバサは驚いた顔をしていた。

「聞いたかった事はそれだけかい？」

「うん、アデルはこれからどうするの？」

「部屋に戻って、精神修行でもしようかなと思ってる」

「分かった」

そして俺は、タバサの部屋に戻った。

少し精神修行した後、ふと本棚にある、イーヴァルディの勇者と書

かれてる本があつた。

「タバサの憧れか……」

何気に読んでみた。面白い。

時間が過ぎて行き……。

すると外が騒がしい様な……。

「やべっ！もう決闘始まってんのか！？急いで行かないと！」

本を置いて窓から飛び出し、加速装置でヴェストリ広場へと急いだ。
ちなみに今の装備は、薄刃陽炎と精霊の杖。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

オスマンサイド

コルベールは、図書館での事をオスマンに説明した。

「なるほどのー。それで始祖ブリミルの使い魔、ガンダールヴに行き着いたという訳じゃね？」

「そうです！あの少年の左手に刻まれたルーンは、伝説の使い魔ガンダールヴに刻まれていたものと全く同じであります！」

「で、君の結論は？」

「あの少年は、ガンダールヴです！これが大事じゃなくて、何なんですか！オールド・オスマン！」

「ふむ……。確かに、ルーンが同じじゃ。ルーンが同じという事は、

ただの平民だったその少年はガンダールヴになった、という事になるんじゃないかな」

「どうでしょう」

「しかし、それだけで、そう決めつけるのは早計かもしれん」

「それもそうですな」

そんな時、ドアからノックの音が聞こえた。

「だれじゃ？」

「私です。オールド・オスマン」

その声はロングビルだった。

「なんじゃ」

「ヴェストリの広場で、決闘をしている生徒がいる様です。大騒ぎになってます。止めに入った教師がいましたが、生徒たちに邪魔されて、止められないようです」

「まったく、暇をもてあました貴族ほど、性質の悪い生き物はおらんわい。で、誰が暴れておるんだね？」

「一人は、ギーシュ・ド・グラモン」

「あのグラモンとこのバカ息子か。親父も色の道では剛の者じゃったが、息子も輪をかけて女好きじゃ。おおかた女の子の取り合いじやろう。相手は誰じゃ？」

「それが、メイジではありません。ミス・ヴァリエールの使い魔の少年の一人のようです。教師たちは、決闘を止めるために“眠りの鐘”の使用許可を求めています」

「アホか。たかが子供のケンカを止めるのに、秘宝を使ってどうするんじゃ。放っておきなさい」

「わかりました」

そう言つてミス・ロングビルが離れていく。それを確認し、今度はコルベールが口を開いた。

「オールド・オスマン」

「うむ。」

オスマンは杖を振る。すると壁にかかった大きな鏡に、ヴェストリア広場の様子が映し出された。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

サイトサイド

教室で掃除が終わつた後、ルイズをからかったら飯抜きにされて、空腹で倒れそうな所をメイドさん（名前はシエスタ）に助けて貰つて、昼飯を御馳走してくれた。

何か恩返しとして給仕の手伝いをしてたが、あの二股気障野郎が二股がばれた事を俺の所為にしやがった。

なんかムカついたので言い返してたら、決闘を申し込まれた。

喧嘩なら、少し自信があるので大丈夫と言おうとしたら、シエスタは真つ青な顔をして何処かに行つてしまった。

その後ルイズが来て、ギーシュに謝る様に言われたが、無視してヴェストリアの広場に向かった。

それからしばらくして…。

ギーシュのワルキューレによつて、サイトの体はボロボロにされた。

それでも立ち向かおうとするサイト

「才人！お願い。もうやめて」

ルイズがサイトを止めようと駆け寄るが、それを手で制し、立ち上がる。

が、無慈悲に襲いかかってくるワルクューレの前に、サイトは咄嗟に目を瞑った。

そして、いつまでも痛みが来ないと不思議に思っ
て目を開いたら、そこには、ワルクューレの攻撃を剣で受け止めているアデルの姿があった。

「あ…アデルさん」この決闘、物申す！「！？」

アデルは、この決闘に異議を唱えた。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

アデルサイド

「あ…アデルさん」この決闘、物申す！「！？」

何とか間に合ったあ。さてと、フン。

ワルクューレを突き飛ばしたアデルに対してギーシュは…。

「ミスタ、これは決闘です。貴方には関係は」では聞くが、決闘
と言いながら、何故ゴーレムを使用している？「…愚問ですねミス

タ、僕はメイジです。だから魔法でたたか。そっちは魔法を使つて、こっちは丸腰のままで挑んだら、誰がどう見てもこっちが不利だろうが！これはもう決闘じゃない、ただの一方的なリンチだ！それとも君は、丸腰の相手じゃなきゃ勝てないとも言つのか？」なっ！？」

よし、後はこのままサイト君に武器を持たせる様に仕向けてつと。

「もし君が丸腰の相手を一方的に叩きのめす卑怯者なんかじゃなく、正々堂々とした貴族なら、彼に武器を持たせるか、君も素手で挑めばいい。それでフェアになる」

「確かに、ミスタの言う事にも一理ある。しかし、僕は貴族だ。素手の殴り合い等という野蛮な事はしたくない」

計算通り。

「では、彼に武器を与えないと」

そう言つて俺は、サイト君の前に立ち、薄刃陽炎を地面に突き刺した。

「あの…アデルさん！？」

「サイト君、君は何故この決闘を受けたんだ？」

「ムカつくからだ。あいつら、貴族だの何だの言つて無駄に威張りやがるから」

サイトは、半ば愚痴を言っていた。

「確かに、世の中の大半はそういう貴族が多い。しかも、逆らえる者が少ない故に、ああも傲慢になる者も多く存在している。でも君

ルイズの悲痛な叫び声を上げた

その時、サイトの左手に刻まれたルーンが光りだした。
良し、これでサイト君の圧勝で終わるな。

そして、ここから先はサイト無双となった。

「続けるか？」

「ま、参った」

ギーシュは震える声で降参したその瞬間、見物していた生徒たちがざわめいた。

「へ、平民がギーシュに勝った!？」

「ギーシュが負けたぞ!」

などという声が飛び交っている。

サイト君の初めての実戦は成功に終わった。

その後ルイズがかけより、サイトは気絶した。

遠見で一部始終覗いていた学院長とコルベール先生、ちゃんと見て
ましたか？

覗いてる場所は、精霊に聞いて把握した。

とりあえず俺は、サイト君にヒールをかけた。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

オスマンサイド

決闘の様子を遠見の鏡で見ていたオスマンとコルベールは、顔を見合わせた。

「オールド・オスマン」

「うむ」

「あの平民、勝ってしまいましたが……」

「うむ」

「ギーシュは一番レベルの低いドットメイジですが、それでもただの平民に後れをとると思えません。そしてあの動き！あんな平民見たことない！やはり彼はガンダールヴ！」

「うむむ……」

「オールド・オスマン。さっそく王室に報告して、指示を仰がないことには……」

「それには及ばん」

オスマンは、重々しく頷いた。

「どうしてですか！？これは世紀の大発見ですよ！現代に蘇ったガンダールヴ！」

「ミスタ・コルベール。ガンダールヴはただの使い魔ではない」

「その通りです。始祖ブリミルの用いたガンダールヴ。その姿形は記述がありませんが、主人の呪文詠唱の時間を守るために特化した存在と伝え聞きます」

「そうじゃ。始祖ブリミルは、呪文を唱える時間が長かった……その強力な呪文ゆえに。知ってのとおり、詠唱時間中のメイジは無力じゃ。そんな無力な間、己の体を守る為に始祖ブリミルが用いた使い魔がガンダールヴじゃ。その強さは……」

オスマンの言葉をコルベールが続ける。

「千人もの軍隊を一人で壊滅させるほどの力を持ち、あまつさえ並のメイジではまったく歯が立たなかったとか！」

「で、ミスタ・コルベール」

「はい」

「その少年は、本当にただの人間だったのかね？」

「はい。何処から如何見ても、ただの平民の少年でした。ミス・ヴァリエールが呼び出した際に、念のためディテクト・マジックで確かめたのですが、真正正銘、ただの平民の少年でした」

「そんなただの少年をガンダールヴにしたのは、誰なんじゃね？」

「ミス・ヴァリエールですが……」

「彼女は優秀なメイジなのかね？」

「いえ、というか、むしろ無能というか……」

「さて、その2つが謎じゃ」

「ですね」

「無能なメイジと契約した、ただの少年が何故ガンダールヴになったのか。まったく謎じゃ。理由が見えん」

「そうですね……」

「とにかく、王室のボンクラ共にガンダールヴとその主人を渡すわけにはいくまい。そんなオモチャを与えてしまつては、また戦でも引き起こすじやろつて。宮廷で暇をもてあましている連中はまったく、戦が好きじゃからな」

「ははあ。学園長の深謀には恐れ入ります」

「この件は私が預かる。他言は無用じゃ。ミスタ・コルベール」

「は、はい！かしこまりました！」

オスマンは一息つくと再び遠目の鏡に目をやった。
その瞬間……

「いかん……！」

目を見開き、叫んだ。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

アデルサイド

アデルは、気絶したサイトを運ぼうとしたその時。

「!?(何か来る!)」

直感でそう思い、咄嗟にサイトとルイズを抱えて横に避けた。
すると、突風に近い何かが通り過ぎた。

「な…何なの!？」

「全く、もう少しでその無礼な平民を始末できたのに」

その声に振り向くと、観客の一人が前に出てきた。

「ヴィリエ！君は一体何をするんだ!？」

そう言ったのはギーシュ。

「何を？決まってるじゃないかギーシュ。君の汚点を消してあげようとしたまだよ」

そこに現れたのは、ヴィリエ・ド・ロレーヌ。かつてタバサに挑み、
返り討ちにあった男。

ヴィリエって確か、タバサにちよつかい出して、返り討ちにあった
噛ませ犬だっけ？つーか、こんな展開は原作の方には無かった筈だ
けど？

「やめるんだ！たとえ彼を殺したとしても、僕が彼に負けたという
事実は消えない。これ以上僕の顔に泥を塗るんじゃない！」

「君が負けた？それは違う。あの平民が勝つことが出来たのは、あ
の男の剣があつたからだ。あの平民の力じゃない」

「それは決闘を公平にする為のものだ。その結果、僕は負けた。だ
から、その事を負けた言い訳にするつもりは無い！」

「いいかい？権力や財力も実力の内さ。あの平民は剣を持ってなか
った。それが、あの平民の実力だよ」

「そんなの、敗者の言い訳に過ぎない！いいから止めるんだ！」
「うるさいんだよギーシュ！」

そう言つて、ヴィリエは杖を振る。

「ひっ！？」

「（まずい！）」

ヴィリエのエア・ハンマーが、ギーシュを襲った。

「……あれっ？」

いつまで経つても痛みが来ないと思ったら、そこにアデルがいた。

「もういいんじゃないのか？」

「なんだと、そういえば貴様はミス・タバサの使い魔だったな。そ
もそもアンタが平民に剣を与えたから、貴族の恥さらしが出てしま
ったんじゃないか！」

俺は、こうゆう様な奴が心底嫌いだった。

「お前は、さっきの様に一方的にリンチにするのが正しいと言いたいのか？」

「当然だろ。貴族は選ばれた存在なんだよ。平民はその貴族に仕えさせて貰えるだけでも光栄な事なんだ。けど、あの平民は貴族に楯突いたんだ。選ばれた存在である貴族にだ！そんな平民なんて、死んで当然なんだよ。まあ、貴族の常識が無いミス・タバサの使い魔にこんな事言っても解らないだろうがな」

この時アデルは、心の底から怒りに満ちていた。こいつは今、言うてはいけない事を言いやがった。タバサの事を馬鹿にしやがった。

もう勘弁しねえ、説教だけにしようと思ったが、こいつには徹底的にぶちのめしてやる（死なない程度に）。

「くだらねーな！」

「なんだと！」

「くだらねえと言ったんだよ三下！」

「なっ！？貴族に向かって三下だと！」

「さっきから何かと言うと貴族貴族って、お前らはそれしか言えないのか木偶の坊！」

「で、木偶だと……どうやら貴様も解らない様だな、貴族に逆らうとどうなるか、思い知らせねばな！」

臨戦態勢を取ろうとするヴィリエ。

この時アデルは、薄刃陽炎と精霊の杖を地面に置いた。

「な、何の真似だ！？」

「お前の様な格下のガキに、武器など必要無い！」
「か、格下だとお、もう許さん！」

ピンポイントバリアを右腕にしてっと。

「喰らえ！」

ヴィリエのエア・ハンマーが発動し、アデルに向かった。だが…。

「ハアッ！」

アデルは裏拳の要領で、エア・ハンマーを弾き返した。
へえ、ピンポイントバリアってこういう使い道もあるんだな。

「な、なにに！？僕のエア・ハンマーを素手で弾くなんて！？」
「どうした？あれだけ粹がっておきながら、あっさり終わらせてくれるのか？」

「くっ、まだまだー！」

「無駄だ！」

ヴィリエは連続でエア・ハンマー打ち続けていた。
ピンポイントバリア（右腕）で、エア・ハンマーを弾き返した後、
ピンポイントバリアを左腕に展開させ、
次のエア・ハンマーを弾き返し、また右腕に展開させて弾き返した、
右へ左へと交互にピンポイントバリアを
展開させては弾き返し続けた。

「な、何で当たらない！？しかも、素手で弾くなんて！？」

俺は徐々に、ヴィリエに近づいていた。

「く、来るなーーーー!?」

アデルは、ヴィリエに必殺技をくり出した。

「ハアアーーーーッ!三ッ!「ブファッ」連ッ!「グエッ」撃イイツ!
!「ガハア!」」

俺はまず、顔面を右ストレートでくり出し、腹に左ボディブローで
ヴィリエを浮かし、止めのサマーソルトキックの三連動作の攻撃、
“三連撃”をぶちかました。

そして蹴り上げられたヴィリエは、そのまま気を失った。
そして同時に、周囲から恐ろしいものを見た様な顔をしていた。

「戦いのたの字も知らないガキが、誰かを傷付けようとしてんじや
ねえー!」」

そう言ったアデルは、その場を立ち去った。
先程の言葉を聞いて、誰もが彼を恐れてしまった。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

オスマンサイド

「……勝って……しまいましたね」
「……うむ」

コルベールとオスマンは、遠見の鏡で一部始終を見ていた。

「最初のガンダールヴの少年にも驚かされましたが……彼はまた一段と驚かされましたな」

コルベールはちよつと興奮気味に話した。が、オスマンは考え込むでいる様だ。

「どうしたんです？ オールド・オスマン。何か不可解な点でも？」

コルベールが気になり、問いかける。コルベールは「ふむ」と呟くと、コルベールに問いかけた。

「のう……ミスタ・コルベール。君から見て、彼をどう見る？」

「もちろん始祖ブリミルの使い魔の再来です！ そして……その相棒イーヴァルディの再来ですぞ！ これはもう興奮して夜も眠れませぬ！」

そう、不思議な事にアデルのルーンであるイーヴァルディは、ガンダールヴと一緒に載っていたのだ。

「イーヴァルディ」その意味は……、

自由自在に武器を振るい、

ありとあらゆる魔法を使う勇敢な戦士、

すべての悪と立ち向かう正義の勇者、

通称、

魔法戦士。

そして、神の左手ガンダールヴの戦友にして、相棒。^{パートナー}

「そう、興奮しなさんな。第一わしが聞いているのはガンタールヴの少年ではなく、イーヴァルディというルーンを持ったメイジの方じゃ」

コルベールは一瞬きよとしたが、瞬時にそんなのを忘れて、

「確かに彼はすごいです！ラインメイジをああも容易く……」

「わしは「炎蛇」としての君の意見を聞きたいのじゃが……」

オスマンが言うと、コルベールは先ほどとは一転して文字通り、蛇のような目になった。

「……私の憶測ですが、おそらく彼は……かなりの修羅場を通っていないだけでできない技です。おそらく彼は、素手で挑めば、一人で傭兵三十人分の戦闘力を持っていると思っても過言ではないでしょう。しかも、彼は本気を出していません」

「うむ……。それにロレーヌはラインメイジで、グラモンより強い筈じゃ。素手のメイジに負ける筈は無いしのう……」

二人は考えた。彼のルーンであるイーヴァルディ。そして素手で挑むメイジ、はたしてその正体とは……？

「まあ、それはおいおい調べれば良いじゃろう。とにかくこのことは他言無用じゃ。特に王室にはのう」

「はて？それはなぜですか？世紀の大発見ですぞ！伝説の使い魔

ガンダールブのルーンを持った少年に、ガンダールヴのパートナー、イーヴァルディのルーンを持ったメイジ！」

「だからじゃ。お主はさっき自分で言ったことを忘れたのか？」

オスマンは諭すようにコルベールに告げる。先ほど言った自分の言葉。それを思い出したらしい。

「たった一人で傭兵三十人の戦闘力、しかも手を抜き、あまつさえ素手で挑んだのじゃ。それが本気になって武器を持ってみたい、おまけにイーヴァルディのルーンまで持つておる。もし、あのルーンが戦闘に特化したルーンじゃったら……どうなると思う？さらには彼は、ガリアの留学生のミス・タバサの使い魔じゃ。下手に荒事を起せばガリアと一戦交えなければならんわい。そうなればトリスティンなんぞ一日もせん内に滅びてしまうわい」

「た、確かに……」

「じゃから、この件は他言無用じゃ。分かったのう？」

「はいっ！」

「しかし、あの男といい、イーヴァルディといい……一体何者なんじゃ？」

「さあ……私も流石にわかりません……」

- - - - -

ルイズサイド

「（ヴィリエと決闘したタバサの使い魔って、あんなに強かったの！??しかも、魔法を使わずに素手で倒すなんて!?!）」

魔法は絶対と考えている貴族にとってはありえない戦いをしたアデルに驚いたルイズであつた。

「あつ、それよりサイトを……」

若干忘れられていたサイトを抱えて自室へと戻って行つた。

- - - - -
- - - - -

ギーシュサイド

「（み、ミスタ・アルマースは、あろう事が素手でメイジを圧勝したなんて。もし、彼が僕と戦っていたら、ヴィリエと同じようになつただろう。彼が只者じゃない事は授業の時によく分かつた。彼は一瞬にしてマリコルヌの後ろに立ったり、石ころを錬金してゴールドにした事から見て、彼は少なくとも土と風のスクウェアメイジなのだろう。出来れば、師と呼べないかな。）」

ひそかにアデルの事を尊敬しているギーシュだつた。

- - - - -
- - - - -

タバササイド

ルイズの使い魔が、ギーシュと決闘している時は興味無かったが、キウルケが引つ張って来たので、仕方なくヴェストリの広場に来たタバサ。

しばらくして、観客が騒いでるのを感じたタバサは、ふと騒いでる中心の方を見たら、タバサは目を見開いて驚いていた。そこにはいつの間にか、アデルの姿があった。

「あ…アデルさん」この決闘、物申す！」「！？」

なんとアデルは、この決闘に異議を唱えたのだ。どうしたのだろうとタバサは、彼を見ていた。

「ミスタ、これは決闘です。貴方には関係は」では聞くが、決闘と言いながら、何故ゴーレムを使用している？」「…愚問です。ねミスタ、僕はメイジです。だから魔法でたたか。そっちは魔法を使って、こっちは丸腰のままで挑んだら、誰がどう見てもこっちが不利だろうが！これはもう決闘じゃない、ただの一方的なリンチだ！それとも君は、丸腰の相手じゃなきゃ勝てないとも言っただけか？」なっ！？」

確かにその通りだとタバサは思った。

そしてアデルは…。

「もし君は、丸腰の相手を一方的に叩きのめす卑怯者なんかじゃなく、正々堂々とした貴族なら、彼に武器を持たせるか、君も素手で挑めばいい。それでフェアになる」

「確かに、ミスタの言う事にも一理ある。しかし、僕は貴族だ。素手の殴り合い等という野蛮な事はしたくない」

貴族なら大抵はそうだ。だからアデルはサイトに武器を持たせようとしたのだろう。

「では、彼に武器を与えないと」

そう言ったアデルは、サイトの前に立ち、アデルの持ってた紫色の細い剣を地面に突き刺した。

「あの…アデルさん！？」

「サイト君、君は何故この決闘を受けたんだ？」

「ム力つくからだ。あいつら、貴族だの何だの言って無駄に威張りやがるから」

サイトは、半ば愚痴を言っていた。

「確かに、世の中の大半はそういう貴族が多い。しかも、逆らえる者が少ない故に、ああも傲慢になる者も多く存在している。でも君は、そんな連中を相手にしようとしてたんだぞ」

「ああ、こつちに来てからそういう風になっているのがよく解ったから」

「それでも君は、立ち上がり、戦おうというのかい？」

「ああ！」

「良い返事だ！そこまでの覚悟があるなら、この剣を抜き、戦え！」

彼は、サイト自身に戦わせようと言っのかと、タバサは困惑した。アデルは少し後ろに下がった。

サイトは、剣を握ろうとしたが、ルイズに止められた。

「だめよサイト！それを握ったら、もうギーシュは容赦しないわ！」
「俺は、元の世界にや帰れねえ。ここで暮らすしかないんだろ」

「そうよ。それがどうしたの！？今は関係ないじゃない！」

ルイズはサイトの手を握り締める。

サイトは力強い声で言い放った。

「使い魔でいい。寝るのは床でもいい。飯は不味くたっていい。下着だって洗ってやるよ。生きるためだ。しょうがねえ……でも……」

「でも……何よ？」

「下げたくねえ頭は、下げられねえ！！」

サイトはルイズの手を振りほどき、地面に突き立った剣を握り、抜き取った。

「バカーーーーーー！！」

ルイズの悲痛な叫び声を上げた

その時、サイトの左手に刻まれたルーンが光りだした。

何故アデルは、自分の剣をサイトに貸してまで戦わせようとしたのだろうと、タバサは思った。

そして、ここから先はサイト無双となった。

「続けるか？」

「ま、参った」

ギーシュは震える声で降参したその瞬間、見物していた生徒たちがざわめいた。

「へ、平民がギーシュに勝った！？」

「ギーシュが負けたぞ！」

などという声が飛び交っている。

サイトがギーシュに勝った、普通はありえないと思った。

「すごいわ彼、剣を持った途端に、ギーシュのゴーレムを一瞬で倒しちゃうなんて！ねえタバサも見たでしょう、彼って素敵じゃない？」

キュルケはいつものが出た。

タバサは、その辺はどうでもよかったが、アデルがサイトに何かしていたのは分かった。

多分、悪魔の治癒魔法だろうと、タバサは思った。

その時、サイトに向けて誰かがエア・ハンマーを放った。

「全く、もう少しでその無礼な平民を始末できたのに」

その声に振り向くと、観客の一人が前に出てきた。

「ヴィリエ！君は一体何をするんだ！？」

そう言ったのはギーシュ。

「何を？決まってるじゃないかギーシュ。君の汚点を消してあげようとしたまだよ」

そこに現れたのは、ヴィリエ・ド・ロレーヌ。かつてタバサに挑み、返り討ちにあった男。

「ちょっと、あいつロレーヌじゃない！？タバサ、あなたの使い魔が大変な事になっちゃうわ！」

キュルケは、アデルを見て心配そうになった。

「心配無い。アデルなら…何とかなる」

「ええっ！？いいのタバサ！？」

心配する必要が無いタバサと心配してるキュルケ。

「やめるんだ！たとえ彼を殺したとしても、僕が彼に負けたという事実は消えない。これ以上僕の顔に泥を塗るんじゃない！」

「君が負けた？それは違う。あの平民が勝つことが出来たのは、あの男の剣があつたからだ。あの平民の力じゃない」

「それは決闘を公平にする為のものだ。その結果、僕は負けた。だから、その事を負けた言い訳にするつもりは無い！」

「いいかい？権力や財力も実力の内さ。あの平民は剣を持ってなかった。それが、あの平民の実力だよ」

「そんなの、敗者の言い訳に過ぎない！いいから止めるんだ！」

「うるさいんだよギーシュ！」

そう言つて、ヴィリエは杖を振る。

「ひっ！？」

ヴィリエのエア・ハンマーが、ギーシュを襲った。

だが、当たる直前にアデルが防いだ。

「……あれっ？」

「もういいんじゃないのか？」

「なんだと、そういえば貴様はミス・タバサの使い魔だったな。そもそもアンタが平民に剣を与えたから、貴族の恥さらしが出てしま

「つたんじゃないか！」

アデルは、ヴィリエの言い分に腹が立ったようだ。

「お前は、さっきの様に一方的にリンチにするのが正しいと言いたいのか？」

「当然だろ。貴族は選ばれた存在なんだよ。平民はその貴族に仕えさせて貰えるだけでも光栄な事なんだ。けど、あの平民は貴族に楯突いたんだ。選ばれた存在である貴族にだ！そんな平民なんて、死んで当然なんだよ。まあ、貴族の常識が無いミス・タバサの使い魔にこんな事言っても解らないだろうがな」

これを聞いて嫌な気分になるキュルケ。

「やーねえ、遠まわしにタバサの事を馬鹿にしてるわね」

その時タバサは、アデルの様子がおかしい事を感じた。

「どうしたのタバサ？」

「何でもない……」

気の所為だと思いたかったタバサ。
するとアデルは…。

「くだらねーな！」

「なんだと！」

「くだらねえと言ったんだよ三下！」

「なっ！？貴族に向かって三下だと！」

「さっきから何かと言うと貴族貴族って、お前はそれしか言えないのか木偶の坊！」

「で、木偶だと……どうやら貴様も解らない様だな、貴族に逆らうとどうなるか、思い知らせねばな!」

臨戦態勢を取ろうとするヴィリエ。

この時アデルは、剣と杖を地面に置いた。

「あれ、ちよつと!?アデルってば、何で武器を置くの!?!」

「武器が無くても彼は勝つ!」

「でも、無謀過ぎない!?!」

「大丈夫!」

心配するキュルケに対して、大丈夫だと確信しているタバサ。

「な、何の真似だ!?!」

「お前の様な格下のガキに、武器など必要無い!」

「か、格下だとお、もう許さん!」

アデルはきつと、思いもよらない事をする。

「喰らえ!」

ヴィリエのエア・ハンマーが発動し、アデルに向かった。だが…。

「ハアツ!」

アデルは裏拳の要領で、エア・ハンマーを弾き返した。

「ちょ、ちよつと!?エア・ハンマーを素手で弾くなんて、どうなっているの彼!?!」

この時は、さすがのタバサも驚いた。

「（すごい、素手で魔法を弾くなんて、あれも悪魔化の影響なの！？）」

「な、なにに！？僕のエア・ハンマーを素手で弾くなんて！？」

「どうした？あれだけ粹がっっておきながら、あっさり終わらせてくれるのか？」

「くっ、まだまだー！」

「無駄だ！」

ヴィリエは連続でエア・ハンマー打ち続けていた。

それでもアデルは、エア・ハンマーを弾き返し続けた。

「な、何で当たらない！？しかも、素手で弾くなんて！？」

アデルは徐々に、ヴィリエに近づいていた。

「く、来るなーーーーー！？」

アデルは、ヴィリエに必殺技をくり出した。

「ハアアーッ！三っ！」「ブファッ」連っ！「グエッ」撃イイツ！
！「ガハア！」

アデルは、顔面を右ストレートでくり出し、腹に左ボディブローでヴィリエを浮かし、止めのサマーソルトキックをぶちかました。

そして蹴り上げられたヴィリエは、そのまま気を失った。

そして同時に、周囲から恐ろしいものを見た様な顔をして、アデルを見ていた。

「戦いのたの字も知らないガキが、誰かを傷付けようとしてんじゃないかねー!!」

そう言ったアデルは、その場を立ち去った。

先程の言葉を聞いて、誰もが彼を恐れてしまった。

「……アデルって、すごいを通り越して、容赦が無いわね……」

タバサは、キュルケの問いにコクリと頷いた。

でも、あの優しい彼が、あそこまで怒っていた事に違和感を感じた。

「（まさか、怒りで悪魔化の進行が早まったの!?!）」

タバサは、直ぐにアデルの所に向かった。

「ちょ、タバサ!?!」

キュルケは、どうしたのだろうと思った。

タバサは、アデルの所に追いついた。

「アデル、大丈夫?」

「……ああ、少し……落ち着いた」

やっぱり悪魔になる影響だったのかな。

「すまないタバサ、心配をかけてしまった」

「あまり無茶はしないで」

すると、タバサの目に変化が…。

「うつ…!？」

「っ!?!どうしたタバサ!？」

景色が見える。馬車に乗っている?……!?!縛られている子達がいる!？」

まさかイルククウ、誘拐されたの!？」

「アデル!」

「!?!なにがあっただタバサ!？」

「イルククウが、どこかに連れて行かれようとしている」

「!?!？」

アデルは少し驚いた後、アデルはタバサをお姫様だっこの様に抱いた。

「!?!?あ、アデ、る!?!？」

突然の事に驚くタバサだが…。

「イルククウの居場所はどこなんだタバサ!！」

「……もうすぐ、ゲルマニアの国境の関所」

ちよつとがっかり。

「方角は？」

「東の方角」

「分かった、全速力で向かう。しっかり捕まってるよ!」

「……うん」

アデルにそう言われ、しがみ付くタバサ。

そして、タバサを抱えたアデルは、一瞬にして魔法学院から姿を消した。

- - - - -

アデルサイド

ただ今、自己嫌悪中です。

タバサの事を馬鹿にした時から怒り状態になるとは、悪魔化した所為か、沸点が低くなってるのかな？
その時、タバサがやって来た。

「アデル、大丈夫？」

「……ああ、少し……落ち着いた」

大分冷静になって来た。

「すまないタバサ、心配をかけてしまつて」

「あまり無茶はしないで」

すると、タバサの目に変化が…。

「うつ…！？」

「っ！？どうしたタバサ！？」

いきなりタバサが、片目を押さえた。
すると…。

「アデル！」

「！？なにがあっただタバサ！？」

「イルククウが、どこかに連れて行かれようとしている」

「！！！？」

そうだ！確かイルククウって、肉食い過ぎて、お金無くなっちゃってる所を攫われたんだっけ？こうしちゃられない！

俺は、タバサを抱き上げた。半ばお姫様だっこの要領で。

「！？？あ、アデ、る！？？」

突然の事に驚くタバサだが…。

「イルククウの居場所はどなんだタバサ！！」

「……もうすぐ、ゲルマニアの国境の関所」

…気の所為かな？タバサが落胆している様な？

「方角は？」

「東の方角」

「分かった、全速力で向かう。しっかり捕まってるよ！」

「……うん」

アデルにそう言われ、しがみ付くタバサ。

「（行くぜ！加速装置、最大出力！！）」

そして、タバサを抱えたアデルは、一瞬にして魔法学院から姿を消した。

貴族対平民（後書き）

ガンダールヴとイーヴァルデイの関係を勝手に設定しちゃいました。

タバサの冒険 おつかい編（前書き）

二話続きます。

タバサの冒険 おつかい編

イルククウサイド

きゅい、どうしてこんな事になったのね。

イルククウは、馬車の荷台の中で途方に暮れていた。
何故この状況になったかと言うと…。

あのちびすけにおつかいを頼まれて、迷子になって、匂いがしてお店に入って、お肉たくさん食べて、本屋の場所を聞いて行ってみたら、金が足りなくて路頭に迷ってて、親切な人がいて助かったと思ったら、その人は実は人攫いだったのね。

そう。イルククウは…いやイルククウ達は、攫われてゲルマニアへと輸送されていた。

「きゅい……」

こんな事になるなら…、故郷の竜の巣でぬくぬくと暮していればよかったのね。

イルククウは、使い魔として召喚された事を後悔した。
夕方になる頃…、馬車は国境についた。

すると、少女達が期待にざわめき始めた。
縛られた少女達を見たら、絶対に御役人が見咎める筈だと言っていた。

イルククウも、そんな会話を聞いてわくわくし始めた。
しかし…現実は厳しかった。

役人達が荷台の中を覗くと…。

「なるほど。確かに小麦粉だな」

どうやら、人攫いと役人はグルだった様だ
役人達の言葉を聞いて、少女達は絶望した。

もう許せないのね！最悪なのね！

イルククウが怒りにまかせ、元に戻ろうとした。

その時、巨大で猛烈な竜巻が、役人と人攫いのメイジを吹き飛ばした。

『どわああああ！？』

メイジ達は、立ち木に激突してそのまま地面へと崩れ落ちる。

激しい砂埃の中、ゆらりと小さいのと大きいの二つの影が現れた。

「ち、ちびすけ……おにーさん……」

それは、遠く離れた魔法学院に居る筈の自分の主人タバサと、自分と同じ使い魔であるアデルであった。

その時、後ろの馬車から、ゆらりと二人のメイジが降り立った。
頭と呼ばれていた

サイドエンド

- - - - -

- - - - -

倒れたメイジが、現れた二人のメイジを見て哀願する様な声をあげた。

「アニキ！ アネゴ！」

「まったくだらしがないね。油断するなといつも言ってるだろう？
ねえダンナ」

「ああ」

ん、アニキ？ アネゴしか出てこないんじゃない？

それから彼女達は、タバサとアデルを見つめると、唇の端を持ち上げて冷笑を浮かべた。

「おやおや、あんたは正真正銘の貴族のようだね。連れの男は傭兵
つてどこかね。こりゃ丁度良いねダンナ」

「ああ」

男の方はあんま喋らない方かな？

タバサは達は無言で夫婦（？）頭目と対峙した。

「どうしてメイジが人攫いなんかやってんだ？ って顔だね。あんたは貴族の様だからきちんと冥土の土産に教えてやろう。あたし達はね、三度の飯より騎士試合が好きでね。あたしは伝説の女隊長の様に、都に出て騎士になりたいなんて言ったら、親に猛反対されたのさ。ダンナも似た様な感じだね。で、こうやって家を出て、好きなだけ騎士試合が出来る商売に鞍替えしたって訳だ」

下らねえな。猛反対されるとこまでは良い方なんだけど、なんでその後に、そんな考えを持つちまったんだ？

「ただの人攫い」

「ただの悪党だな」

タバサ達がそれだけ言うと、女の方にはやりと笑った。

「そりゃあ、食う為には仕方ないさ。ね、ダンナ」

「ああ」

「アニキ！アネゴ！やっちまって下さい！」

倒れた手下の男達が叫ぶ。女の方は首を振った。

「なに、これは騎士同士も決闘だよ。順序と作法てもんがある。さて、正々堂々といこうじゃないか！」

夫婦頭目は構えた。

「私は騎士じゃない」

「俺も騎士じゃねえ」

二人は短く告げて、杖と剣を構えた。

すると女は首を振った。

「騎士試合に付き合わないって言うんなら、あの娘達に魔法を飛ばすよ」

夫婦頭目は杖をイルククウ達がいる荷台に向けた。

どうあっても決闘ごっこをしたい様だな。

夫婦頭目は一礼をして構えた。

めんどくさそうにタバサも合わせ、同じ様に一礼をするアデル。だが、女はタバサに向けて魔法を放って来た。

「きゅい！卑怯者！」

思わずイルククウは叫んだ。

しかし、タバサは驚くべき反応速度で横に飛んだ。

女の目が丸くなる。

男はタバサに向けて、エア・ハンマーをくり出した。

アデルは左腕にピンポイントバリアを展開してタバサの前に立ち、

男の魔法を跳ね返した。

夫婦頭目は驚愕した。

一瞬で呪文を完成させたタバサは、先程の展開を見て止まっていた女の方へと魔法の矢を放った。

その事に気付いた男は、女の前に立ち防いだ。が、アデルは、自分の位置と相手の直線上に向けて勢いよく掛け走った。

「一文字、スラーツシュ！」

勝負は一瞬で付いた。

アデルの一文字スラツシュ（峰打ち）で杖を切られ、交差する瞬間に地面に叩き付けた。

信じられない、といった顔で二人の事を見上げた。

「あ、あんた達、何者……」

「……ただの学生」

「と、その使い魔だ」

二人は小さな声で答えた。

人攫い達と賄賂を受け取った役人達を警邏の騎士に引き渡し、少女達を自由にしたら、アデルの下に警邏の兵士が来てたので聞いてみたら、懸賞金（金貨二百枚）を貰ったのでタバサに渡そうとしたら……。

「あなたが使っていていい」

と言われたので、アデルの懐に入れた。

その後タバサとアデルは、竜の姿に戻ったイルククウの背に跨り、空を飛んだ。

イルククウは何を思ったか、タバサに話しかける。

「あ、あの……、タバサさま。どうもありがとう。助かったのね。でも、どうしてわたしの居場所が分かったのね？」

「あなたの視界を私も見る事が出来る。使い魔と主人は一心同体。行き先の見当がついて、アデルがここまで私を乗せて、先回りして駆け付けた」

「ちなみに十分くらい全速力で走ったからな」

イルククウは素直に感激したのと驚愕した。同時に今までの自分の態度を恥じた。

「昨日はごめんなのね。ちびすけとかなんとか、わたしひどいこと言ったのね」

「……………」

「そ、その上……、わたし本買うのも失敗したのね」

重い空気だな。まあ反省はしてるみたいだしな。

タバサは、イルククウの頭部へと近づいた。

「シルフィード」

「え？それ、なんなのね？」

「あなたの名前。風の精霊って意味」

「へえ、良い名前だな」

「素敵な名前ね！きゅい！」

嬉しそうに声を上げちゃって可愛いなイル…シルフィード。

「可愛いよね！わたしも嬉しいのね！なまえ！新しいなーまーえ！きゅいきゅい！」

よつぽど嬉しかったのか歌いだしたな。

「ねえねえタバサさま！わたし、タバサさまのことをお姉さまって呼んでいいかしら？わたしのほうが身体は大きいけれど、なんだかそう呼ぶのが相応しいような気がするのね！」

タバサはコクリと頷いた。

「それから、おにーさんのこともお兄さまと呼んでいいかしら？」

「ああ、俺で良ければ好きに呼んでいいよ」

「きゅい！お姉さまとお兄さまが出来たのね！きゅい！」

もしかしたら自分は、すごい魔法使いの使い魔になったのかも知れないのね。きゅい！

学院に戻ったタバサ達は、イルククウの寢床を作った（主にアデル一人で）後、部屋に戻った。

「…なあ…タバサさん…今夜も…一緒…ですか……」
「うん！」

一緒に寝たがるタバサの前では、アデルは言う事を聞く事しか出来なかった。

タバサの冒険 おつかい編（後書き）

原作では女の方だけだったが、アデルが居た為、男の方も付けました。

もう一人の転生者（前書き）

新たなる転生者の登場します。

もう一人の転生者

私は速未連香。はやみれんか

何処にでもいる一般人だよ。

私は今、恋人探しをしています。

私の好みは赤い髪が似合っで、男らしい人が好みなの。
そんな人を恋人にしたら、きつと……。

その時、トラックが突っこんで来た。

「えっ!？」

その瞬間、私は意識を絶った。

そして目が覚めると、そこは雲の中とも思える場所に居た。

「あれ?ここは？」

するとそこに、

「おめでと〜」

「な、なに!？」

背後から泣き声が聞こえた。

「……誰ですか？」

「いや〜、君は選ばれたよ〜」

なにこの軽い人……

「アハハハ、大天使のサディエルといいま〜す」

「大天使？」

「はい、そうですよ」

なにこの人…。

「その大天使様がどうしてここに？」

「どうしてここに居るのかと言うと、貴女を迎えに来たからなんだよ」

「迎え？」

「はい、貴女は死んでここに居るから、迎えに来たんです」

「えっ死んで…！？」

そっだ、私…。トラックに轢かれて…。

「いやー!!」

「ど、どしたの…!？」

「私まだ恋もしてないのに死んじゃうなんて嫌ー!」

「え、そこ？」

「私まだ16なのに…」

もうこうなったら、天国の素敵な人をゲットしてみせる。

「あつ言つとくけど、死ぬ訳じゃないよ」

「えっ!?!だつてさっき、迎えに来たつて」

「それは、もう一度生きるチャンスを与えに来たんですよ」

生きるチャンスって事!?

「それってどうゆう事!？」

「それは貴女が、死んだ人五千京人目の為、サービスしに来た

よ」

……サービスってこの大天使、生き返らせてくれるの!?

「と言う訳で、貴女には別の世界で生きて貰います!」

「(何がと言う訳なの?)……って別の世界って!?!」

「はい、元居た場所は既に死亡扱いなので、別の世界に行って頂くとする事なので」

「へえ…で、どんな世界なの?」

「はい、ゼロの使い魔です!」

「ゼロの使い魔?」

「はい、その世界に御招待します」

うん、よくわかんないな。素敵な人いるかな?

「あつ後、その世界で生きていく為の能力も与えますね」

「能力?」

「はい、あつその世界では言葉や文字が解らないから、解かる様にしておきました」

「そうね、やっぱり解る様にしたいからね」

「はい、じゃあ能力付けるね」

すると、連香の体が光り出した。

「……ん? なつ、なによこの格好は!?! 服が少ししかないじゃない!?!」

「それはデイスガイア2仕様のエトナの体だよ」

「エトナって何?」

「デイスガイア2に登場する悪魔だよ」

「悪魔?!?! 嫌よ、何で悪魔なの!?!」

「君の前の転生者が、デイスガイアの主人公になっていたから君も同じ様にしました」

「迷惑な先輩ね…」

「後、翼とか尻尾とか出し入れ出来るよ」

そう言われてやってみたら、納まった。

何か妙な感じね…。

「そんな訳で、あつ後、護身用の武器もあげます」

護身用の武器？

「デイスガイアのヒロインの武器を渡します！」

ウエストバックが装着された。

その中に、セイレーン、ノーブルローズ、ラズベリルの魔本が入っていた。

これ、護身用？

「そんでもって、特殊な装飾品もプレゼント」

ロイヤルリングを付けられた。

「綺麗な指輪ね。これ貰っていいの？」

「そうだよ。これはね、魔法をいくら使っても魔力が無くならないんだよ」

「そなんだ」

「後、ウイングブーツもあげるね」

そう言つてエトナの靴が変化した。

「この靴は?... キヤッ、浮いたわ!？」

「そうだよ、この靴はね、自分の意思で浮いたり出来る靴だよ」

「へ」

「それから、君の実力は、Lv1000ぐらいにしたから」

「れ、Lv1000で、具体的に言っと？」

「具体的に言うとね、Lv10の人が攻撃しても、傷一つ付けられない感じにだよ」

何よそれ... 無敵じゃない...

「それと、ディスガイアのヒロインの技も使える様にしといたよ」

「へ」

「それじゃ、君はここでお別れね」

「えっお別れって？」

「次の世界からの、迎えが来たんだよ」

サディエルは指差した方向には、鏡みたいのが浮いていた。

「あれに入ればいいのね」

「あっ忘れてた」

「な、何よ!？」

「この子達も連れてってね」

そう言っぺペンギンみたいなぬいぐるみが5体現れた。

「何コレ？」

「プリニーっス!」

「よろしくっス！」

「お世話するっス！」

「雑用ガンバルっス！」

「エトナ様〴〵オレ達は貴女様の僕っス！」

「……はあ……」

するとサディエルは、何かを思い出した。

「あつ！？大事な事忘れてた〴〵」

「な、何よ……」

「これを〴〵、先に来た転生者に〴〵、渡して来てくれる〴〵？」

そう言つて差し出して来たのは、小さなプレゼント箱だった。

「分かったわ……で、その転生者って、どんな人なの？」

「ん〴〵？こんな感じ〴〵？」

空中にスクリーンが現れて、アデルの姿が見えた。
するとエトナは、

「キャア〴〵〴〵〴〵素敵イ〴〵〴〵〴〵！！あたしの好みの男性だわ
〴〵〴〵！！！」

「そ、そう〴〵……」

若干引いてるサディエル。

「この素敵な男性にこれを届けばいいのね！分かったわ！」
「そゆ事〴〵、ま〴〵そんな訳で〴〵、頑張つてね〴〵」

そう言つて消えるサディエル。

「しょうがないわね、アンタ達！付いて来なさい！」
「「「「アイアイサー、っス！」「「「「」

そして鏡の中に消えるエトナ一向。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

アンリエッタサイド

サイトとアデルが召喚された次の日。

トリステイン王国の首都トリスタニアにあるとても美しい造りの城、
そこではトリステインの王女アンリエッタ、太后マリアンヌ、マザ
リーニ枢機卿等が一つの部屋に集まっていた。
その部屋の外にも厳重な警備が施されている。

「それでは姫様、段取りはこの様になっております」
「ありがとう、マザリーニ枢機卿」

親友であるルイズが所属する学院が、使い魔召喚の儀式を行う。
そう聞いたアンリエッタは、母親のマリアンヌ、マザリーニ枢機卿
に自分もそろそろ使い魔を召喚したいと願い出たのだ。
だが王家の人間の召喚の儀式である。

始祖ブリミルの導きとはいえ、あまり粗末な使い魔は召喚できない。
尤もどんなものが召喚されようと、アンリエッタは絶対に可愛がる
と決めているが。

「アンリエッタ、大丈夫、あなたなら立派な使い魔を召喚できますよ」

「姫様、どうか平常心で……」

後ろにいたマリアンヌが優しく声をかけ、側に控えているマザリーニが励ます様に言う。

「それではいきます」

そして彼女は滑らかに杖を振り、歌う様に呪文を唱える。

「我が名はアンリエッタ・ド・トリステイン。始祖ブリミルに導かれし使い魔よ、私の呼び声に答えなさい！」

杖は振るわれた。そして鏡の様な物が現れたと思いきや激しく発光する。

だがそれは一瞬で終わり、回りの人間の目が慣れてくる。

「（私は一体何を召喚したのでしょうか？）」

期待に胸を踊らすアンリエッタ、そしてはつきりと視認する。

「え……？」

その声は誰のものだったか、一人だったような気もするし複数だった気もする。

だが声を上げずにはいられないだろう、光が収束するとそこには一人の少女とペンギン五匹がいたのだから。

「いったゝ、何なのよー！？」

「大丈夫ですかエトナ様」

この少女が出て来た為に皆哑然とするしかなかった。

- - - - -

エトナサイド

ゼロの使い魔の世界に着いたのかしら…それにしても、いきなり落ちるだなんて聞いてないわよ！

「貴様何者だ！どこから入り込んだ！」

「姫様、おさがり下さい！」

…何よこの状況…なんかマズイ雰囲気だし…

「貴様答えぬか！」

「うっさいわね！呼ばれたから来てやったのに、何その態度は！」

「貴様無礼だぞ！」

あつたま来るわね…何でいきなり攻撃態勢に入ってるのよ。
その時、

「ま、待って下さい！」

「姫様！？おさがり下さい！」

「アンリエッタ！？さがりなさい！」

「危険などありませんよ…そうですね使い魔さん？」

その言葉に一同が驚愕する。

「そんな馬鹿な……」

「どう見ても人間ではないですか!？」

「でも光が収まったらここにいたのですよ?それ以外何があるというのです。それに、もしこの方が暗殺者だとするなら、私の使い魔が別に召喚されているはずでしょう?」

「それはそうですが……」

「で、あたしを呼んだの誰よ!」

「貴様、恐れ多いぞ!」

「落ち着いて下さい!あの、貴女…お名前は?」

「人に聞く時は、自分から名乗るモンじゃないの?」

「貴様、姫様になんて無礼を!」

「良いのです!先程は失礼しました。私はアンリエッタ・ド・トリステイン。ここトリステイン王国の王女です」

王女様ね…お姫様ね、てかあたしの立場マズくない!?

「ふゝん、王女様ね。あたしはエトナよ」

「エトナさん、貴女は私の使い魔として呼びました。私の使い魔になつて下さいますか?」

なに言つてんのこの女、呼ばれた時点で使い魔になつてるもんじゃないの!

「ひ、姫様!?この様な小娘が使い魔になど…」

「では、コントラクト・サーヴァントを試してみましよう。それでルーンが刻まれれば私の使い魔となる訳です」

「ア、アンリエッタ!？」

「姫様正気ですか!？」

マリアンヌとマザリーニ枢機卿が声を張り上げる。

「私は正気です!それでは行きます!」

「はいはい」

アンリエッタはエトナに近づいた。

「我が名はアンリエッタ・ド・トリステイン。五つの力を司るペンタゴン。この者に祝福を与え、我の使い魔となせ」

そして口付けをする。

つて契約つてキスカい!?

唇を離すと、左腕にルーンが刻まれた。

「あちゃちゃちゃ~~~~~!!?」

「落ちて着いて下さい!?!ルーンが刻まれてるだけですから」

「落ちて着けるか~~~~!!?!」

しばらくして、

やっと収まって来たわね。

「これで貴女は私の使い魔n……!?!」

「なっ!?!」

「?」

皆どーしたんだろ?

すると、近くにいたプリニーが小声で言って来た。

「エトナ様出てます！？翼と尻尾が出てますっス！？」
「えっ！？」

なんと、さっきのルーンが刻まれてる時に出てしまった様だ。

「あ、貴女は…一体…」
「あたし？」

この際、正直に言っちゃえ！

「あたし？あたしは悪魔だよ？」
「「「「「！！！！」」」」」

あゝあ、案の定啞然としてるわね。

「わ、私は…悪魔を…使い魔に…」

よろけるアンリエッタ。

「姫様！？こうなればこの悪魔を滅して、次の召喚を行いましょう！兵達！」

ちよっじーさん、余計な事言わないでよ！？
そして集まって来る兵達。

「悪魔め！消え去るがいい！」
「ちよっと！そっちが勝手にあたしを呼び出して、気に入らなかつたら即始末！？いい度胸してんじやないのアンタ達！」

激怒して殺気を出すエトナ。

魔法衛士隊は若干怯むも、エトナに魔法を放った。

「貴方達…なんて事を…」

「姫様、姫様の評判を失わる様な事は避けなければならいのです！」

「そうよアンリエッタ、貴女が悪魔なんかw…ええっ!？」

すると、魔法が当たって粉塵が舞ってたが、晴れるとそこには、無傷のエトナの姿だった。

あゝびっくりした。本当に効かないのねこの体。

「な、何故無事なんだ!？」

「ん?今何かした？」

その言葉を聴いて驚愕する兵達。

「さゝて、今度はこっちの番だよ!」

人差し指を天に向けた後、大きな火の玉を出した。

「カオスインパクト!」

ちなみに、威力は1/10程減らしています。
火球を投げ付けて、魔法衛士隊にぶつけた。

「「「「グワアアアアッ!!?」」」」」

ちなみに誰も殺していません。

「そんな…魔法衛士隊が…全滅…!？」

「さうて、先に手を出したのはそつちだからお相子ね」

「そ、その様な詭弁は…「双方共お止めなさい！」姫様！？」

アンリエッタが制止した。

「この娘は私の召喚に応じてここに来たのですよ！例え悪魔だろうと私の使い魔である事に変わりはありません！」

「し、しかし姫様！？貴女が悪魔を呼び出したと民衆に知れ渡ったら、姫様の名に傷が付きます！」

「例えそうでも、この娘は一人で魔法衛士隊に傷一つ付かずに倒す程の実力者です！それに…」

アンリエッタはエトナに近づいた。

「そういえば貴女の名前を聞いてませんでしたね？」

「あたしはエトナよ」

「ではエトナ、先程は翼も尻尾も無かった様ですが？」

「あゝこれ、出し入れ自由よ」

そう言つて翼と尻尾を体の中に入れた。

「この様に、悪魔には見えないでしょう？」

「それは確かにそうです…」

「ならエトナの表向きは私の護衛としましょう」

「…「はいっ！？」」「…」

エトナを含む一同が啞然とした。

「それにメイジと使い魔は一心同体、誰が何と言おうと、エトナは私の使い魔です」

「……………」
「へ、かつこいいじゃんお姫様」

何人が睨んで来たが、それだけだった。

「改めて挨拶をしましょう。私はアンリエッタ」
「あたしはエトナ。これからよろしくねお姫様」

その光景をみた一同のなかには、頭を悩ましてたり、啞然としていたり、睨んでいたたり、どうすればいいか混乱している者達だった。そしてアンリエッタはエトナを連れて、アンリエッタの部屋に着いた。

ふとアンリエッタは、エトナの後ろにいるプリニー達に気付いた。

「そういえばエトナ、そのペンギン達は一体？」

「ああこいつらね、雑用悪魔のプリニーよ」

「雑用…ですか？」

「そおーっス！」

「よろしくっス！」

「おじゃましまっス！」

「とんでもない事になってるっス！」

「エトナ様の主人のアンリエッタ様に敬礼っス！」

プリニー達に軽く紹介をした。

「あ、お姫さ、アンリエッタと好きに言って下さい」そう、じゃあリエッタね。こいつらを好きに雑用させても良いからね」

「……………ええーっス!?」

少し苦笑するアンリエッタだった。

もう一人の転生者（後書き）

アンリエッタの所に召喚されました。

途中からエトナの口調が変わってたり、物騒な考えを持つ様になってしまいました。

オリキャラ設定（前書き）

思い付きでオリキャラ入れちゃいました。

オリキャラ設定

名前

転生前

はやみれんか
速未連香

転生後

エトナ

年齢

16歳

容姿

見た目

エトナ

性格

元々は清楚な女性だった為、基本的に礼儀正しく、綺麗好きな少女だったが、自由が無かった。

エトナとして転生した後は、自由奔放に生きる事になっている。

体型（主に胸）の事を言われるとキレる（様になった）。

立場

大天使ルミエルの友達の大天使サディエルが、アデルがデイスガイアの作品で転生したので、同じ作品のヒロインにしようと思って、姿がこうなった

名前もサディエルが考えた

プリニーを5匹程付いて来た

自分も使い魔を召喚したいというアンリエッタの我侭で召喚された最初は悪魔を召喚したとかで騒がれていたが、何とかならしいそれから、アンリエッタの良き相談役になっている

原作に介入する気はないが、アンリエッタが登場する場面には介入

してしまう

アデルの活躍を聞いて惚れるらしい（予定）
相手が転生者なら素の喋り方になる

装備

魔物専用武器 B

ラズベリルの魔本（デイスガイア3のラズベリルが使う武器、名前は不明、本を開いたら好きな武器を精製する事が出来る）
靴

ウイングブーツ（自分の意思で浮遊可能、ハルケギニアで例えるなら常にレビティション状態）

秘宝

ロイヤルリング（魔力が無くならない）

特典

ゼロ魔の世界の言葉や文字が解る様になる

ゼロ魔原作の内容が分かる様になる（小説だけじゃなく、アニメやタバサの冒険も含む）

人間の姿になれる（翼と尻尾を隠せる）

ゼロ魔の兵がLv10ぐらいなら、エトナはLv1000ぐらい、

それでもアデルには敵わない

ゼロ魔の世界の魔法が使える（杖が無くとも使用可能、魔力高めにしてあるからスクウェアクラス）

デイスガイアの魔法が使える

能力

デイスガイアのヒロインの能力を入れました。

固有技系

プリニー落とし

自分の部下であるプリニーを無数に上空から落下させ爆発させる技
セクスイービーム

上空からピンク色のレーザーを地上にむかって無数に発射します。
レーザー放つ際、様々なポーズを取るのが特徴。

カオスインパクト

圧縮した巨大な炎の球を放つ

狂い咲き乱射花

デイスガイア2のロザリンドのガトリング銃、ラズベリルの魔本
から悪魔の力で精製した

ローズリバレート

魔力を氷塊の中に閉じ込めて、敵に向かって撃つと割れて、閉じ
込めた魔力を開放させる

フォーリンアロー

魔力を込めた矢で敵を無力化する

惨禍常

三力条と読む、魔本を広げた後エネルギー弾をぶつける

母乱帝亜

ボランティアと読む、足元に魔法陣を展開させてから対象を爆炎
に巻き込んで攻撃する

漢凶保護

環境保護と読む、紫色の大蛇×5を召喚して敵を攻撃する（それ
ぞれの首から四系統と虚無属性のプレスを吐く）

魔法

ゼロ魔の世界の魔法が使える（スクウェアクラス、先住魔法も使え
る）

デイスガイアの魔法が使える（最初からオメガクラス）

タバサの冒険 翼竜人編（前書き）

サイトはまだ寝ていますので、翼竜人編行っちゃいます。
かなり久しぶりの投稿です。

タバサの冒険 翼竜人編

俺は今、厨房の方に来ています。
何の用かって？それは…。

「おお！「我らが拳」^{「けん」}よ！よく来てくれた！」

この様に、厨房の人達にとっては英雄的存在に祭られていて、ぜひ厨房で礼がしたいから来てくれと招待されたから。
ちなみに、貴族を素手で倒した事からそう呼ばれる様になった。

「ま…マルトーさん、その我らが拳^{「けん」}って、なんか恥ずかしいんだけど…」

そう、サイト君も同じ事思っただろうな、…あっこれから思うのか、まだ目覚めてないし。

「まあ気にするな我らが拳よ。それより、メイジでありながら素手で戦えるんだ？」

当然の疑問だな。こっちの世界に通じる良い訳を言おつと。

「幼い頃はそこの貴族と同じだったけど、家が没落してからは肉体も鍛えないといけなかったから、必死で鍛えたんだ。今でも続けて鍛えているしね…あっ当然魔法もね」

「皆聞いたか？真の達人は日々鍛錬の怠らないってもんだ！」

『オオ〜』

なんか、変な風に持ち上げられてる感が漂っている。

「そんなお前さんに…」

はっ！まさか、この流れは……！？

「俺からの、熱い接吻w」全力で遠慮します！！」

俺は必至でマルトーさんを抑えた。
しばらくすると…。

「あつそうだ、マルトーさん」

「なんだ、我らが拳よ？」

「俺だけご馳走になったら、シルフィードが怒りそうな気がするのから、肉たくさん用意お願い出来るか？」

「我らが拳の頼みだ何でも言ってくれ。…って、シルフィードって誰だ？」

「俺と一緒に召喚された風竜の名前だ」

「あのドラゴンか。良し分かった。少し待っていてくれ、直ぐ用意するからよ」

そしてしばらく経って、肉貰いました。

「さて、そろそろタバサから依頼が来る時間だな」

ちなみに今の装備は、バーニングブローと精霊の杖だけだ。
そしてシルフィードの所に行った。

「きゅい！？お兄さまからいい匂いがするのね！ごはんごはん！」

「分かったから喋らないでくれ！？」

「分かったのね。きゅい」

本当に分かってんだろうか？
するとシルフィードが、

「きゅい！お姉さまが呼んでるのね！」

「じゃあ飯は後でだな」

「きゅい……ごはん……」

「タバサが待つてんだろ？一緒に行くから駄々こねないでくれ」
「きゅい……分かったのね……」

なんか罪悪感が……、

俺はシルフィードに乗ってタバサの部屋に来た。

「タバサ、どうしたんだ？」

まあガリアからの指令だろうがな。

「任務」

「任務？」

一応知らないフリをした。
するとタバサが、

「これは私の問題だから、貴方はここに残って」

タバサは自分の事で、アデルを巻き込ませない為に言った。

「何を言っただタバサ！俺はお前の使い魔だ、タバサの行く所は俺も付いて行く！」

「アデル……」

「お兄さまカツコイイのね！」「ゴンッ」ぎゅい！？痛いよね！？」
「喋っちゃだめ」
「きゅいっ……」

こんなやり取りをした後、俺はタバサと一緒に行く事になった。

「その肉は？」

「ああ、シルフィードが腹を空かしてる頃だと思ったから、用意してきたんだ」

「きゅい！そういえばごはんまだだったのね！お兄さま、お肉ちょうだいなのね」

「はいはい。ちょっと待ってな」

「私にも」

「分かってる」

「それからシルフィード」

「何なのねお姉さま？」

「城に着いたら喋るの禁止」

「きゅい……前も思ったけど、何で喋っちゃ駄目なのね？」

「そりゃあ喋るドラゴンなんていないと思ってるからな、面倒な事になるだけだしな」

タバサはコクリと頷いた。

そんなこんなで、ハルケギニア最大の国家・ガリアの王都リュティスに辿り着いた。

「……………」

「どうしたタバサ？」

「貴方はここに残って」

「何故だ？」

確かタバサの従姉姫のイザベラがいたな。

「貴方が私の使い魔だと言う事を知られたくない」

「タバサ……」

どうやら俺を気遣ってくれているみたいだけど、

「悪いがタバサ、先程も言った様に俺はお前の使い魔だ、タバサの行く所は俺も付いて行く！」

「……………」

少し悩むタバサ。

そして、

「分かった……」

「でもさすがに使い魔って名乗っても信じられないと思うから、俺はシルフィードを召喚する際、偶然巻き込まれた傭兵メイジという事にしてくれ」

「分かった」

こうして二人は、グラン・トロワから少し離れた小宮殿、プチ・トロワに入った。

確か原作だと、イザベラに嫌がらせを受けるんだっただな。何とかして防がないと。

すると、衛兵らしき人物が来た。

「お帰りなさいませ、シャルロット様」

どうやらこの兵士はタバサ派、ひいてはオルレアン派みたいだな。すると、もう一人の衛兵は、先程挨拶した衛兵をたしなめ、下から

せた。

どうやらこっちの方はジョゼフ派みたいだな。

「姫殿下がお待ちだ！」

ジョゼフ派の衛兵は、ぞんざいな仕草で顎をしゃくりながら言った。
オルレアン派の衛兵は何とも苦々しい顔になっていた。
すると、ジョゼフ派の衛兵は俺に気付いた様だ。

「ん？何だ貴様は！」

「俺はタバサに雇われた傭兵だ」

「傭兵だと！？」

この時オルレアン派の衛兵はかなり驚いていた様だ。
するとジョゼフ派の衛兵は、

「まあいい、付いて来い」

そう言われて宮殿内に入っていた。

イザベラ

王女の部屋の前に立ってたガーゴイルが交差させた杖を解除する。

そして部屋に入っていく二人だが、何かがタバサ目掛けて飛んで来た。

するとアデルは即座にタバサの前に立ち、飛んで来た何かを受け止めた。

どうやら卵の様だった。何とか割らずに済んだ。

「なっ、何だお前はっ！？」

突然の事に驚いた少女がいた。

どうやらこの小娘がイザベラみたいだな。

「おい人形娘、こいつは何なんだ!？」
ガーゴイル

何かカチンと来るなこのガキ。
するとタバサは、

「私の使い魔…」

その一言で周りにいたメイドや執事は騒然とした。

「使い魔だつて!？おほ!おほ!おっほ!こりや可笑いね。
じゃあ外にいる風竜は一体何なのさ？」

「あれも使い魔…」

「はあ!？風竜はともかくそっちも使い魔だつて!？」

「俺はあの風竜のそばにいたからな、それで一緒に来た訳だ」

一応ここに着く前に考えた俺のポジションを言ってみた。

「あらら、可哀そくにね。こんな人形娘ガーゴイルに呼ばれる何て、
アンタも災難ね」

ハッキリ言つてウザいなこのデコガキは…、

「なあアンタ傭兵メイジだろ?いつその事私に仕えてみないか？」

ほんの一瞬だけタバサの眉が動いた。
だがアデルは、

「悪いが、使い魔とはいえ一度契約を交わした以上、他の誰かに従
う気は無い!」

アデルはハッキリ言った。

それ以前にこんな奴に仕える気なんざ無い。

「ふゝん…まあいいわ。さて、本題に入るわ」

色々あつて俺達は今、ゲルマニアの国境沿いのアルデラ地方のエギンハイム村に向かつて行つた。

アデルは、プチ・トロワを出てから不機嫌だつた。

「きゅいゝ…お兄さま、どうしたのね？」

「ああ…こつちに来てから、あれ程不愉快になつた事は無いなと思つてな」

「きゅい、あの女ね！いくら偉いからつて、お姉さまに意地悪な事をしている訳無いのね！」

「その上、「私に仕えろ」と言うから更にウザいしな」

「そうなのね！お兄さまはお姉さまなのね！」「ゴン」「ぎゅい、痛いのね！？」

「うるさい…」

「…タバサ…気のせいだと思つが、お前も苛立つてないか？」
「……………」

タバサがまた黙つたな。

さてここで、任務の内容をおさらいしてみるか。

<アルデラ地方 通称“黒い森”にて、翼人の集団が森の一角を占拠。近隣のエギンハイム村の村民より、同民の生活と秩序を脅かすとして掃討の要請 有り。至急向かわれたし>

という内容。

早い話、エギンハイム村の近くの森に住んでる翼人を退治しろという内容だ。

そして、エギンハイム村が見えてきた。

「ところでお兄さま」

「ん？何だシルフィード」

「さっきから何で卵を握ったままなのね？気になってたのね」

「あっ！？」

そういえば、イザベラがイタズラ用に使って俺が受け止めた卵、握ったままだった…。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

タバササイド

私は少しドキドキしていた。

イザベラに「いつその事私に仕えてみないか？」とアデルに言ってきた時は、父様が殺された時と同じくらいの衝撃だったが、アデルの「悪いが、使い魔とはいえ一度契約を交わした以上、他の誰かに従う気は無い！」と言って来た時は、ドキドキした。

その後、色々あって私達は、ゲルマニアの国境沿いのアルデラ地方のエギンハイム村に向かって行った。

アデルは、プチ・トロワを出てから不機嫌だった。

「きゅいっ…お兄さま、どうしたのね？」

「ああ…こっちに来てから、あれ程不愉快になった事は無いなと思

ってな」

アデルが不愉快に思ってるのは、イザベラとのやりとりの所為だろうか？

何れにせよ、負の感情を持ち続けてたら、彼は心まで悪魔になってしまふのではと、タバサは動揺していた。

「きゅい、あの女ね！いくら偉いからって、お姉さまに意地悪な事をしていい訳無いのね！」

「その上、「私に仕えろ」と言うから更にウザいしな」

「そうなのね！お兄さまはお姉さまなのね！」「ゴン」ぎゅい、痛いのね！？」

「うるさい……」

彼は私の勇者様、私なんかじゃ釣り合わない。

「……タバサ……気のせいだと思うが、お前も苛立ってないか？」
「……………」

正直……この感情が解らない事がある。

私は……彼にとつて……何なのだろう……。

その時、村の方から音がした。

「……！？」

どうやら村の住民が先走ったみたいだ。

タバサは思わず飛び降りた。

そして、争ってる場所へと飛んで行った。

駆け付けて見ると、一人の青年が翼人にトドメをさす瞬間だった。タバサは翼人に攻撃した。

「なっ何だ！？この嵐は…雪？…あ…あれは…お、女の子！？」

青年が驚愕した。

と同時に襲いかかる翼人達だが、それに応戦するタバサ。しばらく攻撃が続いていたが、

「皆止めて！」

翼人側から制止の叫びを上げた。

「争ってはダメ！森との契約をそんな事に使わないで！」

翼人側の代表だろうか？

だが、任務を受けたタバサには関係無かった。呪文を唱えるタバサだったが、誰かに掴まれた。

「お、お願いです！杖を納めて下さい！」

後ろ髪を結わえた長髪の男性がタバサを止めた。

しばらくして、翼人達は森の奥へと消えていった。すると、誰かがタバサに訪ねた。

「お、おいアンタ！かなりの腕とお見受けしたが…アンタもしや、お城の騎士様で…！？」

先程タバサを止めた男性と顔が似ているが、短髪で頬に傷のある男性だった。

するとタバサはめんどくさそうに紹介した。

「ガリア花壇騎士：タバサ」

「……………おおおおおっ！」「……………」

「騎士様が来て下さった！」

「ありがたやありがたや〜！」

村の人はタバサに感謝していた。

「騎士：！？」

「こらヨシア！騎士様から離れる！」「わっ！？」「おまけに魔法の邪魔するたあ何事だ！！」

タバサを止めた男、ヨシアを突き飛ばす兄。

「騎士様、では早速、翼人共の排除をおねごきゆるるるるる〜」「……」

「……………空腹」

「こっ、こいつぁ気付きませんで！オイ皆、村中のうまいモン全部持ってこい！！腹ごしらえだ！」

「……………おおっ！！」「……………」

その後タバサは村に連れられて、食事をした。

……………

アデルサイド

「きゅい！？お姉さま！？」

「あらまゝ」

タバサが飛び降りちまった。

村の方で騒ぎがあったみたいだから鎮圧に向かったらしい。

「お姉さまー！？どこー！？」

「落ち付けシルフィード！」

「でもお姉さまが」

「だから落ち着けて、取り合えず村の近くに降りよう」

そう言つて俺達は村の近くに降りた。

野営を始めて、持ってきた肉を改めて焼いた。

「きゅいゝ美味しいのね」

「そりやあ良かった。マルトーさんに感謝しないとな」

「でもお兄さま、お姉さまの事はいいのね？」

「タバサなら今頃メシ食つてる所だろう…多分」

「きゅい、お姉さまがお食事ならシルフィも行くのね！」

「待った！」

「きゅい？お兄さま、どうしたのね？」

「村の人達がいる中で、竜が出て来たら大騒ぎになるだろ！」

「でも、お兄さま「魔法人形扱いガーゴイルされなくなったら待つんだ！」

きゅい、ガーゴイル！？」

「多分タバサは咄嗟のいい訳でお前をガーゴイルと皆に認識させるかも知れないぞ？」

「きゅい…韻竜であるシルフィにガーゴイルと呼ばれるのは屈辱なのね！」

「だからもう少し待って、タバサが部屋に入ったら顔を出す様に！」
「きゅい…分かったのね」

ふう〜説得成功。

さて、今回の仕事は、翼人と共存させる為の芝居を行うが、原作だとシルフィードが暴れて、ヨシアと翼人の仲を皆に見せつけて、共存という筋書きだが、今シルフィードを止めてしまったから、シルフィードが暴れるという設定は効かなくなった。

だが、村の連中は、俺の存在を知らない！ここが鍵だ！その為にも、アデルは、何か計画を考えていた。
しばらくして、

「さてと、タバサの所に行きますか」

「きゅい！」

そして、タバサのいる部屋に辿り着き、窓にノックをした。

「アデル！」

「タバサ、少し遅くなった」

「そう…」

「お姉さま、シルフィも来々「ゴン」きゅい！？何するのね！？」

「誰か来る、静かにして」

「きゅい！？」

そして、扉からノックが聞こえた。

「誰？」

少し扉が開いた。

「ぼ…僕です…ちょっと…お話が…」

「明日にして」

「お願いです！どうしても今話したいんです！」

「タバサ、少しくらい話を聞いてやてもいいんじゃないか？」

「！？貴方は？」

「俺はタバサの従者のアデルだ」

「騎士様のお供の方ですか！？」

「…入って」

ヨシアを部屋に招き入れるタバサ。

「翼人達に危害を加えるのをやめて頂きたいんです」

「それは出来ない」

「事情を聞いて下さい！」

ヨシアの話によると、翼人達はこれから増える家族の為に家を作っていただけの所なんだが、丁度家を作ろうとしてる櫟が村の連中にとっては高額の櫟に住んでる邪魔者としてしか見てないと、ヨシアはそう言った。

それでもタバサは首を横に振った。

騎士としての立場と、任務失敗は母親の命を無くす結果になるから、タバサは何があっても依頼を遂行しなくちゃいけないという考えだから、ヨシアの願いはスルーしちまうからな。

すると、窓から翼人が現れた。

「ヨシア」

「！？アイーシャ！」

臨戦態勢を取るタバサとアデル（アデルは演技）。

「待って下さい、彼女は敵じゃない！」

「私…彼に合いに来たんです」

シルフィードは頭に？を付けた。

話を聞くと、ヨシアとアイーシャは恋人だという。

内容が怪我をしたヨシアをアイーシャが治療したのをきっかけにというお約束な出会いだという。

ヨシアは、互いが協力すべきだと主張した。

でもアイーシャは、

「ごめんなさい…今日はお別れを言いに来たの…」

「えっ？」

翼人達は、争うくらいならと森を出て行くと言い出していたらしい。ヨシアはタバサに引いてもらうよう頼んだが、タバサはそれを拒否した。

「騎士様には心が無いのか!？」

掴みかかって来たヨシアだが、アデルがタバサの前に立ち塞がった。

「命令でしか動けないなら、ガーゴイルと同じだろ!？君は子供だから解らないんだ、愛する人と離れるのがどんなに辛いか…!!」

それくらい…タバサは解ってるよ…

そしてタバサは杖を持った。

「やめて!彼を殺すなら先に私を殺して!」

アイーシャがヨシアの前で懇願した。

が、タバサは、

「それでいく」

「「…はっ…?」」

「なるほど、つまりタバサが言いたいのは、人間と翼人が協力する必要性を、村の連中に見せようって事だ」

タバサはコクツと頷き、二人は笑顔になった。

「さてと、そうと決まったら準備すっか！」

「準備？」

「明日の朝までのお楽しみって奴だ」

「「「?」」」

「あゝそうそう、ヨシアって言ったっけ？」

「はっ、はい!？」

「あんた、俺の事を村の皆には言うなよ。じゃないと計画おじゃんになっちまうからな！そして明日の朝翼人達に助けを求めろよ！んじゃ」

そう言って窓から出るアデル。

そして村はずれの森で精霊の杖をかざしたが、シルフィードが訪ねた。

「お兄さま、何をするつもりなのね？」

「へへっ、ちよっとした変身をするんだよ」

「きゅい！それで精霊達が集まってるのね」

「そゆ事。そんじゃあ、いっちょ派手な大芝居を始めっか！」

俺は精霊達に頼んで、あるモノに変身した。

「きゅいー!？お兄さま。それはっ!？」

さて、目的のモノに変身した以上、本気で暴れますか。

でもまあ、タバサの攻撃は、ちゃんと喰らわないとな。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

タバササイド

夜が明けた。

でも、昨日アデルが言ってた計画って一体？

「お姉さま！」

「静かに」

「ごめんなさいなのね、ってそれどころじゃないのね！」

「どうしたの？」

「お兄さまがとんでもない事をするのね！」

「！？どういう事？」

「実は…「大変だああああっ！！」きゅい！？始まったのね！」

何をしたのアデル！？

「ワイヴァーンが襲って来たああああっ！！！」

ワイヴァーン？アデルは一体何を？

「お姉さま（小声）」

シルフィードが言って来た。

「実はそのワイヴァーンは、お兄さまなのね（小声）」
「！！！！？」

読めた、アデルは、自分が村を襲うフリをして村の人達と翼人が協力して自分を追い払うという彼の計画に。
だったら私は、それに乗る！
そう考えて外に出るタバサ。

「グオオオオオオオオツツ！！！！」

ワイヴァーンが叫びながら炎を吐いて近くの民家を焼いた。
これ程の破壊なら、こっちも多少本気でいかないと芝居だということがバレかねない。

それに、アデルは自分から悪役になったのだから、手加減をしたら彼を侮辱したも同然。
だから、私は、戦う！

タバサはワイヴァーン（アデル）に杖を向けた。

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

ワイヴァーン（アデル）サイド

俺は今ワイヴァーンになって村を襲ってます。
おっ、タバサが出てきた。

「精神統一、一呪入魂、仇敵殲滅、雪風魔法、静まれワイヴァーン」
「！」

た、タバサ！？どこの厨二病！？何その変な言い回し！？
タバサの言い分に心の中で突っ込むアデル。
取り合えず応戦しないと、

「グオオオオオオオオツツ！！！」
「効かぬ！」

俺の吐いた炎をたやすく防ぐタバサ。

「次はこちらの番だ！我が最強の呪文を喰らえ！」

いきなり最強だと！？

「行けっ、風棍棒！！！」

つてそれただのエア・ハンマーだ「ドカッ」へブツ！？
突っ込もうとしたアデルの顔に当たり、地面に落ちた。
その後、立ち上がり、怒り顔で叫んだ。

「グオオオオオオオオツツ！！！」
「アイシクル・エッジ！」

うわっ！？

アデルは飛翔し、空に逃げようとした。
そして、タバサも飛んだ。

「騎士とて飛ぶ、飛ぶ騎士である」

さっきからその言い回しは何なんだ？

そういえばこっちのメイジは、一つの魔法を使用したら、他の魔法は使えなかったよな？

だったら反撃開始！

タバサに突っ込むアデル。

「反撃の呪文を、殺されちまいますよ！」

「…飛びながら他の呪文を唱えられない」

キリッとした顔で言うなよタバサ…。

「えっ！？じゃあどうして空に…？」

同感だ…。

「…って騎士様あー！？後ろ後ろー！！」

「ドン」とタバサに体当たりをしたアデル。

吹き飛ばされて地面に激突し、気絶するタバサ。

「ああつ、騎士様！？しっかりして下さい、騎士様！」

タバサに近づく兄。

勝利の叫びでも吠えようかな。

「グオオオオオオオオツツ！！！！」

村の連中は怯えきっていた。

すると、ヨシアが現れた。

「翼人を追い出そうとしたから、罰が当たったんだ…解つただろ！」

住処を追われるってどういう事か！」

「うるせえ！それとこれとは……」

「別じゃない！協力しあう選択肢だってある！そうすれば、ワイヴアーンだって倒せる……！」

ヨシアが手を上げた瞬間、翼人達が一斉に出てきた。

「なっ、翼人……！」

ヨシアの近くにアイーシャが降りてきた。

「ヨシア」

「……（コク）」

「お前！やっぱりその女も「いいから、僕達に任せて！」ちよっ！？任せて、それじゃ落とされるだろ……！」

まあ、よろよろ飛んでちやなあ。

そして翼人達は、俺の周りを飛び始めた。

「矢を射かせて！ワイヴアーンの注意を引くんだ！」

「おっ、おっ……！」

矢で応戦する村人達。

うわっ、危なっ……？

すると、近くにヨシア達が来た。

そして、アデルの目に石を投げ付けた。

「グギヤアアアアアアアッ……！！？」

目がアアアッ……！！？ヨシア、目に攻撃すんじゃないやねえよ……？

すると、いつの間にかタバサが復活して、目の前にいた。

「トドメ、風棍棒!!」

「グギヤアアアアアアアッ!!」

至近距離でそれは辛いいいっ!!?

アデルは森まで吹っ飛んだ後、遠くへと飛び去った。

「まつ、こんな所かな?…おゝ痛えゝ」

顔に鈍い痛みが出てるよゝ。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

タバササイド

あれから三日が経った。

二人は結婚した。

兄の方は意外と二人の事を祝福していた。

本人が言うには、「いずれ村を背負う者として心を鬼にする事がある」だそうだ。

それでも、「弟が幸せになる事は喜ばしい」と笑顔で言ってた。

こうして、エギンハイムの村を離れた私は、近くの森に住んでたアデルと合流して帰ろうとしたら、

「騎士様——っ!」

ヨシアとアイーシャが飛んで来た。

「ありがとうございます！」

「この御恩は忘れません！」

そう礼を言つてブーケを貰つて、二人は帰つた。

「きゅい、お姉さま！お花いらならぬなら私に頂戴！」

シルフィードの頭に花を付けた。

「さて、これで任務完了つてか」

アデル…何故自分があんな真似をしたんだろう？

「どうしたタバサ？」

「貴方はどうしてあんな事を？」

「あんな？ああワイヴァーンの事か？大抵のハッピーエンドには、英雄が悪役を倒すのがセオリーだからな。彼らが幸せになれるんなら、俺は喜んで悪役になるさ。それに、俺は悪魔だしな」

笑顔で言うアデル。

誰かの為なら喜んで悪役になる、か…でも、自分の事を、悪魔だからって言わないで…貴方は私の…、

「そんな事無い、貴方は私の………使い魔……」

勇者…って言えなかつた。

「そうだな」

胸が少し痛かった、これは一体？
するとシルフィードは、

「結婚式綺麗だしたね！お姉さまも早く結婚したらいいのに！そして、お花いっぱい着飾るの！あつ、その前に恋人をお作りになつて、こ・い・び・と！」

「…うるさい」

結婚…か…、

ふと、タバサはアデルの方を見た。
すると、

「きゅい！どうせならいつその事、お兄さまと結婚すればいいのね！」

「！？」

「ちよつ、シルフィード！？そうゆうのはまだ早いだろ！？マセなドラゴンだな」

「でもシルフィとしてはお兄さまの方がお姉さまを幸せに出来るのね。きゅい！」

私…ドキドキしてる！？

「おいおい、身近にいる者で判断するなよ、そうゆうのはもっと大人になってから考えるもんだろ？」

私は…アデルと…どうしたいんだろ？

タバサの冒険 翼竜人編（後書き）

特徴的な所は、マンガ版タバサの冒険を参考にしました。
タバサにフラグを立ててる事に気付かないアデルでした。

タバサの冒険 吸血鬼編（前書き）

サイトが目覚める前の日からデルフを買う前日の間だと思っていた。
い。

G・Wでは休んばかりでしたので更新が遅くなりました。

タバサの冒険 吸血鬼編

今俺達はまた、プチ・トロワに来ていた。

数日前に任務終わらせたのにまた駆り出されるなんてな。

まあぶつくさ言ってもしょうがないしな、確か次の任務は…吸血鬼か。

だったらまた変身しようかね。

ちなみに俺は今シルフィードと一緒にいます。

「きゅいゝ、きゅいゝ、きゅいきゅいゝ（お兄さまゝ、暇なのねゝ、お話してほしいのゝ）」

「そう言っな、もうすぐ来るから」

「きゅいゝ（暇なのねゝ）」

動物の言葉が解る俺だからシルフィードの鳴き声で返事が出来るって訳です。

あつ、タバサが戻って来た。

その後、首都リュティスから五百リーグ南東のサビエラ村…のはずれまで来ていた。

「ここで良かったの？村からちょっと離れてるけど…」

「今回は…慎重に行く」

「それは勿論なのね！」

さすがのタバサも、相手が吸血鬼…見た目は普通の人間と変わらなから慎重に行くだろう。

「そこで…アデル」

「ん？」

何の用だろう？

「悪魔として聞きたい。吸血鬼について詳しく教えて」

なるほどね。仕方ない、ある程度ネタ晴れしてみるか。

「そうだな、まず誰が吸血鬼かは多分すぐに分かると思う」

「お兄さま！それ本当なのね？」

「吸血鬼はある意味魔性の存在だ、悪魔も同じ魔性の存在、だから分かる」

本当は誰が吸血鬼か知っているだけだな。

「悪魔だから分かる事…」

「きゅいゝ、だったら今回はお兄さまの出番なのね！」

「いや、今回は裏方になるから」

「きゅい！？どうしてなのね！？」

「もしその吸血鬼が、村の人達に信頼されてる奴だったらどうする？例えそいつが吸血鬼と言っても誰も信じようとはしないだろう？ましてや、相手が子供だった場合の事なんか特に」

「アデルの言うとおり」

「きゅいゝ…それじゃあどうするのね？」

タバサはシルフィードに近づいた。

「そこで…化けて」

「ええっ！？い…いや…なの」

「化けて」

「や！」

「やじゃない」

大変だなシルフィード…。

「ううう…お兄さま、助けてなのね」

「…なあタバサ、シルフィードが嫌がつてるから、その「アデルは黙ってて」…すまんシルフィード…」

「きゅい！？諦めないでなのね！？」

正直怖かったよ今のタバサ。

そして根負けそたシルフィード。

「あーっもうっ！後でいっぱいお肉頂戴よ！」

タバサはコクリと頷く。

そして精霊魔法を唱えるシルフィード。

「我を纏いし風よ、私の姿を変えよ」

シルフィードの姿が徐々に人間の姿になっていく。

ん…待てよ？何か忘れてる様な気が…。

そしてシルフィードは、生まれたままの姿の人間の姿となった。

「ブフォッ！！？」

すぐさまアデルは後ろを振り向いた。

み…見ちまった…シルフィード（人型）の裸を…。

「うっ…やっぱりこの体嫌い！動きにくいー！きゅいきゅいー！」

「真顔で言わないでー!」

「取り合えず落ち着けてシルフィード!」

「きゅいー、お兄さま…何とかしてなのねー!」

「そう言われても…」

「アデルは変身」

「えっ?」

タバサが俺に何か変身しろと言ってきた。まあ俺もそのつもりだったから別に良いけど。

取り合えず俺は、大狼（人が二人程乗れるくらいの大きさ）に変身した。

「きゅいー、お兄さまふかふかなのね」

タバサがじゅっと見てたのはこの際置いとして、今の俺らのポジションは、

タバサ、騎士↓従者

シルフィード、使い魔↓騎士

アデル、タバサの使い魔↓シルフィードの使い魔

というポジションになった。

ちなみに大狼になった俺の名前はフェンリル（タバサが命名）になり、その背にシルフィードを乗せ、タバサは側で歩いていた。

村に入った俺達と言うと、村の人達は陰口叩いてるのを聞いた。

「今度の騎士さまは若い女だとさ」

「しかも子供を連れているのよ」

「使い魔は強そうだけど、獣じゃ役に立ちそうにねえな…」

「こないだの騎士さまは三日でお葬式…」

「今度は二日かねえ……」

「もう騎士なんてアテにならねえ！」

「俺達で吸血鬼を見つけるんだ！」

こんな陰口言ってるが、なんにせよ、結果を出さないと。

村長のアイザックさんが来て、村長宅にお邪魔するシルフィードとタバサ。

今の俺は動物だから外で待つてた。

少し暇になってて退屈だった。

すると、話が終わったのか、二人が出て来た。

「タバサ！フェンリルちゃんを連れて来なさい！」

「はい」

フェンリルちゃんて……ちゃん付けかよ。

「（アデル、これから村を調査するから、誰が吸血鬼か探すの手伝って）」

「ウォン（了解）！」

俺は了解の意味で一声上げた。

シルフィード達（一応シルフィードが先頭）は村中を調査した。主に被害者の家を中心に調べた。

家に入ろうとしたが止められたので、また俺は外で待つ事にした。すると、外が騒がしくなった。

シルフィード達が出て来たので、騒ぎになってる現場に行ってみた。そこにはもう、あるあばら家を取り囲んでわめいていた。

その家に住んでる男、アレキサンドルは、母親が吸血鬼じゃないと主張するが、村人たちは吸血鬼だと思ってる為、まったく聞く耳もたない感じになってる。

それはもう、何の罪も無い者が寄って集って犯人扱いするという人間の醜い姿ともいえる状態だった。

「は！？何を考えたんだ自分は！？悪魔化してるせ所為で、物騒な考えをしちまったな。」

すると、大分話が進んでいたみたいだった。

「こんな哀しい事、絶対終わらせてやるんだから！由緒正しき花壇^{シュバリエ・ド・バルテル}騎士の実力、しっかり黙って見てなさい！…なの」

あーあ啖呵切っちゃってまー、でも、これはこれでいい圈になるな。その夜、俺はというと、外で寝ようとしてます。

まあ窓からタバサ達の様子を見れるけど、あつ案の定、

「あんな啖呵切っちゃってどおしよう~~~~~~~~~っ」

「自業自得」

「「ゴン」ふにやつ！？」

タバサにど突かれてるなシルフィード…。

「うゝ、だって…あの二人が可哀相だったんだもの…」

「確かに証拠が無い…」

「その上白だし…」

「白！？アデル、あの二人は違うつて事！？」

「きゅい、やつぱり！」

だけど、アレキサンドルの方は…

「だが、男の方はもうダメだ」

「どうゆう事？」

「屍人鬼^{ゲール}…」

「そうゆう事だ」

「きゅい！？じゃあ、あのお婆さんは！？」

「普通の老婆だった、吸血鬼じゃない」

「きゅい！だったら皆にお婆さんが吸血鬼じゃないって言えば…」

「無駄だろうな」

「ちよつ何でなのね！？」

少し考えたら分かるだろ…。

「考えてもみる。村人たちはあの二人が犯人だと決めつけている。そこに男がグールだって言ったら、必然、婆さんが吸血鬼だと言ってる様なものだから、迂闊に言えば婆さんの命が無くなる可能性だってある」

「うつ… あつそうだお兄さま、お兄さまならグールになったあの人を元n「悪いがそれは出来ない」ええっ！？」

普通に考えたら解るだろ…。

「いくら俺が悪魔でも、そんな事出来るのは根っからの純粹種で上位級悪魔しか出来ないんだ。俺みたいな悪魔に成りかけてる奴は治療は出来ても、そんな真似は出来ないんだ！」

「きゅい…」

「ともかく、今は現状維持しながら調査するしかないんだ。それを分かってくれ」

「う…」

「アデル、吸血鬼の方は？」

「俺が遭った中ではいなかった」

「そう… 吸血鬼は、あの時騒ぎにはいなかった人物と言っ事は分かった」

「？」

「つまり、吸血鬼は、あの時家の中にいたという事だ！」

「これだけでも充分な収穫」

「えっと…良く分からないのね？」

「つまりは、タバサを信じろって事だ」

「きゅい！分かったのね！」

ホント単純だなシルフィードは。

その後、タバサとシルフィードで作戦会議が始まったが、アデルはいいと言われたので、寝ました。

翌日、シルフィードの杖をタバサが足でぶつけた事でシルフィードが怒って、タバサに杖磨きを要求した。

これが昨晚した作戦の一つの囷作戦（元からこうだったような？）だった。

そして村の若い子（ほんの数人）が村長宅に集まった。

すると、女の子が三人ほど俺の方に来ていた。

「ワフウ（ん、何だ）？」

「わっおっきいわんちゃんだ」

「毛がふさふさしてる」

「気持ちいい」

「バウツ、クウーン（ちよっ、くすぐったいって）！？」

子供たちにおもちゃにされてるアデルだった。

それから子供たちの側にいて見張ってたら、悲鳴が聞こえた。

俺は中に入れないから確認の仕様が無いが、タバサが戻って来たので事情を聞いてみた。

「（エルザという女の子がグールに襲われた）」

「（妙だな…俺の感覚だと、誰も来なかったが？）」

と呟いたら、タバサが考え込んだ。

確かに妙だ…原作なら一度グールが来る筈なのに来なかった。

その後、俺は寝ずの番で入り口を見張ってた。

翌日、村長宅に人が集まっていた。

「（まったく、昨日は信じられねえとか言いながら集まって来てんじゃないか。調子の良い人間達だな…って！？また物騒な事考えてるよ俺！？）」

その日の夜、外にいた俺は死臭を感じた。

そこに行ってみると、目が血走り、牙が生えたアレキサンドルがいた。

そして窓から入って行き、襲撃した。

「（後はタバサに任せて、待つとするか）」

すると、アレキサンドルが窓から出て来た。

後を追おうするタバサと目が合い、タバサが口笛を吹いた。

その意図を理解した俺は、タバサの下に行き、タバサを乗せた後、そしてアレキサンドル（グール化）を追った。

追い付いて先回りしたタバサ達は、アレクサンドル（グール化）と対峙した。

「（哀れだな…グールになった者は元に戻す事は出来ないから殺すしかないからな。今のあいつは、吸血鬼の操り人形…いや死体だな）」

「始祖よ、不幸な彼の魂を癒したまえ。ラグーズ・イス・イーサ…
ウィンディ・アイシクル！！」

決着が付いたみたいだ。

その後タバサは、アレキサンドルに土をかけて、鍊金し発火させて、遺体を燃やした。

すると、慌てた様子のシルフィードがやって来た。

「お姉さま、大変なの！ほらアレ！」

よく見ると黒煙が上がっていた。

どうやら火事が起きてるみたいだ。

急いで駆け付けると、周りに人だまりと、あの老婆がいた家が燃えていた。

村人たちは喜んでいた。吸血鬼だと思い込んでる老婆を焼いてる事に。

タバサが火を消した後、散々文句を言ってきた。腹が立ってきた。

しかも、人間の消し炭死体を吸血鬼のだと思い込んで喜ぶ村人たちの姿に、反吐が出そうだった。

「それはそうと、あんたが騎士だったんだな……」

「！？」

「吸血鬼どころか俺達まで騙して、結局村を引っ掻き回しただけじゃねえか！いつそあんた達がこなけりゃ、俺達はもっと早く吸血鬼を討てたんじゃないか？」

討ててないぞ。あんたらがやった事は、無実の者を殺したただけだ。

「……つき」

ん？

「お姉ちゃんの嘘つきっ！」

その少女は走り去った。

「エルザ！」

村長が後を追った。

良く言っぜ。一番の嘘つきの、吸血鬼の癖によっ。やっと会えたぜ。

「……愚か……」

「お姉さま……」

さて、村人たちはいないから、ネタ晴れするか。

「タバサ、気にするな。結局この村は人殺しの村になったただけだからな」

「……………」

「お兄さま！？こんな時に何言うのね！？」

「それに、吸血鬼の目途が付いた」

「！？」

「きゅい！？本当なのね！？」

「タバサ、耳貸してくれ」

「…（コクリ）」

「ってお兄さま、シルフィは？」

「お前に言っつと挙動不審で怪しまれるぞ」

「（コクリ）」

「お姉さままで！？」

そして、タバサに耳打ちした。

「（タバサ、吸血鬼は…お前に嘘つき呼ばわりしたあの少女だ！）」
「！？」

驚いてるな。原作だと、常にずっと一緒にいたからな。当然か。

「（恐らく今夜あたり、タバサを襲うかもしれない）」

「…分かった」

その後、村長宅に戻ったタバサ達。

俺は当然外で待ってた。

すると、タバサとエルザが出て来た。

すぐに俺は起き上がってタバサの側にいこうとしたが、手をかざされた為に止まってしまった。

「待機」

「ワンツ（了解）！」

どうやらタバサは何か考えがあるみたいだな。でも後で助けに行くからな。

「お姉ちゃんの使い魔なのこの子？」

「そう」

「おっきいわんちゃんだね」

「ワン」

その後二人は、森の方に行った。

途中口笛が聞こえたら、タバサの杖を持ったシルフィードが出て来た。

「きゅい、お兄さま！お姉さまが呼んでるね！」

「分かった。俺は元に戻る、お前も元に戻れ！」

「了解なのね！」

二人は元の姿に戻り、タバサの下に飛んだ。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

タバササイド

アデルからエルザが吸血鬼だと教えてくれた。
大方の見当はついていたが、証拠が無かった。
アレキサンドルがグールだと教えてくれた時は半信半疑だったが、
本当にグールになっていた。
と言う事は、エルザは…、

「あ、あの…お姉ちゃん…エルザです…」

ドアからエルザの声が聞こえた。
取り合えず中に入れた。

「さ…さっきはごめんなさい…、わたし…お姉ちゃんにひどい事を
…」

どうやらさっきの事で謝りに来たみたい。

「お姉ちゃんたちは行っちゃうの？」

「…夜が明けたら」

「…そう…あ、あのね！お姉ちゃんに見せたいものがあるの！」
「？」

私は、アデルの言ってた事を思い出した。

『恐らく今夜あたり、タバサを襲うかもしれない』

アデルの予感、当たりかも知れない。

「お姉ちゃんが好きなムラサキヨモギ。いっぱい生えてる所を知ってるの！お土産に持って行って？」

なるほど…この村に来てから、よく食べてるムラサキヨモギを餌に誘う訳という事。

「…分かった」

「あつ…！？」

私が杖を持って、エルザは怯えていた。

相手が確実に油断させるには、ここは杖を置いて行こう。
タバサが杖を置いた事で、エルザは安心した様だ。

「あつ…ありがとう…」

そして二人で外に出た所、フェンリル（アデル）が近づいて来た。

「待機」

「ワンッ！」

私が手をかざすと、アデルは止ってくれた。
貴方はここで待ってて、後で助けに来てね。

「お姉ちゃんの使い魔なのこの子？」

「そう」

「おっきいわんちゃんだね」

「ワン」

アデルはそのままだった。

どうやら私の考えを読んできたみたい。

「ねえお姉ちゃん、笑い声が聞こえるね。吸血鬼が死んで、ごきげんなのかな？」

死んでない、ここにいる。

私はアデルとシルフィードを知らせる為に口笛を吹いた。

「お姉ちゃんもごきげんなの？」

「魔除けの口笛」

「ふうんじょうずなのね」

森の奥に着いた。

「ほら、ここだよ。ね？すごいでしょ？ここが一番ムラサキヨモギが生えるの！好きなだけ積んでいつてね！」

…ムラサキ（・・・）ヨモギなのに、何で紫じゃない？

エルザの話を聞いてみると、積む前は淡い桃色だが、積まれて時間が経つと濃い紫色になるといふ。

「積む前の草を見ない人は、皆知らないんだね。この草が本当はどんな色で、どんな風に生きているのか」

エルザが話してる内に積み終わった。

「わあ… いっぱい積んだのね！ ねえお姉ちゃん…」

エルザが近づいて来た。

「ムラサキヨモギの悲鳴が聞こえるよ？ いたいいたいってね」
「！！？」

私は咄嗟に下がった。

「枝よ・伸びし森の枝よ・彼女の自由を奪いたまえ」
「くっ！？」

エルザの先住魔法で、樹の枝が私を拘束した。

「お姉ちゃんは優しいね。私を気遣って杖を置いてきてくれた。…
今頃従者さんは夢の中、使い魔のワンちゃんはお姉ちゃんを信じて
待ってる。残念だったね？」

エルザが妖しくにやけた。その口から牙が生えていた。

「吸血鬼…」

やっぱりアデルの言った通りだった。エルザが吸血鬼だった。

「あゝあ… あんな演技するから、どっちがメイジか迷ったじゃない。
魔法を使わせれば分かんと思っただけ、案の定だったね」
「皆を騙してたのね」

「やだ、嘘は付いてないよ。だって、誰にも聞かれなかったもの。」

言っておくけど、メイジが嫌いなのは本当なの。私の目の前でパパとママを殺したから…だから…、見つけたらすぐに美味しく頂くの、食事するのにも奴らは邪魔なもの。生きる為に殺す。でもそれは人間^{あなたたち}も同じでしょ？私は何も悪くない！」

自分のした事を正当化している。

「もちろん怪しまれない為に色々準備はしたけどね？村に来てしばらくは血を我慢したの。飢えさえ除けば不便じゃ無かった。何も知らないおじいちゃんのおかげでね。そしてあの親子がやってきたの。お婆さんは外に出ないなんて、こんな好条件滅多にないわ。彼は優しいだった、うちに最初に挨拶に来た時に外のお話をしてってせがんだの。グールにするのは簡単だった。彼はとても使えたわ…」

自分の為に何も知らない村長や親子を利用した。

「何？怒ってるの…？お姉ちゃんのその目…好きよ。冬を固めた様な深く冷たい蒼…でもその奥に暗くて紅い炎が見える気がする…。何の為に騎士なんてやってるの？名誉の為？それとも寝たきりのままの為？」

エルザは、タバサの服を破った。

「！！！」

「ああ…なんて美味しそうな白い肌…お姉ちゃんの美しさが私の血肉となって、永遠に生き続けるんだよ…。その目に興味が湧いて、時間をかけて狩ろうと思ったの。あの時も…」

エルザは前にタバサに質問した事があった。

『吸血鬼は？吸血鬼が血を吸うのも生きる為？』『そう』という質

問に。

「嬉しかったの…本能でこの人とは解りあえる…そう感じたわ。私は吸血鬼なの、そんな人と出会ったらもう抑えられない…この人の血が欲しい…牙が疼くの!」

徐々に近づくエルザ。

「ねえ…最後にあの質問の続きをさせて?生きる為に他社の命を奪う。生きる為…成す事の為…杖を…牙を他者に振るう。私達は同じよね?聞かs「ウインド!」!?!?」

風がエルザを襲った。
やつと来てくれた。

「な…何なの?この風…!!?」

エルザは、上空にいる者に気付いた。

「竜!?それに…人?」

アデルは急降下してエルザに攻撃した。

「ハアッ!」

「キャアアッ!?!」

「タバサ!」

アデルは私に杖を投げつけた。

「ラグーズ・イス・イーサ…」

「はっ…！？ね、眠りを導く「させるかつ、マフージ！」！？あれ、魔法が！？」

エルザが先住魔法を使おうとしたが、アデルによって妨げた後、アデルは横に飛んだ。

「ウィンディ・アイシクル！！」

私の放った氷の矢がエルザに命中した。

「はあ…はあ…風竜？…それにメイジ？…どうして？」

「きゅいきゅい！よくもお姉さまをいじめてくれたわね！」

「その答えは、こいつが風韻竜で…俺はこうだったからな」

アデルは顔だけを狼にした。

「ああ…あの時の口笛で…」

エルザはここに来る前に吹いた口笛の真の意味に気付いた。

「伝説の古代種なんて…まだいたんだ…それに、あの時のワンちゃん…先住魔法を扱える人間…だったなんて…」

「悪いが俺は人間じゃない。お前と同じ…」

アデルは悪魔の翼を展開させた。

「化け物だ！」

アデルがそう言うと、少し哀しくなってきた。

「悪魔って…本当にいたんだ…一体いつから疑ってたの？」

「煙突はもう調べた…どこにも布なんて無かった。煙突から忍び込んだとすると、体の小さい老人か子供の可能性が高い。でも、どこかの誰かまでは判らなかった。あの時…貴女がグールに襲われたと言ってたが、アデルはグールは来ていないと言ってた。つまり、外にいた狼に…アデルに気付かれる恐れがあつた貴女は、自作自演でグールに襲われたと言うしか無かった」

「だがここで誤算だったのは、仮に襲撃が嘘だと気付かれても、狼だから喋る事は出来ないという俺の存在が、ただの狼だと判断した事だ！」

「そこから考えて気付いた。もし本当に襲われたのなら、グールは人目を忍んで行動させられていた。貴女の部屋が手薄な事を知っていて…更に日光の届かない場所において…すぐ近くにいても怪しまれない人、その中に吸血鬼がいると思つた」

「はつきりと解つたのは、お前がタバサに嘘つきと叫んだ時に気付いた…こいつが吸血鬼だってな」

「そう…警戒されてたって訳か…お願い…殺さないで…生きる為にやっただよ。私は悪くない。人間とどこも変わらない…そうだ「見苦しい！」ガハッ！」

アデルはエルザの喉元を踏み付けた。

「確かに生きる為には仕方無いのかも知れねえがな、お前はやり過ぎたんだ！とつと死ぬべきなんだよお前は！」

「そ…んな…」

「勝手か？勝手で上等！好き勝手にやって、他の事は知った事じゃ無い！それが悪魔だ！」

！？…普段の彼ならそんな事言わないのに…まさか、悪魔に！？

「だから、お前達が生きる為に牙を振るうなら、人間は生きる為に、杖を…剣を振るう！そして俺は生きる為に、お前を殺す！」

「！？」

アデルはシルフィードの近くに寄った。

「きゅい…お兄さま？」

「お前の体を借りるぞシルフィード、魔チェンジ！」

「きゅいーーーー！！？」

「！？」

アデルはあろう事かシルフィードを掴んだ後、光がシルフィードを覆い、形を変えていき、光が収まるとシルフィードは彼の…アデルの弓になっていた。

その形はシルフィードの翼と似て、その中心には頭に思える形があった。

「じゃあな吸血鬼…ホーリーアロー！！」

アデルが弦を引くと、弓となったシルフィードの口（？）から光の矢がエルザに向けて、放たれた。

光の矢がエルザに当たり、眩い光が辺りを照らした。

「キャアアアアアッ……………悪魔も……………同じ…なのね……………」

そうして絶命して灰になるエルザ。

タバサは咄嗟にアデルの方を見た。その姿は、エルザを蔑む様に見ていた。

まさかアデル…本当に…悪魔になって…。

「ん？どうしたタバサ、これで任務完了だぞ？」
「……………」

タバサは少し戸惑っていた。

先程とはうってかわって、優しい顔でタバサを心配してた事に。

「ん？ああシルフィードの事か？ちよつと待ってな…」

アデルは、タバサがシルフィードの事を考えてたのかと思っていた。
弓となったシルフィードが光を放った後、光が収まると元の竜の姿に戻っていた。

「きゅい…びつくりしたのね。シルフィがまさか弓になるなんて
思わなかったのね」

「普通…誰も思わない」

タバサが冷静な突っ込みをした。

そうだ、シルフィードが弓になった事を聞いてみようと思った。

「アデル、さっきのは一体？」

「ああ、あれは魔チエンジだ」

「魔チエンジ？」

アデルは魔チエンジについて説明してくれた。

悪魔特有の力と言っていたから、私は少し怖くなった。アデルが人で無くなっていくのを。

「さてと、タバサはこれからどうする？」

「え？」

「エルザの事だよ。いきなりいなくなったら村長さんが心配するだ

る？」

「そう……」

「……どうしたんだタバサ？さっきから黙って……」アデルは悪魔じゃない！」「うおっ！？」

「アデルは……悪魔じゃ……」

私は声が出せずにいた。さっきまでの様子と違うのだから。するとアデルが近づいて来た。

「済まないなタバサ……俺の事を心配してくれて、でもあいつの言ってる事がどこか許せなかったんだ。だから何故か非情になれた」
「そう……」

やっぱり悪魔化の影響なのかな？

- - - - -
- - - - -
- - - - -

アデルサイド

あの娘の言ってる事が某生徒会の副生徒会長のマイナス少年みたいだな。

「嬉しかったの……本能でこの人とは解りあえる……そう感じたわ。私は吸血鬼なの、そんな人と出会ったらもう抑えられない……この人の血が欲しい……牙が疼くの！」

徐々にタバサに近づいていくエルザ。

もう我慢出来ねえ！

「ねえ…最後にあの質問の続きをさせて？生きる為に他社の命を奪う。生きる為に成す事の為に杖を…牙を他者に振るう。私達は同じよね？聞かす「ウインド！！！！」！！？」

風がエルザを襲った。

「行くぞシルフィード！」

「きゅーーーーー！」

「な…何なの？この風…！！？」

エルザは上空にいる者に気付いた。

「竜！？それに…人？」

俺は急降下してエルザに攻撃した。

「ハアツ！」

「キャアアツ！？」

「タバサ！」

俺はタバサに杖を投げた。

「ラグーズ・イス・イーサ…」

「はっ…！？ね、眠りを導く…させるかつ、マフージ！」！？あれ、魔法が！？」

俺は咄嗟に魔法封じの魔法をエルザにかけた。そしてトドメをタバサに譲る為に横に飛んだ。

「ウインディ・アイシクル!!」

タバサの放った氷の矢がエルザに命中した。

「はあ…はあ…風竜?…それにメイジ?…どうして?」

「きゅいきゅい!よくもお姉さまをいじめてくれたわね!」

「その答えは、こいつが風韻竜で…俺はこうだったからな」

俺は顔だけを狼にした。

「ああ…あの時の口笛で…」

エルザはここに来る前に吹いた口笛の真の意味に気付いた。

「伝説の古代種なんて…まだいたんだ…それに、あの時のワンちゃん…先住魔法を扱える人間…だったなんて…」

「悪いが俺は人間じゃない。お前と同じ…」

俺は皮肉を込めて悪魔の翼を展開させた。

「化け物だ!」

俺がそう言うのとタバサが泣きそうな顔をしていた。何故だ?

「悪魔って…本当にいたんだ…一体いつから疑ってたの?」

「煙突はもう調べた…どこにも布なんて無かった。煙突から忍び込んだとすると、体の小さい老人か子供の可能性が高い。でも、どこかの家の誰かまでは判らなかった。あの時…貴女がグールに襲われたと言ってたが、アデルはグールは来ていないと言ってた。つまり、

外にいた狼に…アデルに気付かれる恐れがあつた貴女は、自作自演でグールに襲われたと言うしか無かつた」

「だがここで誤算だったのは、仮に襲撃が嘘だと気付かれても、狼だから喋る事は出来ないという俺の存在が、ただの狼だと判断した事だ！」

「そこから考えて気付いた。もし本当に襲われたのなら、グールは人目を忍んで行動させられていた。貴女の部屋が手薄な事を知っていて…更に日光の届かない場所にいて…すぐ近くにいても怪しまれない人、その中に吸血鬼がいると思つた」

「はつきりと解つたのは、お前がタバサに嘘つきと叫んだ時に気付いた…こいつが吸血鬼だつてな」

「そう…警戒されてたつて訳か…お願い…殺さないで…生きる為にやっただよ。私は悪くない。人間とどこも違わない…そうd「見苦しい！」ガハッ!？」

段々イラついて来たから、エルザの喉元を踏み付けた。

「確かに生きる為には仕方無いのかも知れねえがな、お前はやり過ぎたんだ!とつと死ぬべきなんだよお前は!」

「そ…んな…」

「勝手か?勝手で上等!好き勝手にやって、他の事は知つた事じゃ無い!それが悪魔だ!」

確か悪魔つてそうだった様な…だが、俺はある決意をする。

「だから、お前達が生きる為に牙を振るうなら、人間は生きる為に、杖を…剣を振るう!そして俺は生きる為に、お前を殺す!」

「!？」

アデルはシルフィードの近くに寄つた。

試した事は無いけど、やってみるか！

「きゅい…お兄さま？」

「お前の体を借りるぞシルフィード、魔チエンジ！！」

「きゅいーーーー！！？」

「！！？」

俺はシルフィードを掴んだ後、光がシルフィードを覆った。そして形が変わり、シルフィードは弓になった。

形的には聖竜族に似た弓だな。まあ韻竜は聖竜に近いからな。

「じゃあな吸血鬼…ホーリーアロー！！」

俺が光の矢を放ち、エルザに当たった後、眩い光が辺りを照らした。

「キヤアアアアアッ……………悪魔も……………同じ……………なのね……………」

そうして絶命して灰になるエルザ。

俺はこの世界で、初めて人（吸血鬼だけど）を殺したんだ。

ちよっと鬱になった所、ふとタバサを見ると辛そうな顔をしている。どうしたんだろう？

「ん？どうしたタバサ、これで任務完了だぞ？」

「……………」

ああもしかして…シルフィードの事か！

「ん？ああシルフィードの事か？ちよっと待ってな…」

どうやって戻せばいいんだろ？念じればいいのかな？戻れ！

弓となったシルフィードが光を放った後、光が収まると元の竜の姿に戻っていた。

良かった。戻せた。

「きゅいゝ…びつくりしたのね。シルフィがまさか弓になるなんて思わなかったのね」

「普通…誰も思わない」

まあそうだろうな。

タバサが冷静な突っ込みをした。

「アデル、さっきのは一体？」

「ああ、あれは魔チエンジだ」

「魔チエンジ？」

俺は魔チエンジについて簡単に説明した。

悪魔特有の力の事を言ったら、タバサは俯いていた。

「さてと、タバサはこれからどうする？」

「え？」

「エルザの事だよ。いきなりいなくなったら村長さんが心配するだろう？」

「そう…」

「…どうしたんだタバサ？さっきから黙って…」アデルは悪魔じゃない！」「うおっ！？」

「アデルは…悪魔じゃ…」

うわやべっ！？泣きそうになってるよおい！？と、取り合えず慰めない。

「済まないなタバサ…俺の事を心配してくれて、でもあいつの言ってる事がどこか許せなかったんだ。だから何故か非情になれた」
「そう…」

少し落ち着いたみたいだ。…たのか？

そして翌日、村長に手紙を残して、エルザの事は問題無くなった。
今俺達は、村が見える崖の上で婆さんの墓をたててた。
するとシルフィードは、

「さよならは哀しいだろうけど、本当の事を知るより良い時だってあるもの…」

「……………」

「タバサ？」

「お姉さま？」

「……………帰る」

タバサはどこか寂しそうだっただけ、聞かぬが花って事もあるだろうしな。

でもなタバサ、俺はこれからどんな事があるうとも、君の味方だから。

シルフィードにまたがり、タバサは俺に寄りかかって、眠ってしまった。

「吸血鬼…強かったけど、この先もつと手強い相手と戦う事になるのかしら…」

「だとしても、俺は…いや、俺達は、タバサを守るさ」

「きゅいっ！さっすがお兄さま！」

ふと俺はタバサの方を見たら、ほんのり赤くなってた。

タバサの冒険 吸血鬼編（後書き）

狼になったアデルの名前がフェンリルというのは安易過ぎましたか？
今回別の視点が少ないです。

次回からは、長くなりそうな話は前編・後編に別けようと思います。

サイト、デルフリンガーゲット（前書き）

サイト、デルフリンガーゲット

若干時系列がおかしいですが、出来れば気にしないで下さい。

サイト、デルフリンガーゲット

また夜明け前にタバサを起こして鍛錬に出かけた。

以前タバサに黙って出たら泣きつかれたので、出る前には必ず起こしてから出かける様にした。

いいかげん銃とか弓とか魔法とか練習したかったが、音が出る物は極力控えたかったが、良く考えたらサイレントという魔法があったので、それを使ったら周りに人がいるにも関わらずに使っても全然気付いてなかったたので、丁度良かった。

でもまっ、魔法はまた明日にしよう。

そして朝日が出て、近くにシエスタが通りがかった。

「シエスタ」

「あっアデルさん、おはようございます」

「今日もサイト君の所か？」

「はい！」

元氣良く言うなあ…。なんて献身的な娘だなシエスタ。
さて、そろそろ戻るか。

この数日で得た技は、

拳技・残像拳

剣技・飛天無双斬

弓技・スプラインアロー

銃技・三連星射

魔法・ファイア、ヒールのメガクラス

固有技・紅蓮疾風拳

魔法の効果範囲は単体から十字程といった感じた。

それにしても、拳技と剣技が他に比べて覚える早さが違うなあ。

「ん？あれは…サイトか？」

アデルは、水汲み場に行くサイトを目撃した。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

サイトサイド

ここに来てから十日が経った。今俺は水汲み場に来ていた。

ルイズはというと、相変わらず俺の事こき使うから嫌になるよ。何が「使い魔なら雑用くらいしなさいよ」だ。

でも、ここに来てから二つ良い事がある。

一つは、シエスタや食堂の人達だ。

あの人達はギーシュ（キザヤローの名前はルイズに聞いた）の件以来、俺に優しくしてくれた。

貴族達の残り物を分けてくれた。すっげー美味かった。あいつ等いつもこんな美味いモン食ってたのか、羨ましいぞ。

でも、出来れば俺の事を、「我らの剣」と呼ばないでほしいな、何かむず痒い。

そしてもう一つは、他と同じメイジで、俺と同じ使い魔として呼ばれ、この世界に来て最初に優しくした

「サイト君」

「あつ、アデルさん！」

毎朝鍛錬してるみたいだけど、俺の事を最初に気にかけてくれた人だ。

でもここ数日、あの人の主人のタバサ……だっけか？その人と一緒に何処かに行つてみたいけど、まあ良いか。

「また洗濯か？」

「はい、またお願い出来ますか？」

「分かった。ちよつと待つてろ」

そう言つてアデルさんは杖を出して、水を暖めてくれた。

アデルさんのおかげでいつも冷たい思いをしなくて済むから嬉しい限りだ。

他の貴族が皆アデルさんみたいな感じだったら、この世界は平和なんだろうな。

それに引換え、ルイズは横暴だぞ！仕返しに落書きしてよろうかな」

「サイト君それは止めておいた方がいいよ。後が怖いだろうから」

「あつアデルさん！？……声出てました？」

「「それに引換え」ってあたりから」

「ははは……」

注意されちまつたぜ。

まあ確かにアデルさんの言う通り後が怖い展開にならないとも限らないしなあ。

やっぱ止めよ。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

アデルサイド

その日の夜、鍛錬（タバサが寝る前まで）してたら、何人かが女子寮の方に向かって行った。

そついえば今夜は、確かキュルケがサイトを誘惑してるんだつたな。ボオオオオオオッ

あつ火噴かれて何人が吹っ飛んだ。今日はもうこれ位にしてもう寝よう。

部屋に戻った俺は、またタバサと寝るのであった。

つか俺も慣れたモンだな、最初は緊張して眠れなかったのに、今じゃ妹と一緒に寝る感じになつてきたからな。

そんな訳で、お休みタバサ。

翌日、また夜明け前に起きた。

今日は虚無の曜日だから、トリスタニアの街に剣デルフリンガーを買いに行く日だ。

先回りして街に合うというのもありだな。

さっそくタバサを起こしてつと。

「タバサ、朝だ」

「ん……あつ、おはようアデル……」

「おはようタバサ」

なんか、タバサの起き顔は…照れてくるな、何故か知らないけど。それよりも、

「なあタバサ、今日は街に行つて良いか？」

「構わない」

「ありがとう」

許可も貰った事だし、行きますか。

装備は精霊の杖と薄刃陽炎。

でも、行き方はどうしようかな？

1、馬に乗って行く

2、加速装置で直ぐに着く

3、歩きで行く

今は夜明け前だから約4：30って所だろうし、ルイズ達が出るのは約7：00～7：30って所だろう。

街は馬で約三時間って所だから、良し3で行こう。

歩いて五時間半後、ようやく街に着いた。

途中精霊達に道順を聞いて無かったら迷ってたな絶対。

「それにしても、狭い街だな」

しかも、これで大通りというのだから余計に狭く感じるな。

「さーて、武器屋はどこだ？」

確か裏通りの方だったな。途中スリがいたが、精霊達に頼んで取り返して貰ったついでに、そいつのサイフも抜き取ったという。意外とちゃっかりしてるな精霊達。おかげで金貨三百枚になった。

えーと…お、あった。

アデルは武器屋に入っていた。

「いらつしゃ…って貴族！？…じゃないな、傭兵メイジですかい、何をこそ望で？」

そうだなあ、俺の武器達の中で無い物を選ぼうかなって、おつあれデルフリンガーだ！形も原作通りだ。でもあれは俺じゃなくサイトが手にする物だからな。…よし決めた。

「この店で一番上等なナイフを探している」

「ナイフですかい、それでしたら…左っ側の方でさあ」

俺は左側を向き、ナイフ類が飾ってある棚に近づいた。
その時、ルイズとサイトが入ってきた。

「あつアンタ!？」

「アデルさん!？」

「ああ、お前達か」

さて、デルフを買わせる様に仕向けるか。

「旦那、貴族の旦那！うちは真つ当な商売してまさあ。お上に目をつけられるような事なんか、これっぽっちもありませんや」

「客よ」

「こりやおったまげた。貴族が剣を！おったまげた」

この辺のやり取りは飛ばしてつと。

「すげえ！この剣すげえ！」

「店一番の業物でさあ。貴族のお供をさせるなら、このぐらいは腰から下げて欲しいものですな。といっても、こいつを腰から下げるのは、よほどの大男でないと無理でさあ。やつこさんなら、背中にしよわんといかんですな」

「すげえなこの剣、アデルさん見てこれ、金ピカだ！」

「……サイト君、ちよつとその剣貸してくれないか？」

「え？あ、はい」

さて、鑑定するフリをしてデルフを買う様仕向けないと。

「……なあサイト君」

「はい？」

「こんな鉄クズ買わなくて良いぞ」

「ええっ！？」

「ギクッ！？」

思いっきりギクッって言ってるよ店主。

「アンタ、この剣が鉄クズって分かるの？」

「普通剣という物は、模様はあっても飾りなんて付けないモンなんだよ。付けてたら強度が悪くなつてすぐにポキンと折れちまうぞ」

「えゝ！？じゃあこれ使えないって事かぁ！？」

そして俺は店主に近寄った。

「店主！」

「はっはい！？」

「アンタさつき真っ当な商売してるって言ったよな？あんな鉄クズつかませといて何が真っ当だ！」

「ヒッヒイイイイっ！？」

「怖っ！？」

サイトとルイズは、今のやりとりでアデルの事を怖がっていた。

「二人とも、俺がサイト君の剣を決めて良いか？」

「はっはい！？」

「そ、そーね。よくよく考えたら、傭兵のアンタの方が武器に詳しいもんね。お願いするわ」

良し、後はデルフに…

「おうおうにーちゃん、いい目してんなあ」

「だっ誰!？」

「どこだ!？」

そっちから絡んできたよ。

「そこにある剣からだ」

取り合えずデルフの方に指差した。

「おでれーた!俺っちの場所まで分かっちゃうとはな」

「これって、意思を持つ剣、インテリジェンスソード？」

「すげー、剣が喋った!？」

「アンタよく見分けたわね」

「こうゆう剣には慣れてるからね」

一様そうゆう風に言っておかないとな。

そして俺はデルフを掴んだ。

「!？おでれーた!お前、使い手の相棒だな!」

「使い手の相棒？」

何だそれは？使い手はガンダールヴを示してるけど、ガンダールヴの相棒ってどうゆう意味だ？

「それにおめー、他の奴らとは違うだろ？」

「っ!？分かるのか!？」

「「?」「」」

俺が少なからず悪魔だつて気付いてるとはな。

「まー何でもいい、おめえさん使い手が見つかるまででいい、俺を買え！」

「悪いが剣は間に合つてゐるからな」

これはサイトが相応しいからな。

「サイト君、この剣が一番マシな剣だ」

「な、なんだよ！？こんなひよろつちい奴に使われるのかよ！？」

「ひよ、ひよろつちいって…」

サイトは何気無くデルフを握った。

「これまたおでれーた！見損なつてた。てめ使い手か？」

「使い手？」

「ふん、自分の実力も知らんのか？まあいい。てめ俺を買え！」

「ああ、分かった。ルイズ、これにする」

「えゝそんなのにするの！？」

「でもこれ以外にマシな武器は無かったよ」

「うゝ…」

やっぱルイズは納得しないか。

取り合えずルイズは、店主に値段を訊いた。

「あれおいくら？」

「あれなら、百で結構です」「店主！」はっはい！？」

「百は少し高過ぎじゃないのか？」

「で、ですが、あれくらいは…」

「そーいやさっきの鉄クズを二千か三千で売ろうとしてたんじゃな

いのか？」

「ギクツ！？」

原作知ってなかったらぼったくられてたな。

「後で役所に行つて、この事を報告するしk「分かりました！？三十で構いません！」だによルイズ」

「わ…分かつたわ…」

「俺はデルフリンガーだ。デルフって呼んでくれ。よろしくな相棒！」

「こつちこそよろしくな！」

こうして、ルイズはデルフを三十で買った。

俺の方は、特に用は無かつたが折角なので、投げナイフ用に二十本程を金貨六十枚で買った（本当は百三十程だが、さっきの脅しが効いてるのか）。

一緒に店を出た俺達は。

「アデルさん、今日はありがとうございました。アデルさんはこれからどうするんですか？」

「俺はその辺をぶらぶらしたら帰るつもりだ」

「そうですか」

なんか、サイトって…俺に懐いてないか？

「あたし達は帰るから」

そう言つて帰るルイズとサイト。

後ろの方にいたタバサとキュルケは武器屋の方に入つて行つたみたいな。

俺は適当にぶらついて…お、美味そうな肉があるな。タバサとシルフィードのお土産に買って帰るか。

肉を買ったアデルは、加速装置ですぐに学園に着いた。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

サイトサイド

今日はルイズに連れられて、トリステインの首都、トリスタニアに来た。

何でこの街に来たかと言うと、昨日キュルケの使い魔のフレイム…だっけか？に啜えられて、キュルケの部屋に入れられた。

キュルケは惚れっぽい性格らしく、ギーシュの決闘の件で惚れたらしい。

そんでもって…途中何人かがキュルケの部屋に押し掛けてきたのはびつくりした。あれ皆キュルケと付き合った連中って事か。

そんな時にルイズがやって来て、しっちゃんかめっちゃんかで俺を連れ出した後は、凄まじいお仕置きだった。

部屋でルイズの家系とキュルケの家系について聞いてみたら、どうやらキュルケの先祖はルイズの先祖の恋人を取られまくったのが一番の原因らしい。

キュルケの部屋に入った原因を話したら、剣を買ってくれるという感じになった。

そして馬に乗って三時間後、今に至ると。

「なに一人でブツブツ言ってるの？」

「い、いやっ何でもない!？」

ルイズに付いて行き、目的の武器屋に辿り着いた。
そして驚いた事に、中にいたのは、

「あつアンタ!？」

「アデルさん!？」

「ああ、お前達か」

そう、アデルさんがいた。

「旦那、貴族の旦那！うちは真つ当な商売してまさあ。お上に目をつけられるような事なんか、これっぽっちもありませんや」

「客よ」

「こりやおったまげた。貴族が剣を！おったまげた」

この辺長くなりそうだから飛ばして。

「すげえ！この剣すげえ！」

店の主人のお勧めで、金ピカの剣を見てすぐに欲しくなった。

「店一番の業物でさあ。貴族のお供をさせるなら、このぐらいは腰から下げて欲しいものですな。といっても、こいつを腰から下げるのは、よほどの大男でないと無理でさあ。やつこさんなら、背中にしよわんといかんですな」

「すげえなこの剣、アデルさん見てこれ、金ピカだ！」

感激のあまり、アデルさんにも剣を見せた。

「……サイト君、ちょっとその剣貸してくれないか？」

「え？あ、はい」

金ピカの剣をアデルさんに渡した後じゅっと見始めたアデルさん。
するとアデルさんは、

「……なあサイト君」

「はい？」

「こんな鉄クズ買わなくて良いぞ」

「「ええっ！？」」

「ギクツ！？」

これが鉄クズ！？こんな金ピカなのに？

「アンタ、この剣が鉄クズって分かるの？」

「普通剣という物は、模様はあっても飾りなんて付けないモンなんだよ。付けてたら強度が悪くなつてすぐにポキンと折れちまうぞ」

「えゝ！？じゃあこれ使えないって事かぁ！？」

剣の知識なんて俺には無いけど、アデルさんは凄腕の傭兵って感じだから、使えるのかそうじゃないのかの区別が解るみたいだ。

「店主！」

「はっはい！？」

「アンタさつき真っ当な商売してるって言ったよな？あんな鉄クズつかませといて何が真っ当だ！」

「ヒッヒイイイイっ！？」

「「怖っ！？」」

そうか、アデルさんで、こうゆう不正は許せない性格なんだな。

「二人とも、俺がサイト君の剣を決めて良いか？」

「はっはい!？」

「そ、そーね。よくよく考えたら、傭兵のアンタの方が武器に詳しいもんね。お願いするわ」

確かに、ここはアデルさんに任せよう。その方が安心だし。

「おうおうにーちゃん、いい目してんなあ」

「だっ誰!？」

「どこだ!？」

どこから聞こえて来るんだこの声!？

「そこにある剣からだ」

アデルさんが指差した方にある剣を見た。

「おでれーた！俺っちの場所まで分かっちゃうとはな」

「これって、意思を持つ剣、インテリジェンスソード？」

「すげー、剣が喋った!？」

「アンタよく見分けたわね」

「こつゆう剣には慣れてるからね」

慣れてるんだ!？アデルさんの所って一体…。

そしてアデルさんは、喋ってる剣を掴んだ。

「!？おでれーた！お前、使い手の相棒だな!」

「使い手の相棒？」

使い手？何だそりゃ？

「それにおめー、他の奴らとは違っただろ？」

「っ！？分かるのか！？」

「「？」」

あれ？アデルさん、妙に慌ててるな、どうしたんだろ？

「まー何でもいい、おめえさん使い手が見つかるまででいい、俺を
買え！」

「悪いが剣は間に合ってるからな」

まあ、アデルさん他の剣持ってますしね。

「サイト君、この剣が一番マシな剣だ」

「な、なんだよ！？こんなひよろっちい奴に使わされるのかよ！？」

「ひよ、ひよろっちいって…」

痛い所突くなこの剣。

俺は何気無く喋る剣を握った。

「これまたおでれーた！見損なってた。てめ使い手か？」
「使い手？」

「ふん、自分の実力も知らんのか？まあいい。てめ俺を買え！」

「ああ、分かった。ルイズ、これにする」

「えゝそんなのにするの！？」

「でもこれ以外にマシな武器は無かったよ」

「うゝ…」

いくらうねっても、アデルさんはこれ以外無いって言うてる訳だし、俺もこいつ気に入ったし。

それでルイズは、店主に値段を訊いた。

「あれおいくら？」

「あれなら、百で結構です店主！」はっはい！？」

「百は少し高過ぎじゃないのか？」

「で、ですが、あれくらいは……」

「そーいやさっきの鉄クズを二千か三千で売ろうとしてたんじゃないのか？」

「ギクツ！？」

「後で役所に行つて、この事を報告するし、k「分かりました！？三十で構いません！」だとよルイズ」

「わ…分かったわ…」

すごく強引な…てかほとんど脅迫な値切りをしたアデルさん。

「俺はデルフリンガーだ。デルフって呼んでくれ。よろしくな相棒！」

「こつちこそよろしくな！」

こうして俺達は喋る剣、デルフを買った。

アデルさんは投げナイフ用にナイフを買った後、店を出た。

「アデルさん、今日はありがとうございました。アデルさんはこれからどうするんですか？」

「俺はその辺をぶらぶらしたら帰るつもりだ」

「そうですか」

今日はアデルさんの世話になりっぱなしだったな。出来れば俺から何か返せれば良いなとは思ってる。

「あたし達は帰るから」

ルイズがそう言ってアデルさんと別れて、学院へと帰った。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

タバササイド

今日は虚無の曜日だからアデルと過ごしたかったけど、彼は街に行っちゃったから、一人で本を読む事にした。

すると、扉から大きな音をたててノックする音が聞こえた。

うるさく感じたタバサは、サイレントをかけて無音状態にした。

部屋に入って来たのはキュルケだった。

私の前で何か言ってるみたいだけど、サイレントをかけてるから何も聞こえない。

するとキュルケは、私が読んだ本を取り上げたからサイレントを解いて話を聞いてみた。

「タバサ、今から出かけるわよ！早く支度をしてちょうだい！」

「虚無の曜日」

取り上げた本を取り返そうとするタバサだったが、キュルケとは身長差があり過ぎる為、なかなか取れない。

「分かってる。貴女にとって虚無の曜日がどんな日だか、あたしは痛いほど良く知ってるわよ。でも今はね、そんな事言ってもらえないの！恋なのよ恋！解るでしょ？」

相変わらずキュルケは突拍子の無い事を言っていた。
タバサは首を横に振った。

「そっか。貴女はちゃんと説明しないと動かないのよね。あたしね、恋をしたの！でもその人が今日、あのにつくいヴァリエールと出かけたの！でも馬に乗ってっちゃったから、貴女の使い魔じゃないと追いつかないの、ねえ助けて！」

なるほど、シルフィードじゃないと追いつけないか。
タバサは立ち上がり、窓の方に歩いた。

「分かってくれた？ありがとう！」

窓を開き、口笛を吹くと、シルフィードがやって来た。
そして窓から飛び降りて乗り込んだ。

「いつ見ても貴女のシルフィードは惚れ惚れするわね」
「どっち？」

「えっと…慌ててたから…」

そそっかしいキュルケだった。
仕方ない…。

「馬二頭。食べちゃ駄目」

そしてしばらく飛んでいると、トリスタニアに到着した。
キュルケが街を散策していると目的のルイズとサイト…とアデルがいた！？

話を盗み聞きしてると、

「アデルさん、今日はありがとうございました。アデルさんはこれからどうするんですか？」

「俺はその辺をぶらぶらしたら帰るつもりだ」

「そうですか」

「あたし達は帰るから」

アデルはサイトに何かしたのだろうか？

「ゼロのルイズったら、剣なんか買って気を引こうとしちゃって、あたしが狙ってるって解ったら早速プレゼント攻撃？なんなのよ〜っ！」

多分違うと思う。

するとキュルケは私を引っ張って行き、武器屋に連れて行かれた。

「おや、今日はどうかしてる！また貴族だ！」

「ねえご主人…今の貴族が…何を買っていったか…ご存知い？」

またこの手でいくキュルケ。

「へ、へえ。け、剣でさあ」

「なるほど、やっぱり剣ね…どんな…剣を…買っていったの？」

色っぽく攻め続けるキュルケ。

「へえ、ボロボロの大剣を一振り」

「ボロボロ？どうして？」

「連れの傭兵の旦那に勧められてですねえ」

「傭兵？」

アデルの事だ！

きつと彼があの子に合う剣を選んだのだろう。

「ふうん？ まあいいわ、剣を見繕って下さいな」

「若奥様も剣をお買い求めで？ 少しお待ちを…」

主人が店の奥へと消えた。

アデルが選んだのなら大丈夫だろうと考えてたタバサ。

そして主人が持ってきたのは、黄金に輝く剣だった。

「あら、綺麗じゃない」

「若奥様、さすがお目が高くていらっしゃる。この剣は、先程の貴族のお連れ様が欲しがっていた物でさ。しかし傭兵の旦那が拒否しちゃってますね」

「ほんと？」

なるほど、アデルが選ぶ訳が解った。

こんな見てくれだけの剣なんて彼はいらなと思っただろう。

あれはむしろ儀礼用で、実戦向きじゃないから。

ここから先はキュルケの香で、新金貨三千の所を千にまで値切るキュルケはすごいと思った。

アデルは、スタイルが良くて胸が大きい人が良いのだろうか？

「さあタバサ、ダーリンに剣を届けに行くわよ！」

そしてまたキュルケに引つ張られていくタバサだった。

- - - - -

- - - - -

アデルサイド

買った肉の半分をシルフィードにあげた後、部屋でタバサを待つてたら、

「来て」

と言われて来てみれば、修羅場みたいな展開だった。

「どういう意味？ツエルプストー！」

「だから、サイトが欲しがってる剣を手に入れたから、そっちを使いなさいって言うてるのよ！」

「お生憎さま。使い魔の使う道具なら間に合ってるの。ねえサイト」

「ああ、俺にはこいつがいるからな」

原作だとキュルケのやつを欲しがる所だけど、俺が介入したからサイトはあまり欲しがっていない様だ。

「そんな喋るだけのボロ剣よりも、こっちの方が素敵で綺麗でしょ？」

「ぎゅんねんでした。それ見てくれだけの役に立たない剣よ。そんなのよりもこっちの方が実戦向きよ！」

「あゝら、嫉妬は醜いわよヴァリエール？」

それ以上言うと恥かくだけだぞキュルケ。

すぐに介入したかったが、俺の膝の上に座って読書しているタバサがいるので介入出来ないでいた。

「ふふん。いつもはここで言い返すけど、今日は別に好きに言っただけにしないわ」

「?どうしたのルイズ、その自信は?」

「だってその剣は専門家に鑑定してもらって、鉄クズと判断したのよ!」

「専門家あ、どこの誰の事を言ってるの?」

「そいつ」

ルイズが俺に指差した。

「アデル?」

「ああ、俺が鑑定した。はっきり言って、デルフリンガーの方が強いからな」

「え〜〜〜!?!」

キュルケが悔しそうにして、ルイズの方は心底嬉しそうだ。

「この剣はむしろ儀礼用で実践向きじゃない」

「そんな〜〜!?!」

「残念だったわねツエルプスー!」

「むむむ〜…」

むちゃくちゃ勝ち誇った顔をしてるなルイズは。

その後、諦めたのか、キュルケは部屋へと帰って行った。

タバサと一緒に部屋に戻り、買ってきた肉を二人で食べた。

あれっ?そういえば…フーケのイベントはどうなったんだ?

サイト、デルフリンガーゲット（後書き）

キュルケの色気の部分が伝わり辛かったでしょうか？
フーケの出番はまだ先の予定です。

タバサの冒険 暗殺者編（前書き）

シエスタがモットーの所に行く三日前だと思って下さい。

上記の事以外の考えは、早くアデルにアレを持たせたいが為に此処に入れました。

タバサの冒険 暗殺者編

また俺達はプチ・トロワに来ていた。

「人形7号さま、おなり！」

この人達は仕方なくタバサをそう呼んでるみたいだ。無理して言うてるのが分かるからだ。

今回の任務は暗殺向けだから、今の装備は薄刃陽炎、精霊の杖、バーニングブロー以外にも、ノーブルローズを所持しています。

「お前達、例の物を用意して、早く！」

近くにいた侍女たちに叫ぶイザベラ。

するとイザベラは、タバサに近づいた。

「ねえシャルロット。貴女、これかぶつてみたいと思わない？もしかしたら、貴女のものだったかもしれない冠よ？」

何でコイツはわざわざ神経を逆なでする様な振る舞いをするんだ？

「かぶつてみたいでしょう？顔にそう書いてあるわよ」

こいつ眼科に行った方がいいんじゃないか？

「欲しいって言って御覧なさい。そうしたら」なるほど、今回の任務は、アンタの身代わりか？」っな！？」

いい加減イライラして来たから話を進めた。

「まあ良いわ、従者の方が察しが良いわね。ほらお前たち、この子に王女の格好をさせてやって！」

慌てて侍女たちがタバサを囲って着換えさせた。もちろん俺は目隠しされました。

目隠しが取れると、そこには、王女姿のタバサがいた。侍女たちは今のタバサを見て、何かを強く切望していた。

「ふん、まあ似合いじゃないの。ねえ？」

俺は思わず見とれてしまった。

「さて、お遊びは終わり。アンタに今回の任務を説明するわ」

すると、侍女たちが退室し、一人の若い騎士が来た。

「東薔薇騎士団所属、バツソ・カステルモール、参上しました」

この人は確かオルレアン派の筆頭だった人だな。

「この人形に化粧してあげて」

「…御意」

カステルモールさんも辛そうに…。

カステルモールは杖を持って唱えると、タバサの顔がイザベラの顔に変わった。

風と水のスクウェア、フェイス・チェンジを行ったようだ。

イザベラはタバサの眼鏡を取り上げると、大声で笑った。

「あつはっは、そっくりじゃないの！私ね、地方に旅行に行く事になったんだけど…、アンタはその間の私の影武者ってわけ」

タバサは任務について理解したのか、頷いた。

「そりゃアンタはこんなにやせっぽちで、小さくて、私の美貌に比べたら足も…」だったらそう見せればいいのか？」えっ？」

俺はタバサに杖を向け、精霊達に頼んだ。

「（精霊達よ、不本意ではあるがタバサの体を、イザベラと同じ体にしてくれ）」

すると、タバサの体つきが変化し、イザベラのような体型へと変わっていった。

「なっ！？」

「っっ！？」

これにはイザベラ以外にも、タバサとカステルモールさんも驚いていた。

「へ、へえ…アンタ器用だねえ…。顔も体も…私そっくりじゃないか！」

その後、首都から南西百リーグにある小都市に向かつてる馬車の中では、王女タバサと女官イザベラと護衛アデルとカステルモールが乗っていた。

「最高ね。誰も私を王女だなんて思ってないわ。私の変装術もたいしたものじゃないの！」

アンタの変装術がすごいんじゃないで、ただ単に王女としては見られてないだけだろ。

「さて、そろそろ教えておこうかしら。ねえ王女さま、今度の旅行はただの旅行じゃないのよ。今から向かう街は、アルトーワ伯という生意気な領主が治めてるの。税の払いは滞っているし、今年の降臨際にも宮殿に顔を出さなかった。どうやら謀反を企ててるという噂だわ。でね、その領主の誕生を祝う園遊会が催されて、私は正体されたという訳よ」

イザベラはタバサがかぶってる冠をつつきながら言葉を続けた。

「そんなの罠に決まってるじゃない。王女である私を捕まえて人質にする気に違いはないわ。で、私に「逆手にとつて動かぬ証拠を得る。もし危険があつても自分には危険が無いから堂々と高みの見物が出る。…」という訳か？」！？」

俺がそう指摘すると、カステルモールさんは杖を抜き、俺に向けた。

「貴様、王女を愚弄するか？」

内心俺の言つた事に驚いているが、ここで動かなければ怪しまれると思つての行動だろうと思つた。

「おやめカステルモール。私が話しているのよ」

イザベラの言葉でカステルモールさんは杖を納めるが、ある事に気付いた様だ。

「貴様…いつの間に!？」

そう、俺はカステルモールさんの腹に剣を突き立てていた。

「王女殿下に感謝するんだな。あのまま呪文を唱えようとしたら、腹に刺していた所だったからな」

イザベラとカステルモールさんは心底驚いてる様だ。

「な、なかなかやるじゃないか…そういや、アンタの名前を聞いてなかったね」

「…アデル。…アデル・ラハール・アルマース」

「ふうん、アデルねえ…聞かない名よね」

そして俺は黙った。

「貴様、姫殿下が申してるというのに返事も出来んのか!」

「生憎俺は、契約者以外は関わらない様になっているからな」

「使い魔風情が粹がるな! 貴様など、このカステルモールが切り捨ててく」魔法も戦闘も、俺に及ばない奴が何偉そうにしているんだ?」なっ!？」

実際、フェイス・チェンジは顔だけ変化するだけだが、俺は体全部を変化させたから、魔法は俺のが上だというのは一目瞭然。それにさっきのけん制も、詠唱する前に突き刺せば終わっていたのだからな。

「それに、どうせ今回の仕事は、そのアルトワ伯とやらがアンタを捕まえる為に仕掛けて来る奴がいるんだろ?」

いいかげん話を進めないとキリが無いと思ったアデル。
カステルモールさんは唸っていたが、それは自分ではタバサを守れないからかと自分に向けている様だ。

「そ、そうね。確かにその領主は、私を捕まえる為にとんでもない使い手を雇ったって噂があつてね。地下水という傭兵メイジだってさ、名前は聞いた事があるだろ？」

地下水ね、確か音も無く流れ、不意に姿を現し、目的を果たして地下に消える謎のメイジ、狙われたら最後、命だろугがモノだろугが人だろугが、逃げる事が出来ないという事…だっけか？

しかも、人の心を操る魔法を得意とするとなると…対策が必要だな。そうこう言ってる内に街道に着いた。

住人たちがタバサをイザベラだと思つて熱狂し、その様子を爆笑してるイザベラ。尚も俺の事を睨み続けるカステルモールさん。
しばらくして、宿場町で一泊する事になった。

イザベラは、事情の知る者たちと一緒に部屋に行き、タバサとアデルは一番豪華な部屋に入れられた。
するとタバサは、

「ごめんなさい。貴方にまで迷惑をかけて…」

謝つて来た！？何で！？

「何故謝る？」

「アデルが守るのはタバサであつて、イザベラじゃないのに…」
「そうゆう事が」

なるほど、今はイザベラの顔だから、俺に気を遣つてる訳だな。
すると、扉を叩く音が聞こえた。

「誰？」

「私だ、カステルモールだ」

カステルモールさんが来たようだ。

部屋に入ると、俺は体裁の為にタバサの前に立った。

「何の様だ？」

俺が短く答えると、カステルモールさんは部屋中にディテクトマジックを唱えた。

「魔法で聞き耳を立ててる輩はいないようだな」

カステルモールさんは俺達の方に：正確にはタバサの方に向いた。すると、カステルモールさんは突然跪いた。

「どうかわたくしめに殿下を守りさせて下さいませ！」

タバサの護衛がしたくて来てしまったようだな。でも、

「何を言っている、あの女の犬にタバサを近づかせる訳にh「私はあのような王家の篡奪者さんだつしゃの娘に忠誠を捧げた覚えは無い！」ん？」
「私が真に忠誠を捧げているのは、今は亡きシャルル・オルレアン様と、ここにおわすシャルロット様のみ！」

すごい気迫だ…。

「シャルロット様、昼夜を問わず、護衛つかまります。隣の部屋には隊員を待機させる許可をいただきましたたくあります」

するとタバサは、

「結構。私は殿下じゃない、ただの影武者」

「いえ…シャルロット様は、いつまでも我々の姫殿下でございます。東薔薇花壇騎士団全員、表に出来ぬ、変わらぬ忠誠をシャルロット様に捧げております。昼間は大変失礼を致しました。あの娘に我が心の内を悟られてはと、愚考した次第」

徐々に声が低くなつていくカステルモールさん。よっぽどタバサを信頼してるからこそ、あんな態度をしてしまった自分を責めてるんだろうな。

「私は北花壇騎士。シュヴァリエ・ド・ノールバルテル以上でも以下でもない」

それでもタバサは、カステルモールさんの頼みを断つた。そしてタバサは、

「それに私は、彼がいる」

タバサがそう言ったら、カステルモールさんは驚いた顔で俺を見てきた。

「確かにアデル殿なら実力は申し分無いですが、素性の知らない者にシャルロット様の側にいては…」

「アデルは…彼は信頼できる」

「！？…分かりました」

カステルモールさんは若干羨ましそうに俺を見てきた。すると、真剣な目でタバサを見つめるカステルモールさんは、

「シャルロット様、貴女様さえその気なら…我らは決起の手伝いをば…」

そしてタバサの手にキスをし、

「真の王位継承者に、変わらぬ忠誠を」

その後、アデルに近づいて来るカステルモールは、

「シャルロット様を、頼みます」

「…分かった」

と返事をしたら去って行ったカステルモールさん。

でも少しは協力しても良かったんじゃないかなと思ってタバサに聞いてみた。

「良かったのか？」

「彼に迷惑はかけたくない」

「そうか」

タバサなりの気遣いみたいなものだった。

窓から音がしたから見ると、シルフィードがいた。

取り合えず窓を開けると、シルフィードは人間形態になって入って来た。当然素っ裸で。

「ブハッ!？」

またモロに見てしまった。

慌てて視界をそらすアデル。

「お姉さまはバカなのね！折角お兄さま以外のお姉さまの味方になつてくれるという人が現れたのに、無視して追い返すってどういう事？きゅい」

何かシルフィードが説教を始めたみたいだ。
でもタバサはまったく相手にしてなかった。

「もう！折角心配してあげてるのに！」

と言って、窓から出て元の竜に戻った。

「さてと、俺は寝ずの番をするから、タバサはもう休んでたら？」
「…そうする」

そしてタバサが眠ってから数時間後（多分今の時刻は2：00頃だ
と思う）、誰かが近づいて来たのか、タバサが起き始めた。

「誰か来る」

「分かつてる。俺が対処するから、タバサは援護を頼む」
「分かった」

タバサは杖を握って少し離れた。

ドアが開き、さっき見た侍女さんがワゴンを押しながら入って来た。
つか怪しくてもノックぐらいしろよ。

「何の用だ？」

「姫殿下にお茶のお勧めを」

「こんな時間にか？」

「ええ」

怪しさが堂々としてるな。

「ならせめて入って来る時はノックぐらいしろ、侍女なら当たり前の事だろ、地下水さん？」

「あら、よくご存じで」

タバサは杖を構えて警戒した。

アデルは先程から思ってた事を呟いた。

「…お前、さつきから堂々としてるな…怪しさが服を着て歩いて来た感じだぞ。当たり前のように肯定してるし」

「別に構いませんよ？だって私は絶対に捕まらないから」

「ほう、やけに自信たっぷりだな」

俺はふと、お茶の方を見た。

「ご安心を、お茶には何も入っていませんから」

「まあ確かに盛るつもりなら、もっと早くに来る方だから。んで、アンタは姫様を攫いに来たと？」

「はい」

そして地下水は、懐からナイフとロープを取り出した。

あのナイフが地下水だな。

「それが依頼者により、私めが受けた任務ですから」

「その依頼者というのは、アルトーワ伯？」

タバサが訪ねた。

すると地下水はにっこりと微笑んだ。

「さあ、それを申し上げる事は出来ません。さて…出来れば、大人しく捕まって頂きます」

「それをさせるとでも？」

「そうですね。はつきり言って、貴方は邪魔ですね。まあ依頼者の方からは、邪魔する者は消せとの依頼もありましたからね」

「へっ、そうかい！」

そう言って薄刃陽炎を抜き、斬りかかるアデル。

だが斬りつける瞬間、人間では思えない動きで避け続ける地下水。マ○リツ○ス避けかよ！？

「へえ、魔法だけでなく体術までこなせるとはな」

「そちらこそ、メイジでありながら剣を使うなんて、さすがはイザベラ様に雇われた傭兵というだけの事はありますね」

おいおい、いつ俺があの子の傭兵になったんだ？

「それでは…次はこちらの番です。イル・ウォータル・スレイプ・クラウド…」

どうやら、スリープ・クラウドを使ってきたが、精霊たちの加護があるアデルには効かなかった。

つか、杖も無しに魔法使うなよ。それで大分正体が解りかねないぞ？

「ラグーズ・ウォータル・イス・イーサ・ウィンデ！」

今度はタバサお得意のウィンディ・アイシクルだったが、剣を納めたアデルは片手にピンポイントバリアを張り、一つを防いだ後、も

う片方の手に張り、防いでいく。その繰り返し。

ピンポイントバリアは一部分しか張れないから、常に交互で張り続けなければいけないから少し面倒だった。

氷の矢を撃ち尽くした地下水は、少し驚いていた。

「氷の矢を素手で応戦するなんて、どんな神経してますか貴方は？」
「うるさい」

まさか相手に突っ込まれるとはな。

「ですが、私の攻撃は、まだ続きm「メガファイア！」！？」

アデルは、近くにあったティーポットを燃やし、中のお茶を蒸発させた。余波で窓が割れた。

「なっ！？」

「お前の手が読めたからの対処だ」

そして俺は加速装置で地下水の近くに行き、腹部を殴り付けて気絶させた。

すると同時に、部屋になだれ込んで来た衛士たち。カステルモールさんの隊じゃないな、別の所のか。

「姫殿下！」

「イザベラ様！」

「何事ですか！」

5、6人の衛士たちがタバサを囲んだら、衛士の一人が俺に杖を向けた。

「貴様、何者だ！」

おいおい、俺を怪しむのかよ。
するとタバサは、

「彼は私の護衛」

「えっ、護衛の方ですか!？」

「そうだ！折角姫様をお守りしたのに、襲撃者扱いされるとはな」
「し、失礼しました!？」

少し偉そうに振る舞ってみました。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

タバササイド

地下水が、イザベラに化けている私を攫いに来た。
でも、アデルが私を守ってくれてる。

「へえ、魔法だけじゃなく体術までこなせるとはな」

「そちらこそ、メイジでありながら剣を使うなんて、さすがはイザベラ様に雇われた傭兵というだけの事はありますね」

…アデルは、あの女の傭兵じゃない。

「それでは…次はこちらの番です。イル・ウォータル・スレイプ・クラウディ…」

これはスリープ・クラウド！？でもアデルには効かないみたい。
でも、何故杖も無いのに系統魔法を？

「ラグーズ・ウォータル・イス・イーサ・ウィンデ！」

今度はタバサお得意のウィンディ・アイシクルだったが、剣を納めたアデルは片手にピンポイントバリアを張り、一つを防いだ後、もう片方の手に張り、防いでいく。その繰り返し。
前にアデルが素手で魔法を弾いていたから、あれぐらい何でも無い。氷の矢を撃ち尽くした地下水は、少し驚いていた。

「氷の矢を素手で応戦するなんて、どんな神経してますか貴方は？」
「うるさい」

地下水もアデルが並のメイジじゃない事に気付いたみたい。

「ですが、私の攻撃は、まだ続きm「メガファイア！」！？」

アデルは、近くにあったティーポッドを燃やし、中のお茶を蒸発させた。余波で窓が割れた。

「なっ！？」

「お前の手が読めたからの対処だ」

なるほど、空気中の水蒸気は枯渇しているのに、まだ氷の矢を使おうとしているのは妙だと思った。考えてみれば、ティーポッドの中は液体、いわば水分の塊みたいな物だから、充分に補充できると思っただろう。

でもアデルは直ぐに気付いた。一瞬でお茶を蒸発させてしまったの

だから。でも、あの炎は系統魔法、フレイム・ボールとは少し違う
と思った。

そしてアデルはすぐさま地下水の近くに行き、腹部を殴り付けて気
絶させた。

すると同時に、部屋になだれ込んで来た衛士たち。

やってくるのが少し遅い。

「姫殿下！」

「イザベラ様！」

「何事ですか！」

5〜6人の衛士たちが私を囲んだら、衛士の一人がアデルに杖を向
けた。

「貴様、何者だ！」

違う、アデルは私の勇者。

タバサは咄嗟に、

「彼は私の護衛」

「えっ、護衛の方ですか！？」

「そうだ！折角姫様をお守りしたのに、襲撃者扱いされるとはな
「し、失礼しました！？」

アデルは少しイラついていた様だ。

当然かも知れない。客観的には姫を守った勇者が悪党扱いされてい
る様なものだから。

そして、衛士の一人が倒れてる侍女を抱え起こした。

「おい、起きろ！」

「ん？…きゃあああああ！」

「きゃあじゃない！貴様、王女を襲うとはどういう事だ！」

「襲う？ど、どういう事ですか？私、部屋で寝ていて、目が覚めたらここにいて…」

どうやらこの侍女は本当に知らない様だ。

侍女の態度を見てたタバサは、イザベラの話进行出した。

『地下水は、人を操る魔法を一番得意とするメイジ』

そして衛士たちは侍女を連れて行こうとしたから引き止めた。

多分この衛士たちは地下水の事を知らないだろう。

事情を説明して、この侍女…ナタリーを残して、床に散らばってたロープやナイフを集めた後、退室した。

この子から少し話を聞いてみよう、地下水の事が解るかもしれない。

「お、お許しを…」

「安心して、貴女を罰するつもりはないから」

「ひえ…！？」

余程イザベラに酷い事されたのか、今の私を見て完全に腰が引けた。

「覚えてる範囲で良いから、詳しく話を聞かせて。どこから記憶が無いの？」

ナタリーの話によると、夕食後、部屋に戻って寝て、目が覚めたらこの部屋にいた。

恐らく寝ている隙に魔法をかけられたんだろう。

その後ナタリーを部屋に返した後、アデルが言ってきた。

「タバサ、確証は無いが…地下水が誰か解った気がする」

これは驚いた。

アデルはもう地下水の正体に気付いたという。

「誰が地下水」

「地下水は………だ」

「!？」

地下水の正体がまさか、………とは、通りで誰も解らない訳だ
と思った。

そうなると…いや、今日はもう休もう。

普段のタバサなら寝ずにいただろうが、今は心から信頼できる人物
がタバサを守っているから、心に余裕が出来た結果、安心して休め
るのだろう。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

アデルサイド

俺は地下水の正体についてタバサに話した。

翌日、グルノーブルの街に着いた俺達は、盛大な歓迎を受けていた。
正直徹夜した所為で眠かった。

アルトール伯が出て来て、タバサと挨拶をしていた。

その後、また豪華な部屋に入れられた。正直豪華な部屋は一度体験
したらしばらくは遠慮したい感じだった。

そして部屋に入ってきて来るイザベラとカステルモールさん。
またイザベラの嫌味を言ってきた。
でもタバサは、

「彼のおかげでゆっくり眠れた」

するとイザベラは、不愉快に思ったのか、イラつきながら出ていった。

そしてカステルモールさんは謝ってきた。

「隣の部屋にしながら、シャルロット様への無礼なる仕打ちを止められぬとは……お詫びの言葉もありませぬ。昨晚はあの王女を僭称する娘により、宿の外の警備を申しつけられました……」

「別に貴方の所為じゃない」

「もったいのう……もったいのうございます……」

さてと、カステルモールさんに忠告しといてやるか。

「カステルモール、衛士の中にナイフを持つてる奴はいたか？」

「え？」

「ナイフを持つてる奴は地下水と繋がってる可能性が高いんだ」

「何だつて!？」

「すぐに調べて来て」

「分かりました!」

後はカステルモールさんに任せるとしよう。

その夜、タバサがアルトール伯の所に行こうとしたので付いて行っ

た。
アルトール伯に事情を聞いてみたら白だった。

「アルト・ワ伯じゃなかったら、一体誰が地下水を？」

雇い主が誰か分かってるけど、敢えて言わない事にした。
その時、扉が開いた。

開いた先は、衛士が立っていた。

「こんな時間に祖父程歳の離れた紳士の部屋を訪れるとは…、王女の所業とは思えませんな」

「そういうお前は、そんな紳士の部屋にノックもせずに入ってくる無粋な人物に当て嵌まるけどな」

「地下水…」

「二晩も続けてお会い出来るとは… 光栄至極」

タバサが何か言おうとしたが、俺が遮る。

「誰」 「誰に雇われたか知らないが、力尽くで吐かせてやるぜ！」
…」

タバサが何か訴えそうな顔をしていたが、この際無視した。

地下水はエア・カッターを放ってきたが、ピンポイントバリアで弾いた。

「クール！」

氷塊を地下水にぶつけようとしたが、先にファイヤー・ウォールを展開してた為、氷塊は溶けた。

そして地下水はアイス・ストームを放ってきた。

「まずい！？」

範囲がタバサにまで被害が出る。

アデルはタバサを庇う形で背を向けた。背中の部分にピンポイントバリアを張ってたので、ダメージは無かった。

「あ、アデル……」

「ちっ、狙いそこなったか」

俺だけならまだしも、タバサにまで狙った。こいつをぶちのめす理由が出来た。

「……狙ったな……」

「ん？」

「タバサを狙ったな……」

「アデル……」

「デメエは俺がブチのめす！」

久々に思いっきり戦ってやるぜ！

「残像拳！」

アデルは、^{「レキタス」}遍在の様に何人も分身した。

「な、遍在か！？」

そしてアデルは地下水の背後に立ち、強力なアッパーを繰り出した。

「ガハアアッ！！？」

地下水は窓付近まで吹き飛んだ。
すかさずアデルは追い打ちをかける。

「アバラ（肋骨）5、6本は覚悟しとけよ！」

アデルは右手に炎を纏わせ、一閃の如く地下水にブチかました。

「紅蓮、疾風拳！！！」

その動き、紅蓮の炎ゆらめき、その一撃は、疾風怒濤の如し。

「ギヤアアアアアアアア——！！！」

アデルの一撃で、窓から吹き飛ばされた地下水。と同時に部屋に入って来るカステルモールさん。

「これは!？」

俺はタバサを連れて行こうとした。

「話は後だ！地下水を追うぞ！」

「えっ!? あっ、はい!」

そう言つて外に出る三人。

[illegible]

タバササイド

アデルが私を庇ってくれた。

「……狙ったな……」

「ん？」

「タバサを狙ったな……」

「アデル……」

「テメエは俺がブチのめす！」

アデルが…私の事で怒っている…。

「残像拳！」

アデルは、^{「ユビキタス」}遍在の様に何人も分身した。

「な、遍在か！？」

そしてアデルは地下水の背後に立ち、強力なアッパーを繰り出した。

「ガハアアツ！！？」

いつの間に後ろに！？

地下水は窓付近まで吹き飛んだ。

すかさずアデルは追い打ちをかける。

「アバラ（肋骨）5ゝ6本は覚悟しとけよ！」

アデルは右手に炎を纏わせ、一閃の如く地下水にブチかました。
手に炎が！？

「^{ぐれん}紅蓮、^{しつぷうけん}疾風拳！！！」

していたら、カステルモールさんと倒れてる男がいた。

どうやらカステルモールさんは既に地下水に操られてるなこりゃ。

タバサも来たので、俺はタバサに忠告した。

「（タバサ、カステルモールは既に操られてるかも知れない。俺が様子を見る、タバサは少し離れてて）」

「（…分かった）」

そして俺達は、カステルモールさんに近づいた。

「シャルロット様とアデル殿？」

「彼が地下水？」

「ええ…最近入隊したうちの一人です。今後は、身元をしっかりと確認する必要があるようですな」

するとカステルモールは、ロープとナイフを取り出し、倒れてる男を縛り付けた。

さて、そろそろ終わらせようかね。

「そのナイフはどうしたんだ？」

「え？ああ、彼が持っていたんですよ」

カステルモールさんは、すつと俺に差し出して来た。

こいつ、俺を操ろうとしてるな。

俺は念の為に、精霊達に頼んで、操られない様にして貰った。おまけにピンポイントバリアを掌に展開させて。

タバサは若干驚いていたが、アデルは何か考えがあると思い、留まった。

そしてアデルがナイフを握る瞬間、カステルモールはニヤリとして倒れた。

「これまでだな、地下水！」

「!？」

アデルは握ってるナイフを見て言った。

「な、何で俺の支配を受けねえんだ!？」

「それが…本当に…地下水？」

そう、地下水の正体は、今アデルが握ってるナイフだった。
前にタバサに言った事の回想をします。

『タバサ、確証は無いが…地下水が誰か解った気がする』

『誰が地下水』

『地下水は、あの侍女が持っていたナイフだ』

『!？』

と言っていたのだ。

「インテリジェンス・ナイフって訳なのね」

「うわっ!？シルフィード、いつの間に…」

「もうお兄さま、ついさっきなのね!」

「スマン」

いきなり出て来たからびつくりした。

さて、この意思を持つ短剣の地下水は、握った者の意思を奪う能力インテリジェンス ナイフで、次々と宿主を変えてきたナイフ。それが、謎のメイジ…地下水の正体だった。

しかも、意思を乗っ取ったメイジの魔力がそのまま地下水に加算するから、乗っ取った相手次第で強くも弱くもなるらしい。

「んじゃあ、こいつどうする？」
「土に埋めるか、アデルが壊して」
「やつ、止めてくたせえ！？だ、旦那も何とかしてくだせえ！？」
「だがお前は、タバサまで攻撃したんだ、楽に逝けると思うなよ！」
「ヒイイイイツ！？」

地下水は完全にビクついていた。
するとタバサは、

「誰に雇われてたの？」
「へっ？ああ…イザベラだよ」
「！？」

「あの小娘か！」
「どうしてイザベラに雇われたの？」
「昔っからのお得意様でね。いつもの様に雇われただけさ。俺はこ
れでも北花壇騎士団シュヴァリエ・ド・ノールバルテルの一人だしな」
「そう、何故傭兵をしているの？」

「暇だからさ」
「暇？」
「なるほど、寿命が無いから退屈でしょうがなかったと」
「そうゆうこった」

まったく、はた迷惑な理由だな。
取り合えずネタ晴れ言っとくか。

「今の内容でピンと来たが、あの小娘に雇われた内容は…あいつの
暇潰しか？」
「まったくもってその通りでさあ」

この時タバサは、珍しく怒り顔になってた。

まあそうだろうな。あの女に虚仮にされたんだからな。
ちよーっと、OSHIOKIした方が良いなこれは。

「なあタバサ、俺に考えがあるんだが…」

「……？」

ちよつとした悪だくみを話したら、乗ってくれた。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

イザベラサイド

今日はアルトワの誕生日の日で、ここは園遊会場。

あの人形娘に一泡吹かせる為にここまでしたけど、地下水の奴、報告が遅いじゃない。

「失礼します」

あつ、カステルモール（地下水）が来たわね。ん？何かしら、あの箱は？

イザベラはカステルモールが持ってきた箱を見て不思議に思った。

「カステルモール、何その箱？」

「人形7号が、姫殿下に地下水の心臓を届ける様頼まれましたので」
「何だつて!？」

イザベラは立ち上がり、急いでその箱を受け取り、中を見て驚愕した。

中に入っていたのは、無残にもバラバラになってる地下水があった。

「（あの人形娘、地下水まで倒せるようなレベルまでいったのか！？）そ、それで、あの人形娘は？」

「重傷を負っていましたが、使い魔がリュティスに連れて行きました」

「そ、そう」

ふうん、それでも重傷は負ったのね。あーもう、イラついたら喉乾いちまったじゃないか！

「誰か茶を！」

侍女が怯えながら茶を持ってきた。
それを乱暴に取り、一気に飲んだ。

「！！！？？」

飲んだ瞬間、体の自由が効かなくなったのだ。

すぐに侍女の方を見たら驚いた。その侍女は薄ら笑っていたからだ。そして、その侍女はこう言ってきた。

「（今までお世話になったお礼といっでは何ですが…踊りを披露したく存じます）」

「（！？）」

すぐに察した。

この侍女は地下水だという事が。

「（偶には人に操られる気分を味わってはいかがですか？）」

そして地下水は去り、イザベラは着ている服を大胆な格好にして園遊会の中央に行った。

「（止めて！）」

いくら心の中で叫ぼうとも、

「アルト―ワ伯の誕生日を祝う為に、ワタクシがダンスを披露しますわ」

体がそう言っている為、まったくの無意味だった。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

アデルサイド

イザベラの奴、今頃俺の作った「一度だけ恥をかく」の効果（時間はダンスが終わるまで）入りの茶を飲んで恥をかいてる頃だろうな。

「旦那、お待たせしました」

地下水が戻って来たので、本体を受け取り、気絶する侍女。

「んじゃ、これからよろしくな、地下水」

「あいよ、相棒！」

何故地下水がアデルの事を相棒扱いするのかというと、話は前日にさかのぼります。

「なあタバサ、俺に考えがあるんだが…」
「「「？」」」

アデルは、持っていたナイフを錬金した。
錬金したナイフは、地下水そっくりになった。

「俺になった!？」
「それでどうするの？」
「こうする!」

アデルは地下水（偽）を叩き割り、バラバラにした。

「うげっ!？」
「これがどうしたの？」
「これで地下水は死んだ」
「えっ!？」
「なるほど」
「きゅい？何が解ったのねお姉さま」
「つまり、地下水の死を偽装した」
「じゃあ俺…助けてくれんのか？」
「ああ…だが、俺の条件を飲んでからだ!」
「!？」

アデルは何か精製した後、条件を言った。

「この薬を明日の朝、園遊会の時にイザベラに飲ませるんだ」

「！？アデル、ダメ！」

「安心しろタバサ、これは毒は毒でも、一度だけ恥をかく毒だから心配は無い」

「きゅいゝ…何なのね、その効果は？」

「わざわざこんな手の込んだ暇潰しをしたんだ、その報いくらいを受けたって良いだろ？」

という感じで盛り上がった。

「すごい、ちょっと可哀想だけど、あれだけお姉さまに意地悪してるんだから当然なのかしら。きゅいきゅい！」

と楽しそうな声でシルフィードがわめいてた。

「見てお姉さま、お兄さま。あの王女つてば、もうお嫁にいけないわね。あつ、今全裸になったのね、きゅいきゅい！」

思わず「ぶっ！？」ってなりそうだったけど、聞かなかった事にした。

そしてタバサは、

「帰る」

「えゝ、最後まで見たい」

「趣味が悪いぞシルフィード」

「お兄さまに言われたくないのね」

た、確かに…、

そう考えてる内に飛びたてるシルフィード。

あつそうだ。

「なあ地下水」

「なんだ相棒？」

「その呼び方は止めてくれないか？知ってる奴と同じ呼び方だし」

「そうなのか？じゃあアデルの旦那で」

「まあ、いいけど」

「ってそうじゃなくて。」

「それより、お前の正式な名前は何だ？」

「知らね」

「知らないんかい!？」

「いやマジで知らないから」

名無しか、じゃあ、

「よし、名前を付けるぞ」

「名前っすか？別に今まで通り地下水の方が…」

「もうお前は俺の物になったんだから、いつまでも二つ名で言うてもなあ。だから正式名を付ける！」

「無茶苦茶っすね」

地下水…地下はアンダー…で、水はウォーター…じゃイマイチだし、水って他には…フラッド…は津波だし、（ピン）リキッド、うんそれいい。

後はどう組み合わせるか、アンダー・リキッドじゃそのままだし、アンダー…リ…キッド…!？アンダー…リ…キッド…!

「よし、決めた。今日からお前はアンダー…リ…キッドだ！」

「あ、アンダー…リ…キッド!？」

「きゅい！良い名前なのね」

「良い」

「よし決まりだ、よろしくなアンダリー」

「アンダリーか…まあ悪くないんじゃないかな？」

さて、アンダリーの名前も決まった事だし、帰るとするか。

「きゅい、所でお姉さま、いつも本ばかり読んでばかりいるけど、少しはお話してほしいのね。そんなんじゃまともな友達が出来ないのね」

「友達ならいる」

「キュルケの事か？」

タバサがコクリと頷く。

「あのキュルキュルとかいうあばずれ女は好きじゃありません。あんな不真面目な友達より、別の友達を作るのね。というか恋人よ、恋人を作るべ…ってそうだわ！」

「何がだシルフィード？」

期待に満ちた目で見て来るシルフィード。

「お兄さまがお姉さまの恋人になれば良いのね！」

「なっ！？」

「！？」

いきなりの事で頭が真っ白になる二人だった。

- - - - -

- - - - -

タバササイド

シルフィードがいきなり変な事を言ってきた。

『お兄さまがお姉さまの恋人になれば良いのね!』

私が…アデルの…恋…人…。

タバサはアデルに意識してしまった。

…ダメ、彼は私の使い魔で、私の…勇者…様…、私のこ…恋人…な
んて…。

「どうしたんだタバサ？」

「!?!?」

思わず本を落しそうになるが、つい本で顔を隠すタバサ。

今のタバサはものすごく照れていた。

アデルは…私の事を…どう思ってくれてるのかな…。

胸のドキドキが止らないタバサは、半ば照れ隠しでシルフィードを
叩いた。

そして夜になり、学園に帰ってきたらキュルケとルイズにモットー
の所まで連れて行つてと頼まれて、アデルは学園に残った。

取り合えず、今はキュルケ達に悟られないようにしよう。

タバサの冒険 暗殺者編（後書き）

結局別けずに繋げちゃいました。

後、銃も使わなかったね。

地下水をアンダリー・キッドと名付けました。
フラグを立てたアデルとタバサであった。

王女来日と土くれのフーケ（前書き）

やっと土くれが登場します。

品評会もあるよ。

後それと、アンリエッタと一緒に来る子がいます。

王女来日と土くれのフーケ

ロングビルサイド

私は今、宝物庫の前でアン・ロックをかけたが、うんともすんとも
いわなかった。

えっ、何でそんな事してるのかって？

そりゃあたしが世間に名を轟かしてる土くれのフーケは、あたしの
事だからね。

ここの宝を狙ってこの学院に潜り込んだけど、手強いね。

「まあ、ここの錠前にアン・ロックが通用するとは思ってないけど
ね」

くすりと妖艶に笑うと、ミス・ロングビルは自分の得意な呪文を唱
え始めた。

それは錬金の呪文であつた。朗々と呪文を唱え、分厚い鉄のドアに
向かつて杖を振る。魔法は扉に届いたはずだが…しばらく待っても
変わった所は見られない。

「スクウェアクラスのメイジが固定化の呪文をかけているみたいね」

ロングビルは呟いた。固定化の呪文は、物質の酸化や腐敗を防ぐ呪
文である。これをかけられた物質は、あらゆる化学反応から保護さ
れ、そのままの姿を永遠に保ち続けるのだった。固定化をかけられ
た物質には錬金の呪文も効力を失う。呪文をかけたメイジが、固定
化をかけたメイジの実力を上回れば、その限りではないが。

しかし、この鉄の扉に固定化の呪文をかけたメイジは、相当強力な
メイジらしい。土系統のエキスパートであるロングビルの錬金を受

けつけないのだから。

「まったく、これじゃ手の着けようが…誰か来る!？」

ロングビルは杖を縮めてポケットにしまった。

現れたのは、コルベールだった。

「おや、ミス・ロングビル。ここで何を？」

コルベールは間の抜けた声で尋ねた。ロングビルは愛想のいい笑みを浮かべた。

「ミスタ・コルベール。宝物庫の目録を作っているのですが…」

「はあ…それは大変だ。一つ一つ見て回るだけで一日がかりですよ。何せここにはお宝ガラクタひつくるめて、所狭しと並んでいますからな」

「でしょうね」

目的の物もガラクタじゃないだろうね？

「オールド・オスマンに鍵を借りればいいじゃないですか」

ミス・ロングビルは微笑んだ。

「それが…ご就寝中なのです。まあ、目録作成は急ぎの仕事ではないし…」

「なるほど、ご就寝中ですか。あのエロジイ、じゃなかった、オールド・オスマンは寝るとなかなか起きませんからな。では、僕も後で伺う事にしましょう」

コルベールは歩き出した。それからふと立ち止まり、振り向いた。

「その…ミス・ロングビル」

「なんででしょう?」

照れくさそうに、コルベールは口を開いた。

「もし、よろしかったら、なんですが……。昼食をご一緒にいかがですか?」

ロングビルは少し考えた後、にっこりと微笑んで、申し出を受けた。

「ええ、喜んで」

2人は並んで歩き出した。

「ねえ、ミスタ・コルベール」

ちょっと碎けた言葉遣いになって、ロングビルが話しかけた。

「は、はい? 为什么呢?」

自分の誘いがあっさりと受け入れられた事に気をよくしたコルベールは、跳ねるような調子で答えた。

「宝物庫の中に、入ったことはありません?」

「ありますとも」

「では、破壊の杖をご存知?」

「ああ… あれは、奇妙な形をしておりましたなあ」

ロングビルの目が光った。

「と、申されますと？」

「説明のしようがありません。奇妙としか…はい。それより、なにをお召し上がりになりますか？本日のメニューは、ヒラメの香草包みですが…なに、僕はコック長のマルトー殿に顔が利きますから、僕が一言言えば、世界の珍味、美味を…」

「ミスタ」

ロングビルはコルベールのおしゃべりを遮った。

「は、はい？」

「しかし、宝物庫は立派な造りですわね。あれでは、どんなメイジを連れて来ても、開けるのは不可能でしょうね」

「そうですね。メイジには、開けるのは不可能かと思えます。なんでも、スクウェアアークラスのメイジが何人も集まって、あらゆる呪文に対抗できるように設計したそうですから」

「ほんとに感心しますわ。ミスタ・コルベールは物知りでいらつしやる」

ロングビルは、コルベールを頼もしげに見つめた。

「え？いや…はは、暇にあかせて書物に目を通すことが多いもので…研究一筋と申しましょうか。はは、おかげでこの年になっても独身でして…はい」

「ミスタ・コルベールのおそばにいられる女性は幸せでしょうね。だって、誰も知らないような事を、たくさん教えてくださるんですから…」

ロングビルは、うつとりとした目でコルベールを見つめた。

「いや！もう！からかってはいけませんよ！はい！」

コルベールはかちこちに緊張しながら、禿げ上がった額の汗を拭いた。それから、真剣な顔で、ミス・ロングビルの顔を覗き込んだ。

「ミス・ロングビル。次のユルの曜日に開かれる、フリッツの舞踏会はご存知ですか？」

「なんですの？それは」

「はあ、貴方はここに来てまだ二ヶ月ほどでしたな。その、なんてことはない、ただのパーティです。ただ、ここで一緒に踊ったカップルは、結ばれるとか何とか！そんな伝説がありましたな！はい！」

「それで？」

ロングビルはにっこりと笑って促した。

「その…もしよろしければ、僕と踊りませんか、そういうことではいい」

「喜んで。舞踏会も素敵ですが、それより、もっと宝物庫について知りたいわ。私、魔法の品々にとっても興味がありますの」

コルベールはロングビルの気を引きたい一心で、頭の中を探った。宝物庫、宝物庫と…。

やっと、ロングビルの興味を引けそうな話を見つけたコルベールは、もったいぶって話し始めた。

「では、ちょっとご披露いたしましょう。たいした話ではないのですが…」

「ぜひとも伺いたいわ」

「宝物庫は確かに魔法に関しては無敵ですが、一つだけ弱点があると思うのですよ」

「はあ…興味深いお話ですわ」

「それは…物理的な力です」

「…物理的な力？」

「そうですね！例えば、まあ、そんな事はありませんのですが、巨大なゴーレムが…」

「巨大なゴーレムが…？」

コルベールは得意気に、ロングビルに自説を語った。聞き終わった後、ロングビルは満足げに微笑んだ。

「大変興味深いお話でしたわ。ミスタ・コルベール」

これは運が向いて来たね。巨大ゴーレムなら、宝物庫を破壊できるね。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

タバササイド

そういえばすっかりしていた。使い魔の品評会があった事を。

タバサは、明後日行われる品評会について悩んでいた。

シルフィードだけなら良かったけど、アデルも出ないといけないからすごく悩む。

アデルを見世物にしたいというタバサの悩みだった

「あらタバサ。どうしたの？」

キュルケがやって来たので、事情を話すと、

「多分タバサの為なら、アデルはやると思うわね」

そう、私もそう思っていた。

彼なら、私が頼むと本当にやりそうだから困る。

「アデルの事はサイトと同じでもう学院中に知れ渡ってるし、シルフィードだけだと、彼だけ除け者扱いしてる様な感じだし…」
「悩む」

すると、アデルが来た。

「タバサにキュルケ、どうしたんだこんな所で？」

「丁度貴方の事を話してたのよ」

「俺の事？」

「ええ」

「どうゆう事だ、タバサ？」

「品評会」

「品評会？」

私はアデルに洩々ながらも、品評会の事を話した。

「なるほど、ようは使い魔だから、俺も何か披露するって事だな」

「そうよ」

「そうだな…剣舞とか、珍しい使い方をする魔法とか…そんな感じの？」

「そうゆう事」

やっぱりアデルは参加する気だった。

それと、キュルケが何か思い出した様な素振りをした。

「あっそうだったわ！」

「うおっ、どうしたんだキュルケ!？」

「今年の品評会には、アンリエッタ王女が見に来るんだったわ!こ
うしちゃいけないわ!フレーム、特訓するわよ!」

そう言っ去って行くキュルケ。

「なあタバサ、アンリエッタ王女って?」

「この国の王女」

「トリステインの姫君ね…そいつは大丈夫だろうか?」

多分、イザベラの事を思い出して不安になってるのだと考えてるの
だろう。

「大丈夫、この国の王女は清楚。いたぶる趣味は無い」

「そうか…取り合えずシルフィードの所に行つて、品評会の事でど
うするか打ち合わせして来る」
「分かった」

正直品評会は興味なかったが、アデルはやる気を見せていた。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

アデルサイド

品評会か…剣術も魔法も使えるから問題ないけど、シルフィードとどう合わせたら良いかと悩んでると、庭にサイトがふらふらしながら剣を振っていた。

「サイト君、こんなところで何やってんだ？」

「ああアデルさん、実はルイズの奴が…」

かくかくしかじか…

「なるほど、それで剣を振ってたのか」

「まったくルイズの奴、そんな大事な事、もっと早く教えろってんだ」

「そう言っなよサイト君、そうだ！君の剣術に少し手伝ってあげようか？」

「えっ本当ですか！？」

「ああ、このままだと何もしないで終わるって感じになりそうだからな」

「ははは、言ってるな」

「アデルさん…つかデル公、笑っなよ」

「サイトさんにミスタ・アルマース、何をしているんですか？」

サイトと話していると、シエスタが来た。するとサイトが赤くなっていた。

「シエスタ、あっ…いや…ちょっと…」

「もしかして、品評会の練習ですか？」

「そうそう、それ。でもよく分かったな？」

「二年生の皆さんは、訓練に一生懸命ですから。特に今年は、アンリエッタ様がいらっしやいますし」

「アンリエッタさま？」

「このトリステインの王女さまだとか？」

「はい！皆さん、気に入られようと忙しくなってますから」
「へ」

てかほとんどがそっち目当てだしな。

「という事は、アデルさんも品評会に出るんですか？」

「ああ、俺はタバサの使い魔だからな。シルフィードと一緒に出るつもりだ」

「あの風竜と一緒にですか？」

「タバサも、シルフィードだけなら問題無かったんだけど、俺が一緒だからコンビでやる事になったんだ」

「でもアデルさんなら、魔法も剣も使えるから心配は無さそうですね」

「ミスタ・アルマースはどんな事を見せるんですか？」

正直…何も考えて無かった。

取り合えず、精霊達に頼むか。

「そうだな…四系統の魔法を幻想的に見せるって感じかな？」

「何か、すごそうだな」

「そうですね」

その後、サイトとしばらく剣の稽古をつけさせた。

そしてシルフィードの所に着いた俺は、打ち合わせを開始した。

「きゅいきゅい、お兄さまと一緒に何をしようかしら？」

「お前は存在感があるから、ただ飛びまわっていれば良いだろうけど、それだけじゃつまらないから、俺が一工夫入れようと思う」

「きゅい？」

そして翌日、アンリエッタ王女が来日してきた。

- - - - -

アンリエッタサイド

明日は魔法学院へ行く事になりました。

ルイズは元気にしてるかしら？貴女はどんな使い魔を召喚したのかしら？

私はエトナを…悪魔を召喚してしまいました。

「どったのリエッタ？深刻そうな顔をして」

「エトナ！？…うん、ちょっとね」

「何か飲みますっスか？」

「ありがとう、頂くわ」

本当に助かるわこのペンギンさん！プリニーさん達は、いつも何か欲しいと思ったらすぐに用意してきたりなど、エトナが言うには、彼らは仕事をするのが生きがいな低級の悪魔だと言っていました。

エトナを召喚した私は、連れて行くのかなと思ってるのですが、マザリーニやお母上は連れてかない方が良いと言ってます。

連れてく連れてくれないは彼女自身が決めなくてはいけないから、思い切ってエトナに魔法学院について行くかどうか話してみました。

「面白そう、あたしも行くね！」

と元氣良く返事したので、連れていく事にしました。
マザリーニは渋い顔をしておりました。
すると彼は、

「アンリエッタ様、万が一国民に悟られない様に、エトナをアンリエッタ様の侍女として振る舞う事を提案します！」

そう言つて、エトナに侍女の服を着せた。

「うゝん…何か落ち着かないな」

「ごめんなさい、でも我慢して下さいね」

これで少しは悪魔だと気付かれないでしょう。

待つてねルイズ、私の初めてのお友達。

あとプリニーさん達も付いて行きたかったけど、マザリーニが断り、城の雑用をさせるようエトナが命令した。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

アデルサイド

翌日、王女が来日してくる日になった。

「トリステイン王国王女、アンリエッタ姫殿下の、おなゝり〜！」

王女を乗せた馬車が到着した。
そして、その姿を現した。

「王女っていう割に、結構普通な感じだな」

「イザベラが濃いだけ」

「確かにな」

確かにイザベラと比べたら、こっちの姫様の方がましだしな。

「あれがトリステインの王女？あたしの方が美人じゃない。そう思わないタバサ、アデル」

「さあ」

「そっついうのは考えた事が無いからな」

「つまらないわね」

アンリエッタ王女が学院長の下に行こうとした。

その時アデルは、ありえないモノを見た。

「（！？あの赤い髪のツインテールの女って…魔神エトナ！？いや…まさかな…）」

「どうしたのアデル？」

「あつ、いやつ、別に…」

「ふゝん…アデルもあのお姫様に気があるとか？」

キュルケ…誤解をうむ様な発言はやめてくれ。

あと何でタバサは泣きそうな顔をするんだ？

「違う。俺が気になったのは、王女の連れている赤い髪の侍女の方だ」

「あら、そつちだったの？」

「どうして？」

そう言つて、アデルのマフラーを引つ張っているタバサ。
なんか可愛らしい…じゃなくて、
アデルは、タバサの耳元で言った。

「あの侍女は、昔見た悪魔に似た感じだったから気になつてな」
「！？そう…」

「でも、気の所為だよな。あいつがこんな所にいる訳ないもんな、
確かあの女は、異世界を渡る能力は無かった筈だし…」

「その悪魔はなんて言つたの？」
「魔神エトナ。上位クラスの悪魔で、こつちで言つとエルフみたい
な奴だ」

「！？そんなに強い…」

「ああ…悪魔化した連中50人程相手しても、ほんの数分で、しか
も無傷で終わらせるほどの実力者だ。俺でも勝てるかどうか分から
んからな」

「…そう」

少し大げさに言ってみました。

その夜、いつもの様に鍛錬をするアデルだが、女子寮に近づくフー
ドを被った二人の影を見つけた。

多分、姫様だな。でももう一人は一体…まあいい、取り合えず声を
かけてみるか。

「そこの二人！」

「！？…」

「お前達は何者だ、何しに来た？」

ちよつと慌ててるな。

やがて観念したのか、名乗り出たのだった。

「夜分遅くに申し訳ございません。私は…」

一人がフードを外すと、そこにいたのは、

「トリステイン王国王女、アンリエッタ・ド・トリステインです！」

「…なるほど。しかし王女殿下が何故こんな所を二人で来ているのですか？」

「そ、それは…」

名乗った後に、この場所にいる事を指摘されて口ずさむお姫様。すると、もう一人の方が近づいて来た。

「リエッタ。ここはあたしが話しとくから、リエッタは用をすましてら？」

「えっ、でも…」

「良いから。えっと、リエッタはね、昔の友達のヴァリ…何とかに会いに来たんだって」

「なるほど、ごく個人的な用という訳か…」

「はい」

その後、姫さんはルイズに会いに向かった。

そして今残ってるのは、俺ともう一人の子だった。

「それで、アンタは何者なんだ？」

「あたしは…」

そう言っつてフードを外した。

「エトナよ」

「！？やっぱり魔神エトナか！？」

最強に近い存在が何でここにいるんだよ！？
するとエトナが、

「安心して、あたしも転生者だから」
「何！？」

驚いた。まさか転生者だったとは…。
エトナの前世名は、速未連香というらしい。
俺の方も名前と前世名を言った。
しばらくエトナと話をして、互いの情報を交換した。

「ふーん、そつちも苦労したのね」
「まあな。そつちはアンリエッタ王女の使い魔として召喚されたと
？」
「そうだよ。それにしても…」
「ん？」
「貴方って素敵ね」
「へっ！？」

訳が解らなかった！？何故に？

「私はね、恋に生きたかったの。でも恋をする前に死んじゃって悔
しかったけど、天使さまは私を見捨てなかった！悪魔として転生し
たのは不満だったけど、そのおかげで私は好みの男性に出会えた！」
「はあ…」
「だから、私とお付き合いして下さい！！」
「……えっ？」

お付き合いして下さい？お付き合いして下さい？お付き合いして下さい

さい？お付き合いして下さい？お付き合いして下さい？
アデルの頭の中で、この言葉が響いた。

「…ええーっ！？」

俺をか！？何で！？よりもよってエトナ似のこの子にか！？

「初めて会った時から一目惚れしちゃったの。それで、いてもたってもいられずにリエッタについて行ったの」

クネクネしながら言うエトナ。

「何で俺なんだ？」

別に俺じゃ無くても他に良い男ぐらいいるだろ？

「だって…赤い髪が似合ってて、男らしい人…貴方は、私の好みにピッタリなの！」

「おいおいおいおい…」

「そんな訳で、お付き合いして下さい」

「そんな訳でって…君とは会ったばかりだし、そうゆうのは互いが良く知り合ってからじゃ…」

あまりの事にパニックになるアデルだった。

「それもそうね。今日は顔合わせにしとくから、今度会った時は、お返事…下さいね」

そう言ってアンリエッタの所に行こうとするエトナ。

「あつ、そうだった!」
「うおっ!?!」

慌ててアデルの所に戻るエトナ。

「ごめん、コレ渡すの忘れてた!」

そう言つて差し出して来たのは、小さなプレゼント箱だった。

「これは?」

「私の所に来た天使さまが、貴方につて」

「俺に?」

箱を開けると、そこから「Lv・UP」の文字が出た。

そして、箱からスクリーンが映し出されて、天使の姿が現れた。

『レベルアップおめでと〜』

「……何だこいつ?」

むちゃくちゃ変な天使だな。

「あつ天使さまだ!」

「!?!?て事は、これが君の所に来た天使か?」

「そうだよ。あつ何か言ってるわ」

天使の方を向くと、

『アデル君だったね〜、君に興味が湧いてね〜、今のレベルアップで〜、魔王クラスの実力が出せるようにしたからね〜』

「はあっ!?!?!?」

魔王クラスって…何トンデモナイ能力を俺に付加させるんだよ!?

『といっても、魔王クラスの実力が出せるのは、原作で言うところ、十巻目辺りからだよ』

あ、別に今すぐって訳じゃないのか。

『ちなみに能力は、デイスガイアでいうところ、全てのステータスがSクラスで、使う魔法はヒール系以外全部テラクラスだよ』

……さすがは魔王クラス…。

『他に、武器類は、後で考えとくから』

考えてないのかよ!?

『能力は、めだかボックスの過^{マイナス}負荷を入れますね』

……ある意味…一番最強な能力だな……。

『容姿は、クロノ・クルセイドの覚醒クロノ（角あり）にしとくね』

そこは納得する。

『そんな訳で、一度変身したら、自分の意思で出来る様にしていたから』

最初は条件で変身、以降は自分でって事か。

エトナサイド

迂闊だったわ。

こんな素敵な人を呼び出した人がいた事を失念していたわ。
タバサ… いくつかアデル様を寝取ってやる！

エトナはタバサに嫉妬していた。

取り合えずリエッタのそこに行きましょう。

「えーっと、リエッタはっと… いた！」

エトナは翼を出して、ルイズの窓の所まで飛んだ。
そして覗いてみると、

「忘れたの？ 私、貴女が困った時は、必ず助けるって約束したでしょ？ 一応、私も王女ですからね」

「姫様…」

何か感動してるわね、あの桃髪の子。

「お、お礼の申し上げようも…」

「ぶおっ!？」

あつ桃髪の子が押しつぶしてる男の子をさらに叩き付けたわね。

「ふふっ、ルイズは、良い使い魔を召喚したわね」

「とんでもない!？ こんな下品で変な生き物、一生の不覚ですわ!」

「… くだい… くだい… くだいって言うてんだろ…」

「大人しくしなさいってば!」

「ふふっ」

哀れねあの子も、アデル様に比べたら、大人と子供ね。さて、そろそろ出ますか。

翼をしまい、魔本から何の変哲のない杖を取り出した。そしてエトナは、窓にコンコンと音をたてた。

「つ！？誰！？」

アンリエッタ達がエトナのいる窓を見た。

「はあ、はい」

「エトナ！」

「何も……ってええっ！？ 姫様の知り合いですか！？」

「ええ、エトナは…私の使い魔ですから」

「それじゃ」

桃髪と男の子は固まり、そして叫んだ。

「えええー……っ！！？」

しばらく間があり、部屋の中に入れて貰った。いつまでも外にいるわけじゃないしね。

紹介する前にリエッタは、「貴女が悪魔というのは親友には知られたくないから、人間のフリをして下さい」と言ってきたのでその通りにした。

「姫様も人間の使い魔を!？」

「ええつ、最初は驚いたわ。使い魔は大抵は動物だから、まさか人間が出て来るとは思わなかったわ」

「あたしもまさか誰かに召喚されるとは思わなかったからね」

「ちょっと貴女、姫様になんて口W「よいのです」って姫様!？」

「そーそー、何も固っ苦しく話してたら疲れるじゃん。身近で一人くらいだらけてた方が丁度良いのよ」

「ぶっ無礼よ！よりもよって姫様に無礼極まりない行為を！」

「良いのですよ。私がお願いしたのですから」

「ええっ！？」

信じられないと桃髪の子、ルイズがあたしを見てくる。

「へー、俺とアデルさん以外にも人間が呼ばれたのか」

「アデルさん？」

「さっき外にいた素敵な男性の事ですわ」

「先程の…」

「姫様、アデルの事を御存じなのですか？」

「ええ、先程ここに来る前にちよつとね」

「あんな素敵な男性は初めてあったわ。いつかオトしてみせるわ！」

若干皆が引いていた。

「アデルさんて、やっぱり結構モテるんすね…」

男の子、サイトが黄昏ていた。

そしてアンリエッタとエトナは、ルイズの部屋を出て、ルイズは名残惜しそうにしてた。

「ここ数年で、一番楽しい一時でした」

アンリエッタはルイズと抱き合った。

「ありがとう。ルイズ・フランソワーズ」

「あたしもですわ。姫様」

そして離れる二人。

「使い魔さん」

「えっ…俺？」

「他に誰がいんの？」

「まあ…そうだな」

エトナの言葉に納得するサイト。

「明日、頑張つて下さいね」

「ああ…ふっ、ご期待下さいっ！」

気障っぽく言うサイト。

「キモッ!？」

思わず突っ込んだじゃったじゃない!？
するとルイズは、

「なっ!？コラー! 姫様に向かって、どうしてアンタはいつもー
ー!」

サイトに向けて鞭を振り回すルイズだが、サイトはそれを避け続けた。

「うわすっ」

S なのルイズ、M なのサイト、S M プレイなの二人とも…。
ふとアンリエッタの方を向くと、どこか寂しそうな顔をしていた。

「…やはり…自由の身が、一番の宝ですね…」

そう言つて扉を閉めるアンリエッタ。

「リエッタ、寂しいのなら素直になればいいのに」

「私は王女よ。そう簡単に出来れば苦労はしないわよ…」

「分っかんないなあ人間で、どうして自分がやりたい事を我慢しなきゃいけないんだろう」

ちよつと御茶目なジョークを言つてみた。そしたら、

「悪魔の方々は、自由なんですか？」

「そりゃあ本能に忠実だし、やりたい事好き放題なのが悪魔だし、偶に仕事熱心な悪魔もいるみたいだし…」

「ふふつ、そうゆう所は羨ましい所ね」

「えっ？」

「なんでもありませんわ…」

「リエッタ…」

アンリエッタの寂しさを目の当たりにして、黙ってしまったエトナだった。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

アデルサイド

エトナが実は転生者だったとはな、そんなもって告白されちゃったな。

生まれて初めてだな告白されたのって。

タバサの部屋に辿り着くアデル。

「お帰りなさい」

「ああ、ただいま」

タバサにエトナの事（告白の事は黙っておいた）を喋った。

タバサはひどく驚いていた。

そりゃあそうか、このハルケギニアに悪魔が二人も出てきたんだからな。

「そう、彼女は何が目的だったの？」

「少なくとも、あのお姫様が生きてる間は何もしないと思うな」

「どうして？」

「エトナも俺と同じく使い魔として召喚された訳だからな。悪魔にとって契約は唯一逆らえない存在だから、使い魔契約を行えば、王女の使い魔として居続けなければならないからね」

「！？そう……」

今の話で落ち込むタバサ。

何故落ち込む？

するとタバサは、

「貴方も仕方なく私の使い魔をしてるの？」

その事が、心外だな。

アデルはタバサに近づき、両頬を軽く引っ張った。

「!？」

「あのなタバサ、俺は元は人間なんだ。根っからの悪魔とは違い、契約だから仕方が無いって考えは持ち合わせていないんだ。だから、そんな事をいうんじゃない！」

そして引つ張るのを止めたアデル。

タバサは両頬を押さえていた。

「ごめんなさい」

「分かればいいんだ。んじゃあ明日に備えて寝るか」

「うん」

ちよつと罪悪感はあるものの、少しふてくさりたい気分だったからな。

翌日、品評会の日になった。

「ただ今より、本年度の使い魔お披露目を執り行います」

生徒側からは盛り上がる声がした。

キュルケとフレイム、炎の扱いはお手の物的なアピールをした。

モンモランシーとロビン、モンモランシーの奏でるヴァイオリンに合わせて踊っていた。

マリコルヌとクヴァーシル、ハルケギニアの国旗を出しながら舞っていた。

ギーシュとヴェルダント、床一面に広げた薔薇の上でポーシングをしてる。当然観客はしらけてる。

その他は略した。

次はとうとう俺とシルフィードの出番だった。

「続きまして、ミス・タバサ」

ステージに上ったタバサとアデルとシルフィード。
アデルは、これから飛ぶシルフィードの周りに、水、火、風、土を
纏わらせた。

タバサを乗せたシルフィードがある程度飛んだ後、纏ってた四属性
は空中に飛散し、それぞれが宙を舞い、夜空に煌めく星のように幻
想的なシュエーションを演じた。
皆も好評価だった。

「雪風のタバサでした」

俺はシルフィードの所で休んだ。

次はサイト達だったが、デルフがしゃしゃり出て来て漫才の様にな
ってしまった。

そしてすぐにステージから下りた。

しばらくして審査が始まった。

選ばれたのは、タバサだった。まあ当然だな、原作でも選ばれてた
し。

「きゅい、きゅいきゅいきゅい！（お兄さま、お姉さまが選ばれた
のね！）」

「そうだな」

その後タバサは、アデル達をステージに立たせた。

アンリエッタがタバサに

「素晴らしい使い魔でした。よろしければ、いま一度飛んで見せて
は貰えませんか？」

タバサはコクリと頷いた。

タバサとアデルを乗せて飛ぶシルフィード。

その時、学院の方から衝撃音が聞こえた。

そうだった、フーケが襲いかかって来るんだった!?

「タバサ!」

「うん!」

「シルフィード、学院の反対側に飛んでくれ!」

「きゅいひいっ! (了解なのね!)」

急いで反対側に回る俺達。

そこには、もうゴーレムが宝物庫の壁を破壊して、盗みを終えているフーケだった。

「感謝するよっ!」

フーケがそう言った後、フーケのゴーレムは、手に持ってたサイトを話した。

「だあああああああああつ!!!!??」

落ちるサイトだが、寸前でシルフィードが駆け付けて、アデルが受け止めた。

「大丈夫か?」

「あつ、ありがとうございます!」

「礼ならタバサに言ってくれ」

「ありがとうタバサ!」

「いい」

「やってくれるじゃないか!」

アデルはフーケのいるゴーレムの所に飛んだ。
当然フーケはアデルを迎撃する為に、ゴーレムの拳をアデルに向けて振るった。

「無茶だ！？逃げるアデルさん！」

サイトがそう叫んでいたが、無視して飛んで行くアデル。
そして、

「紅蓮疾風拳！！」

ゴーレムの振るった腕を、アデルの炎を纏った拳で破壊した。

「「「えええっ！！？？」」」

それを見ていたサイト、ルイズ、そしてフーケが叫んだ。
でも、すぐに腕は再生し、逃げるフーケ。

アデルは立ち止まった。

「ちょっとアデル、何で追いかけないのよ！」

「…さっき殴った時に、手え痛めた…」

「…何それ」

その後、フーケは姿を消した。

少し離れた場所には、ゴーレムの成れの果てである土くれの塊を残して。

夕方頃、広場でタバサと一緒に座ってたら、キュルケが来た。

「驚きよね。あの土くれのフーケだなんて！」

キュルケもさすがに驚いていた。

「ねえタバサ、顔見たの？」

「顔隠してた」

「アデルは？」

「タバサと同意見」

「なぐんだ、つまんない」

キュルケはつまんなそうに言った。

実は知っているんだが、さすがに言う訳にはいかないな。

翌日、フーケ討伐と秘宝奪還の任が下される。

王女来日と土くれのフーケ（後書き）

アデルのレベルアップは、しばらく後になります。

エトナの性格の一部を某妖精の尻尾の雨女みたいにしちゃった。

ガンダールヴとイーヴァルディ（前書き）

アデルとサイトのコンビネーションアタックが炸裂（笑）する。

ガンダールヴとイーヴァルディ

アデルサイド

昨日の品評会の時に土くれのフーケが、破壊の杖とやらを強奪された。

その翌日というより今日は授業にならずにいた。

今日は珍しくタバサと一緒に教室にいた。というより来てと頼まれた。

キュルケの方は相変わらずサイトにアプローチしてて、ルイズはそんなサイトを足蹴にしていた。

すると、

「ミス・ヴァリエール、ミス・タバサ、すぐに学院長室に来るように！」

コルベール先生がそう言ってきた。いよいよか！

ルイズとサイト、タバサとアデル、ついでにキュルケは、オスマン学院長のいる学院長室に着いた。

そこには既にロングビルなどの他の教師が大勢来てた。

アデルとサイトは、タバサとルイズの二歩程後ろにいた。

ルイズはキュルケの事で文句を言ってきたが、スルーされた。

「昨日のフーケのサインを見て、すぐにこれが国中の貴族を震え上がらせている大怪盗の仕業と知り、調査を行ったところ、フーケの居所が解りました」

「さすが仕事が早いの、ミス・ロングビル」

大怪盗って、自画自賛してんじゃないのか？

「街で聞き込みをしたところ、森の奥の廃屋に出入りする怪しい口ブの男を見かけたという情報入手致しまして。恐らく、その廃屋がフーケの隠れ家ではないかと。そしてその証言から、私が描いた人物像です」

ローブの男って、何で性別が解ったんだ？今まで性別すら解らなかったんだろ？

ロングビルは、人物像が描かれてる紙をオスマン学院長に渡し、ルイズ達に見せた。

「これはフーケです！間違いありません！」

ルイズは確信を持って叫んだ。

タバサもコクリと頷く。

てかこれ、全身まで描いてるな。ここまで細かく描き過ぎだろ、実際に見たみたいに詳細が解りやすいじゃないか。しかも、胸部分はしっかりとペタンとしてるな。

ルイズがそう叫んだ後、教師側はざわざわし始めた。

「すぐに王室に報告しましょう！王室衛士隊に頼んで、兵を差し向けてもらわなくては！」

「そんなグズグズしとってはフーケに気取られる！我々の手で破壊の杖を奪還し、盗賊によって汚された学院の名誉を取り戻すのじゃ！我と思う者は杖を掲げよ！」

オスマンはそう言ったが、誰も杖を掲げようとしなかった。

「ん？どうした、フーケを捕えて名を上げようとする貴族はおらんのか！」

普段あれだけ貴族の名誉がどうか言ってる割には、いざこづゆつ事が起きると途端に腰抜けになるんだな。

アデルがそう思ってたところに、一人の少女が杖を上げた。

「私が行きます！」

「げっ！？」

サイトは驚きの声を上げた。

「ミス・ヴァリエール！？」

「私も参りますわ」

キュルケまで杖を掲げた。

「ツエルプストー！？」

「ふっ、ヴァリエールには負けられませんか！」

「アンタね……」

キュルケの理由にルイズは呆れた。

すると、タバサも杖を掲げた。

「タバサ！？貴女はいいのよ、これはあたし達の問題何だから」

「二人が心配」

「タバサ……」

「……ありがとう」

タバサの発言により照れ出すルイズとキュルケ。
オスマン学院長は笑いながら言った。

「ほっほっほ。では、三人に頼むでしょう」

この時、ロングビルから「チッ…」て聞こえた。

ルイスとタバサ

「この二名はフーケの目撃者じゃ。その上、ミス・タバサは、若くしてシュヴァリエの称号を持つ騎士でもある」

「騎士!？」

「ほ、本当なのタバサ!？」

学院長の言葉に二人は驚き、タバサはコクリと頷いた。
するとサイトが聞いてきた。もちろん小声で。

「ねえアデルさん、シュヴァリエって何すか？」

「王室から与えられる爵位としては最下級だが、純粹に業績に対し
て贈られる称号。言ってみれば、口先だけの貴族とは違い、実力の
ある貴族の事を言うんだ」

「へーって事は、タバサって実はすごく強いって事か？」

「平たく言えばそうだな」

アデルは簡潔な説明をした。

ここ最近、タバサが騎士としての仕事をしてたから、どのような内
容があらかじめタバサに聞いてよかったな。

そして学院長は言葉を続けた。

「それに、彼女の使い魔である彼は、以前ラインクラスのヴィリエ・
ド・ロレーヌを素手で決闘して勝利し、更にはフーケのゴーレムの
腕を素手で破壊するほどの使い手じゃ」

周りが信じられない様に騒然としてた。キュルケはその状況を見て
なかったから驚愕してアデルの方を見た。

「そついえば彼はイーヴ…！？」

何か言おうとしてたなコルベール先生。

次に学院長はキュルケの紹介もした。

「更にミス・ツエルプストーは、ゲルマニアの優秀な軍人の家系で、彼女自身の炎の魔法もかなり強力だと聞いているが？」

キュルケは胸を張った。（その時少し揺れていた）

タバサが睨んで来たので自重しました。

そして次はルイズの番なので胸を張っていた。

「そして…ゴホン、そのミス・ヴァリエールは…優秀な魔法使いを輩出したヴァリエール侯爵家の息女で…その何だ…将来有望な…」

学院長は言葉を詰まらせながら言った。

「おつそつじやった！」

学院長はサイトを見ながら言った。

「彼女の使い魔は、グラモン元帥の息子である、ギーシュ・ド・グラモンを圧倒する剣の使い手だと聞いておるぞ！」

「えっ？」

サイトはキョトンとし、ルイズは納得いかない様な顔をしていた。

「そつでした！彼は伝説のガンダー…！？」

また何か言おうとしてたなコルベール先生。
しばらくして、

「魔法学院は、諸君らの努力と貴族の義務に期待する」

学院長がそう言い、三人は杖を掲げた。
すると、ロングビルが前に出てきた。

「オールド・オスマン、私が案内役として同行しますわ」
「そうしてくれるか、ミス・ロングビル」
「もとよりそのつもりです」

笑顔で言うロングビル。

もとよりそのつもりなら、何故最初に杖を掲げようとしなかったんだ？

まあいい、取り合えず装備を整えに戻りますか。
持ってきたのは、

ラハールの剣

エルダースピア

夢氷黄泉路

精霊の杖

そしてアンダリーを持ってきた。

「出番か旦那？」

「ああ、頼むぞ」

外に出るアデル。

「待たせたな」

「意外と重装備！？」

サイト…あえて何も言うまい。

そして馬車（荷車？）に乗って、森の奥へと進んでいった。
ていうか何故タバサさんは、乗り始めた時からずっと俺の膝の上にいるんだ！？

「タバサ…見せつけるじゃない。ダーリン、あたしも寄りかかって
良い？」

「え、えつと…」

「ダメに決まってるでしょ！」

道中こんな感じだった。

するとサイトが疑問に思った事を言い出した。

「なあルイズ、魔法が使えるって事は、フーケは貴族なんだろう？何
で貴族が泥棒なんかやってんだ？」

「メイジが全員貴族というわけじゃありませんわ」

ロングビルが答えた。

「様々な事情で、貴族から平民になった者も多いのです。その中には、ミスタ・アルマースの様に身をやつして傭兵になったり、フーケの様に犯罪者になったりする者もありますわ。この私だって、貴族の名を無くした者ですし」

「えっ！？」

ロングビルの素性に驚くルイズ。

「だって、ミス・ロングビルはオールド・オスマンの秘書なのですよ？」

「オスマン氏は、貴族や平民といった事に拘らないお方ですから」
へへ、あのエロそうな爺さんがねえ。

「では、どういった事情で貴族の名を？」

黙りこむロングビル。

「いいじゃない、お聞かせねえ」キュルケ、誰だつて言えない事はあるんだ、その辺の事は止めておけ」わ、分かったわよ……」

さすがにプライバシー無視はいかないからな。

「たく、何が哀しくて泥棒退治なんか」

「だったら来なきゃよかったじゃない！」

またギャーギャー騒ぎだそうだったので、サイレントを使って静かにした。

「タバサ、これで静かになったぞ」

「ありがとう」

アデルとタバサが甘いオーラを発していると、サイトは羨ましそうに見てたり、ルイズとキュルケはケンカする気が無くなったのか座りこんだ。

馬車はいつの間にか深い森の中に入っていた。

「ここから先は歩いて行きましょう」

ロングビルの提案に乗り、全員で小道を歩き始める。

「なんか、暗くて怖いわ…」

キュルケがサイトの腕に絡み付いてきた。

「あんまりくつつくなよ」

「だってー、すごーくー、怖いんだものー」

キュルケはものすごく嘘くさい調子で言った。ルイズがキュルケを睨むと、キュルケも睨み返した。そしてお互いにふんつと顔を背けた。

そんな中タバサは、アデルの裾を握っていた。

「どうしたタバサ？」

「……………」

「怖いのか？」

「怖く…ない」

それを微笑ましい顔で見てくるキュルケ達だった。

そうしている内に、一行は開けた場所に出た。森の中の空き地といった風情である。およそ、魔法学院の中庭くらいの広さだ。真ん中に、確かに廃屋があった。元は木こり小屋だったのだろうか。朽ち果てた炭焼き用らしき窯と、壁板が外れた物置が隣に並んでいる。6人は小屋の中から見えないように、森の茂みに身を隠したまま廃屋を見つめた。

「私の聞いた情報だと、あの中にいるという話です」

ロングビルが廃屋を指差して言った。

人の住んでいる気配はまったくない。フーケはあの中にいるのだろうか。

廃屋からこちらの姿が見えないように隠れつつ、アデル達は作戦を練った。

まず、偵察兼囃が小屋に向かい、中の様子を確認する。

次に、もし中にフーケがいればこれを挑発して外におびき出す。小屋の中では、得意のゴーレムが作りだせないからだ。

そしてフーケが外に出た瞬間を狙い、魔法で一斉に攻撃して一気にフーケを無力化する。

以上が作戦の流れだった。

「で、偵察兼囃は誰がやるんだ？」

サイトはそう言ったら、

「すばしっこいの」

タバサがそう言ったら、皆サイトとアデルを見つめてきた。

「俺たちかよ……」

「ぼやくな、では慎重に行くぞ！」

「はい！」

サイトは肩にかけてあったデルフを鞘から抜いた。すると左手のルーンが光りだした。

「おつ、とうとう出番か！相棒！」

「偵察だから黙っててくれよデルフ」

「あいよ」

「それじゃあサイト君、しっかり捕まってる」

「はい！」

サイトを掴んで、加速装置で一気に廃屋まで移動した。
驚いていたサイトだったが、空気を読んで窓から中を見た。
アデルは扉にディテクトマジックをして調べた。

「誰もいないぞ」

「罠も無かった」

隠れていた四人はおそろおそろ近寄ってきた。

アデルを筆頭に、サイト、タバサ、キュルケが入って行き、小屋の
中に入って行った。

ルイズは外で見張り、ロングビルは周辺の偵察を行った。

「手掛かりが無いか、一応調べてみましょう」

「まっ、無駄だろうけど」

小屋の中を調べる4人。

するとタバサは近くの箱に気付き、中を調べてみると、

「破壊の杖」

「「えっ？」」

「ん？」

タバサは、箱に入ってた破壊の杖入りの箱を抱えた。

「「ええーーーーっ!？」」

サイトとキュルケは酷く驚いた。

「あつけなく見つかったな…」

「確かに箱は同じだけど…」

するとキュルケは中を見ようと箱の鍵を開けた。

その瞬間、

「キャアアアアア!!」

「ルイズ!？」

ルイズの悲鳴が聞こえて、外に出ようとしたら、小屋の屋根が吹き飛んだ。

屋根が無くなったから、空が良く見えるので、ゴーレムが襲ってきた事がすぐに分かった。

「ゴーレム!？」

タバサが真っ先に反応し、杖を振って魔法を放ったが、ゴーレムはびくもしない。

続いてキュルケが、胸に挿した杖を引き抜き、魔法を放ってゴーレムを火炎に包んだが、まったく意に介さない。

「やっぱ無理よ、こんなの!」

キュルケが叫んだ。

「タバサ、シルフィードを呼べ!俺が時間を稼ぐ!」
「分かった。退却」

タバサは口笛を吹き、シルフィードを呼んだ。
するとゴーレムは、殴りかかろうとした。

「喰らえ！メガファイア！！」

アデルは魔法を放ち、殴りかかったゴーレムの手を吹き飛ばした。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

サイトサイド

「やっぱアデルさんてすごい！」

キュルケとタバサがやってもびくともしなかったゴーレムを、こっちに振りおろそうとした腕を吹き飛ばしたアデルさんはすごいと思った。

つてそうだ、ルイズは…いた！

ルイズは逃げようともせず、ゴーレムに魔法を放とうとしていた。

「何やってんだ！？」

ルイズはゴーレムに魔法を放ち、背中の中のほんの一部分しか欠けなかった。

「逃げるルイズ！」

「嫌よ！」

「止める、敵いっこねえだろ！第一魔法なんかまともに！」

ルイズは高らかに言った。

「私は貴族よ！魔法が使える者を貴族と呼ぶんじゃない、敵に後ろを見せない者を貴族と呼ぶのよ！ゼロのルイズなんかじゃないんだから！」

ルイズはまた魔法を放つが、効果はイマイチのようだった。容赦なく振り上げるゴーレムに怯むルイズ。

「あのバカ！」

俺は急いでルイズの下に走った。
間一髪ルイズの救出に成功したサイト。

「邪魔しないで！」

その瞬間、「パンツ」と引つ叩く音がした。
サイトがルイズを引つ叩いた音だった。

「貴族だから何だってんだ！死んだら終わりじゃねえかバカ！」
すると、ルイズは泣き出した。

「だって…いつも…いつも皆から馬鹿にされて…悔しくて…逃げたらまた馬鹿にされるじゃない！「なあおい！？泣くなって…」姫様との約束…守れないし…」

いつの間にかゴーレムの腕がサイト達の所に振り下ろされる。

「ハッ！？」

サイトはルイズを抱えて逃げようとするが、

「（間に合わねえっ！？）」

サイトは死ぬと思ったその時、

「岩石砕き！」

アデルは斧を持って、ゴーレムの腕を叩き割った。

「二人とも下がれ！」

アデルさんが守ってくれた。
するとシルフィードが降りてきた。

「乗って」

タバサがそう言った。

丁度良かった。ルイズを頼むか。

「キュルケ、頼む！」

「しっかりしなさいよ！」

「貴方も」

俺はちらつとアデルさんの方を見た。

アデルさんは一人でゴーレムを相手にしている、あの勇気を俺にも！

「いいから行け！」

「サイト！？」

俺はデルフを抜き、アデルさんの所に近寄った。

「…何で戻って来た？」

「何とかしたくなりましてね」

「？」

悔しいからって泣くなよバカ、何とかしたくなるじゃねえか！

「土つくれが、ナメんなよ！こちとら、ゼロのルイズの、使い魔だつてのお！」

「おい！？」

その時、体が軽く感じた。

「ウオオオオオツ！」

ゴーレムの二の腕を切り裂いた。

「体がすげー軽い！？この感じ…ギーシュと戦った時と、同じ！」

ゴーレムの腕が再生し始めた。

「サイト君、今一度聞く！」

「えっ？」

アデルさんが俺に話しかけてきた。

「サイト君は何故戦う、その理由が聞きたい」

「悔しいからって泣いてる奴がいてな、男ならこの場合、何とかしてあげたくなりませんか？」

アデルさんがどう答えるかは分からないけど、俺が言いたい事は言
ったつもりだ。

「そうか。だったらあいつを倒すぞ、二人でな！」

「！？…はい！」

サイトとアデルはこの時、互いのルーンが輝いていた。

「サイト君、これを渡しとく」

アデルさんは、ナイフを渡してくれた。

「これは？」

「よっす小僧」

「……え？」

今喋った様な？

するとアデルさんは、

「それはインテリジェンス・ナイフのアンダーだ。言ってみれば、
デルフリンガーをナイフにした感じだ」

「そんなのあるんすか…」

「あるんだからここにあんだろうが小僧」

口の悪さはデルフ並だな。

「それは頼めば平民でも魔法が使える代物だから、うまく使えよ」

「えっ！？そうなのか！？」

「まあな」

俺でも魔法が使えるのか！？
近づいて来るゴーレムに気付く二人。

「話は後だ、行くぞ！」

「はいっ！」

「ウオオオオオッ！」

二人が同時に駆け出した

また腕を振り下ろそうとするゴーレムだが、

「アンデリー、俺をゴーレムの上まで飛んでくれ！」

「あいよ！」

アンダリーはサイトにレビテーションをかけ、ゴーレムの真上まで来てた。

「ここでいい、降ろしてくれ」

「あいよ」

アンダリーが魔法を解き、急降下するサイト。

「ウオオオオオッ！」

ゴーレムの腕を叩き斬った後、着地した。

「疾風迅雷！」

アデルさんの早過ぎる槍の突きの連撃で、片足がどんどん削れていった。

俺だって、

「ウオオオオオオッ！」

ゴーレムの殴りかかった腕を切り裂くサイト。

「行くぞ！」

ゴーレムは再生した腕でアデルさんを殴りかかろうとしたが、その腕を足場にして高くジャンプした。そして、

「飛天無双斬！」

急降下での切り付けにより、ゴーレムの腕が吹き飛んだ。でも、尚も再生し続けるゴーレム。

「くそっ、これじゃ負けもしねえけど、勝てもしねえよ。どうすりゃあ……」

「いくら俺でも、あれを片付ける魔法はまだないからな……」

アデルさんもどうしようか悩んでるみたいだ。すると、

「サイト達から離れなさい！」

「ん？…えっ！？」

ルイズが抱えてるアレって…！？

「まさか…破壊の杖って、嘘だろ！？」

信じられなかった、この世界に俺の世界の物があつたなんて。
でも、あれならゴーレムを倒せるかも。

ルイズの方は、破壊の杖をブンブン振り回してた。

「えいつ、えいつ！」

「ルイズー……っ！」

俺とアデルさんは、ルイズの下に駆け寄った。

「えいつ、えいつ！？」

サイトはルイズの持つてる破壊の杖を奪い取った。

「これは魔法の杖なんかじゃねえ！こうやって使っんだ！」

サイトの左手が光った後、安全ピンを引き抜き、リアカバーを出し、
インナーチューブをスライドさせた。

ルイズは不思議がってたがそれどころじゃ無かった。
すぐそこにゴーレムの足が近づいていた。

「伏せてろっ！」

ルイズとアデルは伏せて、サイトは破壊の杖を発射させた。

すると、ゴーレムは大爆発を起こし、崩れていった。

「すごい……」

「なんて威力だ！」

「なんでこんな物が？」

そっ、何で俺の世界にある兵器がここにあるんだ？

- - - - -
- - - - -
- - - - -

アデルサイド

いや、バズーカの威力を間近で見れるとは思わなかったな。

「平民なのに魔法の杖を扱えるなんて、やっぱりあたしのダーリンね！」

あつちは放つところ…。

取り合えずバズーカ砲を持ってつと。
するとタバサは、

「フーケは、どこに？」

「はっ！？ゴーレムがいたって事は、まだこの近くに！」

「それならもうすぐ来るぞ」

「？もうすぐ来るって？」

「決まってるんだろ…」

そしてぐるつと振り返り、そこにいた人物を指差した。
そこにいたのは、ロングビルだった。

「くっ！？」

「ミス・ロングビル？」

「こいつが、土くれのフーケだ」

「「ええっ！！？」」「」

「!？」

俺が指摘した事で、驚愕する皆と、ひどく動揺するロングb…フリーケ。

「わ、私は辺りの偵察に行っていましたのd「だったら何故もつと早く戻ってこなかったのですか？」えっ!？」

「もし本当に偵察に行っていたのなら、あれだけ豪快に音を立てていたのだから、すぐに戻って来る筈だろ？」

「あっ！」

「言われてみれば…」

あんだけドシンドシンしてれば何かあっただろうって思うだろうけど、終わってから来るなんて、まるで今までずっと見てたって事になるからな。

「それにコイツは、今朝の会話だけで自分がフリーケだと言ってる事に気付いていないからな」

「「「えっ!？」」「」」

「はあっ!？」

「どうゆう事？」

さて、朝のセリフで感じた違和感を言おうかな。

「まず一つ、フリーケのサインを見たこいつはこう言っただ。国中の貴族を震え上がらせている大怪盗の仕業と言っていた事だ」

「えっとアデルさん…それでどの辺がフリーケだって解ったんですか？」

サイトが聞いてきた。

「気付かないか？俺が聞いた噂じゃ、貴族の宝を盗みに行ってる盗賊ってくらいにしか聞いていないのに、こいつは国中の貴族を震え上がらせている大怪盗と言ったんだ」

「「あつ！？」」「」

「なるほど」

「それが…どうしたんですか？」

「解らないか？世間じゃ盗賊と言われてるのに、アンタは大怪盗と言ったんだ」

「はっ！？」

「はつきり言つて、フーケは自画自賛だなと思ったよ」

「くっ…」

他にも言うか。

「二つ、アンタは聞き込みで、森の奥の廃屋に出入りする怪しい口ブの男を見かけたと言った事だ」

「えっと…そこはどの辺あたりがですか？」

またサイトが聞いてきた。

「世間の噂では、顔どころか、性別すら解らなかったのにも拘わらず、何故ローブの男だと解ったんだ？それに、今まで神出鬼没の筈のフーケが、そう簡単に情報が入る訳ないだろ」

「「なるほど」」「」

「くっ…」

「三つ、人物像を見せて貰った時だ」

「人物像？私達が見た時は別におかしかった点は無かった筈よ」

ルイズの問いにタバサも頷く。

だがアデルは、

「人物像は別に顔だけでも良かった筈なのに、何で全身が解る様に描いてきたんだ？」

「「「えっ？」」」

「それは、証言を聞いて書いただけで……」

「だったら、何で体の細部の所まで細かく描いたんだ？話を聞いて描いたんなら、もう少しばやけた感じになってる筈なのに」

「「あっ！？」」

「そういえば！」

「あそこまで細かく書いたって事はつまり、鏡なんかで自画像を描いたんだなと思ったよ」

「……………」

もう黙りこんだなフーケ。

「以上から考えて、お前が土くれのフーケだと気付いた訳だ！」

「……はははははっ」

突然笑い出すフーケ。

「なにからなにまで筒抜けだったって事かい？学院のボンクラ共は、まったく疑いもしなかったっていうのに……」

「じゃあ、貴女が本当にフーケだったのか！？」

「ミス・ロングビルがフーケだなんて！？」

「何故こんな事を！？」

驚くルイズ達だった。

「破壊の杖、盗んだはいいいけど、使い方が解らなかったの」

「なるほど、何故こんな回りくどい事をしたのか良く解った」
「どういう事ですかアデルさん？」

サイト…少しは気付いてくれ…。

「つまりフーケは、せつかくのお宝でも使えないんじゃない宝の持ち腐れになる。だから使用方法が解る教師に実演をして貰いたかったが、予想外にも生徒側のルイズ達がしゃしゃり出て来た為に宛が外れたって所だろ？」

「そうさ。魔法学院の教師だったら、使い方を知っててもおかしくないでしょ？あまりにも腰抜け揃いだっただけだね」

「そ、それで…」

「でも、その使い魔君なら出来ると思ったのよ」

「俺？」

「さすがガンダールヴね」

「ガンダールヴ？」

ガンダールヴ…全ての武器を扱いし者、サイトの能力の事を言ったフーケ。

ルイズは当然ガンダールヴの意味が分からないでいた。

「でも、そっちのイーヴァルディ君の所為で何もかもバレるとはね…」

少し意地悪してみるか。

「何だ？これを扱って見たかったのか？」

「ああ、破壊の杖だけあってあの威力、魅力的じゃない」

「そっかい、だったら…」

持ってた破壊の杖を、

「使ってみるか？」

フーケに投げた。

「えっ!？」

「「ええっ!？」」

「!？」

「あ…」

フーケ、ルイズ&キュルケ、タバサ、サイトの順で驚いていた。

「ちょっとアデル!？何破壊の杖を渡してんのよ!？」

「折角有利だったのに、どうゆう神経してるのよ!？」

「アデル…」

「あゝなるほど」

ルイズとキュルケは怒鳴り散らし、タバサは心配そうにアデルを見て、サイトはアデルの意図を呼んだらしい。

そして破壊の杖を拾うフーケ。

「ふふっ、どうゆう考えか知らないけど、随分と馬鹿な事をしたわね」

「へっ、そいつはどうか？」

「強がりと言っちゃって、それじゃあ…さようなら」

そう言って先程サイトがやった様にスイッチを押すフーケに、目をつぶるタバサ、ルイズ、キュルケの三人と、堂々としてるアデルとサイト。

しかし、うんともすんともいわなかった。

「なっ、どうして!？」

その時動いたのは、サイトとアデルだった。

フーケの腹に剣の柄で当てたサイト、後ろ首に手刀をかますアデルにより、フーケは気を失った。

「生憎これは単発式だね。ロケットランチャーっていう、俺の世界の…武器だ!」

「さてと、これで任務完了だな」

サイトとアデルの活躍に啞然とする三人だった。

「それにしてもアデルさん、よくこれが使えないって分かりましたね?」

「なに、君が使った後すぐに捨てただろ?だからあれは使い捨ての道具だと解ったんだ」

「さつきといい、フーケの正体といい、アデルさんて推理力バツグンですね」

「なに、怪しいと思った事は色々と分析できる様にならないと、戦いには生き残れないぞサイト君」

「ははは…」

その後、フーケを捕まえて、学院に帰ったアデル達。

「ふむ…ミス・ロングビルがフーケじゃったとはな…美人だったの
でつい疑いもせずに採用してしまった」

「いったいどこで採用されたんですか?」

「街の居酒屋じゃ。そこでついつい尻を撫でてしまっただけ。怒らな

くてつい採用してしまったのだ」

「それだけですか？」

「おまけに魔法が使えるというのでな」

「死んだ方がいいのでは？」

それにはものすごく同意の女子達だった。

「今思えば、あれも魔法学院に潜り込むためのフーケの手じゃったに違いない。居酒屋でくつろぐ私の前に何度もやってきては、魔法学院学院長は男前で痺れます、などと媚を売りまくる。終いにやお尻を撫でて怒らない。惚れてる、とか思っじやる？なあ？ねえ？」

コルベールは、ついっつかりフーケのその手にやられ、宝物庫の壁の弱点について語ってしまったことを思い出した。

「そ、そうですね！美人はただそれだけで、いけない魔法使いですな！」

「そのとおりじゃ！君はうまいことを言うな！コルベール君！」

アデルとタバサとサイトとルイズとキュルケの5人は呆れて、そんな2人の様子を見つめていた。

「さてと、君たちはよくぞフーケを捕まえ、破壊の杖を取り返してきたくれた」

誇らしげに、ルイズ、キュルケ、タバサの3人が礼をする。

同時にアデルも礼をする。慌ててサイトも礼をした。

「フーケは王室の衛士隊へ引き渡した。そして、破壊の杖は無事に宝物庫に収まった。一件落着じゃ」

オスマン学院長は微笑んだ。

「今日の祝賀会の主役は、君達だ」
「当然ですわ！」

キュルケ…お前んは何もしてないだろ。

「今回の一件は宮廷も高く評価しておる。君達三人に、王室より何らかの褒賞がある」

「王室からの褒賞ですか！？すごい！」

「三人というのは…サイトには？」

「それに…アデルは？」

オスマン学院長は申し訳なさそうに言った。

「残念ながら、彼らは貴族ではないのでな…」

「そうですか…」

「……………」

不服そうなルイズとタバサだった。
するとサイトが、

「別にいいじゃない」

「俺は貴族よりも傭兵の方が性に合うのでな」

「それより、ちょっと聞きたい事があるんですけど」

「俺も用がある」

「…うむ」

タバサが近寄って来た。

「外で待ってる」

「ああ」

そう言つてタバサ達は部屋から出てつた。

部屋にいるのはアデル、サイト、オスマン学院長、コルベール先生の四人だけだつた。

「俺はこつちの世界の人間じゃない。何も解らず、ルイズに召喚されたんです」

「ええっ!？」

「だったら俺も同意見だ。俺は異世界、ヴェルダウムからタバサに召喚されたんだ」

「なんと!？」

「そうなんですか!？」

さつきから驚き過ぎだぞコルベール先生。

あと、俺も別の世界の住人という事でサイトも驚いていた。話を戻して、

「あの破壊の杖は、俺の世界の武器なんです!あれを一体どこから?」

「…なるほど、そうじゃったか」

オスマン学院長が、その時の事を話した。

「破壊の杖は、ある男の形見なんじゃ」

「……」

「もう30年程前になるかのう。森を散策していた私はワイヴァーンに襲われてな、そこを救ってくれたのが、破壊の杖の持ち主の男、

私の命の恩人じゃった。見た事の無い奇妙な格好をしていた。その男は酷い怪我を負っていた、私は彼を学院まで連れて行き手厚く看護したのだが…」

思いだしてうつむくオスマン学院長。

「し、死んだんですか…」

その言葉に頷くオスマン学院長。

「結局何者なのか…どこから来たのか分からなかった。男は破壊の杖を2本持つておつてな、私を救った1本は男と一緒に墓に、もう1本を私が宮廷に献上したんじゃないよ」

「破壊の杖に、そんな曰く^{いわ}があつたとは…」

汗をかきながら言うコルベール先生。

「くそつ、折角帰る手掛かりが出来たと思つたのに…」

心底悔しそうに言うサイト。

さて、次は俺の番かな。正体をバラすか。

「サイト君、話はそこまでかい？」

「…はい」

そう言つて少し下がるサイト。

「君は何の様じゃな？」

「その前に…」

俺は部屋中にディテクトマジックをかけた。

「どうしたんじゃ？」

「ここから先は、ここにいる人達だけの秘密ですからね」

皆が困惑している中、話を進めた。

「はっきりと言います。俺は…」

俺はマフラーの部分を翼に変えた。

「悪魔です」

「なっ！？」

「えっ！？」

「アデルさんが…悪魔！？」

オスマン学院長は険しい顔つきになり、コルベール先生は杖を向けて来て、サイトは驚愕していた。

「言っておくけど、俺は数ヶ月前までは普通の人間だったんですよ」

「…えっ！？」

さて、前にタバサに話した内容を言っかね。

「俺のいた世界、ヴェルダウムは、元々はのどかで静かな世界だったんですが、ある時、魔王ゼノンが俺のいた世界を襲ってきたんだ」

「…魔王！？」

「そしてゼノンは、人間を自分の配下にすべく、ヴェルダウムに呪いをかけたんだ。その呪いは、人間を悪魔に変える呪いなんです」
「なんと！？」

「呪いで悪魔に!？」

「じゃあアデルさんは!？」

「そう、呪われて悪魔になったんだ」

3人は俺の話を聞いて啞然としていた。

「呪いにかかった者は、体が変質して行き、精神が悪魔の様になつて行くんです。俺も、つい最近呪いにかかったんです」

「それでは君は悪魔に!？」

「その筈なんですけど、おかしいんです」

「おかしいとは何じゃ？」

「本当ならもうとくに精神まで悪魔になつてる筈なのに、未だに自我が残っているんです。どうゆうわけか…」

まあ嘘だけどね。

「恐らく…君のルーンに関係しておるのかも知れん」

「ルーンに？」

そう言つて左手を見せる。

「これはワシの憶測何じゃが、そのルーンのおかげで、悪魔化の進行を押さえているのではないかと思うのじゃが…」

「だとしたら、俺はタバサに感謝しないとな」

「そつえばミス・タバサは、この事はご存知なのですか？」

「はい、一応正体をバラしても彼女は、俺を側においてくれたんです。彼女には礼を言わねばなりませんからね」

するとサイトが、

「俺、アデルさんが悪魔だなんて信じられないです！」

「サイト君」

「だって、この世界で初めて優しくしてくれたんです！そんな人が悪魔だなんて考えられません！」

「サイト君……」

「誰が何と言おうと、アデルさんはアデルさんです！」

「……！？」

やべっ、ぐっとときちやったよ。

「ありがとう、サイト君」

「気にしないで下さいアデルさん」「アデルと呼び捨てで構わない」
それじゃあ、アデル！俺の方もサイトと呼んで下さい」

「分かった、サイト」

「うむ、君の事は内密にしておこう」

「私も協力しますぞ」

「……ありがとうございます！」

優しい人達だな本当に……。

それで、その夜……

アルヴィーズの食堂の上の階にあるホールでは、フリッグの舞踏会が催され、着飾った生徒達や教師達で賑わっている。会場には、豪華に盛り付けられた料理がテーブルに並べられ、高級なワインが何本も用意されていた。参加している者達は、一様に楽しげである。ちなみに俺の恰好はシエスタ達に頼んで、給仕の服（フォアサイト眼鏡付き）を着ていた。何人かが俺を見てきたが、気の所為だろうと思った。ドレス姿のタバサは肉と格闘中でしたので、御茶目っぽく言った。

「お嬢様、御飲み物でもお持ちいたしましょうか？」

「……その喋り方止めて」

そしてホールに行き、ふらつきながらも、少しずつマシになりながらも上達していった。

「意外に難しいな…」

「大丈夫、だいぶうまくなってる」

「そ、そうか？」

そしてタバサは、

「学院長と何を話していたの？」

「俺の正体の事を言った」

「！！？」

戸惑ったのか、少しよろけるタバサ。

「どうして！？」

「サイトはこの世界とは違う世界の住人だった、彼が正直に自分の素性を話してくれた事に少し戸惑ってね。俺も正直にしたまでさ」

「そう…」

「でも気にしないでくれタバサ、サイトも学院長もコルベール先生も優しい人達だったよ」

「そう」

だいぶ踊りが様になって来た。

そっぴやそのドレスは確か…、

「そっぴやまだ言ってなかったな」

「？」

「綺麗だよタバサ、そのドレス」

「！！！？」

タバサの顔が赤くなってきてるのが分かる。

「母様のお下がりの」

「母親か…」

俺の力で治せないかな、タバサのお母さんの病の事。

その後、伝書フクロウが来るまで、タバサとアデルは踊り続けていた。

ガンダールヴとイーヴァルディ（後書き）

アングラーはサイトに預けたままになってしまいました。

タバサの冒険 ギャンブラー編（前書き）

サイトとルイズ、アデルとタバサが良い雰囲気になった後からスタートです。

タバサの冒険 ギャンブラー編

「さてつと、踊り終わったから、何か食べるかタバサ？」

タバサはコクリと頷いた。

その時、一羽の伝書フクロウが飛び込んできた。

すると、真っ直ぐタバサの方に行き、肩に止まった。

「タバサ、また指令か？」

タバサはコクリと頷いた。

すぐにリュティスに向かう前に自室へと戻り、タバサと俺は杖を持ち、出立した。

格好はタバサはドレス、俺は給仕の格好（＋フォアサイト）でいた。シルフィードに乗ってすぐにプチ・トロワについた。

謁見室に入ると、イザベラはなにやらほくそ笑んでいた。

「珍しく着飾っているじゃないの」

取り合えず仕事内容が書かれた書簡を貰って出て行こうとしたら、

「お待ち」

イザベラに待ったがかかった。

「随分と良い物を着てるじゃない？こんな物を買えるほど手当を貰ってない筈、盗んだんじゃないだろうね？」

「母様のおさがり」

タバサがそう言い、一瞬怯むイザベラ。

その後イザベラが賭けをしようとするが、タバサが断り、安心したようにタバサを馬鹿にした。

そして、タバサの威圧感に後ずさるイザベラを見て、ザマ見ろと思つた。

次の任務の内容は、ベルクート街に賭博場があり、ほとんどの貴族から金を巻き上げていて、取り潰そうとしても恥をかく貴族が大勢いて、表向きな取り締まりは出来ないとの事。

そこでタバサと俺で正攻法に潰して来いとの事だという。

「今回は怪物や亜人を相手にするのは勝手が違うよ。ちょっとやそつと戦いが上手だからって、どうにもならないよ」

そしてイザベラは、タバサの足元に、金貨の入った軍資金を投げた。

「ほら、軍資金だ」

タバサはそれを無表情のまま拾った。

「賭博場で、お前はド・サリヴァン伯爵家の次女、マルグリットと名乗りな。いいね？」

偽名のタバサに更に偽名って…。

取り合えずタバサ達は、首都リュティスの北東側の、リュティス市立劇場を中心に、四方に繁華街が伸びていた。

その北西にあるベルクート街は、貴族や上級市民達がやってくる高級店が多くあった。

そこに、一風変わった出で立ちの主従がいた。

「お姉さま、とっても可愛い！お兄さまもカッコイイ！なんだかし

ルフィも嬉しい！きゅい！」

「俺の格好…カッコイイのか？」

執事風の服でカッコイイって…すごく微妙なだけだな。

ちなみに今のタバサの格好は、最近貴婦人に人気な男装服で、シルフィードは、メイドの服、俺は執事風の燕尾服だ。

確かにこれなら貴族の娘と、そのお付きの侍女と執事に見えるな。

「でお姉さま、今度の任務は何なの？街中でこんな格好をするって事は、荒っぽい任務じゃないのね。きゅい！」

シルフィードは、嬉しげに歌い出した。

「という事は…」怪我もしない…」嬉しい…」おいしい…」る、るーるーるー」

「うるさい！」

「だって暇なんだもの。おまけに、こんな窮屈な服を着せてからにシルフィに歌わせたくなかったら、きちんと今回の任務を説明するのね！きゅい！」

「貴女には、理解できない」

「そう言っくなよタバサ。シルフィード、今回の任務は頭脳戦だから、俺達の出番はあんま無いって事だから」

「そうなのね。お兄さまは解りやすいのね。きゅい！」

その後タバサは、無言でシルフィードを杖で叩いた。
そして、ある宝石店に辿り着いた。

「うわあ！とっても綺麗なのね！シルフィも欲しいのね！きゅいきゅい」

「後にしてくれ」

店の中はたくさんの魔法で加工された一体型のガラスケースに収められた宝石がたくさん並んでた。

するとタバサは、いつの間にかじつとブルーダイヤモンドを見つめていた。すると店員が駆け寄ってきた。

「いらっしやいませ。お嬢様、今日は何をお探しですか？」

タバサはショーウィンドウの中のブルーダイヤモンドを指差した。

「これ」

「お嬢様、失礼とは存じますが、その宝石は売り物ではございません」

「これが欲しい」

「二千万エキューは致しますが…」

宝石一個でそれは高過ぎだろ…。

「買った」

「では、手付けを頂きますが…」

タバサは無言で銅貨を3枚取り出し、渡した。普通ならフザケルナって言われかねないが…。

「確かに頂きました。では、こちらへ…」

店員はにっこりと笑みを浮かべると、先に立って歩き出した。カーテンで仕切られた奥の間に入り、大きな棚の横に付いた紐を引っ張っぱり、ずるずると棚が横へとずれて行き、大きな扉が現れた。

「どつぞ」

店員はその扉を開き、中には地下への階段があった。しばらく進むとカウンターがあり、黒服の執事が立っていた。タバサに恭しい態度で告げた。

「貴族のお客様でいらっしゃいますか。では、こちらで杖をお預かり致します。お連れの者もお預かり致します」

タバサとアデルは杖を渡した。

シルフィードは、アデルがいれば大丈夫だろうと思っていた為、不安になってなかった。

ドアマンがドアを開くと、中から色々出てきた。

「地下の社交場、天国へようこそ！」

きわどい衣装に身を包んだ女性が入り口をくぐったタバサと俺にしな垂れかかって来た。

ちなみにタバサは2〜3人、俺は5〜6人程来た。つか何で俺の所に来る！？ほらタバサがすごく睨んで来てますから！？

アデルの顔は凜々しくて男らしい顔をしているので、媚を売る女達は黙っていなかった事をアデルは気付かないでいた。

「この方は女性だ」

アデルは空気を読まずに、タバサにしな垂れてる女性達を引っ込めた。代わりにアデルの方に来た。当然タバサはアデルを睨み続けていた。

何故全部こっちに来るんだ！？

すると、でっぴり太った人物が来た。

「当カジノの支配人である、ギルモアです」

オーク
猪人族並のオッサンだな。

タバサは辺りを見回していると、オッサンが喋って来た。

「どうしてこんな地下にカジノを作ったのだ？と言った顔をされますな。いやなに、こんな商売をしているうちに、顔色で思っていることが分かるようになりましてな」

誰もそこまで聞いてないっての。

「安心が第一の当カジノゆえ、慎重を期す為に、お名前を伺っております」

「ド・サリヴァン家の次女、マルグリット」

「ありがとうございます。マルグリットお嬢様、今日はどのようなゲームでお遊びですかな？」

タバサはカジノを見渡し、一つのゲームを指差した。

「あれ」

サイコロを使った賭博。

確かサイコロ賭博って、10以下が小で、11以上が大だったな確か。つかスロットゲーム以外は全部日本のと共通してんじゃねえの？タバサは貰った金貨をチップに変えて挑んだ。

俺はフォアサイトを悪魔の力で発動し、数秒先の未来を見た。

見えた未来は、小、と見えた。

俺はタバサの耳元で呟いた。

「タバサ、出るのは小だ」

「分かった」

タバサはチップ一枚で張った。

「そんなちみつこく張らないのね。もっとこつ、どばーつと張るのね」

タバサは無視した。

そして出た目は、三、一、四、会わせて八。小だったのでタバサの勝ち。

「きゅい！勝ったのねお姉さま！でも少ないのね。次はもっとどーんと張るのね」

またタバサは無視して挑んだ。

次は大だから、タバサに報告して、また勝った。するとディーラーがイチャモン付けて来た。

「申し訳ございませんが、ご指摘するのは控えて貰いませんか？」

と言われて、タバサの方を見て確認を取ろうとした。

「貴方は別の所で好きにしていいい」

と言われ、タバサから離れた。

アデルが向かったのは、ルーレットだった。

ルーレットは全部で、0～36まであり、それぞれ赤と黒が不規則に付けられてあり、赤か黒か、偶数か奇数か、1～12か13～24か25～36、1～18か19～36の位置にチップを置いて張

る。

確か配当分は、一ヶ所だけなら36倍で、色だけなら2倍等だったな。

「やってみるか」

ルーレットの台に近づき、フォアサイトを展開し、何が出るか未来を見た。

赤の9が見えたから、そこに20枚程張ろうとしたが、それで怪しまれると厄介なので、赤に張った。ちなみに俺の金は、既に換金済みだ。

赤の9に入り、倍の40エキューをゲットした。

その後は色でかなり稼ぎ、一点狙いで多く張ったらスって、また色で取り返して、一点狙ったら当たったを繰り返して数時間、合計一万エキュー程稼いだので、タバサの所に戻った。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

タバササイド

アデルが離れた後、私はサイコロを続けた。

14回程ワザと捨てて、15回目辺りでやっと法則が解ったから、巻き返した。

「お姉さますごい！きゅいきゅい！」

そのままちびちびと行い、解った奴は大きく張り続けて、チップを

増やしていった。

数時間後、途中シルフィードも参加したがあつと言う間に入った。それでもタバサのチップは数千エキュ程貯まった。

「タブ…マルグリットお嬢様、そちらはどうでしょうか？」

アデルが来た。アデルも稼いできたみたいだ。

アデルが稼いだ額を聞いたら驚いた。一万も稼いだというのだ。そんな中、一人の男がやってくる。

「お嬢さん、すごいじゃないですか。何かお飲みになりますか？」

周りの貴婦人達が、不満の声を上げる。

「お客様お相手係のトマと申します。どうかお見知りおきを…」

「お姉さま、この男、お姉さまに色目を使ってるのね」

「色目を使っているわけじゃありませんよ」

トマはにっこりと笑う。

「このお嬢様に妙に惹かれるものを感じて、お近づきになりたいと思っただ次第」

タバサは短く注文する。

「スパークリング・ワイン」

かしこまりました、とトマは去っていく。

「お姉さま！」

シルフィがタバサの頭をかき抱き、ぶんぶんと振った。

「今日という今日は、このシルフィ言わせていただきます。確かにシルフィはお姉さまに恋人を作れなんていったのね。ですから、男性に興味をお持ちになったのも理解できます。むしろ喜ばしい！でもね？あの男は駄目なのね！何かいけない香りがぶんぶんするのね！あんなのよりもお兄さまがいるのね！強いし、凛々しいし、優しいし、性格が合ってるのね！お兄さまならお姉さまを幸せに出来るのね！」

どうやらシルフィードは、自分が気に入った異性しかタバサに近づけるつもりは無いようだ。

シルフィードに言われ、顔が赤くなるのが分かるくらい恥ずかしがつてるタバサ。

だがアデルは、

「俺なんかよりも、もっと相応しい相手がいるさ」

アデルがそう言ったら、自分の中にある何かが哀しくなってきた。

私は…アデルの相手には出来ないのだろうか…。

タバサはそう思っていたら、

「そんな事無いのね！お兄さま以外、お姉さまに相応しい相手はいないのね！」

「そう言われてもなあ、俺は悪魔だs「そんな事関係無いのね！」ええっ！？」

「素敵な人同士が愛し合うのに種族なんて関係ないのね！」

シルフィードは力強くそう言った。

アデルは照れ始めていた。

それと同時にタバサも、少し顔が赤くなっていた。

- - - - -

アデルサイド

シルフィードに言われて、思わず照れちゃったじゃないか!?

タバサはこの先、サイトとくっつくんだから、俺なんかとは...でも、タバサの事を想うと、なんでこんなにドキドキするんだ?

アデルは、タバサへの感情に気付いて無かった
その時、

「どうなっているんだ!このワシをバカにするのも大概にしろ!」

店内の視線が一斉にそちらを向く。

「どうなさいました?旦那さま」

ギルモアが、にやかな笑みを浮かべてやってくる。

「どうなさった、だど?あの場面で、フォー・ファイアが揃うなんて出来過ぎもいい所だ!イカサマだ!」

多分、スペードのエースのフォーカード辺りの事を言ってるのかな?

「これはこれは、言いがかりと申すもの。ご存知の通り、当店は貴

族のお客様が来店された際には、必ず杖をお預かりする規則になっております。魔法を使われたら、こんなちっぽけな店は一発で潰れてしまいますからな！しかしながら、それは我々も同じ条件。見ての通り、杖を持ったディーラー、シューターはどこにもおりませぬ。なんなら、ディテクトマジックをお使いになられても結構ですよ」「ぬぬぬ…では、魔法を使わないイカサマであろう！」「カードを切り、配つたのは貴方様でございます。直接ディーラーとやり取りする賭博では、公平さと、当店の誠実さを示す為に、そうさせて頂いてるのですが…」

低姿勢だが、どこか小馬鹿にしたような口調だった。貴族の客は大口で出口に消えて行った。

「お騒がせして、大変申し訳ございません」

周りに頭を下げるギルモアだが、先程の貴族が杖を持って現れた。

「この、平民風情が…貴族をナメくさりおつて！」

ゲームに興じていた客達が悲鳴を上げて逃げ惑う。火の玉がギルモアを襲った。

しかしすばやい影がギルモアを抱えて転がった。

「トマ！」

「貴様！」

火の玉はもう一発放たれた。トマはかわし、その火の玉はこっちに来た。タバサに向かって…、

「タバサっ！」

アデルは咄嗟にタバサを押し倒して、火の玉を避けた。

「貴様！ハアアッ！！」

「ガハッ！？」

アデルは、火の玉を放った貴族を蹴っ飛ばした（骨折しない程度に）。

この時タバサは、顔には出て無いが、ものすごく恥ずかしがっていた。

貴族の方はトマが説得した様だ。

すると、ギルモアが近づいてきた。

「いやはや、ありがとうございます」

「いや、大切なマルグリットお嬢様に怪我させようとしたのですから」

貴族の客は苦い顔を、平民の客は拍手を飛ばしていた。

夜もふけた頃、俺はまた稼ぎに他の所に行った。

フォアサイトを駆使して未来を見まくったから、勝ちまくった。

バカラ、ブラックジャック等で稼いだので、更に二万エキュール稼いだ。

タバサの所に戻ると、タバサは二千エキュール程張っていた。

当たった為にシューターはがっくりと落ち込んでいた。

するとそこに、ギルモアが揉み手をしながらやってきた。

「お嬢様にお連れの方…これはこれは大変な大勝でございますな。さて、そろそろ夜もふけてまいりましたが…」

どうやらタバサとアデルは店の予想以上の大勝したようだな。

勝ち逃げは困るという事か。

「続ける」

ギヤラリーから再びどよめきが起こる。指をぱちんとならし、シューターがほつとしたような顔になり、ぺこりと頭を下げてテーブルから離れて奥へと消えていく。

「さて、そろそろ小さな賭け額にも飽きた頃ではございませんか？」

タバサは頷いた。

だが、空気の読めないシルフィードがきゅいきゅい喚いた。

「お姉さま！勝負は引き際が肝心なのね！きゅい！」

「そうですね！お嬢様、もう充分稼ぎましたでしょう」

ワザと執事風に接するアデル。

「おやおや、お連れさまは乗り気ではないようですね…どうなされます？」

「きゅい…い…い…！お肉どんだけ買えると思ってるのね！」

「続ける」

タバサはただ単に告げる。

「落ち着け、シルフィード。肉なら俺が買ってやる」

「ありがとなのね！きゅいきゅい！やっぱお姉さまにはアデルがいいのね！きゅいきゅい！」

「おやおや、二人とも少し顔が赤くなりましたな。ハハハハハ！」

「それより少し休みたい」

タバサ達は、豪華な別室に入れられた。どうやら勝ちまくった客を引き留める為の部屋らしい。

「全く…勝ってるうちが華だというのね。ああ、こんなお部屋に釣られて、勝った分をそっくり吐き出すのがせきのやまなのね！きゅい！」

タバサは本から顔を離さず、

「勝ちに来た訳じゃない」

「負ける勝負なんかしちゃ駄目なのね！」

「シルフィード、俺が説明する」

周りに注意してシルフィードの耳元で説明した。一応納得してくれた。

「なるほど。でお姉さまは、さっそくその切っ掛けを見つけたって訳ね？」

タバサはふるふると首を横に振った。

「俺は多分だけ解ったぞ」

タバサが驚愕の目で見ってくる。
結果は解ってるからな。

「今回はシルフィードが役に立つ番だからな、俺はシルフィードと動く事にする。勝負はなるべく長引かせておいてくれ。シルフィー

ド、一度外に出てみる」

そう言つてシルフィードは外に出た後、戻つて来た。

「何か変な声が聞こえるのね!」

「という事だ。多分それが原因だ。じゃあ行つて来る。気を付けてな」

「うん」

ドアを開き、外に出た。

するとアデルは、タバサに忠告をした。

「そうそうタバサ、熱くなり過ぎて全部スらない様にな。じゃないと服まで賭けなくちゃいけなくなるからな」

「!?!」

そう言つてアデルは出て行つた後、タバサは顔を赤くしていた。

精霊の杖を持ってないから、シルフィードが頑張つて貰わないとな。

「きゅい、ここなのね!」

その部屋に入ると、そこには、イタチの子供に近い動物が籠の中に囚われていた。

「きゅい!?!これエコーなのね!?!偉大なる古代の幻獣なのね!?!」

「エコー?」

一応知らない事にした。

「きゅい、精霊の力で姿を変えられるのね!」

「イカサマの正体は、この子の親って事か」

「きゅい！こんな可愛いエコーの子供を利用して、大人のエコーに言う事をきかせるなんて、許せないのね！」

「そうと解ればこの子を解放して、ギルモア達を締め上げてやるぜ！」

「きゅい！」

急いで会場に戻るアデルとシルフィード。

到着して丁度タバサが席に着いた様だ。

そうだ、エコーに協力しよう。

「なあシルフィード、エコー達にタバサを勝ち続ける様に頼んでくれるか？」

「分かったのね！」

シルフィードは俺の考えを理解したみたいだな。

つまり、奴らはエコー達を使えば絶対勝てると考えてるだろうが、エコー達はもう縛れる事は無いので、俺達に協力すると思うから、奴らにはきっちり絞ってやるぜ！

- - - - -
- - - - -
- - - - -

タバササイド

その後、タバサは難なく勝ち続けて連戦連勝になった。

その額は五万エキュー、周りが卒倒し始めた。

何故こんな簡単に勝ち続ける？

タバサは不思議がっていた。

ギルモアと、後ろにいたトーマス（トマ）は困惑していた。

「なっ！？貴様！どんなイカサマをしたのだ！？」

タバサは答え様が無かった。自分でも解らないのだから。
するとそこに、

「教えてやろうか？」

その場にいた全員がアデルの方に向いた。
アデルはまた何かしてくれたのだろうか？

「アンタらが使ってたイカサマを利用しただけだ！」

「なっ、何を言うか！？我々がいつイカサマを…」「これを見るのね
！」

シルフィードが、何かを抱えていた。

それを見たギルモアが叫んだ。

「き、貴様！それをどこで！？」

「あんも」ある廊下を歩いてたら物音が聞こえてね、そこを覗いたらこの子がいた訳だ」きゅいゝ…」

シルフィードは、自分が言おうとした事をアデルに遮られて、ちよつと膨れてた。

すると、タバサとギルモアが持っていたカードが、一斉にイタチの様な姿に変わった。

「これはエコー！偉大なる古代の幻獣なのね！そのエコーの持つ精

霊の力を利用して、あくどい金稼ぎの片棒を担がせるなんて、大いなる意思への侮辱も甚だしいのね！」

なるほど。カード自体が先住魔法で変化して絵柄を変えていた訳か。誰も解らない筈ね。

シルフィードが散々文句を言った後、周りにいた客達は殺到した。

「こいつめ！騙しやがって！」

「吊るし上げる！」

外からたくさんの野次が飛ぶ。しかし、そんな野次の前にトーマスが立ち塞がる。

「ギルモア様に手出しは許さん！」

言った瞬間に煙球を投げた。

後を追いかける為に杖を持ち、逃げた場所へと進んだ。後ろにはアデルがついて来てた。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

アデルサイド

俺達は先回りして、ギルモア達を追いつめた。

「お嬢さま…と執事か」

出て来たな。

「どうして、この抜け道が御分かりになったのですか？」

「風を辿った」

事もなげに言った。タバサはすつと手を突き出した。

「シレ銀行の鍵」

金を引き出し、分配せねばならないからだ。その言葉で、ギルモアは何かに気づき、頭を地面に擦り付けた。

「あなたさまは、もしや政府のお役人ですか？そうならば、どうかお見逃しくださいませ！我らは義賊で……」

「だったら何故、お前は私腹を肥やす暮らしをしているんだ？大方、全部自分の懐に入れてるだけだろ」

俺はコイツの事を知ってるから確信持って言えるからな。
するとギルモアは、小型拳銃を取り出して叫んだ。

「当たり前だ！誰が溜めた金を配るようなマネをすと思ってる
！トマ！こいつらをやってしまえ！」

本性現したギルモアの叫びにトーマスは、切なげな表情を浮かべた
後…ギルモアを守るように前に出た。

「トーマス」

タバサは叛意を促す様に、トーマスの名前を呼んだ。しかし、トーマスは首を横に振った。

「分かっておりました…それでも、彼は…ギルモア様は…行く所の無かった私を拾ってくれた恩人なのです」

それからトーマスは、悔しげな顔でタバサを睨んだ。

「お嬢さまは王政府の人間ですか？」

一瞬の間のち、タバサは頷いた。

「何故ですか？どうしてお嬢さまは…お父上をお殺めになった王政府に協力するのですか？わたくしには、そちらの方が理解出来ませぬ。貴族では無いわたくしには、お嬢さまのお考えが解りかねます。シャルロットお嬢さま…どうして」

「私はまだ…シャルロットじゃない」

「まだ？もうじゃなくて？」

すると、トーマスが仕掛けようとするが、アデルはタバサの前に出た。

「タバサ、こいつは俺に任せろ」

「…気を付けて」

「貴方は何者ですか？貴方はただのお嬢さまの付き人では無い事は分かります。一体…」

「俺はタバサに仕える傭兵だ」

「なるほど、しかもメイジ殺し級の腕前と見ました」

「そりゃ光栄だな」

俺がそう言い終わると、トーマスはナイフを投げて来たが、俺には通じず全て受け止めた。が、それはフェイントだった。

トーマスはまた煙球を使い、辺りを白煙だらけにした。
しかし、フォアサイトを装備している今の俺には、どこから来るかはつきり見えているぜ！

トーマスが飛び掛かる場所に移動したアデル。

動こうとしたトーマスは驚愕して咄嗟に剣を取り出して切りかかるが、ピンポイントバリアを手に纏い、殴り付けた事で剣は大破した。

「なっ！？」

「三連撃！」

トーマスが怯んでる隙に三発叩きこむアデル。

「がはっ！？なるほど…お嬢さまが信頼なさってる訳だ…」

そう言っただけで倒れるトーマス。

それを見てタバサは、悲しそうに目をつむった。

ギルモアから貸し金庫の鍵を取り上げたタバサは、魔法で眠らせたトーマスとギルモアを街の外れにある宿屋へ預けた。

別に捕縛しろとは命令を受けていないからだ。タバサ達は宮殿に出頭し、任務を終了させた。

俺は別行動をとる事にした。儲けた二万エキユーを持ってある場所に向かい、買い物を済ませた後、タバサ達と合流した。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

タバササイド

「しかし、あいつら許せないのね！シルフィの遠い遠い親戚みたいな仲間達を使ってひどい事をするのね！と言つかお兄さま、どこに行っていたのね？」

「ああ、宝石店さ。はい、二人とも」

そう言つてアデルは、私とシルフィードに宝石を渡してくれた。

「珍しかったんでね。タバサには指輪、シルフィードには角飾りを買ってきたんだ」

指輪！？アデルが！？私に！？指輪！？これって！？婚約！？

思考が熱くなつてゐるタバサ。

いや、多分日頃のお礼だろう。

思考の一部が冷えていくタバサ。

そして、指輪をよく見ると、

「！？」

アデル…貴方は…

タバサは照れていた。

その指輪は、ダイヤモンドだからだ。

前にキュルケが見せてくれた宝石についての本の中で、ダイヤの意味は、永遠の絆を意味していた。

まさかアデルは…本当に…。

タバサは赤くなつてもじもじしていた。

「きゅい！やるのねお兄さま！シルフィのは？」

「ああ、待つてな。今付けるからよ」

そう言つてアデルは、シルフィードの角部分に付けた。

「きゅい、可愛い？お姉さま？お兄さま？」

「ああ、可愛いぞ」

「きゅいきゅい」

シルフィードの宝石を見たところ、オパールだった。

アデルは本当に宝石を理解しているのかと思ってしまうぐらいだとタバサは思った。

オパールの意味は、無邪気を意味していた。

だとしたら、アデルは…私の事を…す…

「お姉さまも可愛いのね。きゅいきゅい。「ゴン」痛いよね！？褒めたのに！？」

シルフィードに思考を邪魔されて八つ当たりをするタバサだった。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

アデルサイド

一応女の子だから、ダイヤが気に入るかなと思って選び、角飾り用の宝石がオパールのしか無かったから選んだ。

二人とも気に入るかな。

アデルは、タバサを感じた想いに気付いていなかった。

タバサの冒険 ギャンブラー編（後書き）

とことんフラグを立て続けているアデルなのに気付きもしないでいた。

シルフィードとアデルの一日（前書き）

シルフィードの一日にアデルを入れただけです。

シルフィードとアデルの一日

朝、いつもの様にタバサを一度起こした後、鍛錬に行った。
フーケの事とかで一氣にレベルが上がっていた。

拳技・獅子王波

剣技・暗黒剣Xの字斬り

槍技・酷刺無槍

弓技・ライデンミサイル

銃技・土竜弾

斧技・ブーメランアクス

魔法・ウインド、クール、スターのメガクラス

固有技・飛翔爆炎脚、回転剣の舞

魔法の効果範囲は単体から縦に二つと横に三つ程（縦に三つと横に二つもある）といった感じた。

最近覚えるスピードが早くなってるような？

まあそんな事はどうでもいいとして、鍛錬を続けた。

丁度良い頃合いなので、タバサを起こしに行き、部屋の中でタバサの着替えシーンを逸らしながら待ち、朝食に向かった。

一応俺は平民メイジ扱いなので、厨房の方に向かい、サイトと一緒にメシを食った。

食い終わった後、タバサ達は授業があるので、俺達は自由時間となったから、サイトを誘った。

「なあサイト」

「なんだアデル？」

「良かったら剣の鍛錬に付き合わないか？」

「いいのかアデル！？」

「ああ、君はルーンの力で身体能力が上がってるとはいえ、剣術は素人だ。だから、少しでも様になるようにしてやるぜ」

「ありがとうアデル！じゃあ少し待っててくれ、デルフ持ってくるから！」

その後、サイトに剣術を教えた。

余談だが、アンダリーを預けっぱなしにした事を思い出して返してもらった。アンダリーに文句を言われた。

「きゅいゝ…」

ふとシルフィードをみたら、なにやら哀しそうにため息をついていた。

話し相手になってるキュルケの使い魔のフレイムと、ギーシュの使い魔のヴェルダンデもいた。

何の話をしているのだろうと、アデルは使い魔達に近づいた（精霊の杖を持っているから、動物の音が解ります）。

「どうしたシルフィード、元氣無さそうだが？」

「（あつ、お兄さま…）」

「（よお、悪魔の旦那）」

「（こんにちわ）」

「こんにちわ」

アデルは使い魔達に挨拶をした。

ちなみに使い魔達は、アデルが悪魔だと言っるのは知っている（シルフィード経由で）。

そして、シルフィードが落ち込んでる事情を聞いた。

今朝シルフィードの所に女の子が来てお話（シルフィードはきゅいきゅい言っただけ）してたら、その女の子の親が来て、竜は怖い存在だと言って、女の子を怖がらせたという。

「なるほど、まあ人にとっては竜は脅威に思えるのも無理は無いさ。俺だって悪魔になってなかったら、竜は怖い存在と思い続けていたしな」

「（そうなのかい！？）」

「（そついや悪魔の旦那は元は普通の人間だったんだな）」

「（それでも…仲良くしたいのね…）」

するとフレームは、

「（それは贅沢つてもんさ青いの。近所に住む人間にどう思われたつていいじゃないか。怖がられるのは嫌？贅沢過ぎる！贅沢過ぎるよ！）」

「（そうかな…）」

フレームの意見に落ち込むシルフィード。

「さすがにこの事は本人次第だから、俺からは何も言えないな」

そう思ったアデルだった。

.....

シルフィードサイド

「ふあ~~~~~っ」

シルフィード起床。

「あが…小鳥さんお早うらのね」

鳥たちがシルフィードの口の中に入って行った（食べられに来た訳じゃない）。

「歯のお掃除お願いしまふ」

鳥たちがシルフィードの食べ残しをつんつくしてた。
ふとシルフィードは空を見上げた。

「太陽さん、お早うなのね」

シルフィードはいつも魔法学院の近くの森で暮らしてるのね。

拘った立地は日当たり良好。顔を洗うお池付き。住み心地最高のね！あつ、住処はお兄さまが作ってくれたのね。

お姉さまのお呼びがかかるまで優雅にお昼寝してみたり、池でご飯をしたりしてるのね。

あ、学院でご飯を食べる事もあるのね！食堂の人達は使い魔にも優しいのね。

今日は…お魚が食べたいな。

するとその時、茂みの中から女の子が現れた。

「ん？」

じくじくっと女の子がシルフィードを見つめていた。
だだだだだっ誰！？

シルフィードは驚いていた。

小ちゃくて可愛い…じゃない、どうしてこんな所に…、
シルフィードは慌てていた。

「…竜さん？こゝ、竜さんのおうち？」

シルフィードは慌ててコクコクと頷いた。

「わたしニナっていうの。蛙苺採りに来たんだけど…迷っちゃった」

驚いたの。竜を怖がらない子もいるのね。

「竜さんはお空から来たの？」

コクコクと頷く。

「ニナはねえ、この森の近くの村に住んでるの。竜さんはこれから何をするの？」

口をパクパクと開け閉めした。

「ごはん？竜さんは食べるの？牛？鳥？魚？」

魚の所でコクコクと頷いた。

「ニナもお魚大好き！この間パパね、こゝんな大きいコイを釣ったの！」

ニナは両腕を広げて、どのくらい大きいかを表現した。

「それをオーブンで焼いてん」「ニナ！こんな所にいたのか！」

ニナの親らしき男女が来た。

その二人はシルフィードを見て驚愕した。

「竜が何故こんな所に!？」

やばっ!？

「ママ、パパー。あのね、い'm 駄目じゃない、私たちから離れたら!」ママ?」

父親の方は、持っていた猟銃をシルフィードに向けた。

「いい二ナ、竜は恐ろしい生き物なの!人を食べる事だつてあるんだから!！」

「た…食べるの?」

「本当よ!竜はこの世で一番凶暴なんだから!さあ、暴れ出さないうちに帰りましょう!」

「竜さん…二ナを食べようとしたの?」

ちが…そんな事しないのね!信じてほしいのね!シルフィードは誤解を解こうと手を上げたら、

「キャッ!？」

余計に怖がらせてしまった様だ。

「ほら、行くわよ!」

「うん…」

二ナを連れだす親たち。
ぽつん…と俯くシルフィードは、

「食べないのに…ん？」

足元にあるカバンを見つけた。

「あつ、これ…」

二ナのカバンを村の近くに置いた後、学院で食事をとる事にしたシルフィード。

この事を使い魔仲間のフレイムとヴェルダンデに相談した。

「（それで…君は親切に届けてあげたと）」

「（村の入り口に置いただけなの…）」

「（君は心根は優しい誇り高い韻竜だというのに…凶暴な竜扱いとは哀しいね）」

ギーシュの使い魔のヴェルダンデは同情してた。

「（ごつい顔してるからだろ青いの？）」

「（まつ、ひどい事を言うのね！）」

笑いながらチロチロと炎を噴き出すのは、キュルケの使い魔のフレイム。

「（まあ、人間に嫌われてもいいじゃないか。好かれなくても生きていける）」

「（…問題発言だなあ）」

「（使い魔でいるのが嫌なの？）」

「（嫌なもんか！ご主人様は優しいし、メシにも困らない！俺が前いた火竜山脈なんて、火竜共が威張り散らす地獄の様なモンだった。

そこに比べたら、ここは天国だよ。頼まれたって辞めるつもりはないね！」

フゴフゴと言うフレ임。

「（お前達だってそうだろう？自然の中で生きるって事は、命を守る為に不自由を我慢するって事さ）」

「（そうかな…）」

するとそこにアデルがやってきた。

「どうしたシルフィード、元氣無さそうだが？」

「（あつ、お兄さま…）」

「（よお、悪魔の旦那）」

「（こんにちわ）」

「こんにちわ」

お兄さまはフレ임とヴェルダンデに挨拶をした。

ちなみにフレ임とヴェルダンデは、お兄さまが悪魔だと言つのは知っているのね（シルフィがうつかり）。

そして、シルフィードが落ち込んでる事情をアデルに話した。

「なるほど、まあ人にとっては竜は脅威に思えるのも無理は無いさ。俺だって悪魔になってなかったら、竜は怖い存在と思い続けていたしな」

「（そうなのかい！？）」

「（そっぴや悪魔の旦那は元は普通の人間だったんだな）」

「（それでも…仲良くしたいのね…）」

するとフレ임は、

「（それは贅沢ってもんさ青いの。近所に住む人間にどう思われた
つていいじゃないか。怖がられるのは嫌？贅沢過ぎる！贅沢過ぎる
よ！）」

「（そうかな…）」

フレイムの意見に落ち込むシルフィード。

「さすがにこの事は本人次第だから、俺からは何も言えないな」

アデルはそう言って立ち去った。

数日後、お姉さまとお兄さまを乗せて、シルフィの寢床がある森に
着いた。

「とうちゃく！お姉さまがここに来るのは初めてね」

「俺は前にシルフィードの住処を作った時に来たしな」

「視察…あと声禁止」

「大丈夫ですわ。この辺りに人なんも」あれは…？「きゅい？」

「魚と…手紙か？」

手紙の内容を見る私達。

『竜さんへ、この間は怖がってごめんなさい。カバン届けてくれて
ありがとう。お礼が言いたくて神官さまに手紙を書いてもらいまし
た。ママやパパは竜さんを怖いというけど、わたしはそうじゃない
と思います。お魚はカバンのお礼です。また遊びに行ってもいいで
すか？——二ナ』

するとシルフィードは泣きだした。

「こっ…この間の子なの、う…嬉しいのね……ッッ!!お姉さま、お兄さま、先日お話した子ですわ……!!」

「そう」

「良かったなシルフィード」

シルフィードはきゅおおおんと号泣した。

「しかもこんな立派なお魚…ホクホク焼いて頂くとするのね!」

お兄さまに頼んで焼いてもらったの。

「こんがり焼けたのね」

「シルフィード…ものすごいにやけてるぞ」

「くふふ…嬉し過ぎてにやけちゃうのね!いいお友達になれるかな?」

「なれるんじゃないか?お前の好物を送ってくれたんだから」

「ねえお姉さまm「はむ」ビキヤアアンツ!!?」

折角焼いてくれたお魚を…お姉さまが…

「そっそれ私の……!!!?」

「…お腹が空いてたから」

「せめて一声言えよ…」

シルフィードとアデルの一日（後書き）

ちょっと短めでした。

タバサの冒険 魔法人形編（出番無し）（前書き）

これはかなり手抜きの為短いです。

タバサの冒険 魔法人形編（出番無し）

サイトと鍛錬を続けて早数日、タバサの下にまた伝書フクロウが来た。

しかも内容はタバサ一人で従者は不要と書かれていた。

「どうするタバサ？何だったら影ながらサポートするが？」

「いい、今回は貴方は休んでて」

「分かった」

そう言ってタバサはシルフィードに乗って飛んで行った。

「暇が出来たな」

タバサが戻ってくるまでの約5日間、暇が出来たな。

筋トレでもするか。

それから、サイトの都合が出来た頃に剣術を教えたり、フレイムとヴェルダンデを魔チエンジした。

フレイムは炎の剣。

ヴェルダンデは爪手。

ついでに側にいたモンモランシーの使い魔のロビンも魔チェンジして杖になった。

…これは暇潰しだな。

……… とうか鍛錬以外する事が無いので、それ以外何かないかふらふらしてたら、マルトーさんに頼まれて、そこらの獲物を狩ってきて補充したり、シエスタ達の手伝いをしたり等で、あつと言う間に5日経った。

タバサが帰って来た。任務の内容は、ニートを魔法学院に行かせる事。途中、元北花壇騎士がしゃしゃり出て来たので、タバサが撃退

したという。

「で、結局俺を連れて来るなって理由は？」

「アデルに頼りすぎじゃないのかだって」

「なるほど」

確かにほとんど俺がやってた訳だしな。

さて、そろそろアルビオン攻略の時期かな？

- - - - -
- - - - -
- - - - -

フーケサイド

トリステインの城下町の一角にあるチエルノボーグの監獄では、土くれのフーケがぼんやりとベッドに寝転んで壁を見つめていた。

ここチエルノボーグの監獄は、城下で一番監視と防備が厳重と言われている。

フーケは、散々貴族のお宝を荒らしまわった怪盗だったので、魔法衛士隊に引き渡されるなり、ここにぶち込まれたのだ。

「まったく、かわい女一人閉じ込めるのに、この物々しさはどうなのかしらね？」

苦々しげに呟く。

それからフーケは自分を捕まえた少年達のことを思い出した。

「大したもんじゃないの。あいつらは」

破壊の杖を使いこなした少年と、ゴーレムを圧倒した青年。

しかし、今となってはもう関係ない事だ。

フーケは、眠ろうと思って目を閉じるが、すぐにぱちりと開いた。

フーケが投獄された監獄の上の階から、誰かが降りてくる足音がする。

フーケはベッドから身を起こした。

鉄格子の向こうに、長身の黒マントを纏った人物が現れた。

白い仮面に覆われて顔が見えないが、マントの中から長い魔法の杖が突き出ていることから、どうやらメイジのようだ。

フーケは鼻を鳴らした。

「おや！こんな夜更けにお客さんなんて、珍しいわね」

その人物は鉄格子の向こうに立ったまま、フーケを値踏みするかのよう黙りこくっている。

フーケは、その人物が口封じのために自分を始末しに来た刺客だと当たりをつけた。

「おあいにく。見ての通り、ここには客人をもてなすような気の利いたものはございませんの。でもまあ、茶のみ話をしにきたって顔じゃありませんわね」

すると、男が口を開いた。

「土くれだな？」

「誰がつけたか知らないけど、確かにそう呼ばれているわ」

男は両手を広げて、敵意のないことを示した。

「話をしにきた」

「話？」

怪訝な声で、フーケは言った。

「弁護でもしてくれるっていの？物好きね」

「何なら弁護してやつてもかまわんが。マチルダ・オブ・サウスゴ
ータ」

フーケの顔が蒼白になった。

その名は、かつて捨てた、いや、捨てることを強いられた貴族の名
であった。

「あんた、何者？」

震える声でフーケは尋ねた。

男はその問いには答えずに、笑って言った。

「再びアルビオンに仕える気はないかね？マチルダ」

「まさか！父を殺し、家名を奪った王家に仕える気なんかさらさら
ないわ！」

フーケは、いつもの冷たい態度をかなぐり捨てて怒鳴った。

「勘違いするな。何もアルビオンの王家に仕えろと言っているわけ
ではない。アルビオンの王家は倒れる。近いうちにね」

「如何いう事？」

「革命さ。無能な王家はつぶれる。そして、我々有能な貴族が政を
行なうのだ」

「でも、アンタはトリステインの貴族じゃないの。アルビオンの革

命とやらと、何の関係があるっていうの？」

「我々はハルケギニアの将来を憂い、国境を越えて繋がった貴族の連盟さ。我々に国境はない。ハルケギニアは我々の手で一つとなり、始祖ブリミルの光臨せし『聖地』を取り戻すのだ」

「バカ言っちゃいけないわ」

フーケは薄ら笑いを浮かべた。

「で、その国境を越えた貴族の連盟とやらが、このこそ泥に何の用？」

「我々は優秀なメイジが1人でも多く欲しい。協力してくれないかね？土くれよ」

「夢の絵は、寝てから描くものよ」

フーケは手を振った。

「私は貴族が嫌いだし、ハルケギニアの統一なんかにや興味がないわ。おまけに『聖地』を取り返すだって？エルフに喧嘩売るなんて真っ平ゴメンだね」

男は、腰に下げた長柄の杖に手をかけた。

「土くれよ。お前は選択することができる」

「言ってごらん」

「我々の同志となるか…」

後はフーケが引き取った。

「ここで死ぬか、でしょ？」

「その通りだ。我々の事を知ったからには、生かしてはおけんから

な」

「ほんとに、あんたら貴族ってやつは、困った連中だわ。他人の都合なんか考えないんだからね」

フーケは笑った。

「つまり選択じゃない。強制でしょ？」

男も笑った。

「そうだ」

「だったらはっきり味方になれって言いなさいな。命令も出来ない男は嫌いだわ」

「我々と一緒に来い」

フーケは腕を組むと尋ねた。

「あんたらの貴族の連盟とやらは、なんていうのかしら？」

「味方になるのか？ならないのか？どっちなんだ」

「これから旗を振る組織の名前は、先に聞いておきたいのよ」

男はポケットから鍵を取り出し、鉄格子についた錠前に差し込んで言った。

「レコン・キスタ」

タバサの冒険 魔法人形編（出番無し）（後書き）

すみません。思いつきり怠けました。
後からフーケの部分付けました。

王女の密命依頼（前書き）

ほとんど周りの出番が無いので短いです。

王女の密命依頼

夜、俺がいつもの様に鍛錬していると、誰か来たようだ。まっすぐ女子寮の方に向かうので声をかけた。

「その二人！」

「！？」

「お前達は何者だ、何しに来た？」

あれ？このやりとり、何処かで？

「あつ、アデル様！」

はっ！？この声は…。

「貴方のエトナです！」

「やっぱりお前か！？という事は…」

もう一人のフードが取れると、そこにいたのは、

「お久しぶりですね」

「王女殿下！？」

そうか、とうとうアルビオンに行く日だったんだな。

「申し訳ありませんg「ルイズの所か？」っ！？…はい」

「何の用か知りませんが、早めに済まして下さいね」

「あつ、ありがとうございます！」

そう言つてルイズの部屋の窓まで飛んで行つた。

「さて、あたしも行つてくるかな」

「おう、ん？」

その時、誰かが女子寮の方に向かった。
多分ギーシュだな。

「あつそうそう、この前の…」

まさか！？

「この前の返事をお聞きしたいのですが…」

「さて帰るか…」

「あつ！？お待ちになつてえー！」

それから、王女が戻ってくるまで学院中を逃げ回つた。

翌日、いつもの様に鍛錬に行つたが、門のところにいるサイト、ルイズ、おまけにギーシュがいた。

俺は咄嗟に隠れながら見てると、ヴェルダンデと戯れるルイズに見とれるサイトとギーシュだった。

その直後、突風が舞い、ヴェルダンデを吹き飛ばした。

「ヴェルダンデエエエエツ！！？」

ギーシュが悲痛の叫びを上げた。

出て来たか、ワルド！

すると、少しルイズと話し込んだ後、グリフォンにワルドはルイズと乗り、飛翔した。

サイトとギーシュは馬に乗って走って行つた。

「この後は確かキュルケが、ワルド目当てに追いかけるんだったな。当然シルフィード目当てにタバサの所に行くんだったな」

部屋に戻ると、案の定キュルケがタバサに頼み込んでいた。

「タバサ、キュルケの奴どうしたんだ」

「いつもの発作」

「誰に対して？」

この時はワルドの事を知らないと思うから、知らないフリをした。

「あのねアデル、実はあたし、今朝お髭の似合う素敵な人を見かけたのよ！」

「そ…そう」

「という訳で、ついさっきグリフォンで飛んで行ったからシルフィードで追いかけたいの！ねえお願いタバサ！」

タバサはふうと息を吐きながらシルフィードを呼んだ。

ちなみに装備は、ラハールの剣、ノーブルローズ、精霊の杖、アンダーリィー。

タバサはパジャマ姿だった為、アデルが着替えてからにしろと言いつ、着替えさせてから出発した。

シルフィードに乗って行ったアデル達は、辺りが静かな真夜中になる頃、ようやくサイト達に辿り着いた。

しかもサイト達は、盗賊と戦闘中だった。

タバサとアデルは風の魔法で、崖の上にいた盗賊を吹き飛ばした。

「シルフィード！？」

ルイズが驚きの声を上げた。
そしてシルフィードが地面に着地すると、キュルケが髪をかき上げながら言った。

「お待たせ」

「お待たせじゃないわよっ！何しに来たのよ！」

「助けに来てあげたじゃないの。朝方、窓から見てたらアンタ達が馬に乗って出かけようとしてるもんだから、急いでタバサを叩き起こして後を付けたのよ」

正直迷惑な行動に何も言えないが、当のタバサは気にせず本を読んでいた。

「ツエルプストー。あのねえ、これはお忍びなのよ？」

「お忍び？だったら、そう言いなさいよ。言ってくれなきゃ分からないじゃない。とにかく、感謝しなさいよね。貴女達を襲った連中を、捕まえただから」

どちらかというと、俺とタバサしかしてないんじゃない？

アデルはそう思い、倒れてる盗賊達に近づいた。

どうやらギーシュが尋問している様だ。

「あつ、ミスタ・アルマース。僕はこれからこいつらに尋問するのd「ちなみに聞くが、どうやって尋問するんだ？」えっ？それはちゃんと問い詰めて……」

「それでは適当にはぐらかされるだけだ、俺がやる」

「はあ……」

こいつらはレコン・キスタに雇われてるんだっただな。

実際ギーシュが尋問しても、ただの物取りと言うだけで終わってた

からな。

「さて、お前達は何の目的でこいつらを襲った？」

「フン、金目の物とかありそうだったからだ」

「どうやらただの物取りの様だね」

盗賊の言葉を信じるなよギーシュ。

「問われてホイホイ喋る奴は信用しない性質なんだな。悪いが体で聞かせて貰おうか！」

アデルは躊躇なく盗賊の一人の指を折った。

若干罪悪感はあるが、まあ後で治せばいいか。

「ギヤアアアアアアッ！！？」

「み、ミスタ・アルマース、何を！？」

「考えても見ろギーシュ。こいつらはお前達をメイジだと知ってて襲ったんだ」

「えつと…それが何か？」

「解らないのか？普通何の力も無い平民の盗賊が、魔法を使えるメイジ相手にケンカ売ると思うか？」

「一人いるけど…」

ギーシュはサイトの方を見て言った。

確かにサイトは力の無い平民でメイジ相手にケンカを売ってたけどね。

「サイトの事は置いといて、他にもグリフォンを扱える貴族は魔法衛士隊ぐらいだ。そんな貴族を相手にケンカを売ると思うか？」

「！？そう言われてみれば！？」

「尋問を続けるぞ」

さらに今度は肘を折った。

「ギヤアアアアアアッ！！？」

次に肩を脱臼させた。

「ギヤアアアアアアアッ！！？」

もう片方の腕も同じ様にした。

「ギヤアアアアアアアッ！！？」

悶絶してしまった。

「気を失ったか、まあいい、他にたくさんいるからな」

アデルは盗賊達の方を見た。

すると、盗賊達は怯えていた。

そりゃそうだ。

「じゃあ次は…お前だ」

「ヒッ、言います言います！だから、命だけは助けて下さい！」

「最初からそういえば良いのに」

盗賊が素直に話してくれたおかげで目的が分かった。

その後、盗賊達…傭兵達は縛り付けた後、放置した。

「本当にミスタ・アルマースと戦わなくて良かった…」

ギーシュがそう呟いていたが、どうでもよかったので聞き流した。皆の所に戻ると、何故か怖い物でも見る様な目で見られた。

「多分、先程の尋問が皆に聞こえたのではないでしょうか…」

「？尋問するなら、あれくらいがザラではないのか？」

それを聞いた途端、皆が数歩下がった。

何故だ？

「とにかく、奴等はアルビオンの貴族派に雇われた傭兵で、狙いはルイズ達だという訳だ」

「貴族派の刺客か…どうやら我々の行動が既に知られているという訳か…」

お前がバラしたんだろうが。

「今日の所はラ・ロシエールに一泊して、朝一番の便でアルビオンに渡ろう」

一行はラ・ロシエールに向かった。

その後、ラ・ロシエールで一番上等な宿、『女神の杵』亭に泊まることにした一行は、一階の酒場でくつろいでいた。

そこに、棧橋へ乗船の交渉に行っていたワルドとルイズが帰ってきた。

ワルドは店に着くと、困ったように言った。

「アルビオンに渡る船は明後日にならないと、出ないそうだ」

「急ぎの任務なのに…」

ルイズは唇を尖らせている。

「あたしはアルビオンに行った事がないから分かんないけど、どうして明日は船が出ないの？」

キュルケの方を向いて、ワルドが答えた。

「明日の夜は月が重なるだろう？スヴェルの月夜だ。その翌日の朝、アルビオンが最も、ラ・ロシエールに近づく」

「ふん」

キュルケは相槌をうった。

アデルは体裁の為にタバサに聞いてみた。

「なあタバサ、何でこんな山の中なんだ？見た感じ海なんて無さそうだし、潮の香りだって無いし」

「アルビオンは浮遊大陸だから、空を飛ぶ船じゃないと行けない」

「そ、空に浮いてる方の浮島なのか…」

「そう」

若干呆れ風に言ってみた。

「さて、じゃあ、今日はもう寝よう。部屋を取った」

ワルドは鍵束を机の上に置いた。

「3つ部屋を取った。そして、僕とルイズが同室だ。残りは君たちで好きにしたまえ」

才人はぎょつとして、ワルドの方を向いた。

「婚約者だからな。当然だろう？」

「そんな、ダメよ！まだ私達結婚してるわけじゃないじゃない！」

才人は頷いた。それはいかん！と心の中で怒鳴った。

しかし、ワルドは首を振って、ルイズを見つめた。

「大事な話があるんだ。2人きりで話したい」

結局ワルドに押し切られ、ルイズとワルドの同室が決まった。

最初タバサは、アデルと同席用の部屋をもう一つ取ろうとしたが、さすがにそれはダメと皆が止め、仕方なく止めた様子のタバサだった。

部屋割りには、アデルとサイトとギーシュ、キュルケとタバサとなった。

ちなみにベッドが二つしか無かったので、アデルは椅子で寝ようとしてギーシュに止められたが、一応年長者であるアデルは二人に譲った。

夜になり、しばらくするとサイトが何処かに出かけた。

多分ルイズとワルドの部屋だな。

アデルはサイトの後を追った。

案の定、ルイズとワルドの部屋の外窓に張り付いていた。

「情けねえ」

「黙れ」

「こんな風に芋虫みてえに窓にへばり付いて、惚れた女とその恋人が歓談する様を見て齒噛みをするのが俺の相棒だあ！切なくて涙が出るね」

まあ、気持ちは解らなくもないけどね。

「何やってんだよサイト」

「あ、アデル…」

「よう、旦那も言っただけでいいよ。相棒が娘っ子とその恋人の様子を覗き見してるのを止めるって」

「サイト…人にはモラルと言う物があつてな…」

「いやっ、そんなじゃねえって！？ただ気になっただけで…」

そこに通りかかったのはキュルケとタバサ。

「あら、何やってるの？…覗き？…ダーリンには私がいるじゃない」

そしてサイトに後ろから抱きつく。

するとタバサがアデルに質問して来た。

「何してたの？」

「サイトの様子が気になってね。後を付けたらルイズの部屋を覗いてるサイトを発見したただけだ」

「みつともない」

「グハッ！？」

タバサはサイトを見て言った。

サイトもタバサの一言で、鳩尾に強力なストレートでも喰らったかのように落ち込んだ。

それはさすがにキツイよタバサさん…。

その後は、タバサと一緒に部屋に戻った。

キュルケが帰って来たので自分の部屋に戻った。

タバサは寂しそうな目をしていたが、キュルケに任せる事にした。さて、明日は忙しくなるな。

王女の密命依頼（後書き）

アルビオン編に突入です。

アデルはどう動くか？ウエールズの生存は？

実はもう決めているんだけどね。

港の攻防戦（前書き）

久しぶりに投稿しました。

一応原作通りに進みますが、それだけでは済みません。

港の攻防戦

いつもの様にタバサを起こして（その際キュルケを起こさない様に慎重に会った）から鍛錬に行った。

鍛錬を終えると、暗い顔をしたサイトの姿だった。

そうか、ワルドと戦って自信喪失気味になってるな。

よし、男同士なら少しは慰めになるだろう。

アデルはサイトの所に向かった。

「どうしたサイト？」

「！？アデルか…」

「ほ、本当にどうしたんだサイト、元気無えじゃねえか！？」

「別に…」

「娘っ子の婚約者と戦ってボロ負けしたんだ」

「言っくなよ！」

「ワルドって奴と戦ったのか？分が悪い勝負を挑んだなサイト」

「分が悪いって？」

ああ…奴がレコン・キスタのスパイだって言いてえ。

「考えても見ろ、ワルドはこの国の魔法衛士隊の隊長で、戦闘は慣れてる筈さ。それに比べてサイトは、ルーンの手で常人より強いが、基本は素人だ。戦闘のプロと素人が戦ったって、結果は火を見るより明らかだ」

「……………」

「つまり、戦い始めた奴が戦い慣れた相手に勝つ事はほぼ不可能だ」

「…はつきり言っくなあアデルは…」

「これでも傭兵だからな…でもなサイト、これだけは言っておく」

「？」

「諦めるな！」

「！？」

「諦めたら何をやってもダメな結果になる。しかし、諦めずに前を進めば必ず光が見えて来る！俺みたいにな」

「アデルみたいに？」

うつ、ついノリで言っちゃったよ…。

しょうがない、アドリブで行くか！

「俺だってな、何もかも諦めて完全な悪魔になっちまおうかなって思った時期があったんだ」

「ええっ！？」

「でも、それじゃ逃げてるだけだって思えるようになったのは、昔世話になった忍者の女の子に出会ったからなんだ」

「忍者がいるんだ…アデルの世界にも…」

そこ感心するところかよ！？

「その子には兄がいてな、親や友達も隣人も、皆魔王ゼノンに殺されてな、それで兄は復讐しようと考えたが、その女の子は復讐よりも、兄が共にいれば良いと思ってたんだ」

「どうしてだいその娘っ子は？」

「彼女にとつて家族はその兄しかいなかったから、生きててほしいと思い、兄を捜す為に旅に出てたんだ」

「……………」

「自分だって辛い筈なのに…その子は誰よりも立派に見えたんだ。誰かを思う事がその心が、時に大いなる力を生んだんだ。それに比べて俺は、ただ諦めていただけだったんだなと思い知ったんだ」

「！」

「その子が自分に信念を持つてる様に、自分の中にある確かな何か

を、一生賭けてでも貫き通したいという意志を持つ事が大事なんだと」

「自分の中にある確かな何かを…貫き通す…か…」

咄嗟の言い訳だが、何とかなった様だ。

「アデルは…その何かを見つけたのか？」

「俺か？」

やべっ、どうしよう…そう返してくるか。こうなったら…。

「当時の俺は、その何かを見つける事は出来なかった。でも、この世界に召喚されて、見つける事が出来た」

「それって一体…」

「それは…」

一息入れて…、

「タバサを守る事だ！」

「タバサを？」

「ああ、俺を救ってくれた彼女の為に、俺はタバサの剣となる事を決めたから」

「アデル…」

「それで、サイトはどうするんだ？」

「……強く……」

「ん？」

「強くなりたい！俺はもつと強くなりたい！アデルみたいに、俺にも胸張って誰かを守る様な存在になりたいんだ！」

「良く言った！それでこそ漢だな！」

サイト、これで少しは元気になったかな？
後の頑張りはサイト自身が決める事だしな。
さて、今夜は忙しくなるぞ。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

サイトサイド

アデルが励ましてくれた。
アデルも悩んで苦しんで、そして強くなっただ。
俺もあんな風になりてえな。

「デルフ、悩んでも仕方ねえ！いつかワールドを倒せる様に、特訓するぞ！」

「あ、相棒！？なんか知んねえけど、まっ、元気になったみてえだな」

さっそく俺は、アデルがいつも剣の素振りをしていたから、素振りから始めてみた。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

タバササイド

アデルの帰りが遅いから心配して来てみると、サイトと話をしていた様だ。

「自分だって辛い筈なのに…その子は誰よりも立派に見えたんだ。誰かを想う事がその心が、時に大いなる力を生んだんだ。それに比べて俺は、ただ諦めていただけだったんだなと思い知ったんだ」

「！」

誰かを想う事…それが大いなる力を生む…。

「その子が自分に信念を持つてる様に、自分の中にある確かな何かを、一生賭けてでも貫き通したいという意志を持つ事が大事なんだと」

「自分の中にある確かな何かを…貫き通す…か…」

母様を救いたいと、あの男に復讐する事が、私の意志。

「アデルは…その何かを見つけたのか？」

「俺か？」

アデルの貫きたい事って？

「当時の俺は、その何かを見つける事は出来なかった。でも、この世界に召喚されて、見つける事が出来た」

「それって一体…」

「それは…」

アデルは一呼吸を入れて、そして言った。

「タバサを守る事だ！」

「タバサを？」

！？私を！？

「ああ、俺を救ってくれた彼女の為に、俺はタバサの剣となる事を決めたから」

「アデル…」

ここから先は恥ずかしくなって、その場を去った。

部屋に帰ると、キュルケから「顔が真っ赤よ？」と指摘され、ますます恥ずかしくなった。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

ルイズサイド

サイトがワルドに負けて、どこかに行っちゃったようだけど、相手は魔法衛士隊の隊長なのよ。

いくらルーンの力で多少強くなっても、敵いつこないじゃない。

それにしてもあのバカ犬、どこにいろのよ…。

するとルイズは、素振りをしているサイトを見つけた。

「サイト！」

「ん？ようルイズ」

ようやく見つけた…わ…あれ？

てつきり負けて悔しがってるかと思ったら、何処か清々しいわね？

「どうしたのサイト？」

「何が？」

「だって、アンタさっき、ワールドに負けて悔しかったんじゃない？」

「確かに…でも、いつまでもウジウジしたってしょうがないからな。この悔しさをバネにして、次は勝てる様に強くなるさ」

…何があつたの？

「サイト…デルフちよつと貸して」

「えっ！？でも…」

「いいから貸す！」

ルイズは無理矢理デルフを引っ張った。

サイトから少し離れて、デルフに確認した。

「ちよつとボロ剣！サイトに何があつたの！？」

「さっきまで落ち込んでた相棒の所に、アデルの旦那が来てな。少し話をした後、相棒はあんな風になっちまったんだよ」

「アデルに！？」

あの…タバサの使い魔の傭兵メイジに？

「ルイズー、そろそろデル公返してくれよ」

「えっ、うん…」

デルフを返した後、ルイズの中で釈然としない気持ちが出てた。サイトが元気を出したのに、何か腑に落ちないな。すると、巨大な何かが近づいて来た。

- - - - -

アデルサイド

夜が更けてきた。

今俺達は、レコン・キスタの刺客達に熱烈大歓迎を受けていた。
一階の酒場はちょっとした戦争状態になっていた。

この様子だとサイトの方はフーケが来てるみたいだな。

「キリが無いな」

テーブルをバリケード代わりにして敵の攻撃を防ぎ、ノーブルローズやアンドリーで応戦中のアデルと一緒に応戦するタバサ達。
するとそこにサイト達が駆け寄った。

「参ったね」

「この前の連中以外にもいた訳ね」

「フーケまでいる訳だからな」

「…奴等はちびちびとこつちに魔法を使わせて、精神力が切れた所を見計らい、一斉に突撃してくるわよ。そしたらどうすんの？」

「僕のゴーレムで防いでやる」

「俺が単騎で斬り込む」

「アデルなら出来そうで置いとくとして、ギーシュのゴーレムじゃあ、一個小隊ぐらいが関の山ね。相手は手錬れの傭兵達よ？」

俺なら出来そうって…まあ出来るけど。

「やってみなくちゃ分かん」「ギーシュは無理をするな」ってミスタ・アルマース！？そんなはつきり言わなくても！？」

その後、ワルドの提案で、半数が目的地に向かう班と囃役の班に別ける事となった。

その辺は原作通りだな。今後の為にアレを使つてつと…。

アデルはこっそり精霊の杖である魔法を唱えた。

「今からここで彼女たちが敵を引き付ける。精々派手に暴れて目立つてもらおう。その隙に、僕らは裏口から出て棧橋に向かう。以上だ」「で、でも…」

「ま、仕方ないかなって。あたし達、貴女達が何しにアルビオンに行くのかすら知らないもんね」

「うむむ…ここで死ぬのかな、どうなのかな。死んだら、姫殿下とモンモランシーには会えなくなってしまうな…」

それ以前の問題だと思うけど…。

「行つて」

「でも…」

「これはお前の任務だろ？それに俺達は勝手に付いてきた身だ、ここは任せておけ」

「アデル…すまない…」

サイトが申し訳なさそうにしていた。

「ねえヴァリエール。勘違いしないでね？あんたの為に囃になるんじゃないんだからね」

「わ、分かつてるわよ」

ツンデレ同士の会話だなコレ。
そしてサイト達は棧橋に向かった。

「それじゃおっぱじめるか！あつギーシュ、アングリーを貸しとい
てやる」

「えっ？」

アングリーをギーシュに貸した。

「旦那、こんな小僧に俺を持たせるんで？」

「お前は持つてる奴のレベルを一段階程上げる事が出来るから、ギ
ーシュが持てばラインメイジに昇華出来るだろ？」

「そりゃまあそうだが」

「ミスタ・アルマース！？これを持つてるだけで僕はラインクラス
になっているんですか！？」

「一応」

「便利なナイフね」

んじゃま、暴れてやろうかね！

「それじゃあ、仕掛けるぞ！」

「あつ、ちよつと待ってアデル。貴方は油を錬金して」

「な、何だキュルケ、これからって時に……」

取り合えず言われた通りに油を錬金した。

「というよりキュルケ、君はこんな時に化粧をするのか？」

キュルケは手鏡を覗き込んで化粧を直していた。

「だって歌劇の始まりよ？主演女優がすっぴんじゃ…」

キュルケは、俺がさつき錬金した油に杖を向けた。

「しまらないじゃないの！」

キュルケは、油に火の魔法で引火させて、入口付近は燃えだした。

その炎にびびる傭兵達。

俺は炎を操って傭兵達へと燃え移らせた。

矢が俺とキュルケを狙って来たが、俺はラハールの剣で防ぎ、キュルケの方はタバサが風の魔法で防いでくれた。

「名も無き傭兵の皆様方、あなた方がどうしてあたし達を襲うのか、まったくこちらと存じませんけども…この微熱のキュルケ、謹んでお相手仕りますわ！」

キュルケは名乗り出た。

戦闘シーンはある程度省略。

キュルケが炎を撒き散らし、ギーシュは15体程のゴーレムを作り出して突撃したり、タバサは風で攻撃したり、アデルは突貫して相手の陣地の中心で暴れまわった等をした。
そして敵わないとみたのか、傭兵達が逃げ出した。

「あんまり手応え無かったな」

「アデルじゃそう思うわね」

「……………（コクコク）」

「ともかく、これで僕たちの…」

その時、

ズドン

轟音と共に建物の入り口が無くなった。

「え？」

土埃が晴れると、そこにいたのは巨大ゴーレムだった。

「あちゃあ、忘れてたわ。あの業突く張りのお姉さんがいたんだっけ……」

「調子に乗るんじゃないよ小娘共が！纏めて捻り潰してやるよ！」

ゴーレムの肩に乗ったフーケが怒鳴っていた。

「フーケか…俺が倒してくる」

「ま、待ってくれミスタ・アルマース！僕も一緒に……」

「足手まとい」

「というかアンタが出たら確実にアデルの邪魔になるだけよ」

「な、何を言っただ二人とも！？トリステイン貴族の意地と、僕が男である為に、そしてこのギーシュ・ド・グラモンが姫殿下の名誉の為に薔薇と散らせてくれ！」

早死にするタイプだなこいつ…。

「…貴方って…戦場で真っ先に死ぬタイプなのね……」

代弁ありがとうございます。

するとタバサはギーシュに近づいた。

「何だね？」

「薔薇」

「「？」」

「花卉たくさん」

「花卉が一体……」

「タバサの事だから何か手はあるみたいだな。ギーシュ、やってくれ」

「はっ、はい！？」

ギーシュの魔法で、大量の花弁がゴーレムに纏わり付いた。

「なるほど、その手があったか！」

「？どうゆう事？」

「花卉をゴーレムに塗した事が一体？」

「錬金」

タバサが言った。

ギーシュは「はっ！」とタバサの意図を理解し、花卉を油に錬金した。

そこにキュルケがささず炎を出し、油まみれのゴーレムは業火に包まれた。

そして、ゴーレムは音を立てて崩壊した。

「やったわ！勝ったわあたし達！」

「ぼ、僕の錬金で勝ちました！父上！姫殿下！ギーシュは勝ちましたよ！」

「タバサの作戦で勝ったんじゃないの！」

「俺の出番が無かったな。皆もレベルアップしてるって事が」

「……………（コクコク）」

すると、焼けてボロボロになったフーケがすごい形相で立った。

「よ、よくもあんたら…二度までもこのフーケに土を付けたわね…」

俺は直ぐに構えた。

するとキュルケは、

「あら、素敵な化粧じゃないおばさん？貴女にはそのぐらい派手な化粧が似合ってよ？なにせ年だしね」

その瞬間、「ピキリ」と何かに亀裂が走った音が聞こえた。
するとフーケは、真っ直ぐキュルケに向かった。

「年ですって小娘が！私はまだ23よ！！」

年寄り呼ばわりされてキレたフーケは、キュルケと殴り合いになった。

「……止めなくて良いのかなアレ？」

「どうでもいい」

「…イイ…すごく良い…」

よく見たら、二人とも服が乱れていて危ない感じになっていた。

ふと周りを見たら、さっきの傭兵達が戻って来て、どっちが勝つか賭けていたという。お前らそれで良いのか？

ともかく、こっちの方は片付いたな。

向こうは上手くいってるかな？

港の攻防戦（後書き）

前半臭いセリフがテンコ盛りでした。

アデルがこっそり使ってた魔法が気になる方は次回を待って下さい。

アルピオンで暗躍（前書き）

結構話飛びます。

歌詞の無断転載が来てしまった為に、異界を切り裂け！A・C・E・
（R）の翼に出てる歌を全部消します。

アルピオンで暗躍

ウェールズサイド

いよいよ明日が最後の戦いか。

明日の戦いで私は死ぬだろう。アンには悪い事をしたな。

君が亡命してくれという手紙を貰ったが、私が亡命すればレコン・キスタの連中はこれを口実にトリステインに攻め込むだろう。

そうならない為に、私はここで、華々しく散らなければならない。許してくれ…我が愛しのアンリエッタ…。

「そこまで想っているなら、何故それに応えようとしない？」

「!?誰だ!?」

何者がそこにいた！

赤い髪をした侵入者が杖を向けて来た。

!?

「悪いが、しばらく眠って貰うぞ」

「はっ！？これ……は……」

これは……スリープ・クラウド……だめだ……ねむ……い……。

ウェールズは眠りに落ちた。

すぐ側にいた赤い髪のメイジは不敵に笑った。

[illegible]

サイトサイド

正直言つて、どうかしてるって思う。

王子様は死ぬと分かっているのに逃げもせず、玉碎覚悟で王家の誇りを見せつけ様だなんて、本当にどうかしてるって思うよ。

それにワルドもだ。こんな時にルイズと結婚だなんてそれこそどうかしてるよホントに。

でも、何でルイズも結婚しようと思ったんだろう？それに…何だ？このモヤモヤした気持ちは！？

「だ…も…、何なんだよまったく！」

俺は…ルイズに黙って去ろうと考えている…昨日あれだけ啖呵切つたのに…もう迷ってるよ俺…。

今イーグル号の前まで来ている。

これに乗った後、俺はどこに行けばいいのかな？アデルの所はタバサがいるし、シエスタの所か…でも、何れ地球に帰らないといけなししな…。

その時、サイトの左目に変化が現れた。

「ん？何だ？」

「どうした相棒？」

「さっきから左目が変なんだ」

「疲れてんじゃないのか？」

すると、左目から映像が見えてきた。

「うわ！？何か見える！？」

「何が見えるんだ？相棒」

「これ多分、ルイズの視界だ！」

そういえば何時だったかルイズが、「使い魔は、主人の目となり、耳となる能力を与えられるわ」と言っていた様な…？

でも何で急に見え始めたんだ？それに、この胸騒ぎは一体…。

サイトは船を降りて、結婚式が行われている礼拝堂へと駆け出した。そして何とか辿り着き、礼拝堂の中に入ろうとしたが、

「サイト！助けて！」

それを聞いたサイトは無我夢中で礼拝堂の壁をデルフでぶち抜いた。礼拝堂の中に入ったサイトが目にした物は、今にもルイズを襲おうとしているワルドと、その隣で血を流しながら倒れてるウェールズ王子がいた。

「貴様…」

ワルドは驚いていた。

「てめえ…」

サイトは斬りかかったが、ワルドはかわして下がった。

サイトはちらつとルイズを見たら、失神したのか気絶していた。

「なぜここがわかった？ガンダールヴ」

返事は剣だった。しかしそれを平然とかわすワルド。

「そうか、主人の危機が目映ったか」

サイトがワールドを見据え、剣を構える。

「よくもルイズを騙しやがったな！」

サイトは叫んで、剣を腰だめにして突っ込んだ。

ワールドは飛び、かわす。

そして、優雅に床に着地する。

「目的のためには、手段を選んでおれぬのでね」

「ルイズはてめえを信じてたんだぞ！婚約者のてめえを…幼い頃の憧れだつたてめえを…」

「信じるのは其方の勝手だ」

ワールドは飛びながら剣をかわした。

ワールドはウインド・ブレイクを唱える。

サイトは剣で受け止めようとしたが、剣ごと吹き飛ばされた。壁にぶち当たり、サイトはうめきをあげる。

だが、それでもサイトは立ち上がった。

そんな時、デルFRINGERが叫んだ。

「思い出した！！」

「何だよ、こんな時に！」

「いやあ、俺は昔、お前に握られてたぜ。ガンダールヴ。でも忘れてた。なにせ、今から六千年も昔の話だ」

「昔話なら後にしてくれ！」

サイトはそう言うが、デルFRINGERの言葉は止まらない。

「懐かしいねえ。泣けるねえ。そうかあ、いやあ、なんか懐かしい気がしてたが、そうか。相棒、あのガンダールヴか！」

「いい加減にしろよ！」

サイトは怒鳴る。

「嬉しいねえ！そうこなくっちゃいけねえ！俺もこんな格好してる場合じゃねえ！」

叫ぶなり、デルフリンガーの刀身が輝きだす。

サイトは一瞬呆気に取りられてデルフリンガーを見つめた。

「デルフ？はい？」

再びワルドはウィンド・ブレイクを唱えた。

猛る風が、サイト目掛けて吹きすさぶ。

サイトは咄嗟に、光りだしたデルフリンガーを構えた。

「無駄だ！剣では避けられないと分かっただろうが！」

ワルドが叫んだ。

が、サイトを吹き飛ばすかに思われた風が、デルフリンガーの刀身に吸い込まれる。

そして、デルフリンガーは今まさに研がれたかのように、光り輝いていた。

「デルフ？お前……」

「これがほんとの俺の姿さ！相棒！いやあ、てんで忘れてた！そういや、飽き飽きしてたときに、テメエの体を変えたんだった！なにせ、面白いことはありゃあしねえし、つまらん連中ばかりだったからな！」

「早く言いやがれ！」

「仕方ねえだろ。忘れてたんだから。でも、安心しな相棒。ちゃん魔法は全部、俺が吸い込んでやるよ！このガンダールヴの左腕、デルフリンガー様かな！」

興味深そうに、ワルドはサイトの握った剣を見つめた。

「なるほど、やはりただの剣ではなかったようだな。この私のライトニング・クラウドを軽減させた時に気付くべきだったな」

それでも、ワルドは余裕の態度を失わない。
杖を構えると薄く笑った。

「さて、ではこちらも本気を出そう。何故、風の魔法が最強と呼ばれるのか、その所以を教育いたそう」

サイトは飛びかかったが、ワルドは軽業師のように剣戟をかわしながら、呪文を唱える。

「ユビキタス・デル・ウインデ…」

呪文が完成すると、ワルドの身体はいきなり分身した。
本体と合せて5人のワルドがサイトを取り囲んだ。

「分身かよ！」

「ただの分身ではない。風の偏在^{ユビキタス}。風は偏在する。風の吹くところ、何処となくさ迷い現れ、その距離は意思の力に比例する。しかも、一つ一つが意思と力を持っている」

5人のワルドがサイトに踊りかかる。
更にワルドは呪文を唱え、杖を青白く光らせた。

「杖自体が魔法の渦の中心だ。その剣で吸い込む事は出来ぬ！」

杖が細かく震動している。

回転する空気の渦が、鋭利な切っ先となり、才人の身体を襲う。

剣で、受け、流す。

しかし、相手は5人。

こちらは1人。

少しずつ才人の身体は傷つけられていく。

ワルドは楽しそうに笑った。

「平民にしてはやるではないか。流石は伝説の使い魔といったところか。しかし、やはりはただの骨董品のようだな。風の『偏在』に手も足も出ぬようではな！」

「うるせえ！」

サイトは叫ぶ。

その身体はいたる所に怪我を負っている。

だが、徐々にサイトの動きは速さを増していく。

ワルドたちの息が荒くなる。

こんなはずでは、と思っていたが表情は変わらない。

剣戟を加えながら、ワルドが問う。

「どうして死地に帰ってきた？お前を蔑むルイズの為、どうして命を捨てる？平民の思考は理解できぬな」

「じゃあ何で貴様はルイズを殺そうとした！婚約者だろうがよ！」

サイトは叫んで答えた。

「ほほう、やはりお前はルイズに恋をしていたのか？敵わぬ恋に主

人を抱いたか！滑稽な事だ！あの傲慢なルイズが貴様に振り向く事などありえまいに！ささやかな同情を恋と勘違いしたか？愚か者め！」

「恋なんかしてねえよ！ただ…」

「ただ、何だね？」

「どきどきするんだよ！」

「何だと？」

ワルドは戸惑った表情を浮かべた。

「ああ、顔を見てるとどきどきすんだよ！理由なんかどうだっていい！だからルイズは、俺が守る！」

サイトが叫んだと同時に、ガンダールヴのルーンが強い光を放った。その輝きを受け、デルフリンガーが光る。

「いいぞ！いいぞ相棒！そう！その調子だ！思い出したぜ！俺の知ってるガンダールヴもそうやって力を溜めてた！いいか相棒！ガンダールヴの強さは心の震えで決まる！怒り！悲しみ！愛！喜び！なんだっていい！とにかく心を震わせな、俺のガンダールヴ！」

才人は剣を切り上げた。

物凄いスピードだったので、間合いを読みきれなかったワルドが切り上げられ、消滅した。

「き、貴様…」

残りは3人。

「忘れるな！戦うのは俺じゃねえ！俺はただの道具に過ぎねえ！」

サイトは空中高く飛び上がると、剣を振りかぶった。
ワルドも飛んだ。

「空は風の領域…貫ったぞ！ガンダールヴ！！」

ワルドの杖が、サイトの身体に三方から伸びた。
しかし、サイトは風車のようにデルフリンガーを振り回す。
デルフリンガーが叫んだ。

「戦うのはお前だ、ガンダールヴ！お前の心の震えが、俺を振る！！」

次の瞬間、3人のワルドは閃光が瞬く合間に切り裂かれた。
サイトは着地した。

全ての偏在が切り裂かれ、残った本体のワルドが床に叩き付けられた。

切られた左腕が、一瞬遅れて地面に落ちた。

サイトは地面に着地したが、よろけて膝をついた。
疲労は限界に達している。

ワルドはよろめきながら立ち上がり、サイトを睨んだ。

「くそ…この閃光がよもや後れを取るとは…」

才人は駆け寄ろうとしたが、身体が思うように動かない。

「く…」

「ああ、相棒。無茶をすればそれだけガンダールヴとして動ける時間は減るぜ。なにせ、お前さんは主人の呪文詠唱を守るためだけに生み出された使い魔だからな」

デルフリンガーが説明した。

ワルドは、残った右腕で杖を振り、宙に浮いた。

「まあ、目的の一つが果たせただけで良しとしよう。どの道ここには直ぐに我がレコン・キスタの大群が押し寄せる。愚かな主人共々灰になるがいい！ガンダールヴ！」

その捨て台詞を残して、ワルドは飛び去った。

くそっ！折角ワルドを追っ払ったのに、このままじゃ…。すると、

「良くやったなサイト！」

「「！？」」

サイトは驚愕した。今この場にはルイズ以外人は居ない筈なのに声が聞こえたからだ。

慌てて振り向くと、そこにいたのは…

「な…何で…！？」

ワルドによって殺された筈のウェールズ王子がいた。

「何で死んだ筈の王子様が！？」

「待て待てサイト、今教えるから」

「へっ？」

するとウェールズは、見た事ある杖を出し、呪文を唱えた。

あの杖！？まさか！？

ウェールズは徐々に姿を変え、見覚えのある人物に変わっていった。

「つまりこつゆう事だ」

その人物は…

「アデル！？」

アデルその人だった。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

アデル（遍在）サイド

「悪いが、しばらく眠って貰うぞ」

「はっ！？これ…は…」

ウェールズは眠りに落ちた。

「ふう、後は俺がウェールズに化ければOKだな」

もう分かってると思うが、俺はウェールズの身代わりとしてアデル
が作りだした遍在だ。

アデルはウェールズに変身した。

「さて、ウェールズはイーグル号の貨物室にぶち込んでおけば、死
亡せずに済むな」

アデルサイド

今俺達は、サイト達がいる礼拝堂の真下にいる。

原作通りヴェルダンテが掘って行き、サイト達と合流した。

サイト達を乗せた後、ラ・ロシエールに向かい、貨物室にいたウェールズを連れてトリスティンに向かった。

ウェールズを連れ出した時に騒がれたが、何とか黙らせた。

「どうして皇太子がここに？」

「遍在の俺がここに押し込んだ」

「…何で？」

「死にたがりだったのな、無理矢理気絶させた」

「そう」

タバサの疑問に答えました。

アルピオンで暗躍（後書き）

答えは遍在でウェールズとすり替わっていたという訳でした。それで、ルイズのディスプレイのイベントはどうしようかと悩んでいます。

後、新作を考えているんですが、どれがよろしいですか？
今の所、こんな感じです。

1位 ゼロのロストマジック使い 3票

2位 ブレイブフェンサー才人伝 1票
失われし魔法使い 1票

他 ブレイドマスター才人伝

番長と1/2と音楽の御使い

ラウルとアデルとギアスが真・恋姫無双の世界に！？

バカとテストと天元突破

バカと女装と特殊メイク

詳しくは、フェアリーテイル〜虹の滅竜魔導士〜「運命の出会いの日」特別依頼。気になる彼に注意せよ！」の後書きを見て下さい
2巻分終えました。

宝探してゼロ戦ゲット（前書き）

色々飛んですが、あくまでアデルの話だからその辺よろしく。

宝探してゼロ戦ゲット

王宮に着いた後、ウェールズ王子が駄々こねていたが、アンリエッタ王女と対面したら大人しくなり、そのまま二人の雰囲気になった。俺達はルイズとサイトが戻ってくるまで暇だったが、戻って来て学院へと帰った。

途中ギーシュが落ちたが、どうでもいいのでスルーして、サイトが落ちそうになったからレビテーションでゆっくり降ろした。

数日後、俺はいつもの様にタバサを一度起こした後、鍛錬に行った。魔法・ファイア、ウインドのギガクラス

最近技を覚えるのが遅くなった様な？

学院に戻って来て以来、サイトと一緒に鍛錬する様になった。その時にサイトから聞いた。

「最近ルイズの奴、俺への待遇が良くなってる様な気がしてな」

そろそろサイトに意識し始めたか。

また数日後…ってか、最近任務の方も来ないな？

サイトと一緒に五右衛門風呂っぽい風呂を作った。

「すみません、手伝って貰っちゃって」

「いいよ、俺もそろそろ風呂入りたかったし」

「アデルも風呂好きなんですか？」

「ああ、主に筋トレの後や戦闘の後によく入っていたからね」

「そうですか」

元日本人としてちょっと譲れない所でもあるからね。

風呂は交代で入る事にした。

俺はいつもの鍛錬を終えたら入るつもりだったので、サイトを先に

入らせた。

のぼせたサイトが「入っても良いですよ」と言われ、向かった。つてか、やけに顔赤いな…あっそうか、シエスタと入ったんだっけ？そして、アデルは風呂場に行き、入浴した。

「うあゝ…良い湯だなゝ…」

何か…久しぶりに入った様な…でも気持ち良い…。
すると、何かが近づいて来た。

「ん？」

「きゅいゝ」

シルフィードだった。

「どうしたシルフィード？」

「お兄さま！？自分で鍋の中に入って、誰に食べられたいのね！？」「何の話だ！？」

いくらこの風呂がデカイ鍋だからって、その発想は無かった。
何とか事情を説明するアデル。

「何だお風呂だったのね、びっくりしたのね」

「こっちはむしろお前の発想にびっくりしたぞ」

「だって煮立った鍋に入ってたからてつきり…」

「仮にそうだとしても、自主的に釜茹でなんかは絶対にしないぞ」「きゅいゝ…」

目線を反らせて誤魔化しているシルフィード。
その後シルフィードは、タバサに呼ばれたらしく、去って行った。

翌日、今日は近くの森で鍛錬をしてたが、昼過ぎになってもサイトが来なかった。一応約束はしたんだけどな？

ってそうだった、確か今日ってルイズに追い出される日だったな。アデルはヴェストリの広場に向かった。

「え〜っと…サイトは…おっ、あれだ！」

広場の片隅にテントを発見した。
良く見るとギーシュもいた。

「ギーシュ、こんな所で何やってんだ？」

「あっ、アデルじゃないか」

ちなみにギーシュには名前で呼ぶようにしてある。
俺はちらっとサイトを見た。

「どうしたんだコレ？」

「何でもルイズに部屋を追い出されたみたいで」

「…どうせ俺は…モグラ何だ…惨めで…情けなくて…しがない…モグラだから…」

「…そうとう重症だな…」

こりやしばらくかかるな。

翌日、一応サイトに剣術教えようと誘ったんだが、無関心状態になっていた。

今夜はタバサの部屋で瞑想してたところ、キュルケがやって来て、サイトの為に宝探しをしようと言い出してきた。

それから数日後、オーク鬼と戦っていた俺は、

「三連星射！スプラインアロー！酷刺無槍！土竜弾！ライデンミサ

イル！獅子王波！」

三連発の銃弾を撃ったり、広がって狙った敵に集める矢を放ったり、脳天を槍で貫いたり、地面に潜って下から撃ち抜いたり、電撃を帯びた矢を放ったり、拳に悪魔の力を宿して（一応杖を手に振りかけて魔法を掛けたようにした）撃ち放った。

その結果、オーク鬼達は一ヶ所に集まった。

「トドメだ！飛翔、爆炎脚！！」

FF？の主人公みtainなアクロバティックな横回転で飛んだ後、空中で蹴る態勢を作り、悪魔の力で足を燃やした。
そして、一ヶ所に集まったオーク鬼達の所にぶちかました。
その結果、オーク鬼達の身体は八方に飛散した。

「さ…さすがアデル…」

「み…見事なまでの戦いっぷり…だね…」

「すごいですアデルさん！あんなにいた凶暴なオーク鬼を苦も無く退治してしまうなんて！」

「（コクコク）！」

「さすがアデルね。あなた達もあれぐらい出来ないの？」

「ねえ、ない面目…」

そんな会話をした後キュルケ達は、目的の教会跡に着いた。
その夜、

「…で、その秘宝とやらはこれかね？」

ギーシュはそう言って、目の前のガラクタを指差した。

「この真鍮で出来た安物のネックレスや耳飾りが、まさかそのブリ
ーシंगाメルというわけじゃないよね？」

不満たらたらに文句を言うギーシュ。

それをスルーしながら爪の手入れをするキュルケ。

「なあキュルケ、これで7件目だ！地図をあてにお宝が眠るという
場所に苦勞して行ってみても、見つかるのは金貨どころかせいぜい
銅貨が数枚！地図を注釈に書かれた秘宝なんか欠片も無いじゃない
か！インチキ地図ばかりじゃないか！」

「うるさいわね。だから言ったじゃない、中には本物があるかもし
れないって」

「いくら何でも酷すぎる！廃墟や洞窟は化け物や猛獣の住処になっ
てるし！苦勞してそいつらをやつつけて、得られた報酬がこれじゃ
あ、割りにあわんこと甚だしい」

ギーシュは薔薇の造花をくわえて、敷いた毛布の上に寝転がった。

「そりゃそうよ。化け物を退治したぐらいでほいほいお宝が手に入
ったら、誰も苦勞しないわ」

険悪な雰囲気が漂う。

「皆さーん、お食事が出来ましたよー！」

シエスタは、焚き火にくべた鍋からシチューをよそって、めいめい
に配り始めた。

「こりゃ美味そうだ！と思ったらホントに美味しいじゃないかね！一
体何の肉だい？」

ギーシュがシチューを頬張りながら呟いた。
皆も、口にシチューを運んで、うまい！と騒ぎ始めた。
シエスタは微笑んで言った。

「オーク鬼の肉ですわ」

ぶほつと、ギーシュがシチューを吐き出した。

「豚肉か、それにしては柔らかい様な…」

「いやアデル！？オーク鬼を豚肉って！？」

実際豚だろ？

そして、アデルを除く全員が啞然としてシエスタを見つめた。

「じょ、冗談です！ホントは野うさぎです！罠を仕掛けて捕まえたんです」

それからシエスタは、皆が宝探しに夢中になっている間に、うさぎや鷓鴣を罠で捕まえ、ハーブや山菜を集め、シチューを作ったのだと説明した。

ほつとした口調でキュルケが言った。

「驚かせないでよね。でも、あなた器用ね。こうやって森にあるもので、美味しいものを作っちゃうんだから」
「田舎育ちですから」

シエスタははにかんで言った。

「これはなんていうシチューなの？ハーブの使い方が独特ね。あと、

「なんだか見た事も無い野菜がたくさん入っているわ」

「キュルケは、フォークで食べ慣れない野菜を突きまわしながら言った。」

「私の村に伝わるシチューで、ヨシエナヴェっていうんです」

「シエスタは鍋をかきまぜながら説明した。」

「正しくは寄せ鍋だな…久しぶりに食った感じた。」

「父から作り方を教わったんです。食べられる山菜や、木の根つこや…父は、ひいおじいちゃんから教わったそうです。今では私の村の名物です」

「サイトとアデルはその料理を食べて、少し懐かしさを感じた。」

「アデル、どうしたの？」

「タバサが訪ねてきた。」

「あ、いや…ちょっと懐かしい味がしてと思って…」

「懐かしい？」

「ちよつとだけ日本の話をしようかな。」

「俺の故郷じゃこの味に近い料理があつてね、寄せ鍋って言うんだ」
「寄せ鍋…？ヨシエナヴェと似た名前…？」

「タバサが不思議そうに考えてた。」

「食事の後、キュルケは再び地図を広げた。」

「もう諦めて、学院に帰ろう」

ギーシュがそう促したが、キュルケは首を振らない。

「あと一件だけ。一件だけよ」

キュルケは何かに取り付かれたように、目を輝かせて地図を覗き込んでいる。

そして、一枚の地図を選んで、地面に叩きつけた。

「これ！これよ！これでダメだったら学院に帰ろうじゃないの！」

やっとゼロ戦か？

「なんというお宝だね？」

キュルケは腕を組んで呟いた。

「竜の羽衣」

皆が食事を終えた後、シチューを食べていたシエスタが、ぶほと吐き出した。

「そ、それホントですか？」

「なによ貴女。知ってるの？場所は、タルブの村の近くね。タルブってどこら辺なの？」

キュルケがそう言うと、シエスタは焦った声で呟いた。

「ラ・ロシエールの向こうです。広い草原があつて…私の故郷なんです」

翌朝、一行は空飛ぶシルフィードの上で、シエスタの説明を受けていた。

シエスタの説明は、あんまり要領を得なかった。とにかく、村の近くに寺院があること。

その寺院に竜の羽衣と呼ばれるものが存在している事。

「どうして、竜の羽衣って呼ばれてるの？」

「それを纏ったものは、空を飛べるそうです」

シエスタは、言い難そうに言った。

「空を？風系のマジックアイテムかしら」

「そんな…大したものじゃありません」

シエスタは、困ったように呟いた。

「どうして？」

「インチキなんです。どこにでもある、名ばかりの秘宝。ただ、地元の皆はそれでもありがたがつて…寺院に飾ってあるし、拝んでるおばあちゃんとかいますけど」

「へえええ」

それからシエスタは、恥ずかしそうな口調で言った。

「実は…その持ち主、私のひいおじいちゃんだったんです。ある日、ふらりと私の村に、ひいおじいちゃんはあらわれたそうです。」
そして、その竜の羽衣で、東の地から、私の村にやってきたって、

皆にそう言っただんです」

「凄じくないの」

「でも、誰も信じなかったんです。ひいおじいちゃんは、頭がおかしかっただって、皆言ってます」

「どうして？」

「誰かが言っただんです。「じゃあその竜の羽衣で飛んでみる」と。

でも、ひいおじいちゃん、飛べなくて。なんかいろいろ言い訳したらしいですけど、皆が信じるわけもなく。おまけに「もう飛べない」と言っただけの村に住み着いちゃって。一生懸命働いてお金を作って、そのお金で貴族にお願いして、竜の羽衣に固定化の呪文までかけてもらって、大事に大事にしてました」

「変わり者だったのね。さぞかし家族は苦労したのでしょうね」

「いや、竜の羽衣の件以外では、働き者のいい人だったんで。皆に好かれたそうです」

「それってようは村の名物なんだろう？昨日のヨシエナヴェみたいな。そんなの持ってきたらダメじゃん」

とサイトが言っと、

「でも…私の家の私物みたいなものだし…サイトさんがもし、欲しいって言うなら、父に掛け合ってみます」

とシエスタは、悩んだ声で呟いた。

サイトはそんなインチキな代物ならいらなと思ったが、キュルケが解決策を打ち出した。

「まあ、インチキならインチキなりの売り方があるわよね。世の中には馬鹿と好事家は掃いて捨てる程いるのよ」

ギーシュは呆れた声で言った。

「君は酷い女だな」

一行を乗せて、シルフィードは一路タルブの村へと羽ばたいた。

一行はタルブの村の近くに立てられた寺院にいた。

竜の羽衣はその寺院に安置されていた。

というか、竜の羽衣を包み込むように寺院が建てられた、と言ったほうが正しい。

シエスタの曾祖父が建てたというその寺院の形はアデルとサイトに懐かしさを覚えさせた。

寺院は、草原の片隅に建てられていた。丸木が組み合わされた門の形。石の代わりに、板と漆喰で作られた壁。木の柱。白い紙と、縄で作られた紐飾り。そして板敷きの上に、くすんだ濃緑の塗装を施された竜の羽衣は鎮座していた。

固定化のお陰か、何処にも錆は浮いていない。作られたそのままの姿を竜の羽衣は見せていた。

キュルケやギーシュは、気の無さそうにその竜の羽衣を見つめていた。

そして、その竜の羽衣をサイトは目を丸くして見つめていた。やっぱ改めて見るとカッコイイな。

「あ、あの…サイトさん、どうしたんですか？私、何か不味い物を見せてしまったんじゃない…」

サイトは答えず、ただ黙って竜の羽衣を見つめるばかり。

「全く、こんな物が飛ぶ訳ないじゃないの」

キュルケが言った。

ギーシュも頷く。

「これはカヌーか何かだろう？それに鳥の玩具の様に、こんな翼をくつつけたインチキさ。大体見る、この翼を。如何見たって羽ばたけるようには出来ていない。この大きさ、小型のドラゴン程もあるじゃないか。ドラゴンだって、ワイバーンだって、羽ばたくからこそ空に浮かぶ事が出来るんだ。何が竜の羽衣だ」

ギーシュは竜の羽衣を指差して、もっともらしく頷いた。

「サイトさん、ホントに…大丈夫？」

心配そうに才人の顔を覗き込むシエスタの肩を掴んで、サイトは熱っぽい口調で言った。

「シエスタ！」

「は、はい？」

シエスタは頬を染めて、才人の目を見つめ返した。

「君のひいおじいちゃんが残したものは、他にないのか？」

「えっと…あと大したものはお墓と、遺品が少しですけど」

「それを見せてくれ！」

「は、はい！」

サイトとシエスタは寺院を出て行った。

「どうしたのかしら？」

「さあ？」

キュルケとギーシュは、頭に？を付けていた。

俺はというと、竜の羽衣に近づいた。

時期的には第二次世界大戦頃なのだろうな。年代物だな。

「アデル、どうしたの？」

「ああ」

タバサが訪ねてきた。

「シエスタの曾祖父が残した物だから、かなりの年代物だなんて思ってたな」

「アデルは古い物に興味があるの？」

「何でもって訳じゃないけど、こうゆう様なイメージのありそうな物なら割と好きだぞ」

「そう」

あつ、サイトが戻って来た。

サイトは竜の羽衣に乗り、燃料タンクがある所を見た。

まあ燃料切れだから飛ぶ事は無いけどね。

そこに、生家に帰っていたシエスタが戻ってきた。

「ふわ、予定より2週間も早く帰ってきてしまったから、皆に驚かれました」

シエスタはいそいそと手に持った品物を才人に手渡した。

それは、古ぼけたゴーグルだった。

海軍少尉だった、シエスタの曾祖父が着けていた物だろう。

フーケのゴーレムを倒した時に使った破壊の杖の持ち主と同じ、過去の異世界からの闖入者。

才人と同じ、異邦人。

「ひいおじいちゃんの形見、これだけだそうです。日記も、何も残さなかったみたいで。ただ、父が言っていたんですけど、遺言を残したそうです」

「遺言？」

「そうです。なんでも、あの墓石を銘を読める者が現れたら、その者に竜の羽衣を渡すようにと」

「となると、俺にその権利があるって訳か」

「そうですね。その事を話したら、お渡ししてもいいって言ってきました。管理も面倒だし…大きいし、拜んでる人もいますけど、今じや村のお荷物だそうです」

才人は言った。

「じゃあ、ありがたく貰うよ」

「それで、その人物にこう告げて欲しいと言ったそうです」

「なんて言ったの？」

「なんとしてでも竜の羽衣を陛下にお返しして欲しい、だそうです。陛下ってどこの陛下でしょう？ひいおじいちゃんは、何処の国の人だったんでしょうね」

才人は呟いた。

「俺と同じ国だよ」

「ホントですか？なるほど、だからお墓の文字が読めたんですね。うわぁ、なんか感激です。私のひいおじいちゃんと、サイトさんが同じ国の人だなんて。なんだか、運命を感じます」

シエスタは、うつとりした顔でそう言った。

「じゃあ、ホントにひいおじいちゃんは、竜の羽衣でタルブの村へ

やってきたんですね…」

「これは竜の羽衣って名前じゃないよ」

「じゃあ、サイトさんの国では、なんて言っんですか？」

才人は言った。

「ゼロ戦。俺の国の、昔の戦闘機」

「ぜろせん？せんとうき？」

「つまり飛行機だよ」

「こないだ、サイトさんが言っていた、ひこうき？」

才人は頷くた。

こないだって事は、お風呂イベントの時か。

「なるほど、これはサイトの国の物だったのか」

「本当にこれが飛ぶの？」

「サイトの言ってた事が本当なら飛ぶかもな」

「そう」

気の所為かな？タバサがワクワクしてる様な気がする？

その日サイト達は、シエスタの生家に泊まる事になった。貴族の客をお泊めすると言うので、村長までが挨拶に来る騒ぎになった。

その晩、タバサがどうしても俺と一緒に寝たいと言い出して、キユルケやギーシュにからかわれながらも一緒に寝る事にした。

翌朝、ギーシュの父のコネで竜騎士隊にゼロ戦を運ぶ事になった。運送代の事でサイトは頭を抱えていたが、快く立て替えた人物がいた。

コルベール先生だった。

宝探してゼロ戦ゲット（後書き）

新作の投票について今の所、

ゼロのロストマジック使い

が有力です。

次回のタルブ戦争はどうしようか悩んでいます。

タルブ攻防戦（出番無し）（前書き）

しばらく間が空いてしまいました。

新作の方も書きますので、さらに間が空くかもしれません。

タルプ攻防戦（出番無し）

コルベール先生がゼロ戦の運賃を立て替えてくれました。

ちなみに俺はタバサ達と一緒に窓拭きをしていたら、サイトとルイズを見かけた。

「一週間以上も……どこだったのよ……もう……ばか……きらい……」

「なっ、泣くなよ!？」

「きらい、だいつきらい!」

ルイズはぼろぼろと泣き崩れてて、それを慰めようとするサイトだった。

それを見ていたギーシュ達は、

「君、ご主人様を泣かせたら、いかんのじゃないかね？」

「あら、もう仲直り？面白くないの」

「雨降って地固まる」

「終わり良ければ全て良し」

ギーシュはにやにや笑い、キュルケはつまんなさそうにし、タバサとアデルは何故か諺を言った。

それから三日後が経った。

剣技・乱れ吹雪の舞

銃技・リフレクトレイ

斧技・乱れ散り花

魔法・ヒールのギガクラス

固有技・閃走・重ね十字

を覚えた。

するとルイズが近くに寄って来た。

「ちょっとアデル」

「ん？ルイズか」

「ちよつと…手伝ってくれない？」

「何をだ？」

「姫様の結婚式の詔を考えないといけないんだけど、いい案が浮かばなくて…アデル、アンタ何かいい案ある？出来れば参考にしたいんだけど？」

いきなりそれかい！？

つつてもなあ、ん？待てよ、ウェールズが死なずに済んだなら、別に結婚なんてしなくてもいいんじゃないかな？

取り合えず…ええい、適当に言っただけ！

「そうだな…火については、人々を照らす太陽みたいな感じの奴が良いと思うし、水は人の心に潤いが来る感じなので、土は人が住む大地に感謝する事とか、風は人間の行動の意味とか…そんな感じしか思い付かないんだけど…参考になるかな？」

「充分参考になるわよ！ありがとね！さっそくあたしなりに考えてみるわ！」

そう言つてルイズは、自分の部屋へと歸つて行つた。

今ので参考になるんなら…別に良いか。

そして、数日が経つた後、アルビオンからの宣戦布告により、タルブの村が襲われたとの話を聞いた。

その話にいち早く動いたのは、サイトだった。

サイトは、燃料補給したゼロ戦で戦場へと向かった。

正直ついて行きたかったが、タバサが残っていた為に、行けなかった。

しばらくすると、フェニックスと太陽がトリステイン軍を勝利に導

いたとの情報が届いて、学院の皆が大はしゃぎしていた。
— 先ずは第一部完つてとこかな？

タルブ攻防戦（出番無し）（後書き）

3巻分終わりです。

詔については、本当に咄嗟に思い付いた感じで書きました。
タルブの戦争がごっそり無くなったので、短いです。

タバサにセーラー服！？（前書き）

かなり話を進みます。

マリコルヌの代わりにアデルが出ます。

タバサにセーラー服！？

タルプの件があつてから数日後、俺はいつもの様に鍛錬をしていた。

「うおおおおおおおおオオオオオッ！！オレッ、サイッコ
オオオオオオッ！！！」

…何か…凄まじくバカな叫び声が聞こえた様な…。

「シエスタも最高おおおおオオオオオッ！！！」

…そついや…セーラー服をシエスタに着せたんだつたな…。
うるさいから注意しに行こつと。

すると近くにギーシュがいた。

「ギーシュ」

「ん？やあアデルじゃないか」

「どうしたこんな所で？」

「アデルこそどうしてここに？」

「いつもの鍛錬さ。それより、さつき変な叫びが聞こえなかったか
？」

「そついえばさつき聞こえたね」

そして俺とギーシュは、奇妙な叫び声が聞こえた所に向かった。
そこにいたのは、

「きき、き、君の勇気にありがとう」

サイトが意味不明な事を言っていた。

シエスタもセーラー服を着て、今のサイトに困惑していた。

「次はどうするの？」

「えっと、次は「それは何だね？その服は何だね！」！？」

ギーシュは何故か泣きそうな顔で怒っていた。

「け、けしからん！まったくもってけしからん！こんなけしからん衣装は見た事無いぞ！のの、脳髓を、直撃するじゃないかああああー！！」

ギーシュも訳分からん事を言い出した。

シエスタはヒクヒクしながら愛想笑いをしながら去って行った。
その後ろ姿にギーシュは、

「可憐だ……」

と萌えていた。

「何やってんだか……」

俺は思わず呟いた。

「何なんだよギーシュ！それにアデルも！」

サイトが怒鳴ると、我に返ったギーシュがサイトの肩を抱いた。

「な、なあ君、あの衣装をどこで買ったんだ？」
「聞いてどうする？」

ギーシュははにかんだ笑みを浮かべて言った。

「あ、あの可憐な装いをプレゼントしたい人物がいるんだ」

「姫様？」

「バカ者！恐れ多い！恐れ多いぞ！姫殿下は、今や女王陛下だ！ああ、手の届かない、高い場所に行ってしまったわ…姫殿下ならまだしも、女王陛下では…」

どちらかと言うと、最初から相手にされて無かった様な気が？

「それでやっと、僕は思い出したんだ！いつも側にいて…僕を見つめ続けてくれていた可憐な眼差しを…あの麗しい金髪を…芳しい香水のような微笑みを…」

「ああ、元カノのモンモン？」

「モンモンじゃない！モンモランシーだ！」

「なるほど、ヨリを戻したくなったのか。お前って本当に節操ねえのな」

「君に言われたくない！さてと、では教えたまえ、どこで売ってた？」

「ふん。お前なんか芸術が解るかつつの」

だがサイト、お前には…、

「仕方無いな。今の出来事をきちんと報告した上で、ルイズに尋ねてみよ」後二着ある。好きに使ってくれ」

ルイズがいるから…って、綺麗なくらいに頭を下げたなサイト…。

「しかし、あの装いは何なんだ？どっかで見た事ある様な…確か水兵が着ている服じゃないのか？それが、うーむ…女の子が着るだ

けであんなに魅力を放つとは！不思議だ！」

「当然だ！俺の故郷の、魅力の魔法が掛っているからな！」

そんな自信満々に言ってもなあ…俺は制服に萌える様な趣味は無いぞ。

「アデルも一着どうですか？」

「そうは言っても、使い道が無いし…俺には必要無いな」

「ええっ！？アデルはセーラー服の魅力が解らないのか！？」

何故そうも自信満々に言えるんだ！？

「とにかく、俺には必要無い！」

「ん？君にはタバサがいるんじゃないのかね？」

「タバサ？いや、着ないと思うけどな」

「アデル、想像しろよ。タバサのセーラー服姿を…」

サイトがそんな事を言ってきた。

アデルは想像してみた。タバサのセーラー服姿を。

『アデル先輩…遅刻しますよ？』

そう考えたアデルは、全身から湯気が出るくらい真っ赤になった。

「…一着貰おうかな…」

この時、サイトとギーシュはガッツポーズを取っていた様に見えた。そして俺はサイトから貰ったセーラー服を持って、タバサの部屋に向かった。

「つい持って来ちまったけど、決めるのはタバサだしな」

実を言うと、貰った事をちょっと後悔してます。
そして、部屋に入った。

「アデル…それ何？」

「ああ…これはな…」

一応事情を話した。

「そう…」

「別に着なくてもいいんだぞ。ちよつと雑念が出ただけだから…」

そくだよな、タバサがこうゆつのを着る訳…、

「着てみる」

「……………はい？」

まさかの承認！？

「少し…見ないで」

「あ、ああ…」

咄嗟に後ろを向いた。

そして、

「も、もついい…」

「ん、もついいの…か……………」

タバサのセーラー服姿に、俺は思わず絶句してしまった。

「ど、どう？」

タバサが照れながら言った。

「#&*?<>~\$'##!!*<>(か、可愛いよ)」
「アデル…ちゃんと喋って？」

アデルは思わず人外な言葉を発してしまった。
やばいやばいやばいやばいやばい！！！？
思わず変な風に言っちゃまった！？

「に、似合ってる？」

「ももも、もちちちろろ、もちろんだよ！」

うわー！？思いっきり噛みまくってるじゃねーかー！？
その言葉にまた照れるタバサ。

「今晚から毎日コレを着て寝る」
「いや待ってタバサさん！？」

毎晩それ着てたらいつか俺壊れるかも知れないよタバサさん！？
アデルはまた、眠れぬ夜を過ごすのだった。
翌日には、タバサにとって大きな転機があると知らずに…。

タバサにセーラー服！？（後書き）

アデルは後輩系キャラ萌に目覚めちゃいました。

ギアセルシア「タバサさんのセーラー服うううっ！！！」

アデル「って、お前は別の作品だろ！何でここにいるんだ！」

ギアセルシア「少女ある所、正義のロリコンあり！」

アデル「どっかの牙戦隊の決め台詞みたいな事を言っなよ！」

ギアセルシア「やかましいわ！貴様といい、もう一つの作品の奴といい、美女のヒロインがいて羨ましいじゃねーか！俺にもそうゆうのを……」

作者「本日これまで」

ギアセルシア「ってそんなー！！？」

ギアセルシア強制退場

アデル「……………嵐の様な奴だったな……」

タバサの過去（前書き）

タバサの悲劇な話です。

タバサの過去

昨日は衝撃的な事が起こった為寝不足ですが、タバサが突然帰省すると言いだした。

まあ、今朝に任務の報告があったからな。

それで荷物を纏めてたところにキュルケが遊びに来たが、タバサが帰省すると分かると「あたしも行く」と言い出してきたので、一緒に行く事になった。

ちなみに持つて行く物は薄刃陽炎、精霊の杖、アンダリー。

俺はシルフィードに乗って行こうとしたら、タバサに止められて、一緒に馬車に乗る事になった。

すると、キュルケが尋ねて来た。

「タバサ、あなたのお国がトリステインじゃなくて、ガリアだって初めて知ったわ。あなたも留学生だったのね」

キュルケは珍しがっていた。

「何でまた、トリステインに留学してきたの？」

しかし、タバサは答えなかった。じつと、本を見つめたままだ。

だが、その本は出発した時からページがめくられて無い事に気付いた。

めくりもしない本を、タバサはじつと見つめている。

キュルケの方も、それ以上尋ねるのを止めていた。

「ねえアデル、タバサの帰省について何か聞いてない？」

キュルケがいきなりアデルに尋ねて来た。

「いや、詳しい事情は聞いていないが？」
「そう……」

キュルケはそれ以上詮索する事は無かった。

一行の2泊した旅路は、ラグドリアン湖の水が溢れて街道が水没し通れなくなったため迂回した以外は、おおむね順調だった。

街道のすぐ傍をゆるやかに丘が下り、ラグドリアン湖へと続いている。湖の向こう側はトリステインだ。

衛士の言うとおり、確かにラグドリアン湖の水位は上がっていた。

浜は見えず、湖水は丘の緑を侵食している。

タバサは本を閉じ、窓から外を覗いている。

「あなたのご実家、この辺なの？」

「もうすぐ」

タバサは馬車に乗り込んでから、初めて口を開いた。

しかし、すぐにまた黙り込んだ。

「そついやタバサの実家って、始めてだな」

その言葉を聞いていたキュルケは、ニヤニヤした顔でタバサとアデルの顔を交互に見ていた。

街道を山側へと折れ、馬車は一路タバサの実家へと進む。

そのうちに森の中へと馬車は進み、大きな櫟の木が茂っているところにてた。

木陰の空き地では農民たちが休んでいる。

リンゴの籠に目をとめたキュルケは、馬車を止めさせ、農民を呼んだ。

「美味しそうなリンゴね。いくつか売って頂戴」

農民は籠からリンゴを取り出し、銅貨と引き換えにキュルケに渡した。

「こんなに貰ったら、籠一杯分になっちまいます」

「5個でいいわ」

キュルケは1個をかじり、残りの4個をそれぞれに渡した。

この時、黒いオーラが一時的に消えた事にキュルケは安堵した。

「美味しいリンゴね。ここはなんていう土地なの？」

キュルケは農民に問う。

「へえ、この辺りはラグドリアンの直轄領でさ」

「え？直轄領？」

王様が直接保有、管理する土地の事だ。

「ええ。陛下の所領でさ。わしらも陛下のご家来様ってことでさあ」

農民たちは笑った。

確かに土地の手入れがよく行き届いた、風光明媚な場所である。

王様が欲しがるのも無理はない。

キュルケは目を丸くして、タバサを見つめた。

「直轄領が実家って…あなたってもしかして…」

キュルケはタバサの正体に気付いた様だ。

それから10分ほどで、タバサの実家のお屋敷が見えてきた。旧い、立派なつくりの大名邸である。

門に刻まれた紋章を見て、キュルケは息を呑んだ。

交差した2本の杖、そして「更に先へ」と書かれた銘。

まごうことなきガリア王家の紋章である。

しかし、近付くとその紋章にはバツテンの傷がついていた、不名誉印である。

この家のものは、王族でありながらその権利を剥奪されている事を意味している。

玄関前の馬周りにつくと、1人の老僕が近付いてきて馬車の扉を開けた。

恭しくタバサに頭を下げる。

「お嬢様、お帰りなさいませ」

他に出迎えの者はいない。

タバサが降りると、続いてキュルケ、アデルの順で馬車を降りた。

3人は老僕に連れられ、屋敷の客間へと案内された。

手入れが行き届いた綺麗な邸内だったが、シーンと静まり返って、まるで葬式が行なわれている寺院のようだ。

タバサを除いた2人はホールのソファに座る。

キュルケがタバサに言った。

「まずはお父上にご挨拶したいわ」

「きゅ、キュルケ!？」

「?」

アデルが慌てて止めようとしたが、キュルケはキョトンとしていた。

「ここで待ってて」

タバサは首を横に振った後、そう言って客間を出て行った。

取り残された2人がぼかんとしていると、先程の老僕が入ってきてワインとお菓子を置いた。

それには手を付けずに、キュルケは老僕に尋ねた。

「このお屋敷、随分と由緒正しいみたいだけど。なんだか貴方以外、人がいないみたいね」

「確かに、それに所々荒らされてる様に見えるな」

キュルケの言葉にアデルが同意した。

老僕は恭しく礼をした。

「このオルレアン家の執事を務めておりまするペルスランでございます。おそれながら、シャルロットお嬢様のお友達でございますか？」

2人が頷いた。

すると、キュルケは気付いた。

「どうして王弟家の紋章を掲げずに、不名誉印なんか飾っておくのかしら？」

「お見受けしたところ、外国のお方と存じますが…お許しがいただければ、お名前をお伺いしてもよろしいでしょうか？」

「ゲルマニアのフォン・ツエルプストー」

「タバサの使い魔のアデルだ」

「使い魔!？」

アデルの事情をペルスランに話した。

「そうでしたか…それでお嬢様の使い魔を」

「タバサの仕事の手伝いも多くこなしてきたからな」

「！？それは誠にありがとうございます！」

「ところで、いったいこの家はどんな家なの？タバサは何故偽名を使つて留学してきたの？あの子、何も話してくれないのよ」

キュルケがそう言うと、ペルスランは切なげな溜め息を漏らした。

「お嬢様は「タバサ」と名乗つてらっしゃるのですか…わかりました。お嬢様が、お友達をこの屋敷に連れてくるなど、絶えてない事お嬢様が心許す方なら、構いますまい。皆様を信用してお話しまし
よう」

それからペルスランは深く一礼すると語りだした。

「この屋敷は牢獄なのです」

- - - - -
- - - - -
- - - - -

タバササイド

タバサは屋敷の一番奥の部屋の扉をノックした。
返事はない。

この部屋の主がノックに対する返事を行なわなくなつてから、5年
が経っている。

その時、タバサはまだ10歳だった。

タバサは扉を開けた。

大きく殺風景な部屋だった。

ベッドと椅子とテーブル以外、他には何も無い。

開け放した窓からはさわやかな風が吹いてカーテンをそよがせている。

この何も無い部屋の主は自分の世界への闖入者に気付いた。

乳飲み子の様に抱えた人形をギュッと抱きしめる。

それは瘦身の女性だった。

もとは美しかった顔が病の為、見る影もなくやつれている。

彼女はまだ30代の後半だったが、20も老けて見えた。

伸ばし放題の髪から除く目が、まるで子供の様に怯えている。
わななく声で女性我问うた。

「だれ？」

タバサはその女性に近付くと、深々と頭を下げた。

「ただいま帰りました。母さま」

しかし、その人物はタバサを娘と認めない。

そればかりか、目を爛々と光らせて冷たく言い放つ。

「下がりなさい無礼者。王家の回し者ね？私からシャルロットを奪おうというのね？誰があなたがたに、可愛いシャルロットを渡すものですか」

タバサは身じろぎもしないで、母の前で頭を垂れ続けた。

「おそろしや…この子がいずれ王位を狙うなどと…誰が申したのでありましょうか。薄汚い宮廷のすずめたちにはもつうんざり！私達

は静かに暮らしたいだけなのに……下がりなさい！下がれ！」

母はタバサに、
 テーブルの上のコップを投げつけた。

タバサはそれを避けなかった。

頭に当たり、床に転がる。

母は抱きしめた人形に頼ずりした。

何度も何度もそのように頬を擦り付けられた所為か、人形の顔は擦り切れて綿がはみ出ている。

タバサは悲しい笑みを浮かべた。

それは、母の前でのみ見せる、たった一つの表情だった。

「貴女の夫を殺し、貴女をこの様にした者共の首を、いずれここに並べに戻つて参ります。その日まで、あなたが娘に与えた人形が仇共を欺けるようお祈り下さい」

開けた窓から風が吹き込んでカーテンを揺らす。

初夏だというのに、湖から吹いてくる風は肌寒かった。

[illegible]

アデルサイド

「継承争いの犠牲者？」

キュルケがそう問い返すと、ペルスランは頷いた。

「そうでございます。今を去ること5年前…先王が崩御されました。」

先王は2人の王子を遺されました。現在、王座に着いておられるご長男のジョゼフ様、そしてシャルロットお嬢様のお父上であられたご次男オルレアン公のお2人です」

「あの子は、王族だったのね」

「しかし、ご長男のジョゼフ様はお世辞にも王の器とは言いにくい暗愚な御方でありました。オルレアン公は王家のご次男としてはご不幸な事に、才能と人望に溢れていた。したがって、オルレアン公を擁して王座へ、という動きが持ち上がったのです。宮廷は2つに分かれての醜い争いになり、結果オルレアン公は謀殺されました。狩猟会の最中、毒矢で胸を射抜かれたのでございます。この国の誰よりも高潔な御方が魔法ではなく、下賤な毒矢によってお命を奪われたのです。その無念たるや、私などには想像もつきかねます。しかし、ご不幸はそれに留まらなかったのです」

ペルスランは胸を詰まらせるような声で続けた。

「ジョゼフ様を王座に着けた連中は、次にお嬢様を狙いました。将来の禍根を断とうと考えたのでありましょう。連中はお嬢様と奥様を宮廷に呼びつけ、酒肴を振舞いました。しかし、お嬢様の料理には毒が盛られていました。奥様はそれを知り、お嬢様を庇いその料理を口にされたのです。それはお心を狂わせる水魔法の毒でございました。以来、奥様は心を病まれたままでございます」

2人は言葉を失い、呆然とペルスランの告白に耳を傾けた。

「お嬢様は…その日より、言葉と表情を失われました。快活で明るかったシャルロットお嬢様はまるで別人の様になってしまわれた。しかしそれも無理なからぬこと。目の前で母が狂えば、誰でもその様になってしまうでしょう。そんなお嬢様はご自分の身を守る為に、進んで王家の命に従いました。困難な…生還不能と思われた任務に

志願し、これを見事果たして王家への忠誠を知らしめ、ご自分をお守りになられたのです。王家はそんなシャルロットお嬢様を、それでも冷たくあしらわれました。本来なら領地を下賜されてしかるべき功績にも関わらず、シュヴァリエの称号のみを与え、外国に留学させたのです。そして心を病まれた奥様を、この屋敷に閉じ込めました。体のいい、厄介払いという訳です」

口惜しそうにペルスランは唇を噛んだ。

「そして！未だに宮廷で解決困難な汚れ仕事を持ち上がると、今日の様にホイホイ呼びつける！父を殺され、母を狂わされた娘が、自分の仇にまるで牛馬の様に扱き使われる！私はこれほどの悲劇を知りませぬ。何処まで人は人に残酷になれるのでありましょうか」

その場にいたキュルケは、タバサが口を開かぬ理由を知った。

アデルは事情を知っているとはいえ、聞くに堪えない状態だった。決してマントに縫い付けぬ、シュヴァリエの称号の理由を知った。

「雪風」、彼女の二つ名。

彼女の心には冷たい吹雪が吹き荒れ、今も止む事が無いのだろう。

「お嬢様は、タバサと名乗っておられる。そうおっしゃいましたね？」

2人は頷いた。

「奥様は、お忙しい方でありました。幼い頃のお嬢様はそれでも明るさを失いませんでした。随分と寂しい想いをされた事でありましょう。しかし、そんな奥様が、ある日、お嬢様に人形をプレゼントなさったのです。お忙しい中、ご自分で街に出でて、下々の者に交じり、手ずからお選びになった人形でした。その時のお嬢様の喜

び様といったら！その人形に名前を付けて、まるで妹のように可愛がっておられました。今現在、その人形は奥様の腕の中でございます。心を病まれた奥様は、その人形をシャルロットお嬢様と思い込んでおられます」

ペルスランは一息つく。

「タバサ。それはお嬢様が、その人形にお付けになった名前でございます」

扉が開いて、タバサが現れた。

ペルスランは一礼すると、苦しそうな表情を浮かべ、懐から一通の手紙を取り出した。

「王家よりの指令でございます」

タバサはそれを受け取ると、無造作に封を開いて読み始めた。読み終わると軽く頷いた。

「何時頃、取り掛られますか？」

まるで散歩の予定を答えるように、タバサは言った。

「明日」

「かしこまりました。その様に使者に取り次ぎます。ご武運をお祈り致します」

そう言い残すと、ペルスランは厳かに一礼して部屋を出て行った。アデルはタバサの近くに寄った。タバサはキュルケの方に向いた。

「ここで待ってて」

これ以上はついて来るなど言いたいのだろう。
しかし、キュルケは首を横に振った。

「ゴメンね。さっきの人に全部聞いちゃったの。だからあたしもついて行くわ!」

「危険」

「アデルがいるとはいえ、余計に貴女達だけで行かせる訳にはいかないわね!」

タバサの言葉にキュルケがそう言う。

タバサは答えない。ただ、軽く下を向いた。

その夜、アデルは用意された客室にいた。

タバサの方はキュルケに任せた。

アデルはベッドの上で考え事をしていた。

「タバサのお袋さんが元に戻るのがしばらく先とは言え、あんな話を聞かされちゃ、黙ってられないぞ!」

アデルはベットから立ち上がり、部屋を出た。

「タバサ、君の悪夢を取り払ってみるよ。成功するかどうか分からないが、子供には親が必要なんだ!」

アデルはある決意を固めながら、タバサの母親の部屋へと向かった。

タバサの過去（後書き）

小説を読んで気付いたのですが、時系列が違っていましたが、出来れば気にしない方向でお願いします。アデルの行動が意味するのは、次回に続く。

アデルの騎士（前書き）

アデルの行動がどのような結果をもたらすのか？

アデルの騎士

タバササイド

私はふと目を覚ますと、キュルケに抱き着いていた。どうやら悪夢を見て無意識にキュルケに抱き着いてしまったようだ。キュルケの方はすやすやと寝息をたてていた。

「ん？」

廊下の方に足音が聞こえた。

誰だろう？こんな夜更けに足音？ペルスラン？いや、彼はこの時間はもう就寝しているだろうし、アデル？でも、彼がこの時間に様があると思えない様な？

気になったタバサは、思い切ってそっと部屋を出た。もちろん静かに戸を開けて。

するとそこにいたのは、アデルだった。

「アデル？どうして彼が？」

しかも、彼が向かっている方向は…母様の部屋？

アデルの行動が気になったタバサは、音を立てずに静かに後をつけた。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

アデルサイド

俺はタバサの母親の部屋まで来ています。

タバサの悪夢を振り払えるかどうかは分からないけど、やれるだけの事はやってみよう。

「待つてろタバサ、君の悪夢を消してみせるから」

俺は静かに入って行った。

部屋に入ると、痩せた女性がベッドに横たわっていた。

「念の為に、スリープ」

万が一起こさない為に、念入りに寝かし付けた。

「後……」

部屋中をディテクトマジックを使って調べたり、念には念を入れて窓の外も調べた。

ミヨズニトニルンのシェフィールドが監視してるとも限らないしな。さっそくアデルは準備を行った。

「それじゃ…始めるか!」

精霊の杖をかがげ、タバサの母親に向けた。

「ハアアアアアアッ!」

この人の今の状態は、毒とド忘れ状態になってるから、あれで大丈夫だよな？

杖に魔力を溜めて、そして放たれた。
イチかバチか！行けえ！

「エスポワァーールッ！！」

タバサの母親の周りに光が包み込んだ。
後は成功する事を祈るのみ！

光が収まると、タバサの母親が目を覚ました。

「ん…んん…」

「（ゴクリッ…）」

思わず生唾を飲んでしまった。
そして、目が会ってしまった。

「「……………」」

な、何か気まずい空気が…、

「えっと…貴方はどちら様ですか？」

「あっ、えっと…オルレアン夫人ですよ？」

「は、はい…」

「自分、アデル・ラハール・アルマースといいます。夜分遅くにすみません…」

「はい、こちらこそ…」

何なんだこの微妙な空気は…とにかく治ってるかどうか確認しないと。

ん？そっぴやあれは…あれで確認してみよう。

「えっと、貴女が抱いてるその人形は何ですか？」

「え？これですか、これは昔シャルロットにプレゼントした人形です。あれ？そういえば、何でここに？」

決まりだ！成功したんだ俺！もしその人形が、「娘です！」って言われたらどうしようかと思ったけど、杞憂に終わったみたいだな。さて、元に戻った事が確認取れたので、タバサ呼びに…、

ボタンッ

「「！？」」

いきなり扉が開いたと思ったら、そこにいたのは、タバサだった。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

タバササイド

目の前の光景に思わず自分の目を疑ってしまった。

何度も願った事が今、目の前にあった事を。

思わず母様の部屋に入ってしまった私は、言葉も出ずにいた。

「た、タバサ！？」

アデルは驚愕していた。

そしてタバサの母親は、タバサをじっと見つめていた。
そして、

「シャルロット…なの…？」
「!？」

私は母様の下に駆け出した。

「母様ーっ!！」

タバサは泣きながら母親に抱き付いた。

「母様…母様…母様あ…」

「ごめんなさい…シャルロット…」

タバサはその言葉を繰り返していた。

タバサの母親は、タバサの頭をそつと撫でた。

アデルは空気を呼んだのか、静かに部屋を出ていった。

アデルが出ていったと同時に、キュルケとペルスランが駆け付けた。
ペルスランは泣きながら驚愕していたり、キュルケは温かい目で見守っていた。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

アデルサイド

良かったなタバサ。

翌日、タバサの母親の部屋に集められた。

アデルが部屋に入った時には、イスに腰掛けてるタバサ、母親の近

くにいるタバサ、二人の光景に涙するペルスラン、タバサに微笑んでるキュルケが既にいた。

「ペルスラン、今まで迷惑をかけてしまつてごめんなさい」

「いえいえ奥様！？私の事などは別に気にせずとも！？」

タバサの母親は、今日まで自分の世話を任されていたペルスランに頭を下げていたが、ペルスランは恐縮していた。

そしてタバサの母親は、アデルの方を向いた。

「貴方が私を治して下さいたんですね。なんとお礼を言っているやら」

「アデル殿！このペルスラン、心より感謝致します！よくぞ…よくぞ奥様のお心を取り戻してくれました！！」

ペルスランは興奮気味で礼を言った。

「いえそんな、タバサの為にと思ってやった事ですから」

その言葉で赤くなるタバサ。

するとキュルケは、

「それにしてもアデル、こんな事を言うのも何だけど、よく治せたわね？」

ギクツ×2

キュルケの言葉で焦り出すアデルと、事情を知っているタバサも焦り出した。

「いや…それは…何というか…」
「「「？」」」」

慌てるアデルと、若干おろおろしているタバサ。
…仕方ない、話すか。

アデルは、自分の正体について皆に話した。

「何と！？悪魔ですと！？」

「嘘！？アデルが…悪魔！？」

「彼が…」

「でも安心して、彼は悪い人じゃない」

何とかタバサの説得により、場は静まった。

「それにしても、悪魔とは思えないわね。あたし達とあんまり変わらないのね」

「そうね」

まじまじと見てたキュルケに同意するタバサの母親。
更に、自分の生い立ちを話した。

「人間を悪魔にですと！？」

「アデルも苦労してたのね」

「そんな事があつたなんて！？」

自分が悪魔になった経過を話したら、タバサが心配そうに俺を見てた。

「良かったの？皆に話して…」

「ああ、これはもう、タバサだけの問題じゃないからな」

「そう…」

そしてタバサの母親がアデルに向けて言った。

「たとえ悪魔でも、私を救って下さった事に変わりはありません。本当に、ありがとうございます」

「いえ…そんな…」

タバサの母親は頭を下げた事により、アデルは恐縮していた。そこでアデルはある事に気付いた。

「そういえば、今日の任務はどうするんだ？」

「あつ、そういえば!？」

アデルの言った事にキュルケは気付いた。

「でも、タバサのお母様が治ったのだから、もうガリア王家に従わなくても良かったのじゃない？」

「だが奴らは奥さんの病気が治ったと知ったら、どの様な強硬策が出て来るか解ったモンじゃないからな。最悪、また心を壊す毒を飲まされるかもしれないぞ？」

「うつ…」

「任務は出るつもり」

「タバサ!？」

「お嬢さま!？本気なのですか!？」

「私が任務を放棄すれば、また母様が危険な目に合わせてしまう」

タバサの意見に皆が何も言えなかった。

「分かりました。それが貴女が決めた事なら、何も言いません」

「奥様！？」

タバサの母親がタバサの背中を押す様に言った。

「それに、私の方も考えたのですが、私はこのまま狂ったフリをし続けようと思っていますから」

「ええっ！？」

「奥様！？何故その様に！？」

タバサの母親の提案にキュルケとペルスランは驚愕し、タバサも声を上げていないが驚いていた。
するとアデルはどこか納得していた。

「なるほど、ある意味それが一番の安全策と言えますね」

「母様…」

タバサは少し寂しそうな顔をする。

「シャルロット、そんなに寂しそうな顔をしないの。貴女にはこんなに素晴らしい友人がいるじゃないの」

タバサの母親は、タバサに優しく語り掛ける。

さてと、この辺りでいいかな？

「んじゃあ話が纏まった所で、任務に行きますか」

「待ってアデル」

「ん？」

タバサに呼び止められた。

「どうしたタバサ？」

「まだ貴方にちゃんとした礼を言っていない」

「礼か？別に気にしなくてm「私は貴方に一生かけても返せない恩が出来た」だから…」

「アデル…私の心を凍てついた絶望の牢獄から救い出してくれた、異世界の勇者様」

「いや…確かに俺のルーンの意味は勇者だが、俺は悪魔だし…」

「自分を卑下しなくてもいい。貴方は母様の呪縛を解いてくれた」

段々照れ臭くなってきたな。

「これからは、私が命を懸けて貴方を守る」

「えっ!？」

「私は…」

タバサがアデルに近づき、アデルの頬に手を付けた後、タバサは…、

「貴方の騎士になる」

アデルにキスをした。

「!!!??」

「あら！」

「まあ！」

「なんと!？」

「きゅーー!」

キュルケ、タバサの母親はニヤニヤしながら喜び、ペルスランは驚愕していた。

しかも、いつの間にか窓にはシルフィードが覗いて興奮していた。

「！！？？」

まだキスをしていた。

アデルの精神が爆発しそうになっていた途端に、タバサは唇から離して、頬を赤く染まっていた。

「……………」

ただ今思考停止状態のアデル。

「固まってるわねアデルってば」

「うふふ、意外と初心うぶなのね」

キュルケとタバサの母親はキスシーンからずっとニヤニヤしていた。

「アデルさん…と言いましたね？娘を…シャルロットの事を、よろしくね」

「……………（ハッ！）、ええっ！？」

思考停止状態から還って来たアデル。

「ちよつ、よろしくつて、それつて…」

「うふふ」

タバサの母親が、慈悲深い微笑みでアデルを見た。

「あらあら、アデルは幸せ者ね。親公認みたいよ」

「ええっ！？」

親公認ってなんだよキュルケ！？えっ！？これって、そうゆう事なの！？

つくづく恋愛経験の無いアデルは、今この状況について来れずいた。

「改めて、これからもよろしくね。アデル」

タバサが今まで見た事が無い位の最高の笑顔でアデルに言った。

アデルの騎士（後書き）

タバサの母親の名についてはまだ出てないので、タバサの母親としています。

次回は水の精霊と交渉します。ついでにデレルイズも。

水の精霊との対話（前書き）

遅くなりました。

最近体がだるく感じてきました。
ちよつと遅く来た夏バテかな？

水の精霊との対話

今朝はホントに色々あったが、今俺達はラグドリアン湖に来ています。

任務の内容は、「湖の水を増やす水の精霊を退治して来い」という内容だった。

正直俺は水の精霊に危害を加えるつもりは無かったから、タバサに「何故増水するか交渉してみる」と言ったら、あっさり任された。何かタバサ…俺を信じ切ってる様だな。

それも当然、アデルはタバサの夢を叶えさせた様なモノだから。アデルは精霊に頼んで水の膜を使って湖の底に行こうとしたら、

「あれ、アデル？」

後ろから声が聞こえたから振り向くと、そこにいたのは、サイトとギーシュとモンモランシーに、サイトに抱き着いてうっとりしているルイズがいた。

「サイト、何でここに？」

「あらダーリン！」

「キュルケ！？それにタバサまで！？」

「どうしてここに？」

「僕らは水の精霊に用があつて来たんだ」

「用って何だギーシュ？」

理由は知ってるが、あえて言わないでおこう。

「えっと…その…」

「それは…何というか…」

モンモランシーとギーシュは口ずさんでいた。

「それはだん「サイトはキュルケとタバサが良いの？あたしじゃダメなの！？」」

「「「えっ！？」」「」」

「あーもう、違うつて！事情を聞いただけだから、ルイズは取り合えず寝てろ。な？」

「やだ、寝ない。今日はサイトとあんまり口訊いてくれてないもん。32回しか言葉のやり取りしてくれてないもん」

「「「……………」」「」」

いくら惚れ薬の影響だからって、ここまで変わるものなのかよ……。つか数えてたのかよルイズ…。

「後でもつと話すから、今は寝ててくれ」

「じゃあ、キスして」

「え？」

「いっぱいして。じゃないと寝ない」

未だに呆けてるキュルケとタバサ。事情を知ってるギーシュとモンモランシーは隠れてくすくすと笑っていた。

そしてサイトは仕方なくルイズの頬にキスをした。

「ほっぺじゃやだ」

ルイズはまだ不満の様だった。

それからサイトは、ルイズの額にキスをした。

それで満足したのか、あぐらをかいているサイトの膝の間にちょこんと座り込み、胸に体を預けて目をつむり、しばらくするとルイズ

の静かな寝息が聞こえてきた。

それを見ていたキュルケは、我に返ってサイトを茶化した。

「貴方って、実はとんでもなく女の扱いが上手かったのね。いつの間にもルイズを手なづけたの？この子メロメロじゃないの」

「いや、そうじゃねえから！？モンモンが惚れ薬を作って、ギーシユに飲ませようとしたんだが、間違ってルイズが飲んじまってな」

サイトがある程度の事情を話して、惚れ薬を解くには「水の精霊の涙」が必要らしいが、キュルケが悩んでる様に言った。

「困ったわね。私達タバサの実家から頼まれて、ラグドリアン湖の水を増やしてる水の精霊を退治することになってるのよ」

「ええっ！？何で！？」

サイトが驚き、聞き返す。

「水かさが上がった所為で、タバサの実家の領地が被害を受けてるのよ。それで私たちが退治を頼まれたってわけ」

あながち間違っていないレベルで、キュルケはサイト達に説明する。アデルはそのフォローをした。

「ただ、精霊を退治すると色々問題になりかねないから、俺が直接湖に入って交渉しようと思ってな。ダメだったら力尽くでって事になるけどな」

「直接入るって、大丈夫なのか？聞いた話じゃ一滴でも水に触れるとアウトなんだろう？」

「その辺は抜かりないさ」

「つか、わざわざそっちに行かなくてもいいんじゃないのか？」

「一応こつちから話をするんだから、向こつこの所に行くのが筋だろ？」

「そりゃそうだがよ…」

アデルの案に渋るサイト達。

するとキュルケが、

「そつちも水の精霊に用があるのなら、どうやって接触するつもりだったの？」

「それは…モンモン？」

サイトはモンモランシーに尋ねる。

「私の家は水の精霊との交渉役を何代も続けてきたの。今は色々あつて他の貴族が勤めてるけど、私の事を覚えていれば、話を聞いてくれるかもしれないのよ」

「だって」

「話を聞いてくれるっていうんならさ、水かさを増やしてる理由を聞いて止めてもらうってことは出来ないかな？」

「そうね。結局は水位が戻れば、無理に退治する必要もない訳だし」

そんなこんなで、モンモランシーの使い魔の毒々しいカエルのロビンに自分の血を付けた後、頼んで湖へと行かせた。

しばらく経ったら、ロビンが帰って来た後、湖から何かが盛り上がってきた。

「私はモンモランシー・マルガリタ・ラ・フェール・ド・モンモランシ。水の使い手で、旧き盟約の一員の家系よ。カエルにつけた血に覚えはおありかしら。覚えていたら、私たちにわかるやり方と言葉で返事をして頂戴」

盛り上がった水面がぐねぐねと形を取り始める。

アデルとサイトは、その光景を驚きながら見ていた。

水の塊がモンモランシーそっくりの形になって、にっこりと微笑んだからだ。

その水の精霊は何度か表情を変えた後、モンモランシーの問いに答えた。

『覚えている。単なる者よ。貴様の体を流れる液体を、我は覚えている。貴様に最後に会ってから、月が52回交差した』

細かいな水の精霊さんよお。

「良かった。水の精霊よ、お願いがあるの。あつかましいとは思っているけど、あなたの一部を分けて欲しいの」

その言葉にサイトがモンモランシーに尋ねるが、モンモランシーは鬱陶しそくに答えて、サイトを黙らせる。

水の精霊は、にこつと笑う。

だが、出てきた言葉は全く逆だった。

『断る。単なる者よ』

「そりゃそうよね。残念でしたー。さ、帰ろ」

モンモランシーがあっさりと諦めたので、サイトは呆れた。

「おいおい、ちょっと待てよ！？ルイズはどーすんだよ！しかもアデル達の問題も聞いてねーし！なあ水の精霊さん！」

サイトはモンモランシーを押しつけて、水の精霊に対峙した。

「ちょっと！？あなた、やめなさいよ！怒らせたらどーすんのよ！」
モンモランシーはサイトを押しのけようとしたが、サイトは怯まな
い。

「水の精霊さんよ！お願いだよ！何でもいう事聞くから、
「水の精霊の涙」をわけてくれよ！ちょっとだけ！ほんのちょっとだけ！」

水の精霊は、何も返事をしなかった。
サイトは土下座する。

「お願いです！俺の大事な人が大変なんです！あなたにだって、大
事なものがあるでしょう？それと同じぐらい俺にとつて大事な人が
大変な事になってて…あなたの体の一部が必要なんだ！だからお願い
い！この通り！」

水の精霊はふるふると震えて、姿形を何度も変えた。
再びモンモランシーの姿になると、サイトに問うた。

『良かるう』

「ええ！ほんと！」

『しかし、条件がある。世の理を知らぬ単なる者よ。貴様は何でも
すると申したな？』

「はい！言いました！」

『ならば、数えるほど愚かしいほど月が交差する時間の間、我が
守りし秘法を、お前たちの同胞が盗んだ物を取り返してくれ』

「秘宝？」

『そうだ。我が暮らす最も濃き水の底から、その秘宝が盗まれたの
は、月が30ほど交差する前の晩の事』

「おおよそ2年前ね」

良く解るなモンモン。

「じゃあお前は、人間に復讐するために、水かさを増やして村々を飲み込んだじまったのか？」

『復讐？我はそのような目的は持たない。ただ、秘宝を取り返したいと願うだけ。ゆつくりと水が浸食すれば、いずれは秘宝に届くだろう。水が全てを覆い尽くすその暁には、我が体が秘宝のありかを知るだろう』

「な、なんだそりゃ」

サイトは呆れていた。

いや、サイトじゃなくても呆れるって。

「気の長い奴だな」

『我とお前たちでは、時に対する概念が違う。我にとって全は個。個は全。時もまた然り。今も未来も過去も、我に違いはない。いずれも我が存在する時間ゆえ』

「ようし、そんなら俺たちがその秘宝を取り返してきてやる。なんていう秘宝なんだ？」

『「アンドバリの指輪」。我が共に、時を過ごした指輪』
「なんか聞いた事あるわ」

モンモランシーが呟く。

「水系統の伝説のマジックアイテム。たしか、偽りの生命を死者に与えるという…」

『その通り。誰が作ったものかはわからぬが、単なる者よ、お前の仲間かも知れぬ。ただお前たちがこの地にやってきたときには、既

に存在した。死は我には無い概念ゆえ理解できぬが、死を免れぬお前たちにはなるほど、命を与える力は魅力と思えるのかもしれない。しかしながら、アンドバリの指輪がもたらすのは偽りの命。旧き水の力に過ぎぬ。所詮益にはならぬ』

「そんな代物を、誰が盗ったんだ？」

『風の力を行使して、私の住処にやってきたのは数個体。眠る我には手を触れず、秘宝のみを持ち去っていった』

「名前とかわからないの？」

『確か個体の1人がこう呼ばれていた。「クロムウエル」と』

キュルケがぼつんと呟いた。

「あたしの聞き間違いじゃなければ、アルビオンの新皇帝の名前ね」

サイト達は顔を見合わせた。

「人違いという可能性もあるんじゃないか。同じ名前の奴なんかいっぱいいるだろう。で、偽りの命とやらを与えられたら、どうなっちゃうんだ？」

『指輪を使った者に従うようになる。個々に意思があるとは不便なものだな』

「とんでもない指輪ね。死者を動かすなんて、趣味が悪いわね」

「確かに、まるで死霊使ネクロマンサーみたいだな」

アデルの一言に皆が納得していた。

サイトは決心したように頷くと、水の精霊に向かって大声で言った。

「分かった！約束する！その指輪をなんとしてでも取り返してくるから、水かさを増やすのを止めてくれ！」

水の精霊はふるふると震えた。

『わかった。お前たちを信用しよう。指輪が戻るのなら、水を増やす必要もない』

「何時までに取り返して来ればいいんだ？」

すると再び水の精霊はふるふると震えた。

『お前たちの寿命が尽きるまでで構わぬ』

「そんなに長くていいのかよ」

『構わぬ。我にとっては、明日も未来も余り変わらぬ』

そう言い残すと、水の精霊はごぼごぼと姿を消そうとした。

その後、皆は学院へと戻った。

俺は風呂に入っていた。

「ふう〜、極楽極「ドシャーン」…」

女子寮から凄まじい音が響いた。

「お、俺は悪くないって！？仕方ないじゃん、薬の所為なんだもの！お互い不幸だったんだよ！」

正気に返ったルイズが照れ過ぎるあまり、サイトをボコメキヨな目に遭わせた。

そして女子寮へと引つ張られていった。

「いつもの光景だな…」

しばらく浸かっていると、誰か来たようだ。

「アデル…」

「!?!」

聞き覚えのある声がして振り返ってみると、そこにいたのはタバサだった。

「た、タバサ!?!何でここに!?!」

「シルフィードが言っていた。アデルがここで風呂に入ってるって」

「あいつか…」

あのお喋り韻竜…。

するとタバサは服を脱ぎ始めた。

「ええ!?!ちよつ、タバサさん!?!何で服を脱ぐの!?!」

「私も一緒に入る」

「お、俺すぐ出るから、後はゆっくりと」一緒に入る「……（これ…詰んだ?）」

アデルは観念してタバサを入れた。

「気持ち良い」

「まあ、サイトの故郷の風呂を似せたらしいからな」

「そうなの?」

「ああ」

やべつ、ドキドキし過ぎて風呂が熱く感じるなこりゃ。でも何でタバサが急にこんな事をするんだ?

「なあタバサ、タバサは何だ「シャルロット」…え?」

「私の名前、シャルロット・エレーヌ・オルレアン。二人っきりの時は、そう呼んで」

「えっ!?!」

タバサが本名で呼んで良いって…良いんですか？

「えっと…しゃ、シャルロット？」

「はい」

あれ？本名で呼んであげただけなのに、何でこんなにドキドキするんだ!？

「貴方は私の勇者様。私は貴方の騎士。これからアデルと一緒に…」

これ以降はのぼせてしまったので、何も聞けなかった。

水の精霊との対話（後書き）

ついにタバサを本名で呼ぶ事になりました（二人っきりの時限定）。最近体がついて行かずにバテ気味になってますが、小説は何とか続けていきます。

新作はプロローグの部分で悩んでいます。

次回は魅惑の妖精亭です。

魅惑の妖精亭で騒動（前書き）

ウェールズ（死体）の件がまるまるカットになったから、魅惑の妖精亭に一気に飛びます。

魅惑の妖精亭で騒動

キュルケサイド

夏季休暇なつやすみが始まったばかりの寮塔では、2人の貴族が退屈を持て余していた。

キュルケとタバサであった。

キュルケは、あられもない格好で、シャルロットの部屋のベッドでぐったりと横たわっている。

キュルケは熱さを好んだが、暑さは苦手であった。

「ねえタバサ、お願いよ。さっきみたいに風を吹かせてちょうだい」

タバサは、本を読みながら杖を振った。

タバサが唱えた風の呪文の中には、氷の粒が混じっていた。

そんな雪風が、キュルケの体を冷やしていく。

「あー、気持ちいい…」

キュルケはふとタバサを見つめる。

本を読むその顔は何処となく嬉しそうに見える。

「タバサ、夏季休暇に入った時、一度実家へ戻ったわね。その時に何か良い事でもあったの？」

キュルケは尋ねた。

タバサは微笑み、

「うん。母様がお帰りって言ってくれた」

そう答えた。

心を狂わされていた母親を見続けていたタバサにとって、そんなごく当たり前のことでも、うれしい事なのだ。

「そう。良かったじゃない」

「うん」

キュルケは身を起こすと、

「ホントにもう、こんな蒸し風呂みたいな寮に残ってるのなんて、あたしたちぐらいね」

余りの暑さにそうグチた。

「アデルの方もよく外で鍛錬なんか出来るわね。大丈夫かしら？」

アデルはいつも外で剣やら槍やら杖などを振るっているみたいだけど、暑くないのかしら？

実はアデルは、精霊達に頼んで温度調節を行っている為、猛暑の中においても快適に過ごしているからだ。

その時、階下から悲鳴が聞えてきた。

キュルケは杖を握って、部屋を飛び出した。

タバサもその後を追った。

階下の部屋にいたのはギーシュとモンモランシーだった。

多少のイザコザがあったが、何故か気分転換で街に出かける事になった。

外にいたアデルも誘い、5人はシルフィードでトリスタニアの城下町へ向かった。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

アデルサイド

サイト達が密命を受けに行つて数日後、俺達は気分転換の為にトリスタニアのブルドンネ街に来ていた。

時間的にはもう夕方だけだね。

うつすらと暮れゆく街に、魔法の明かりを灯した街灯が彩りを添えていく。

ブルドンネ街がトリスタニアの表の顔なら、このチクトンネ街は裏の顔である。

如何わしい酒場や賭博場なんかが並んでいる。

モンモランシーは眉をひそめたが、キュルケは気にした風もなく歩き続ける。

どの店にしようか、と、一行は相談しながら歩く。

知っている店はないの？とキュルケはギーシュに尋ねる。

ギーシュはにやっと笑って、

「そっぴや、噂の店があつてね。一度、行つてみたいと思つてたんだが……」

「変な店じゃないでしょうね？」

その声の調子に、色っぽい何かを嗅ぎつけたモンモランシーが釘をさす。

ギーシュは首を振った。

「全然変な店じゃないよ！」

「どついつ店なの？」

ギーシュは黙ってしまった。

「やっぱり変な店じゃないのよぉ~~~~！言つて御覧なさいよぉ~~~~！！」

モンモランシーがその首を絞める。

「ち、違つんだ！女の子が、その、可愛い格好でお酒を運ん

「バキッ」……ぐえ！」

「変じゃない！何処が違ふのよ！」

可愛い格好！いかかわしいと思つてるのかなモンモンは？

「面白そうじゃない。そこ」

キュルケが興味をひかれたらしく、ギーシュを促した。

「そこに行つてみましょうよ。ありきたりの店じゃつまないし」

「なんですつてえ！」

モンモランシーが喚く。

「まったくどうしてトリスティンの女はこう、そろいもそろつて自分に自信がないのかしら？嫌になつちゃう」

キュルケが小ばかりにするような声で言ったので、モンモランシーはいきり立った。

「ふん！下々の女に酌なんかされたら、お酒がまずくなるじゃないの！」

しかし、キュルケに促されたギーシュが跳ねるような調子で歩き出したので、仕方なくモンモランシーは後を追いかけた。

「ちょっと！待ちなさいよ！こんなところに置いていかないで！」

一行は、魅惑の妖精亭へと向かった。

「いらっしやいませ~~~~~！」

店に入ると、背の高いぴったりとした革の胴着を身に着けた男が迎ええた。

「あら！こちらはお初？しかも貴族のお嬢さん！まあ綺麗！なんてトレビアン！店の女の子が霞んじやうわ！私は店長のスカロン。今日はぜひとも楽しんでってくださいまし！」

そう言つて身をくねらせて一礼。

初めてみるけど…強烈だな…。

キモい店長だが、とりあえず綺麗と誉められたのでモンモランシーの機嫌がよくなった。
髪をかきあげ、

「お店で一番綺麗な席に案内して頂戴」

と、すましていった。

「当店はどのお店も、陛下の別荘並みにピカピカにしておりますわ」

スカロンは一行を席へと案内する。

一行が席に着くと、桃色がかったブロンドの少女が注文を取りに来た。

慌てた調子で、咄嗟にお盆で顔を隠す。

全身が小刻みに震え始めた。

「何で君は顔を隠すんだね？」

ギーシュは不満げに問いかけた。

そりゃまあ隠したくもなるわな。知り合いが来てたのなら尚更だし。

その少女は答えずに、身振り手振りで「注文を言え」と示す。

その少女の髪の色と身長で、キュルケがすぐに何かに気付き、この夏初めて見せる特大の笑みを浮かべた。

「このお店のお勧めは何？」

お盆で顔を隠した少女は、隣のテーブルを指差す。

そこには蜂蜜を塗って炙った雛鳥をパイ皮につつんだ料理が並んでいた。

「じゃあ、この店のお勧めのお酒は？」

少女の傍のテーブルで給仕をしている女の子が持った、ゴーニユの古酒を指差す。

そこでキュルケは、驚いた声で言った。

「あ、使い魔さんが女の子口説いてる」

少女はお盆から顔を出し、きつ！とした目つきでキヨロキヨロと辺りを見回した。

キュルケとアデルを除く一行は現れた顔を見て、大声を上げた。

「……ルイズ！？」「……」

キュルケがにやにやと笑っている事に気付いたルイズは、自分が騙された事に気付き、再びお盆で顔を隠した。

「手遅れよ。ラ・ヴァリエール」

「私、ルイズじゃないわ」

震える声でルイズが言う。

つかヴァリエールって言うてるのに、何故ルイズじゃないと答えるのだろう？

キュルケはその手を引っ張り、テーブルの上にルイズを横たえる。

キュルケが右手を、ギーシュが左手を掴む。

タバサが右足を、モンモランシーが左足を掴んだ。

アデルは呆れながらそれを見ていた。

動けないルイズは横を向いて、わなわな震えながら言った。

「ルイズじゃないわ。離して」

「何してるの？あなた」

ルイズは答えない。

ぱちん！とキュルケが指を弾くと、タバサが呪文を唱えた。風の力で空気がルイズの体に絡みつき、操った。ルイズはテーブルの上に正座させられた。

「な、なにすんのよ！」

再びキュルケは指を弾いた。
無言でタバサは杖を振る。

ルイズを操る空気の塊は、見えない指となってルイズの体をくすぐり始めた。

「あはははは！やめて！くすぐりたい！やめてってば！」

「どんな事情があつて、ここで給仕なんかしてるの？」

「言つもんですか！あはははははは！」

空気の指が散々にルイズをくすぐりまくる。

それでもルイズは口を割らなかつた。

「キュルケ、その辺にしまつて」

「はい」

ルイズはぐったりとしてしまった。

取り合えず分かつてるからネタ晴れを言ってみた。

「どうせあれだろ？前に王女さまの…いや、今は女王様の密命でアルビオンに行つてみたいに、今回は女王の風評などについての身辺調査の為に街に来たが、ルイズの貴族としてのプライドが災いして金が足りないと言ひ出して、手っ取り早く金を稼ぐ為にカジノで人稼ぎでもしようとしたがスツてしまい、路頭に迷つてたところをここの店長さんに拾われて、ここで働いてるんじゃないか？」

「何でピッタリ当ててるのよ！？…っは、そんな訳…ないでしょ…」

「ルイズ、もう遅いわよ…」

今のルイズは、秘密がバレたにも拘わらず誤魔化そうとしていた。

「な〜んだ、そんな事だったの。隠す程の事じゃ無いじゃない」

「じよ、女王陛下の依頼だって！ ど、どうして僕に声を掛けてくれなかったんだね！？」

「……………」

キュルケは興味を失った様に頬杖をついた。

ギーシュの抗議は、モンモランシーが彼の頭をテーブルに叩きつけて黙殺された。

タバサはアデルの名推理に感動していた。

キュルケはつまらなさそうに、メニューを取り上げた。

「早く注文言いなさいよね」

「これ」

メニューを指差して、キュルケは言った。

「これじゃわかんないわよ」

「ここに書いてあるの、とりあえず全部」

「は？」

きよとんとして、ルイズはキュルケを見つめる。

「いいから全部持ってきなさいな」

「お金持ちね…はあ、うらやましいわ」

ため息混じりに呟くルイズに、キュルケが言った。

「あら？あなたのツケに決まってるじゃないの。ご好意はありがとうございました。くお受けしますわ。ラ・ヴァリエールさん」

「はあ？寝言言わないでよ！なんであんたに奢んなくちゃならないのよ！」

「学院の皆に、ここで給仕やってる事言っわよ」

ルイズの口が、あんどりと開いた。

「言ったら……ここ、殺すわよ」

「あらいやだ。あたし殺されたくないから、早いとこ全部持つてきてね」

ルイズはしょぼんと肩を落とした。

「後で俺が払つとくから……元気出せ」

「……ありがと」

さすがに哀れに思えてきたからな。

ルイズはよたよたと厨房へと消えていった。

ギーシュが首を振りながら、

「君はほんとに意地の悪い女だな」

と言えば、キュルケは嬉しそうに、

「勘違いしないでいただきたいわ。あたしあの子嫌いな。基本的には敵よ敵」

そう言った。

タバサは先程の魔法で乱れた髪とマントを整えていた。

「あらタバサ。あなた見栄えを気にするようになったの？嬉しい変

化ね。やっぱり恋をすると変わるわね」

タバサを見たキュルケが嬉しそうに言った。
タバサは頬を少し染めて俯いた。

「ちよつとちよつと！タバサが恋したってホント？」

モンモランシーが興味心身といった顔で尋ねる。
女って、どうもこの手の話は敏感だな。

「ええほんとよ。タバサのこの反応見れば分かるじゃない」

キュルケがタバサの頭を撫でながら言う。

「それで相手は！？」

モンモランシーが尋ねたとき、店に新たな客が現れた。

見た目麗しい貴族たちであった。

広いつばの羽根つき帽子を粹に被り、マントの裾から剣状の杖が覗く。

王軍の仕官たちであるようだった。

きな臭い昨今、軍事訓練に明け暮れていたのだろう。

陽気に騒ぎながら入ってくると、席について辺りを眺め始めた。

口々に店の女の子について品評を始める。

いろんな女の子が入れ替わり立ち代り酌をしたが、どうにもお気に召さない様子であった。

1人の士官がキュルケに気付き、目配せをした。

「あそこに貴族の子がいるじゃないか！僕たちと釣り合いが取れる女性、やはり杖を下げていないとな！」

「そうとも！王軍の士官様がやっと陛下に頂いた非番だぜ？平民の酌では慰めにならぬというものだ。君」

口々にそんな事を言いながら、こっちに聞えるような声で誰が声をかけにいくのかを相談しあう。

何か腹立つ連中が話しかけてきたな…。

アデルは密かに苛立っていた。

キュルケはこういう事に慣れっこなのか、平然とワインを口にして
いる。

しかし、ギーシュなどは既に気が気ではない。

一応自分は男で連れの女性をエスコートする立場なのだが、連隊長か親衛隊の隊員を務めているような貴族相手に、強気になれよう筈もない。

叩きのめされるのがオチだろう。

そのうちに声をかける人物が決まったらしい。

1人の貴族が立ち上がる。

20歳を少し超えたばかりの、なかなかの男前である。

自信たっぷり口ひげをいじりながらキュルケに近づくと、典雅な仕草で一礼した。

「我々はナヴァール連隊所属の士官です。恐れながら美の化身と思しき貴女を我らの食卓へとご案内したいのですが」

キュルケは其方の方を眺めもせずに答える。

「失礼、友人たちと楽しい時間を過ごしているところですの」

仲間たちから野次が飛ぶ。

ここで断られては面子が保てないと思ったのだろう。熱心な言葉で貴族はキュルケを口説きにかかる。

「そこをなんとか。まげてお願い申し上げる。いずれは死地へと赴く我ら、一時の幸福を分け与えてはくださるまいか？」

しかし、キュルケはにべもなく手を振った。

貴族は残念そうに仲間たちの元へと戻っていく。

「お前はモテない」と言われ、その貴族は首を振る。

「あの言葉のなまりを聞いたかい？ゲルマニアの女だ。貴族と言っても、怪しいものだ！」

「ゲルマニアの女は好色と聞いたぞ？身持ちが硬いなんて珍しいな！」

「おそらく新教徒なのであろうよ！」

酔いも手伝ってか、悔し紛れに貴族たちは聞こえよがしに悪口を言い始めた。

「あーあ、振られた腹いせに陰で女の悪口か？ちっちえ貴族様だと」

アデルはわざわざ相手に聞こえる様な声で言った。

それを聞いてたタバサはコクリと頷き、キュルケは笑い、ギーシュとモンモランシーは青ざめていた。

そして、横目で事の成り行きを見守っていた他の客や店の女の子たちが、一斉に静まり返った。

貴族たちはアデルの言葉に腹が立ったのか、席を立った。

「聞き捨てならないな、この貴族崩れの傭兵風情が！」

「我らはナヴァール連隊の騎士、貴様のような没落貴族に言われる筋合いは無い！」

貴族たちはアデルを罵倒し始めた。

「はっ？自分好みの女性がないからって、貴族の女性に手を出す様な奴らに言われたくないな」

アデルは気にせず返事した。

それで更に苛立ったのか、貴族たちは杖を抜いた。

「我らは貴族であるが、軍人でもある！かかる侮辱、もう容赦せんぞ！参られい！」

表へと士官たちは顎をしゃくった。

ギーシュは事の成り行きに震え、モンモランシーは我関せずといった顔でワインを飲んでいた。

アデルはすっと席を立ち、タバサの方を見た。

「タバサ、俺のは肉料理とワインを注文しといてくれ」

「分かった」

「先に頂いてるわ」

「って君たち！？何そんなに落ち着いているんだい！？」

アデルとタバサとキュルケもやり取りに突っ込むギーシュ。

「へーきへーき、どうせすぐ終わるから」

「（コクリ）」

「んじゃ片付けて来るわ」

アデルは貴族たちについて行った。
一分後。

「お待たせ」

「「早っ！！？」」

アデルがすぐに戻ってきた事に思わずハモリながら突っ込んだギーシュとモンモランシー。

「あら、もう片付けたのアデル？」

「あの程度の連中じゃ、一分でも長すぎるぐらいだったよ」

「「……………」」

アデルの規格外さに言葉も出なかったギーシュとモンモランシーだった。

「あんたすごいな。一瞬で片が着いちゃったな」

店内は拍手に包まれた。

えっ？戦闘描写を略すなって？

まず、立ち会った時に相手が、

「没落貴族が、せめてものハンデだ。先に仕掛けて来るがいい」

と言ってきたので、遠慮なく加速装置で一瞬の内にボコボコにして、近くのゴミ捨て場に貴族たちの頭を突っ込ませた。

容赦無いだろと思ってても気にしないで下さい。

そして乾杯したら、

「ふぁぁぁあゝ」

キユルケは大きくあくびをした。

「飲んで喋ったら、眠くなっちゃったわ」
「そう、なら、帰りなさい」

冷たくルイズが言う。

「面倒だから泊まるわ」

「お金は？」

「ご馳走さま」

「ふざけないで！アンタどれだけ飲み食いしたと思ってるのよ！」
「学院の皆にバラすわよ」

ルイズは黙って俯いた。

「後で俺が纏めて払っとくから、元気出せ。なっ？」

「…ありがとう」

ルイズは少し嬉しそうな顔で礼を言った。

その後キュルケとタバサは部屋に行き、ギーシュとモンモランシーも泊まる事になった。

そして、昼間の貴族たちが大勢押し寄せて来たが、昼間と同じくあつと言う間に片付けて、タバサ達のいる部屋へと向かった。

翌日、学院の方へと戻った。

魅惑の妖精亭で騒動（後書き）

リッシュモンの件は関与しませんので、飛ばします。
次回は久々のタバサの冒険、極楽鳥をハンティングです。

タバサの冒険 極楽鳥編（前書き）

時系列がごっちゃになってますが、気にしないで下さい。お願いします。

投稿するのになんまり遅くなってしまいました。

タバサの冒険 極楽鳥編

相変わらずイザベラは腹立つ真似しかしない女だな。
タバサに手掴みで飯を食わせようとしたのだからな。

原作を知ってる俺としては、木彫りの箸を作ってタバサにあげて、
出された料理を箸を使わして何とかなった。

今回の任務は極楽鳥のタマゴを取ってくる事。

何でも、一年に二度タマゴを生む極楽鳥のタマゴを今食べたいから
だと言っ。

何が「たかが私の美食の為に」だ！

俺達は極楽鳥のいる火竜山脈に向かっていた。

今の装備はラハールの剣、エルダースピア、ドレイクハンター、夢
氷黄泉路、精霊の杖。

シルフィードの話だと、今の時期に極楽鳥のタマゴを取りに行くの
は自殺行為だとか、子育て中の火竜は大変気が荒くて獰猛な為、韻
竜でも容赦しないなど、嫌がる様に言っていた。

そんなこんなで火竜山脈に着きました。

…正直に言っと…ものすごく暑い！まるで蒸し風呂にいるみたいだ
…。

さすがに暑過ぎるから、精霊達に頼んで、暑さを中和してくれたけ
ど、それでも暑かった。（解りやすく言っと、快晴の猛暑から、曇
りの猛暑になっただけ）

尚、空から行ったんじゃ火竜達に見つかってしまっから、麓から登
って行くしか無かった。

「…この姿で…山登りはごめんなのね…」

シルフィードは人間形態になって愚痴を言っていた。
何でも竜のままじゃ目立ち過ぎるから、人化させたという。

登山道の無い切り立った崖やら巨大な岩石がたくさんあるから、思う様に進めずにいた。

体力に自信のあるアデルはまだ大丈夫だが、アデルより体力が劣るタバサは少し疲労していた。

するとシルフィードがわめいた。

「まったく、あの最悪姫の食い意地つたらないのね！たかが自分の食道楽の為に、この韻竜のシルフィにこんな苦勞をさせてからに…」

1リーグを進むだけで半日はかかった。

15分進んで5分休憩の繰り返しで進むだけでも、かなり時間がかかった。

しばらく歩いてると、瑠璃色に光る鳥の羽があるのを見て、シルフィードは興奮していた。

「きゅい、あのh「待てシルフィード！（小声）」ねぎゅい！？」

シルフィードが極楽鳥の羽を見て叫ぼうとしたが、アデルに口を塞がれた。

「お兄さま、何するのね！？」

「ここは火竜の巣だぞ？」

「はっ！？そうなのね、うっかりしてたのね…」

アデルの一言で、シルフィードは謝った。

その後も、灼熱地獄を思わせる様な暑さに耐えながら進んで行つた。しばらく進んだ後、アデルとタバサは腰を屈んで岩の窪みを覗き始めた。

ある程度時間が過ぎたが、極楽鳥の巣はなかなか見つけれなかった。

シルフィードはそわそわしていた。いつ何時、火竜が姿を現さないと限らないから。

「…お姉さま、お兄さま。今日のところは諦めるのね。また明日にするのね。きゅい」

「もう少し探してからな」

するとタバサは、

「あつた」

見つけた様だ。

「ほんと？ほんとなのね？」

アデルとシルフィードが駆け寄り、タバサが指差す岩の隙間を覗き込んだ。

岩の欠片で出来たお椀の様な形の極楽鳥の巣がそこにあつた。動物の毛が敷き詰められた中には、瑠璃色に輝くタマゴが三つ、キラキラと輝いていた。

「すごい！ほんとにあつた！きゅい」

シルフィードは嬉しさのあまり、腰を左右にフラフラと振り始めた。タバサはタマゴに手を伸ばそうとしたが、届かなかった。

「俺が代わりに取るよ」

タバサは照れた様に頷いた。
アデルがタマゴに手を出そうとしたら、極楽鳥が戻ってきた。

極楽鳥はタマゴを守る為に、アデルの頭にクチバシで突きまくっていた。

「痛っ、いででででっ!？」

何とか極楽鳥を振り払おうとするアデル。
するとタバサが、魔法で極楽鳥を追っ払ってくれた。

「ありがとうタバサ」

「大丈夫？」

「ああ」

何か良い雰囲気になってる様な感じになっていたが、

「ビヤアビヤア！」

「煩い鳥なのね…」

極楽鳥が急に叫び出した。

「「!？」」

アデルとタバサは嫌な予感を感じたのか、周りの靄の方を凝視した。

「ん？お姉さま、お兄さま、どうしたの？早くタマゴを取って帰るのね」

シルフィードの眩きと同時に、靄の中から巨大な影が出てきた。
タバサとアデルは咄嗟にそれぞれの武器を取り、シルフィードを魔法で突き飛ばした後、アデルはタバサを押し倒して岩の陰に身を潜めた。

『ゴオオオオオオオオオッ!!』

タバサ達がさっきまでいた場所が炎に包まれた。

「火竜!？」

シルフィードが叫んだ。

霧の中から出て来たのは、全長15マイル程の大きな若い火竜だった。

でけえ…まるで、妖精の尻尾に出てくるドラゴンみたいだな…。一応、あれくらいの怪物と渡り合える弓、ドレイクハンターを持ってるとは言え、正直これで倒せるのかな？

火竜は上空で反転すると、再びタバサ達がいる方へと向かっていった。

その瞬間、タバサとアデルは岩場の隙間から躍り出た。

「お姉さま!お兄さま!」

俺は一緒に出て来たタバサを守りながら弓を構えた。

矢は俺の力で出してる為、いくらでも使えるのだ。

その矢で射るつもりだったが、タバサが先に氷槍ジャベリンを放っていた。

だが、火竜の息吹ブレスがそのジャベリンを一瞬で蒸発させた。

「!？」

「うわ…ジャベリンが一瞬で…」

尚も襲ってくる火竜のブレス。

くそっ、今放つてもこっちが先に焼かれる、だが…横に逃げようにももうそこまで来てる以上避け切る事は最早不可能状態になってい

た。

こうなったら、せめてタバサだけでも！

「お姉さま！お兄さま！逃げてなのね！」

地面に伏せていたシルフィードが叫んだ。

アデルは咄嗟にタバサを庇うように抱き、ピンポイントバリアを背中に展開させた。

火竜のブレスはアデルの背中に直撃した。

「グアアアアアアアアアアッ！！？」

暑い熱いアツイあついATUE！！？

訳が解らなくなるぐらい熱過ぎるってこの炎！？

アデルとタバサは、火竜のブレスによって吹き飛ばされた。
アデルが気を失いかけた時だった。

「キャアアアアアアアアアアッ！！？」

タバサの悲痛の叫びが木霊した。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

タバササイド

私は…自分の行動に初めて後悔した…。

あの時、アデルが弓を構えて攻撃しようとしてた時に、私が勝手に

彼を援護しようとジャベリンを放った。

でも、あの火竜は…私のジャベリンを難なく蒸発させてしまった。火竜の放ったブレスは勢いをつけてこっちに向かってきた。

もうダメと思った時に、アデルが私を覆う様に抱き、火竜のブレスが彼の背中を焼き付けた。

勢いに負けて吹き飛ばされた時に、私はアデルの背中を見てしまった。

背中一面にありえないほどの火傷と焼けて黒く焦げた跡を…。

私の援護が…アデルを…こんな目に会わせてしまった…。

彼が攻撃しようとしたのに…私が邪魔したから…？

目の前の現実が信じられないでいるタバサは、

「キヤアアアアアアアアアッ！！？」

悲痛な叫びを上げた。

「アデル…アデル…アデル、しっかりしてアデル！？」

気が動転してるのか、アデルを揺らしているタバサ。

「お兄さま！？」

シルフィードも駆け付けたが、

『ゴオオオオオオオオオッ！！』

火竜が尻尾を振るって、タバサとシルフィードを弾き飛ばし、地面へと叩き付けられた。

「…アデル…」

タバサがアデルの方を見て眩き、気絶した。

しばらく気を失っていたが、不意に何かが聞こえてきたので、目を覚ました。

「…あつ、気が付きました？」

目の前にいたのは、見知らぬ女性だった。

良く周りを見ると、ここはテントの中の様だ。

右隣を見ると、寝息を立てながら眠っているシルフィードがいた。そして左隣を見ると、若干うなされてるアデルの姿があった。

「アデル！？」

アデルの体をよく見ると、手当をした後があった。

恐らく目の前の女性が手当てをしてくれたのだろう。

「貴女が助けてくれたの？」

「そうです。あなた達が火竜と戦うところをちよつと離れた岩陰から見てたんです。それにしても無謀ですわ…人の身で火竜と対峙するなんて…」

「どうやって助けてくれたの？」

「弾き飛ばされるのが見えたから、急いで音を立てて火竜の注意を逸らしたんです。火竜が空を旋回している間に忍び寄って、風魔法であなたがたを運んだんです」

という事は、この人はメイジという事になる。
すると、

「お姉さまぁーーーー！！？火竜がぁーーーー！！？きゅー
ーーーーー！！！」

シルフィードが目を覚ましたと同時に絶叫した。
すると少女は、慌ててシルフィードの口を塞いだ。

「しっ！音を立てないで下さい！このテントは魔法で岩に偽装して
るんです。音で火竜に気付かれてしまいます！」

「んぐんぐ（コクコク）！」

「貴女はここで何をしているの？」

私たちを助けてくれた女性はリユリユというらしい。

彼女はガリア西部にあるルシユンという街の行政官の娘らしい。

彼女の趣味は美食で、美味しい食べ物を求めて外国に行くぐらいの
食通との事でシルフィードが何故か納得していた。

自分で料理をしたくても、貴族の娘が料理を作るなんて許されない
事だから、わざわざ家を出てまでして食を探求し続けた程だという。
そんな彼女にも夢があると言う。

それは、美味しい物は全て貴族が味わうものじゃなく、万民に味わ
うものだ。

その言葉にシルフィードは感激していた。

リユリユがここにいる理由は、私たちと同じ極楽鳥のタマゴが目当
てだという。

何でもあれは世界七大大味の一つに数えられているという。

一か月も居ながら手に入れないのは、火竜が邪魔しているとい
う。

極楽鳥は敵が近づくと火竜を呼ぶので、迂闊には近づけないでいた。
尚、親鳥を狙ったらで問題がある、辺りにいる極楽鳥と火竜がたく
さん集まってくるらしい。

しかも、一生に一度しか伴侶を選ばないから、殺したらずっと一人

になると言って何も出来ないでいたとリュリュは言っていた。結構のんびり屋みたいだなと思った。

やはりタマゴを手に入れるには、火竜をどうにかするしかないと思った。

しかし、並大抵の方法じゃ倒せない事はさっきの事で解っていた。アデルなら何とかなかったかも知れないけど、この状態では動けそうにないみたいだし、安静にしていけないから。

しばらく悩んでいると、リュリュが何か思い付いたみたいだ。

「…こういうのはどうでしょうか？どちらか片方が音を立てて囃になるんです」

現状それしかないみたいだから、この案で決行する事にした。

翌日、火竜が三頭になっていた。

どうやら昨日の内に呼び出していたらしい。

タバサは囃として火竜を引き付けて、氷の嵐で視界を眩ませて風魔法で穴を掘って身を隠し、火竜達を撒いた。

諦めたのか、火竜達が去ってしばらくすると、地面から出てきたタバサは、極楽鳥のタマゴの方に向かうと、

「きゃあああああ！！？たーすーけーてー！！？」

「プレスをはかないでなのね！！？シルフィに熱い息吹をかけないでなのね！！？」

一際起きたい火竜が二人を追いかけていた。

タバサはこっそり近づき、さっきと同じ方法で身を隠した。

…作戦は失敗に終わった。

テントに戻ると、二人はすっかり諦めムードが高まっていた。

「無理なのね…」

「やっぱりダメなんですかね…この季節の極楽鳥のタマゴは…。火竜の数を侮っていました…この季節は繁殖の為にハルケギニア中の火竜がこの山脈に集まってるってのは、ホントの事だったんですね…」

二人は愚痴り始めていた。

私は呼吸が落ち着いて来てるアデルを見ていた。

「お姉さま、お兄さまの様子が気になるのは解りますけど、これからどうするのか考えるのね」

「！」

「まあ！」

シルフィードの言葉に顔を赤くするタバサ。

そんなタバサを見て照れ出すリユリユ。

すると、

「何…この状況？」

声がした方向を見ると、いつの間にか目を覚ましたアデルがこっちを見ていた。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

アデルサイド

あの火竜…次遭ったら狩ってやるからな！

アデルが意識を取り戻したと同時にそう考えた。

すると、シルフィードはタバサの方を見て何故かニヤニヤしてて、タバサは赤くなってて、全然知らない子（多分リリユだな）がタバサの方を見てて何か妄想してた。

「何…この状況？」

アデルは思わずそう言ってしまった。

「アデル！」

タバサは思いつきりアデルに抱きついた。

「ちよつ、おいタバサ！？」

「きゅいっ！」

「まままあ！」

「良かった…目が覚めて…」

「えっと…ごめんタバサ…」

「うっん…謝るのは私の方…私があの時、あなたの邪魔をしなれば…」

タバサは、自分の所為でアデルが怪我をしたと後悔していたが、アデルはタバサにデコピンをかました。

「痛っ！？」

「あのさタバサ、もしかして…自分が勝手に攻撃したから俺がこうなったと思ってるのか？」

「だって…」

「俺は元々、タバサに援護をお願いしようとしたんだ、それが早まっただけだ。俺が怪我したのは、火竜のプレスが予想よりも強力だ

ったからと、タバサを守りたかったからだ」

「!？」

「「(ニヤニヤ)」」

「でも…」

「考えてもみる、ジャベリンを一瞬で蒸発させる様な強力なプレスを浴びたら、タバサは一瞬で黒焦げだろうが。それに、俺の場合は普通の奴とは違うから耐えられると思ったからな」

一応リユリユがいるから、自分が悪魔という事は悟られない様に言った。

「だから、タバサが気に病む事は無いんだよ」

「…ありがとう」

少し元気になったタバサ。

アデルとタバサのやりとりを終始ニヤニヤしながら見てたシルフィードとリユリユ。

つか、何で二人はニヤニヤしてたんだ？

翌日、アデルは火竜を倒すと言ってきた為、シルフィードとリユリユは猛反対してたが、タバサが許可してくれた。そのかわり、タバサが「私も一緒に戦う」と言い出したので、今アデルとタバサは、火竜と対峙していた。

「行くぞタバサ！」

「うん！」

アデルは弓を構えた。

「スプラインアロー!!」

アデルの放った矢が火竜の体を挟った。
すげーなこのドレイクハンターは。火竜に効いているな。

「タバサ、援護を！」

「分かった。ウィンディ・アイシクル！」

タバサも攻撃を仕掛けた。

怯んだ火竜に攻撃を繰り出した。

「喰らえ！氷刃、瞬雪斬！！」

アデルは夢氷黄泉路に悪魔の力を宿し、火竜に斬りかかった。
アデルは火竜を通り過ぎた数秒後、火竜は真つ二つになった。

「こんなもんかな」

「すごいのお兄さま！」

「火竜を真つ二つって、すご過ぎ！？」

「アデル、次来る！」

「了解！」

次々とやってくる火竜を全て蹂躪していったアデルだった。

そして、最後（周辺にいた内で）の一頭となった火竜と対峙していた。

「こいつで最後か。タバサ、一気に行くぞ！」

「うん！」

「いっけえ！閃走・重ね十字！！」

アデルはラハールの剣で縦一閃を放ち、火竜に当たる直前で火竜に近づき、放った縦一閃と同時に横一撃を繰り出して、十字の閃撃を

お見舞いした。

「アイス・ストーム!!」

タバサが氷の嵐で火竜の視界を眩ませた。
氷の風…もしかして、あれが出来るかも。

「タバサ、俺の剣にアイス・ストームを掛けてくれ!」

「?…分かった!」

タバサがアデルの剣目掛けてアイス・ストームを放った。
よし、行くぜ!

「秘奥義、乱れ吹雪の舞イイツ!!!」

アデルは火竜の周りを掛け走り、残像が残るくらい走り、その中でいくつものジャベリンを放ち、火竜にぶつけて上空へと吹き飛ばし、四人となったアデルはそれぞれ回転し、氷の竜巻を作り出して火竜を飲み込んだ。

結果、氷の槍に突き刺さった状態で氷漬けになった火竜の姿だった。

「火竜が氷漬けになってますね…」

「きゅー! お兄さま、最高なのねー!」

「すごい攻撃だった」

「これで火竜は片付けたな。後は極楽鳥のタマゴを手に入れるだけだ」

そして、火竜という後ろ盾が無くなった極楽鳥は、タマゴをアデル達に奪われるのを黙って見ている事しか出来なかった。

それから、リュティスに向かう途中、皆で極楽鳥のタマゴを食べよ

うと焼き卵風にして食べた。

「「「」……………」

すごく…微妙な味がした。

「不味い…」

タバサ…ここは思っても口に出しちゃダメだからね…。

とりあえず、これは元々あのうるさい王女にやる物だったから、別に良いか。不味いって言うても聞かぬ存ぜぬを貫くか。

タバサの冒険 極楽鳥編（後書き）

新作の「ゼロのロストマジック使い」は、10月入ってから投稿します。

閃走・重ね十字って、ダイの大冒険のアバンストラッシュクロスXに似てるなって思ったのは自分だけですか？

次回は寄り道でミノタウロス退治です。

タバサの冒険 ミノタウロス編（前書き）

極楽鳥の後に発生しました。

申し訳ございません。かなり遅くなりました。

タバサの冒険 ミノタウロス編

俺達は極楽鳥のタマゴについての任務を終えて学院に帰るところだったのだが、シルフィードがお腹空いたと駄々こねたので近くの街で食事をする事になった。シルフィードがうっかりタバサがガリア騎士だと言う事を喋ってしまい、タバサにどつかれた。

食事中、近くにいた老婆がタバサの下へと近づき、泣きながら跪いた。

「騎士さま！騎士さまにお願いがありますのじゃ！」

「お願い？お腹が空いてるのね？じゃあ一緒に食べるのね。きゅい」

おいおい…。

「違います違います！？私は物乞いではありませんのじゃ！騎士さまをこれと見込んでお願いしたい事がありますのじゃ！」

老婆は必至でタバサに懇願していたが、店の人が野次を飛ばしてきたので、落ち着かせて話を聞いてみた。

「ミノタウロス？」

老婆は、自分の居たエズレ村で起こった悲劇を語った。

話を聞いてみると、最近村の近くの洞窟にミノタウロスと呼ばれる牛頭の怪物が住み着き、若い娘を毎月一人生贄を要求しているとか、しなかった場合は村人を皆殺しにするとかで脅迫されてるらしい。一応内容は知ってるが、改めて聞くと違和感があるな。怪物がそんなの要求する知識があるかよ。

「騎士さまに是非とも、あの罰当たりな怪物を退治して欲しいのでございます！」

老婆は泣きながら訴えたが、店の人達は諦める様に老婆に言っていたが、

「何処？」

「え？」

老婆は、タバサの言った事に戸惑った。

「村の場所が何処かってタバサは言ってるんだ」

アデルがフォローするとタバサは頷いた。

「おおお、ありがとうございます！ありがとうございます！」

「お姉さま、お兄さままで！？」

シルフィードはきゅいきゅい喚いていた。

そして老婆と一緒に店を出た。ちゃんと勘定は払いました。

老婆、ドミニクは道すがら自分たちの現状を話していた。

どうやらこの辺りの領主はナシのつぶてらしい。

約3時間後、鬱蒼と茂る森を背後に抱いた、小川に挟まれた小さな村に着いた。

なるほど、畑だけの小さな村なら領主に見捨てられたと言っても納得がいくな。

「騎士さまを連れて来たよ！」

ドミニクさんの声で村人たちは歓声を上げた。

が、タバサを見た途端にがっかりした表情になっていた。

「なんでえ…子供かい…」

「こ、子供といったって、騎士さまにはかわるまいよ！」

「そっちの兄ちゃんは何でい？」

「騎士さまの従者だよ」

「そっちのあんちゃんだけならまだマシだと思ったんだけどもよお…」

村人たちはあからさまに落胆し、家へと帰ってしまい、ドミニクは深いため息をついた。

「お姉さま、お兄さま、ほら、村人もああ言っているし、今回ハ「貴女の家はどこ？」ってお姉さま！」

「こっちです。いやはや、村人たちの無礼をお詫びします…気を悪くならんで下さい。皆必死なんです…」

タバサ達は、村はずれにあるドミニクの家に向かった。

家に着くと、中には可愛らしい少女とその母親が抱き合って泣いていた。

すると少女は、ドミニクが帰って来た事に気付いた。

「お婆ちゃん！」

「ジジ、もう大丈夫だよ。ほら、騎士さまを連れてきたからね」

ジジと呼ばれた少女、栗色の長い髪に、茶色の瞳がくりくり動いてる17歳ぐらいの娘だった。

なるほど、確かにミノタウロスじゃなくても取って食べたくなるよ

…ってタバサ！？何で凄まじい目つきで睨みつけるの！？

するとジジはアデルに近づいた。

「わあ、カッコイイ騎士さまです！」

「いや、俺じゃなくてこっちが騎士だが？」

アデルはタバサの方を指した。

一瞬戸惑った顔をしていたが、直ぐにタバサに興味が出たのか、杖をまじまじと見てた。

すると母親の方の女性がタバサの足元にすりついた。

「ありがとうございます！どうかこの娘を救って下さい！」

その晩、ドミニクさん達の家に歓待された。藁にもすぎる勢いとは良く言ったものだ。

ミノタウロスの要求状を見せて貰った。

内容は、「次に月が重なる晩、森の洞窟前にジジなる娘を用意するべし」と血文字で荒々しく書いているが、ちゃんとした内容が書かれていた。

しかもこれはガリア語で書かれてる。どう見たって人間が書いたものだなこりや。

ドミニクさん達の話によると、十年前にも似た様な事があつたらしく、ジジの姉が生贄にされたとか、当時現れた騎士、ラルカスによってミノタウロスは退治されたと言っていた。

ジジの父親はタバサの魔法を見せてくれと頼まれて、ジャベリンを見せた。俺はメガファイアを見せたら、感嘆な声で「ミノタウロスを退治してくれ」と改めてお願いされた。

タバサはジジの父親に質問をした。

「十年前も、娘の指定はあつた？」

「いえ…十年前は、ただ若い娘と書いてあつた様に思いますが…だからくじ引きで決めたのです。それが何か？」

「何でもない」

なるほど、これで確定したな。

部屋は家族全員で寝る為、一つしか無かったので、俺は外で寝ようとしたら、タバサに無理矢理入れられた後、抱き着く様に寝る体制を取っていた。

そしてジジ達が寝静まった後、シルフィードは寝付かないのか、俺とタバサをつついてた。

それでシルフィードは小声で話しかけてきた。

「ねえお姉さま、昼間は黙っていたけれど、今度という今度は言わせて頂きます。ミノタウロスがどれだけ危険なのか、戦った事の無いお姉さまは知らないのね」

「知ってる」

「何がどう危険なのか言ってみるのね」

「中々死なない」

「おやおや、良く知ってるじゃないのね。褒めてあげるのね」

シルフィードは、タバサの頭をぐりぐりと撫でた。

「そう。あいつら生命力が尋常じゃ無いのね。首を刎ねても動き回るのね。でも、それだけじゃないのね！皮膚が鋼鉄みたいに固いのね！ちよつとやさつと傷付けたぐらいじゃビクともしないのね！」

「分かってる」

「分かってないのね。お姉さま、自分の系統ご存知？風、そう風なのね。お姉さまは風を刃や矢に変えて相手を切り刻むのが得意なんだけど、その刃がミノタウロスにはほとんど通用しないのね！いくらお兄さまがいるからって、立ち向かうのは自殺行為なのね。きゅいきゅい」

俺ならって、まあ多分大丈夫だけど…。
すると、誰かがシルフィードの肩を叩いた。

「で、でで、出たのね!？」

「わ、私です…」

声から察するにジジのようだな。

「騎士さま…申し訳ございません。良ければ、このままお帰りにな
って下さい。私の為に、誰かが犠牲になるのは耐えられません」
「貴女一人の問題じゃない」

タバサの一言で黙ってしまうジジ。

「寝て」

「…騎士さまはすごいですね。こんなにお小さいのに…魔法ってや
っぱりすごいんですね。完全無欠の奇跡の技なんですね…」

ジジは羨ましそうにタバサへと呟いた後、自分の寢床に向かい、寢
息を立てた。

タバサは小声で呟いた。

「魔法は…完全じゃない…」

そう呟いた後、静かに寢息を立てた。

「お兄さま、起きてますか？」

「何だシルフィード？」

シルフィードが何か質問してきた。

「こうなったらお兄さまが頼りなのね！お姉さまに何かあったら守ってなのね！」

「ああ、分かってる」

シルフィードは直ぐに横になり、寝息を立てた。

良く直ぐに眠れるな皆、俺なんて寝付き悪い方だからな。

アデルはその数分後、寝息を立てて眠っていた。

翌日、夜八時頃、いつもの様にシルフィードを囿「いつもの様に！？」をして、近くの茂みでタバサと一緒に機会を待った。

ちなみに今のシルフィードは、ジジの服を着せて、髪を栗色に近い茶髪に染めて、指定した場所に縛り付けた。

「あのちびすけ…わたしを何だと思ってるのね。この誇り高き古代種たるシルフィに対する種としての敬意が感じられないのね…いつか噛みついてやるわ。きゅい…」

…何か、シルフィードから呪いの言葉を発してる様な…。

「大いなる意思よ…この可哀想な使い魔を守りたまえなのね…」

とうとう神頼みならぬ、精霊頼みをしたシルフィード。

それから数時間が経った。

ガサガサッ

「「！？」」

「きゅいきゅい！？きゅい！？」

俺達のいる茂みから反対側からの茂みが聞こえてきた。

すると、大きな牛の頭が見えた。

「きゅいーーーーーっ!!?」

シルフィードは悲痛の叫びを上げた。

「なあタバサ、あれどう見ても人間じゃね?」

俺は小声でタバサと話してた。

「手紙の内容から解っていた」

あつ、やっぱり気付いてたみたい。

「いやあああああ!!?怖いーーーー!!?助けてお姉さま、お兄さま!!?きゅいきゅい!!?」

…何だろう、この罪悪感は?

すると、ミノタウロス?はシルフィードを抱えて、来た道へと戻っていった。

「後を付ける」

「おう!」

俺達はそつとミノタウロス?を尾行した。

すると、錆びた短剣を持った奴二人と、銃を握ってる奴二人と長柄の槍を持った奴、計5人がいた。

「人売りみたい」

「ミノタウロスを利用して生贄と称して人を攫い、売りつける…?」か、

手の込んだ真似しやがって」

すると人売り達は、シルフィードを問い詰めていた。

「タバサ、どうやらジジじゃないってバレたみたいだ」

「分かってる」

タバサは杖を構えた。

そして、それぞれの得物をシルフィードに突き付けた。

「今だ！」

タバサとアデルはそれぞれ魔法を放った。

「ぎゃっ!？」

二人は直ぐに人売り達を押さえた。

「動かないで、今度は心臓を狙う」

人売り達は直ぐに戦意を消失した。

「答える、お前達は人売りか？」

「はっ、はい、そうです!？」

どうやら本当に人売りだったようだ。

そして直ぐに縛り付けた。

するとシルフィードが、

「お姉さま、お兄さま、もしかしてこいつらがミノタウロスじゃない

くつて、人間の人攫いという事に気付いていたのね？」

と言ってきた。

「確信は無かった」

「俺は手紙を見て人間の仕業だと思ったぐらいだからな」

「お姉さまも？」

「あの字は、ミノタウロスが書いたにしては整い過ぎていた」

「おまけにミノタウロスが娘の指名をしてたんだ。怪物が人の名前なんていちいち気にしないのに名指しなんて考えられなかったからな」

「若い娘なら誰でも良い筈なのに」

シルフィードはじつと二人を見つめた。

「……お兄さま、またシルフィに黙ってたのね？」

「いや、今回はタバサに話していないぞ!？」

「敵を欺くにはまず味方から」

シルフィードはプルプル震えた。

つかさつきつから後ろにいる奴、いつまで覗き見してるんだよ？

「お姉さまは……絶対良い死に方しないのね。さて、じゃあ誰があの手紙を書いたか言うのね！」

「後ろにいる奴に訊けば良いんじゃないか？」

「……!？」

「きゅい!？」

タバサが後ろを向くと、そこには小さな杖を持った男がいた。

「ラグーズ・イス……危ないタバサ！」！？」

タバサは呪文を唱えようとしたが、男の方が早くに氷の矢を放ってきたので、アデルはラハールの剣で弾いた。

「これはこれは、こんな所で貴族様が何をしておいでなのかな？」

こいつは確か、タバサをイラつかせる奴だったな。

「見たところ、かなりの高貴のようだが、武者修行かね？そっちの勘の良い傭兵も連れて、しかしまあ、随分と間が悪い」

「誰？」

「はは、名前など何年も前に捨てた」

さあて、そろそろブチのめすか。

「そうだな、オル」紅蓮疾風拳！！「グブオウツ！！？」

加速装置＋紅蓮疾風拳で一瞬の内に沈めた。

「あゝ悪い、下らない事を言いそうだったんで、先に攻撃しちまったな」（棒読み）」

「……………」

タバサとシルフィードは、事の結末に啞然としていた。アデルがリーダーらしき男を縛り上げたその時、

「ぎいやあああああ！！？」

「な、何だ！？何だこいつは！？」

縛った人売り達は騒然としていた。

そいつらの目線の先には、大斧を持ったミノタウロスがいた。

「ミノタウロス！？本物じゃねえか！？」

人売り達は足は縛ってなかった為に、我先と逃げ出して行った。

ミノタウロスはタバサ達の方を向いた。

「タバサ！俺の後ろに！」

「待ちたまえ」

「「「！？」」」

ミノタウロスは丁寧な口調で言った。

「…貴方は？」

「そうだな、この姿では私が何者なのか気になるだろうな。まあいい、君達は貴族の様だから説明しよう。こっちに來たまえ」

ミノタウロスは先程の洞窟へと向かい、タバサ達も後について行った。

尚、人売りのリーダーはアデルが背負っていた。

洞窟内に入ると、中は暗かったので、アデルは杖を光らせて松明代わりにしていた。

「君は中々の使い手だな」

「はあ…恐縮です」

ミノタウロスに褒められて少し驚くアデル。

「うわぁ、綺麗なのね」

「こらシルフィード、あんま離れるなよ。その辺土がむき出しで危ないだろ」

「きゅい…」

シルフィードは石英の結晶に近づこうとしたら、アデルに止められた。

「（ん？）」

アデルはちらつとミノタウロスを見たら、何故かほつとしていた。奥に進むと、かなり大きめの机と椅子があったり、鍋やらガラス瓶やら秘薬入り袋とかたくさんあった。

そこは、洞窟の中に作られた実験室であつた。

「貴方は？」

「ラルカスという。元は…いや、今もだが貴族だ」

「ラルカス？ 確か十年前にミノタウロスを退治したって言う騎士の名前…だよな？」

アデルがタバサの方を見たら、コクリと頷いていた。

「ああそうだ。その私がどうしてこんな格好をしているのか気になるだろうな」

ラルカスは十年前に、村人たちの依頼でミノタウロスを退治した。火の魔法で倒したらしい。

不治の病に冒されていたラルカスは、ミノタウロスの生命力に惹かれ、自慢の水魔法を使って脳移植を行った。

結果、病に冒された人間の体を捨て、ミノタウロスという強靱な生命力と精神力を持った体を手に入れたという。

当然タバサ達も驚いていた。つかよく一人で脳移植なんて出来たな。まあ本人は気に入ってるみたいだし、一応目的は果たしたから村に帰る事にした。

ラルカスは他言無用で頼まれた。

村に戻ると、村人たちからの歓声で迎えられた。突きだした人売りのメイジを見たら、散々罵りの声を投げた。

明日には役人に引き渡す事になった。

その夜、村をあげての料理が振る舞われていた。と言っても、貧しい村の為、大したものではなかった。でも、気にしない事にした。

「いやあ、お小さいなんて言って大変失礼しました。しかし、元貴族がミノタウロスを騙って人攫いを企てるとは……」

村長がそう言って何度も頭を下げていた。

すると村の一人が縛られた人売りのメイジに近づいた。

「おい、向こうの村や街の近くで最近子供の誘拐が流行ってるが、それも全部おめえの仕業だろ？」

「えっ？ いや、知らない、俺じゃない！俺はつい一週間ほど前にこの辺りに流れ着いたんだ！」

「嘘をつけ！ まあいい、お上にきっちり取り調べてもらえばいいだけの話さ」

「ほんとだ！十年前のミノタウロスの話を聞いて、それで今回の計画を立てたんだ！嘘じゃない！」

それを聞いていたシルフィードは、

「まったく、元貴族だっていうのに、潔くないのね」
「そうだな」

まあラルカスが真犯人だって事は解ってるが、ここはシルフィードに同意しないとな。

「お姉さま？」

シルフィードは、タバサが何か考え込んでるみたいだな。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

タバササイド

私は気になった。

翌日、ラルカスのいた洞窟を調べようと思った。

シルフィードは連れてるが、アデルは村に残してきた。というより、しばらく休んでいた方が良くと思ったから。

彼は数日前に火竜のブレスの直撃を喰らっていたから、本来はもっと休ませた方が良くと思って置いて来た。

今私たちは、ラルカスのいる洞窟に来ていた。

「何なのね？ラルカスさんに用事なのね？」

私はライトを行い、明るくして中に入り、奥へと進んだ。

途中、石英の結晶があつて、それに近づくタバサ。

「そっちはダメなのね！お兄さまが危ないって言ってたのね」

私は気になっていた。アデルがシルフィードに注意した時に、ラルカスがほっとしていた事に。

まるで、ここには何か見られてはいけない何かがあるという事を！
タバサは石英の結晶周辺を調べた。

すると、固い筈の鍾乳洞なのに、そこだけ土がむき出しになっていた。

タバサはそこを掘ると、中から出て来たのは、

「！？」

「ほ、骨なのね…」

そう、人骨が埋まっていたのだ。

「十年前にここに住み着いていたミノタウロスの犠牲者なのね？」

「違う。まだ新しい」

この骨は最近のもの。特に劣化していないから。
すると、洞窟の奥から野太い声がした。

「帰ったのではなかったのかね？」

ラルカスが来た。

「この骨は何？」

タバサはラルカスに質問をした。

「…この辺りに住むサルの骨だよ」

白を切るつもりみたい。

「子供を攫っていたのは、貴方？」

するとラルカスは、氷の矢を放ってきた。

タバサは素早く飛びのき、先程まで居た場所に氷の矢が刺さった。

「下がってて」

タバサはシルフィードに命令し、石筈の後ろに隠れた。

ライトを消して暗闇となった洞窟内でタバサとラルカスは対峙した。

「少女よ、諦めろ。全ての利は私にある」

タバサはジャベリンを使おうとするが、暗闇で場所が特定出来ずにいた。

「一つ目の利、まずこの闇だ。お前達は私の姿が見えぬが、私には見える。闇は、この体の友だからな！」

声で狙おうとするタバサだが、洞窟内だから声が反響して場所が分からずにいた。

「お姉さまの斜め前、左三十度！」

タバサはその場所目掛けてジャベリンを放った。
鈍い音と共に命中の手応えを感じたが、

「中々鋭いジャベリンだな。しかし、この暑い皮膚は破れぬよ。さて、次の利点はこの体だ。私の皮膚は知っての通り、風の刃や氷の矢など受け付けぬ」

ラルカスは持ってた大斧をタバサ目掛けて振り下ろしたが、耳が良いタバサはどうか避けた。

「利点その三だ。私のこの体力は、人間など簡単にバラバラに出来る」

タバサは咄嗟に魔法で埃を舞い上がらせたが、ラルカスは魔法で埃を洞窟の奥へと吹き飛ばした。

「利点その四、言っただろう？私はこの体を得た事により、更に強力な精神力を得る事になった。恐らくスクウェアクラスにまで成長しているだろう」

奥に隠れていたシルフィードが叫んだ。

「お姉さま、逃げて！分が悪いのね！」

「逃げようなどと考えない方が良い。土地勘のない洞窟だ。焦って駆け出せば必ず転ぶ。それに、どんなに速く駆けても私の方が速い」

私はこの時、久しぶりに恐怖が湧き出てきた。怖いと感じてしまった。自分は死ぬと感じてしまった。

「…けて…」

タバサは彼の事を思った。

「助けて、アデル！」

その時だった。

「飛翔爆炎脚！！」

「ぐうおおっ！！？」

炎を帯びた飛び蹴りでラルカスを蹴り飛ばした。
こんな事が出来るのは一人しかない！

「俺のタバサに、手え出してんじゃねえ！！」

「アデル！」

「お兄さま！」

そう、タバサのピンチにアデルが駆け付けたのだ。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

アデルサイド

危ない所だった。

こうなってる事は知ってた筈なのに、火竜山脈の時に怪我した背中を治療しててラルカスの事をすっかり忘れてたからな。

その時に左目が疼いたと思ったら、ラルカスが見えたからな。

これ、タバサが見てる光景なのだろう。だとしたら。既に戦いは始まってる様だ！

アデルは急いでタバサの所に向かった。

つか俺、よくこんな暗闇の洞窟の中で周りが見えるんだ？

そして駆け付けた所、タバサに攻撃を入れようとしてたから、咄嗟に飛翔爆炎脚を喰らわせて蹴っ飛ばした。

「俺のタバサに、手え出してんじゃねえ!!」

「アデル!」

「お兄さま!」

ラルカスはゆっくりと立ち上がった。

「…君は確かその少女の連れの傭兵メイジだったな。どうしてここが分かったのかな?」

「俺はタバサの使い魔だ!この左目がタバサの危機を知らせてくれたんだ!」

「使い魔!?これは驚きだな。人が使い魔になるとはな」

アデルは剣と槍を構えた。

ラルカスはフゴフゴと笑っていた。

「笑うなど久しぶりでね、笑い方すら忘れてしまったようだ。さて青年よ、中々見事な構えだなお前の様な潔い貴族らしい貴族は昨今珍しいな」

「そんなんじゃねえ、俺はただ、タバサを守る為に戦うんだ!」

ラルカスは大斧を構えた。

どうやらあれがラルカスの杖の様だ。

「元とはいえ、貴族同士の決闘だな。いざ!」

ミノタウロスがメイジの様に振る舞ってる姿は滑稽に思えたな。つか俺貴族じゃないし、それに…

「テメエはもう貴族じゃねえ、ただの汚らわしく血に飢えたケダモノ」

ノじゃねえか！」

ラルカスの目が一瞬赤く光った。

「私は貴族だ！貴族らしく勝負を着けようではないか！エア・ハンマーだ！」

ラルカスはエア・ハンマーを放ったが、アデルのピンポイントバリアで弾いた。

「行くぞ！暗黒剣、Xの字斬り！！」

アデルはラルカスの懐に入り、胸にXの字を深く刻みつけた。

「ぐあぁっ！？馬鹿な、このミノタウロスの皮膚は鋼鉄以上だぞ！？」

「まだまだあ！乱れ散り花！！」

アデルは剣をしまい、斧を取り出した。
そして何度も斬り付けて、ラルカスの体は徐々に血飛沫が舞っていた。

「ぐおおっ！？」

「うおおおおっ！」

アデルは斧をしまい、杖を取り出した。

「喰らえ、ギガファイア！！」

「ばばばばばっ！！！！？」

アデルは、怯んでいるラルカスの口目掛けて大火球を注ぎ込んだ。

「ぐおおおおっ！！？」

「どんなに体が丈夫だろうとな、口の中は大概が弱点なんだよ！」

ラルカスは吐血しながら立ち上がった。

しかし、ラルカスの目は赤かった。

「オノレエエエツ！ユルサンゾキサマアアアー！ツ！！」

「とうとう本性を現したか？…いや、体に精神を乗っ取られたか？いずれにしても哀れだな。せめて苦しまない様に逝かせてやる！」

「ウゴアアアアアアツ！！」

ラルカスはアデルを襲おうとするが、かわされてしまい、天井すれすれの所にジャンプした。

そして杖をしまい、槍を構えた。

「トドメだ！酷刺無槍！！」

アデルの無数に見えるくらいの槍の連続突きを放った。

「ガアアアアアアアツ！！？」

アデルの連続突きにより、徐々に体の四肢が削れていき、最後は槍の先に魔力を込めて、ラルカスの胸を貫き、貫通させた。

「ギヤアアアアアアアアツ！！??」

ラルカスはとうとう倒れた。

アデルは着地し、ライトを着けたタバサとシルフィードと一緒に横

たわるラルカスを見た。

ラルカスの目はもう獣の赤い目じゃなく、人の白い目だった。
ついでに血まみれの口が開いた。

「三年ほど前だ…子供を襲う夢を見た…獣の様に、私は子供に喰らいついていた…それから何度もそんな夢を見る様になった…ああ、初めは夢だと思っていたよ…ある時目が覚めて、意識が戻って…そばに転がってた子供の骨を見ても、それが現実の事だとは思えなかった」

「………」

「段々と…自分の精神がミノタウロスに近づいていくのが分かった…特に空腹の時など…不意に人間が食べたくなる…理性が否定しても、感情が言う事を聞かんのだ…必死に抑えつけても、直ぐにその欲求は首を持ち上げてくる…体の中にミノタウロスの意識が残っていたのか…それとも私の心が体に近づいていったのかは解らぬ…恐らく両方なのだろうな…ごほっ、ごほっ！」

ラルカスは吐血しながら咳き込んだ。

「…死のうとも考えた…しかし、私には己の命を絶つ勇気が無かった…己の中の獣を殺そうとして…色んな薬を調合したが無駄だった…日に日に私でいられる時間が減っていった…だから…これで良かったのだ…見事だ青年よ…私はかつて火を放ってこの洞窟内を燃やし、このミノタウロスを窒息させて殺したのだが…スマートなやり方とは言えぬな…お前の様に…皮膚を引き裂き、貫かせる事など思いも付かなかった…」

するとアデルは、悪魔の翼を生やした。

「俺は悪魔だからな。ミノタウロスぐらい倒せなくてどうするんだ

？」

「悪魔、か…それでも…礼を言いたい…」

ラルカスは唇の端をわずかに持ち上げた。笑顔を浮かべているのだった。

「青年達よ…最後に君達の名を覚えてくれぬか…？」

「アデルだ」

タバサはわずかに瞑った後、

「シャルロット…」

自分の本名を言った。

「シルフィードなのね」

ついでにシルフィードも言った。

「良い名だ…」

するとタバサは、

「ありがとう」

と小さく頷いた。

「ああ…自分が自分で無くなるというのはイヤなものだな…実にイヤなものだ…ゴポアッ！」

ラルカスは血の塊を吐いた後、小刻みに痙攣し、絶命した。

研究室ごとラルカスを火葬した後、魔法学院に帰る為にシルフィードに乗っていった。

俺はと言うと、先程のラルカスの言葉で他人事じゃないなと思って
いた。

「自分が自分で無くなるというのはイヤなもの…か、確かにな…」

「アデル？」

「俺もいつかはラルカスみたいに完全な悪魔になって、自分の事が分からなくなっちゃうのかな…」

「アデル…」

変な事考えちゃったな…寝るか。

「悪いタバサ、少し疲れたから寝るわ」

「あ…」

タバサに寄りかかった感じになってしまったが、今は眠くてしょうがないしな…。

アデルは眠りに着いた。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

タバササイド

アデルが私に寄りかかり、徐々に下の方へとずれて行き、私の膝の所で止まった。

これは、アデルに膝枕をしてるって事なのかな？

それよりも、先程アデルの言ってた事が哀しくて仕方が無かった。

『俺もいつかはラルカスみたいに完全な悪魔になって、自分の事が分からなくなっちまうのかな…』

彼が完全に悪魔になった時、彼は自分を意地出来るのだろうか…。
そうなってしまったら、私はどうしたら…。

「お姉さま、お兄さまの事で悩んでるのね？」

シルフィードに尋ねられて、頷くタバサ。

「でも安心するのねお姉さま！」

「？」

「例えお兄さまがお兄さまで無くなったとしても、シルフィとお姉さまはずっと、お兄さまの味方なのね！」

「！？…そうね」

シルフィードの言い分に納得するタバサ。
すると、シルフィードから空腹音がした。

「お姉さま、こんな時にアレ何だけど、お腹が空いたのね」

「アデルもこんな状態だから、我慢して」

「きゅい…我慢するのね…じゃあ、魔法学院に急ぐのね！きゅい！」

シルフィードは速度を上げて魔法学院の所へと向かっていった。

タバサの冒険 ミノタウロス編（後書き）

やっぱタバサの冒険を書くにすごく時間がかかるな。
次回は魔法学院でホモ疑惑がある炎使い襲来です。

魔法学院強襲、さらばコルベール先生（前書き）

焼きマニアが出ます。

魔法学院強襲、さらばコルベール先生

一度ヴァリエール領から帰ってきたサイト達は、アルビオンへ戦争に行こうとしていた。

俺もサイトに激励しに向かった。

「サイト」

「あ、アデルか？」

「サイト、必ず生きて戻って来いよ」

「縁起でもない事言わないでくれよアデル」

「悪い、でも戦争なんだ、万が一の事もある」

「それは…そうだけど…」

「だから…」

アデルは懷から、

「これをお前に預ける」

「これは!？」

ノーブルローズとアンダリーを出した。

「アンダリーと俺の銃だ。俺からの餞別代りだ」

「アデル…」

「しばらくはよろしくな小僧」

「威力は押さえてあるから、人に向けてもある程度は大丈夫だ」

「それ大丈夫じゃないだろ!？」

「弾の数は三百発だ。考えてから撃てよ」

「…ああ、絶対に返しに戻ってくるからな!」

サイト達は、ゼロ戦に乗って戦地へと向かった。

近くにいたコルベール先生も、何だか複雑そうな顔をしていた。

尚、学院の男子全員が戦争に駆り出された為、今の学院はオスマン学院長とコルベール先生とアデル以外全員女性だけとなってしまうていた。

しばらく前から学院には、銃士隊という女性だけの平民部隊が駐在していた。

何でも、軍の作戦指揮官や他の軍人達は皆貴族である為に、あからさまに格下を見る様な感じで戦争に参加できずにいた。

だが、隊長のアニエス・シュヴァリエ・ド・ミランは、そんな事どうでもよかったらしい。

なんせ、ここにはもうすぐアルビオンからの刺客が来るからな。俺も多少は準備してかないとな。

その為にも…鍛錬だ！

拳技・餓狼粉碎蹴

剣技・大次元断

槍技・タービュレンス、真槍神理

弓技・ジールレーゲン、ドッペルゲンガー

斧技・グラビトンフレア

魔法・ウインド、クール、スターのギガクラス、ファイアのオメガクラス

固有技・烈火武神撃

魔法の効果範囲は七か所で結構広くなった。

…習得し過ぎじゃね？まあ火竜やらミノタウロスやらでレベルアップしてるからな。

「そこのお前！」

「ん？」

誰かに呼ばれたので振り向くと、そこにいたのはアニエスだった。

「確か、銃士隊のアニエス…だったか？」

「お前は戦争には参加しないのか？」

「悪いが、俺はこの生徒で無ければ、教師でも無いからな」

「では何故ここにいる？」

俺はアニエスに左手を見せながら言った。

「俺はタバサの使い魔なんぞでな。主人から離れる訳にはいかないのぞでな」

「！？お前も使い魔か！？なるほど…」

アニエスはどこか納得した様だ。

するとアニエスが、

「お前は炎使いか？」

と言ってきたが、

「俺は炎だけじゃなく、他の系統魔法が使える」

と答えた。

「そうか…」

アニエスは炎を使うメイジを敵視してるからな。

「何か火系統のメイジに恨みでもあるのか？」

「！？」

アニエスが鋭く睨みつけてきた。

「貴様には関係ない事だ！」

そう言つて去つていくアニエス。

相当根が深い様だな。

…昼間の内に寝ておくか。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

メヌヌヴィルサイド

俺はメヌヌヴィル、アルビオンに雇われている傭兵だ。

シェフィールド執政官殿の命令で魔法学院を焼き払う任務を命じられた。

焼き払う事は俺の大好きな事だ。特に戦場ではな。

深夜、まもなく学院の上空。

「ガキばつかの学院なんざ、襲つても面白くねえな」

「いゝや、魔法学院には今、女ばかりの部隊が駐留している様だぞ？」

「女か、そいつはイケる！」

「生け捕りにしてやろうぜ」

「……ウハハハハッ！」「……」

女ばかりと聞いて興奮し始めたな部下共、そんな事よりも焼き払っ

た方がもつと興奮するぞ？

「下賤な奴等だな。女だろうと関係無い、平等に死を与えてやる！
フフフッ」

さあ、貴様らの焼けた匂いを俺に嗅がせてくれ！

- - - - -
- - - - -
- - - - -

アデルサイド

昼間たつぷり寝たから、眠気が来ないな。

タバサの部屋で冥想してたら、多数の気配を感じた。ついに来たか！
アデルはタバサを起こそうとしたら、既に起きていた。

「起きていたか」

「敵の気配…」

「だろうな」

タバサはすぐに着替え始めた（当然アデルは後ろを向いて）。

ちなみに装備はバーニングブロー、薄刃陽炎、精霊の杖。

そしてキュルケの部屋に向かった。キュルケを起こす為に。

部屋の前まで来て扉を叩いた。

部屋から出てきたのは、薄手のネグリジェを纏ったあられの無い格
好のキュルケだった。

相変わらず大胆な格好だな。

「何タバサ…」

眠そうな声を上げたキュルケ。

「外が…」

「まだ夜も開けてないのに…」

「変」

「何かが起きようとしてるんだ」

「？」

すると、何かが壊れる音がした。

キュルケは音を聞いた途端、目が覚めた様だ。

「みたいね…」

キュルケはすぐに着替え始めた（アデルは扉を閉めて外で待ってた）。

そして窓から脱出した。

本塔の近くに潜み、機会をうかがう事にした。

「どうやら、寮塔にいた子は皆捕まったみたいだな」

「それに先生達も」

「人質を取るなんて、卑怯で卑劣な連中ね」

中には既に銃士隊の人達が戦闘を開始してる様だ。

「あいつら、アルビオンの傭兵みたいだな」

「見た感じ数は多くないみたいだけど…」

「かなりの腕」

すると、誰かが近づいてきた。

「誰か来る！？」

すぐに身を潜めた。

現れた人物は、

「皆！」

コルベールだった。

「コルベール先生！？」

「良かった、無事だったんだな」

「先生こそ。それより、皆が人質に」

「知っている、先程、援軍を要請した。君達は、今すぐ逃げるんだ！」

コルベールがアデル達に逃げる様に言うが、

「援軍で宮廷からでしょ？そんないつまでも悠長に待っていていられないわ！私たちで何とかしなくちゃ！」

キュルケが言い出した。

コルベールは首を横に振った。

「敵はプロだ！君達が敵う相手ではない！援軍が来るまで待つんだ！君達は、早く逃げなさい！」

「臆病者は必要無いわ！そんなに逃げたきゃどうぞ、先生だけ逃げれば良いじゃない」

コルベールは再度逃げる様言うが、キュルケは凜とした感じで返した

「奴らはあたしたちの存在を知らないもの、奇襲の力ギはそこよ!」

「彼らはプロなんだ!小細工が通用する様な相手ではない!」

コルベールはキュルケを説得しようとするが、

「先生は引っ込んでてよ!」

キュルケはそれを軽蔑するように拒否した。

「しかし…」

「いいから、具体的な作戦を立てましょう」

キュルケはコルベールを無視して話を進めた。

「コルベール先生、貴方の言い分も分かりますが、皆が人質に取られてる以上、すぐに人質を殺さないとも限らない。俺は早期解決を望む」

「アデル君…」

「最初に誰かが囷になって飛び込んで…」

「ただ飛び込むだけじゃダメ」

「敵の目を派手に引き付ける必要があるな」

作戦会議をしていると、

「待ちなさい」

「何よ!」

「私ならこの事態を收拾出来る!だから、ここは私に任せなさい!」

「?」

コルベールは、何か策を思い付いた様だ。
コルベールはどこかに向かおうとした。

「先生？」

「アデル君、手伝ってくれ」

「…はい」

アデルはコルベールの後を追った。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

アニエスサイド

我々は、アルビオンの手先共との戦闘を開始したが、武器が全て燃やされしまい、丸腰になってしまった。
だがそれよりも、この男、襲撃者の隊長から聞き捨てならない事を聞いた。

「昔、一つの村を焼き滅ぼした事がある！」

一つの村…焼き滅ぼした…。

その言葉にすぐ心当たりがある。
20年前、私の故郷であるダングルテールの村が、疫病対策と偽った新教徒狩りで焼かれ、滅ぼされた。

「炎が全てを飲む込むさまは、圧巻だった！あれこそ戦場の醍醐味

だ！」

「お前は…お前は…」

この男が…実行犯…！

「私の故郷を…ダングルテールを…焼いたのは…お前か！？」

「ほう、お前はあの村の生き残りか？」

「お前だけは許さぬ！死ねえ！」

アニエスは斬りかかるが、メンヌヴィルは容易く避けた。

「剣の腕では、貴様の方が上だな。だがな、所詮は平民だ！」
「！？」

しまった！？奴の炎が剣に！？
メンヌヴィルの炎で剣が溶けてしまった。

「くっ！？」
「フフフツ、もうこれで何も無くなったな！」

くそ、仇は目の前にいるというのに！

「お前が…お前があの時の隊長か！」

しかし、ここで思いもよらない事を聞いてしまった。

「残念ながら違うな」

「何っ！？」

「残念ながら違うんだよ」

違う…だと！？この男が隊長ではないだと！？

「当時の私は副官にすぎない…指揮官は炎の蛇、炎蛇えんじゃと呼ばれた男だ。奴は私よりもつと残忍で、全てを焼きつくす炎を持っていた！」
「何だと！？」

こんな奴よりも上の奴がいたのか！？

「私こそ、その男を探し続けているのだ！」

どういう事だ？こいつも探しているとは？

「この私に傷を負わせた…炎の蛇をな！あの男を焼きたい…俺の願いはそれだけだアー！！」

傷を負わせた？仲間をも焼くというのか！

「今思い出しても身震いがする…ダングルテールを焼いた時の隊長はすごかった。顔色一つ変えずに、あつと言う間に村を炎で攻め滅ぼした。完璧にな！」

アニエスは齒痒い想いで一杯だった。

「俺は隊長のあまりの強さに興味を惹かれた。思わず奴の背中に攻撃を仕掛けてみた」

何！？自分の隊長を攻撃しただと！？

「若気の至りというやつさ、隊長がどれだけ強いのか、その強さは本物なのか、確かめたくなっただのだ！」

するとメンヌヴィルは高揚とにやけた。

「あいつは本物だった！難なく俺をあしらいやがった！」

自分で隊長に攻撃して、反撃されたというのに、この男…笑っている！？

「貴様は、狂っている！」

「そうかも知れんな。昔話はこれくらいにしておこう、そろそろ交渉の時間だ」

メンヌヴィルは学院長に交渉し始めた。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

アデルサイド

向かった先は、コルベールの研究室だった。

「これから作る物を手伝ってくれ。一人では時間がかかり過ぎるからね」

「分かった」

すると、紙風船みたいな物を作る様指示された。

はたから見るとこれ、色を白一色にした紙風船にしか見えないな。

「アデル君」

「はい？」

いきなりコルベール先生に呼ばれたな？

「君のいたヴェルダームという世界は、どんな所だい？」

正直、どう答えたら良いか分からなかったが、知ってる限りの事を話した。

「…ただの田舎ですよ、シエスタの故郷のタルブみたいな感じでのどかな所でした」

「そうか…」

「でも魔王が来てからは、景色がガラリと変わってしまったからな…草原溢れた土地が一瞬で荒野になったり、綺麗な景色も一瞬で不気味な景色になってしまったりと…あんまり良い思い出はありませんね…」

「そうだったな…すまない、余計な事を思い出させてしまった…」

「いいんですよ。俺に言わせりゃ、こつちの世界の方が綺麗だから」

「綺麗か…」

コルベールは少し俯いてしまった。

「何でいきなり俺の故郷について聞きたくなったんだ？」

「サイト君が前に故郷の話聞かせてくれてね。そこには誰もが技術を平等に扱えててね、私はそれが素晴らしい事だと思うんだ」

地球の話か…何だか懐かしくなってきたな。

「誰もが平等にか、その為にはある程度の勉強は必要そうだな」

「サイト君もそう言っていたよ。私はいつか、サイト君が暮らしていた世界に行ってみたい」

「先生…先生はこの世界の人達とは違って、魔法主義者が多い人達の中でそんな事考えられるなんてね」

「私は変わり者だからね」

コルベールがそう言って微笑んだ。

作業はもう間もなく終えようとしていた。

「先生、出来ました！」

「よし、行くぞ！」

紙風船みたいな物を箱詰めにして、タバサとキュルケの下に向かった。

「アデル君」

「はい？」

また唐突に話しかけてきたな？

「私は、サイト君が元の世界に帰る時は…私も一緒に行こうと思っている」

「えっ？」

コルベールがそう言った後、また走り出した。

「…行けると良いですね」

「…ああ」

その為にも、今は！

「アデル！」

「悪い、待たせた」

「遅過ぎ！」

タバサとキュルケの所に辿り着いたアデルとコルベール。

「それ何？」

「…君達全員の力を借りる」

タバサとキュルケは紙風船を飛ばす班で、俺とコルベール先生は人質救出班となり、それぞれが配置に着いた。

タバサは奴らが開けた二階の穴から、紙風船に魔力を込めて食堂に送り込んだ。

「何だこりゃ？」

「どうしてこんなモンが？」

敵はこれを見て不思議がっていた。

「いいな、あくまでも、皆の救出が目的だ。敵を相手にするな」

「了解」

食堂いる全員が紙風船に集中した。

「よし、今だ！」

コルベールが叫んだのと同時に、キュルケが紙風船を爆発させて、強烈な光と爆音が食堂を包んだ。

「「「「「
「「「「「キヤ
「「「「「ア
「「「「「ア
「「「「「ア
「「「「「ア
「「「「「ア
「「「「「!
「「「「「?
「「「「「?
「「「「「
「「「「「
「「「「「
「「「「「
「「「「「

「うわっ！？」
「目がっ！！？」

食堂にいた全員が今ので怯んだ。辺りは一面、白煙に満ちていた。

「今よ！」

「了解！」

俺とコルベールが人質の近くにいる連中を片付けていたら、キュルケが敵に攻撃をしていた。

「タバサ、行くわよ！」

「いかん、敵に齒向かうな!？」

キュルケはタバサと一緒に攻撃した。

コルベールがキュルケ達に攻撃するなど叫ぶ。
俺はアニエスの近くにいた敵を切り捨てた。

「お前！？」

「アニエス、これを使え！」

アデルはアニエスに薄刃陽炎を渡した。

「すまん！」

「いって、皆は？」

to be U-

「キヤアアアッ！！？」

「タバサ！？キュルケ！？」

キュルケとタバサが吹き飛ばされた。

俺とアニエスは、白煙の中から出て来る人影に注意した。

キュルケは落とした杖を拾おうとしたが、先にメンヌヴィルが踏みつけた。

「惜しかったな、爆発で視力を奪うまでは良かったが…」

確かメンヌヴィルの左目は義眼だったな。

「も、もしかして…目…」

メンヌヴィルは左目の所に手を伸ばした。
すると、目を取り出した。

やはり義眼か、つかグロい…。

「俺はあの時目を焼かれて以来、光が解らん」
「な、何で見えるの…？」

キュルケは若干怯えながら言った。

メンヌヴィルは再び義眼を左目に入れ直した。

「蛇は温度で獲物を見つけるといふ」

「えっ！？」

「俺も炎を使う内に随分と敏感になっただけ」

メンヌヴィルはキュルケの頭を掴んだ。

「温度で人の見分けすらつくんだ」

キュルケはもう完全にメンヌヴィルに怯えていた。

「嗅ぎたい！」

「へっ！？」

「お前の焼ける香りが、嗅ぎたい！」

メンヌヴィルはキュルケを地面に叩き付けた。

「ヤダ…」

「ふははは、フン！」

メンヌヴィルはキュルケ目掛けて炎を放ったが、横から鋭い炎がキュルケを焼こうとした炎を吹き飛ばした。その炎を放ったのは、コルベールだった。

「先生！？」

「コルベール先生…」

「私の教え子から離れる！」

メンヌヴィルは構えた。

「！？お、おお…」

メンヌヴィルが高揚とした顔でコルベールを見た。

「お前は…お前はお前はお前は！探し求めていた温度だ！」

コルベールに出会った事に喜ぶメンヌヴィルは、続けて言った。

「お前を探し続けて来たのだぞ！何と懐かしい隊長殿！」

「何っ！？」

メンヌヴィルの言った事に驚くアニエス。

「貴様…視力を失っていたのか！？」

「そうさ、隊長殿のおかげだな」

「コルベール先生が…隊長？」

キュルケはコルベールを見て呟いた。

「先生？フハハハハッ！貴様が教師か？戦場で会わぬ筈だ、まさか教師になっていたとはな！炎蛇と言われた貴様が？」

「炎…蛇？」

「そうだ。この男はな、かつて炎の蛇、炎蛇と言われた使い手だ！女だろうが子供だろうが構わずに燃やし尽くした男だ！」

「！？」

「そして俺から両の目を、光を奪った男だ！」

その時、コルベールの後ろから奇襲しようとした敵がいたが、難なく対処するコルベールだった。

「さすがは隊長殿、腕は衰えておらぬ様だな。そうだと、そうではなくては、フハハハハッ！」

「ミス・ツエルプストー、ミス・タバサを抱え、この場を離れるんだ！」

「は、はい…」

キュルケは引け腰だけど、タバサを連れ出した。

「アデル君、皆を連れて逃げなさい！」

「分かった！」

俺はすぐに杖を出して、皆を縛ってるロープを解かせた。

「皆立て、こっちだ、急げ！」

女子達は急いで食堂から出て行った。

コルベールとメンヌヴィルが炎で攻防していると、アニエスがコルベール目掛けて斬りかかった。

「死ネエ！！」

「！？」

「何やってんだアニエス！？」

「アニエス君、近づくな！」

「フザケルナ、才前ハ私ガ殺ス！」

「！？」

おいおい、何だこの状況は、三つ巴の戦いになってんじゃねえか！？
って、呆けてる場合じゃなかった！？アニエスを止めないと！

「引っ込んでろ平民！お前に、要は無い！」

「危ない！？」

メンヌヴィルがアニエス目掛けて炎を放ったが、コルベールがそれを防いだ。

「アニエス、下がってろ！ここにいたら巻き込まれるぞ！」

「離セ貴様！私ハアノ男ヲ殺ス！」

「！？」

おいおいアニエスの目…あれは人の目じゃない…狂人の目だ…。
アニエスの復讐心が歪ませているのか？

「危険だ！アデル君、アニエス君を連れて、私から離れる！」

「ソウハ行クカアッ！」

「うわっ！？」

アニエスはアデルを振り払ってコルベールに斬りかかるうとするが、

「まずは貴様からだ！」

メヌヌヴィルはアニエス目掛けて炎を放った。

「！？危ない！？」

「ウワアアアアッ！ハッ！？」

炎がアニエスに当たる直前、コルベールが突き飛ばし、身代わりとなった。

「グオオオオオオオオ！！？」

「コルベール先生！？」

俺は咄嗟に炎を冷風で飛ばした。

コルベールは倒れた。

するとメヌヌヴィルは狂喜のあまりに高笑いし始めた。

「隊長殿、焼け死ぬ気分はどうだ？」

コルベールは満身創痍がちだが、何とか起き上がろうとしていた。

「!？」

アニエスは、コルベールの左肩の火傷を見て驚愕していた。

確かあの傷って、アニエスを助ける為に出来た傷だったよな？

「ずっとこの瞬間を待っていたのだ！お前を焼き殺す日を！感謝しているぞ隊長殿！お前への復讐心で、俺はこんなにも強くなれたのだから！」

また高笑いを始めたメンヌヴィル。

コルベールはその隙をつき、炎を放った。

しかしメンヌヴィルは、

「さすがだな、炎の蛇よ！」

炎を払った。

すかさずコルベールは攻撃するが、

「今の俺は、あの時の若造ではない！俺の炎は、隊長を超えたのだ！」

メンヌヴィルは高々と言ったが、

「あの頃の…ま、ままだ」

「何？」

「慢心は、あの頃のままだな！」

「グアアアアアアアアッ!!!？」

コルベールの強力な炎に苦しむメンヌヴィル。

「ハア…ハア…おのれえ！ヌウオオオオオオッ！」

メンヌヴィルは巨大な炎を展開し、詠唱し始めた。
コルベールは反撃しようとするが膝をついてしまった。

「喰らええ！！」

メンヌヴィルがコルベール目掛けて放とうとするが、一人、メンヌヴィルに向かって駆け出した者がいた。

「！？」

「我が故郷ノ恨ミイツー！」

アニエスが薄刃陽炎でメンヌヴィルを突き刺した。
展開していた魔法は完成せず、霧散した。
メンヌヴィルはゆっくりと倒れ込んだ。
そしてアニエスは、コルベールに近づいた。

「…大丈夫…か…」

「……………」

「良かった…」

アニエスの無事を知り、コルベールは倒れた。

「何故、助けたのだ？ダングルテールを焼き払ったあの日…」

「…間違いに…気付いたのだ…」

「！？」

「コルベール先生！」

キウルケとタバサが駆け付けた。
俺はゆっくりとこの場を離れた。
そろそろ準備しねえと。

アデルは杖を握り、魔力を込めた。

「ドケ！」

「何するつもり！？」

「邪魔スルナ！」

アニエスは剣をコルベールに突き付けた。

「止めてアニエス！？」

「ドケ！私ハコノ日ノ為ニ生キテ来タノダ！20年…20ダゾ！」

「止めて！？お願いだから！」

「ドケ！！」

するとコルベールは、

「ミス…ツエルプストー…どいてく…れ…」

「！？」

「アニエス君には…私を殺…す…権利…が…ある…」

「先生…」

「あの時…初めて…罪に…気付いた…命令に…従うのは…正しい…
こ…とだと…思っていた…でも、違う！例え戦争であっても…人を
殺すのは…罪だ！アニエス君…私を、殺せ…だが、これを最後に…
人を殺すのは…止めて…くれ…」

今だ！

アデルはある魔法をコルベールに掛けた。
コルベールはゆっくりと目を閉じた。

「貴様ア、何ヲ又ケヌケト！」

剣を構えるアニエス。

「アニエス止めて！？」

「邪魔スルナ！」

剣を強く握り締めるアニエス。
しかしタバサはコルベールの手を取り、脈をはかった。

「剣を収めて」

「フザケルナッ！…ハッ！？」

アニエスも気付いたみたいだ。

「もう…亡くなってる」

タバサがそう言うと、

「何…だと…！？」

アニエスは震えだした。

「ウアアアアアアッ！！？」

アニエスはコルベールのすぐ横に剣を突き刺した。
そしてアニエスは、言葉を出さずにポロポロと泣き崩れた。

翌日、キュルケがコルベールの遺体を自分の領地に埋葬すると言
出し、俺とタバサは付き添う事にした。

魔法学院強襲、さらばコルベール先生（後書き）

アニメスがカタカナで喋り出していたのは、狂気の状態だったからという表現を出してみました。

アデルがコルベールに掛けた魔法は、アニメ版を知ってれば解ります。

次回は軍港爆破テロ事件勃発です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9501p/>

タバサの悪魔勇者

2011年10月30日15時28分発行